
Fragment of braves

虹色冒険書

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F r a g m e n t o f b r a v e s

【Nコード】

N 6 6 9 6 R

【作者名】

虹色冒険書

【あらすじ】

ここは三つの種族が暮らす世界「アスヴァン」。
他の種族の祖とも言われている最も多く存在する「人間」。
兎や猫、色々な動物の姿とその能力を持つ「獣人族」。
大きな翼と炎を操る、誇り高き種族「竜族」。
数十年前の「第一次アスヴァン大戦」を経て、
三つの種族は共存し、手を取り合い、共に繁栄を築いていった。
その繁栄の象徴とも言えるのが、アスヴァンの国家の中でも絶大な規模と力を誇る、「アスヴァン三大国」と呼ばれる三つの国家。

このお話は、その三大国の一つ、「アルカドール王国」に暮らす少年、「ロア」とその友人達が紡ぐ遙かなる冒険物語……

Prologue #第0章 〈生贄の赤子〉

今、ここに広がっている光景を一言で表現するならば、「異様」という言葉ほど適した言葉はないだろう。

薄暗い神殿、所々に置かれた燭台に灯された炎が辺りをぼんやりと照らしている。

漆黒のローブを纏った何百人もの人間が、中央の正方形の祭壇を囲むように立っている。

その祭壇には巨大な円形の魔法陣が刻み込まれていて、その上に点々と赤黒い液体が付着していた。

その魔法陣の中央には、薄い布でくるまれた一人の赤子が寝かされていた。

お腹がすいているのか、それとも石造りの祭壇に寝かされているせいで背中が冷たいのか、神殿には赤子の泣き声が隅々みまで響き渡っていた。

不意に後方から扉が開く音がする。周りの人間の視線が一斉にそちらへ向く。

一人の老婆が神殿へと足を踏み入れる。その老婆もまた、漆黒のローブに身を包んでいた。

ローブの袖からはみ出た手は皺だらけで、猫背で杖をついている。相当な年長者なのだろう。

ボタン、と今度は扉が閉まる音。老婆が足を進めると周りの人間は何も言わずに道を譲っていくことから見て、どうやら彼女は権力者

か何かのようだ。

カツ、カツ、カツ、と、赤子の泣き声に老婆が杖をつく音が混ざる。老婆は階段を上がってゆつくりと祭壇へ上る。そして目の前の赤子に視線を向けた。

赤子は手足を小さく振り回しながら相変わらず泣き続けていた。

「（この赤子が……次の生贄か……）」

目の前の小さな命を見つめながら、しわがれたかすかな声で老婆はそう呟く。

老婆は徐々に背筋を伸ばし、その場に杖を手放す。杖が倒れた音が響くと、今度は老婆は両手を合わせた。

そして老婆は目を閉じる。息を吸い込んで、経でも唱えるようにブツブツと何かを呟き始めた。

老婆が呟き始めた言葉はこの国の言葉でもない、どうやら何かの呪文のようだ。

赤子の泣き声に、老婆のしわがれた声が混じっていく。

徐々に徐々に老婆の声が大きくなり、周りの人間にも聞こえる程度になっていく。

刹那、轟！！という音と共に神殿の中に嵐のような激しい風が巻き起こった。

バサバサとローブが風になびく音、周りの人間の悲鳴もかすかに聞こえた。

老婆の顔と手には汗が滲んでいく、周りの様子など気にも留めず、彼女は呪文を唱え続ける。

声を大きくしていくのに比例するように、神殿の中に巻き起こった

風も激しさを増していく。

どれくらいの時間が経っただろうか、呪文を言い終えたと思うと、目を閉じていた老婆が、いきなりカッと目を見開いた。そして天を仰ぐように両腕を広げたかと思うと、

「カアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

風音にも勝る凄まじい声で叫んだ。

次の瞬間、今度は黒い煙のようなものが神殿の天の方から降り注ぐ。まるで吸いこまれていくかのように、黒い煙は赤子へと向かっていく、そして赤子の腹へと黒い煙が吸収されていった。

「ギヤアアアアアアッ！！！！！」

今度は赤子が凄まじい悲鳴を上げる。

余程苦しいのだろう。そのときの赤子の声は、「泣いている」というよりも「叫んでいる」といったほうが正しい。

黒い煙が腹に吸い込まれていく間、赤子はこの苦しみから逃れようと必死に声を上げ、空を掻くように手足を振り回していた。そんな行為など無意味に等しいとも知らずに。

どれほどの時間が経ったのだろうか、赤子が声を出す元気もなくなった頃、神殿は静まり返り、そこには風も、黒い煙も吹いていなかった。

老婆は杖を拾い上げて、祭壇の側に立っていた男に「連れ出せ」と一言。

何百人もの黒いローブを纏った人間達に見守られながら、白い布に

くるまれて泣くこともなく、ただ虚ろな瞳をした赤子は神殿から連れ出されて行った。

これこそが、滅ぶ筈だった闇が生き長らえた瞬間である。

初めまして皆さん、今日初めて小説を書かせていただきます「虹色冒険書」という者です。

全く文才のない初心者ですが、頑張って書きますのでどうか読んでくだされば幸いです。

アドバイスや感想、誤字脱字の指摘など、お待ちしております。

第1章
〜朝〜

—
F
r
a
g
m
e
n
t
o
f
b
r
a
v
e
s

フラグメント・オブ・ブレイブス—

「ふ……あゝあ……」

我ながら間の抜けた欠伸を発して、ロアはベッドから起き上がる。窓から差し込む光が眩しく感じたのか、目やにと涙の溜まった瞳をこする。

時計を見ると時刻は九時、どうやら寝過ごしたようだ。

ベッドから降りて、洗面場に向かう。顔を洗い、ハリネズミのように立った茶髪を寝かしつける。

口をすぎながら、ロアはふと思い出した。

「今日は確か、何か予定があつた気が……あれ、何だっけ？」

ぼそりと独り言。予定があつたということは覚えているのだが、肝心の予定の内容が思い出せない。

「ん」と、市場の特売日でもないし、修理に出してた剣の受け取り日でもない、バイトは今日は休みだし……あとは……」

日常的な予定ならばいくつか浮かんでくるが、どちらも今日の予定とは違う。

「んん、本当に何だつたっけ!？」

どうにか思い出そうと、ロアは頭をフル回転させる……が、その思考は一時中断せざるを得なくなった。

ロアの腹部から鳴り響いた、「ぐるるるる………」という音によって。

そういえば、朝から何も食べていなかった。

食器棚から皿を取り出す。大きなパンを包丁でカットして、その断面にマーマレードのジャムを塗り付ける。

物足りないと感じたのだろうか、床下の扉を開けて、紙袋からリンゴを一つ取り出した。

テーブルに向かうと、まずはパンをかじる。ジャムのマーマレード味が口の中に広がった。

余程お腹が減っていたのだろう。がつがつ、という効果音が似合う食べっぷりだ。

あっという間にパンを平らげると、今度はリンゴを手取る。

その時、後ろからかすかに自分を呼ぶ声が聞こえた気がした。気のせいかな？　と思って耳を澄ませてみると、確かに「ロアー、まだ寝てるのー？」と、女の声が聞こえた。

ロアは窓を開けて下を見る、そこには一人の少女と、兎の姿をした獣人族の少年がいた。

「アルニカ、それにルーノも……あー！」

ようやくロアは思い出した。

どうして、こんな大事なことを忘れていたのだろうか。

今日はこの三人が、ここアルカドル王国の王女から直々に呼び出しを受けている日だったのだ。

ロアは階段をドタドタと駆け下りて、玄関の扉を開いた。

ロアとアルニカ、そしてルーノはアルカドール王国の街を歩いていた。

天気は晴れていて気候も暖かい、日傘を差して歩く人もいる。

広場の大きな噴水の周りでは、人間や獣人族の子供達が楽しそうにじゃれていた。

獣人族は、見た目は動物でも人間と同じ「人」として扱われる。

人数を数える時は「〴〵匹」ではなく「〴〵人」を使う。

また獣人族にも人間と同様人権があり、選挙に参加する権利もあるし、職業を選ぶ権利も認められている。

姿は違えども人間と何ら変わらない対等な存在であり、人間と獣人族との差別行為は法で禁じられているのだ。

「ルーノってさ、相変わらずいい毛並みしてるよね」

ロアは、自分の隣を歩いている獣人族の少年にそう言った。

「ルーノ」と呼ばれた少年は兎の獣人族で、大きな耳と丸くてふわふわした、まるで綿毛のような尻尾を持っている。

二足歩行をしているが、背の高さは耳の高さを入れてもロアとアルニカの胸の辺りまでしかない。

獣人族は、一部の種族を除き同年代の人間に比べて平均身長が30センチ程低いのである。

「ほんとほんと、青くて艶やかできれいな毛だね……毛布にしちやいたいかも」

本気ではないだろうが、アルニカが他の獣人族が聞けば震え上がりそうな冗談を言う。

ふう、とルーノはため息。

かゆみを感じたのか、ルーノは背中を掻きながら、

「……アルニカ、その冗談はあまり余所で言わねー方がいいぞ?」

「ははは、わかってるわかってる」

はあ、とルーノはまたため息、そんなルーノを見てアルニカは微笑む。

「絶対分かってないね」今度はそんなアルニカを見て、ロアが呟いた。

「んっ!?! ロア、今何か言った!?!」

「いつ!?!」

ずい、とアルニカがロアの顔を覗き込む。彼女の肩まで伸びたオレンジ色の髪がふわりとなびく。

ロアは、「小さい声で言ったのに、何で聞こえたんだ!?!」と言わんばかりの表情を浮かべていた。

「な、何も言っていないです……スミマセン」

「……ぷっ、よろしい」

敬語で謝るロアが可笑しかったのだろう。アルニカはまた微笑む。そしてアルニカはまた歩き始める。ロアとルーノもそれに続く。

「はあ……」アルニカに聞こえないよう、彼女の後ろ姿を見つめながらロアは小さくため息。

アルニカはロアの幼なじみで、人間の少女だ。

快活な性格をしていて、かつ礼儀正しく、そしてとても優しい一面も持ち合わせている。

その性格と綺麗な容姿から、学校では男女問わず人気がある。

数分程街の中を歩いただろうか、前方にアルカドールの城が見えてきた。

「……なあ、二人とも」

不意に、ルーノが二人を引き留めた。

「どうしたの、ルーノ？」とアルニカが問う。

ルーノは街の時計塔の大時計を指差しながら、

「約束の時間までまだ結構時間があると思うんだけどよ……」

ロアとアルニカも、大時計に視線を向けた。たしかに、まだ40分は余裕があった。

当初の予定では数分前に着く予定だったが、どうやら思いのほか早く着いてしまったようだ。

ルーノが続ける。

「どうする？ 確か今日は約束の時間までは城には入れないって言ってたよな……」

そう。今日城では大きな会議が行われていて、その間城の門は閉鎖されているのだ。

予定では会議は一時間後に終了するのだが、それまでは城に入ることはできない。

「あと40分はあるな……どうするアルニカ？」

ロアが聞くと、アルニカはしばらく考え込んで、はっ、と何か思いついたように二人の方を見る。

「あのさ、私ここから近くにおいしいコーヒーとか飲めるお店知ってるんだけど、そこで時間つぶすっていうのはどう？」

第2章　く喫茶店く

三人は、城の近くのレンガ造りの赤い屋根の建物の前にいた。

看板には「喫茶モノリス」とある。アルニカによると、ここが彼女のお気に入りのお喫茶店らしい。

木製のドアを開けると、カランカラン、と音がする。

それと同時に、カウンターの方から「いらっしやい」と声が聞こえた。

店内は少し暗く、ジャジーな音楽のレコードが流れていて、どこかシックで大人な雰囲気だった。

それなりに人気のある店のようで、数人の客がテーブル席に座っている。

三人は、カウンター前の席に腰掛けた。

「ご注文は何にいたします？」

店のマスターが注文を聞きにくる。

アルニカは「私はブラックコーヒー」と答え、ルーノはメニューを眺めて、「人参ジュース」と答えた。

普段、喫茶店など利用しないロアはしばらく悩んでいたが、とりあえずコーヒーを注文した。

注文してから数分後、マスターが注文の飲み物を運んできた。

ロアはコーヒーを受け取ると、固形砂糖をいくつか入れて、スプーンでかき混ぜた。

「あれあれ？　ロア、もしかしていまだに砂糖入れないとコーヒー

飲めないのお？」

ロアの右隣でブラックコーヒーを飲んでいたアルニカが言う。
不意の言葉にロアは一瞬ぎくり、として、

「いきなり何だよアルニカ……てか、君はどうしてブラックをそんなにごくごく飲めるんだよ!？」

「え？　だっておいしいじゃん、ブラックコーヒー」

普通のコーヒーすら砂糖を入れなければ飲めないロアにしてみれば、
ブラックコーヒーをまるでジュースのように一気飲みするアルニカの舌は理解不能だった。

「まだまだ子供だね、ロア」

ぷくく、と笑い混じりにアルニカが言う。

「いやいや、てゆうか僕たち同い年だろ!？」

とロア。

ロアの左隣に座っていたルーノが人参ジュースを片手に、

「やっぱりロアにはオレンジジュースがお似合いじゃねえか？」

その彼の言葉にカチン、と来たロアは、ビシィ!!　とルーノを指差して、

「人参ジュースなんか飲んでるお前にだけは言われたくない!!」

「しょうがないでしょ？ ルーノは獣人族なんだからコーヒーなんか飲めないもの」

確かにアルニカの言う通りだ。

獣人族は体の機能、例えば消化機能などは普通の動物とほとんど変わらない。

例えば、猫の獣人族の子供には専用のミルクを飲ませないとお腹を壊してしまうこともある。

コーヒーやチョコなどのカフェイン含有物は、大半の獣人族には毒のような物なのだ。

「二人して僕をいじめて……！！」

ムスーン、とロアは拗ねる。

ヤケ酒ならぬヤケコーヒー、と言わんばかりに彼は砂糖の入れすぎで甘ったるくなったコーヒーをすする。

「ごめんごめん、ちょっとからかっただけじゃん？」

アルニカの言葉に、ロアはそっぽを向いて、「フン！！」とだけ返事した。

ありゃ、ちょっといじりすぎちゃったかな？ とアルニカは思った。

「全くもつ……可愛いんだから」

ブラックコーヒーの入ったカップを片手に、ロアの横顔を見つめながら、

彼に聞こえないように小さな声でアルニカは呟く。

「ふふ」、とアルニカは笑みをこぼした。

その時、店のドアの方からボタン！！と大きな音が響く。

店内の客達の視線が、一斉にドアの方へと向く。

二人の大柄な人間の男がズカズカと店へ押し入り、銀色に鈍く輝く物を懷から取り出した。

男が握っていたのは、平和なこの街には似つかわしくない物、それは、ナイフだった。

その瞬間に、静かだった店に人々の悲鳴が響き渡る。

「騒ぐんじゃねえっ！！」と押し入ってきた男の一人が怒鳴る。

もう一人の男が、マスターに麻袋を投げつけて、「命が惜しいなら、この袋に金を詰めろ」と命令した。

「ま、まさか……強盗！？」

アルニカがそう言った。

第3章　くロアのかく

「オイそのメスガキ！！　大人しくしろ！！」

男の一人が、アルニカにナイフをを向ける。

「メス」という、まるで動物を扱うような言葉が気に入らなかったのだろう。

アルニカはドン、とカウンターを叩いて、

「め……メスつて……！！」

相手が年上の男で、それもナイフを持った強盗だということすら忘れて、

「人のことを動物みたいに言うんじゃない……むぐ！？」

そこまで言いかけて、アルニカの言葉は止まった。いや、止められた。

ルーノの、フサフサに毛の生えた手が、彼女の口を塞いだから。

「ちょ、なによルーノ……」

「やめとけアルニカ、相手は一応強盗だぞ？」

「おいテメエら！！　何ゴチャゴチャ喋ってやがんだ！？」

アルニカとルーノの話を割って、男がそう言った。

そして周囲の人間の様子を伺いながら三人の方へ歩み寄ってくる。マスターに麻袋を渡した方の男が、「丁度いい、そのメスガキを人

質に取れ！！」と告げた。

「メ……また……！！」

「へっ、わかったよ」

そう答えた男は、アルニカへ近づきながら、

「悪いなお嬢ちゃん、すまねえが人質になってもらっぜ？　お、よく見りやなかなか上玉じゃねえか」

アルニカは、「メスだの何だの……！！」とぶるぶると震えながら呟いている。

そんなアルニカを間近で見ていたルーノは、ロアに「なあロア、大丈夫かな？」と耳打ちした。

ロアは、「いや、大丈夫じゃないだろ……」と答えた。

二人のやり取りをそばで聞いていた客は、「大丈夫じゃないとわかってるなら、彼女のために何かしないのか」というような表情を浮かべていた。

「なあお嬢ちゃん、よかつたらこの後俺達と遊ばねえか？　ま、無傷で帰れる保証はねえけどな」

そう言いながら、男がアルニカの肩に手を回そうとした、その時だった。

「汚い手で……！！　触らないでよ……！！」

怒りが丸出しになったアルニカの声。

ドスッ！！ という音と共に、店の中に一瞬振動が走る。
男の足の甲に、アルニカのブーツの踵が直撃していた。

「い、い、い……い#&”—\$?痛”。<β:＊9%htギヤ@+
^α}——ッ！！！！」

声にならない声を上げながら、男は右足の甲を押さえながら地面に
転げ回った。

少女といえどもブーツの踵に全体重をかけたストップ、かなり効い
ただろう。

「やっぱり大丈夫じゃなかったね」

とロア。

ルーノは「うん」と頷いた。

そう、先ほどのルーノの「大丈夫かな？」という言葉は、なにもア
ルニカの身を心配して言ったわけではない。

つまりは、不用意にアルニカをキレさせた、男の身を案じて言った
のだ。

「て、めえ……ぶち殺してやる！！」

男は右足を押さえながら立ちあがり、
アルニカに向かってナイフを構え、けたたましい足音を響かせなが
ら突進した。

店中に再び悲鳴が響く、誰もが最悪の展開を予想していた。

……しかし、ナイフがアルニカへ届くことはなかった。
気づいた時、男はナイフを持った右手を押さえられ、突進の勢いも殺されていた。

アルニカの隣に立っていた一人の少年——ロアによって。

強盗の男は、何が起こったのか理解できなかった。

少女に向けてナイフを構えて、そして彼女に向かって駆け寄った。

そしてナイフが少女の体に突き刺さる…… 筈だった。

ナイフが少女に届こうとしたその瞬間、

何者かにナイフを持つ手を掴まれ、そして突進も止められた。

「な……に……？」

そして何よりも男を驚かせたのが、自分の突進を止めたのが少女と一緒にいた一人の少年ということだった。

「恥ずかしくないのかいおじさん、女の子にナイフを向けるなんて」

驚きの表情を浮かべる男の顔を見て、ロアが言う。

身長之差もかなりある。体重も倍近くあるかもしれない。

普通に考えれば、こんな子供に自分の突進を止められる筈がないのだ。

「この……ガキィ!!」

男はロアの手を振りほどくと、ナイフを逆手に持ち替えて振り上げる。

そしてロアめがけて、力の限り振り下ろした。

だが、ナイフが少年に突き刺さることはなかった。

ロアは体をゆつくりと横へ向ける。

たったそれだけの行為で、男のナイフは目標を失い、後ろにあった椅子の背もたれを切断した。

喫茶店の床に、木屑が散らばる。

「じつとしてやがれ!!」

男は再びナイフを構え、ロアへと突進する。

そして、何度も彼に向けて振りかざした。しかし、ただの一度も刃は少年に届かない。

「……あの礼儀知らずな男、ちゃんと学校に出ていたのかしら？」

アルニカがそう漏らす。

このアルカドル王国では、学校では古文や数学の他に、剣術の授業も義務づけられている。

ロア達三人も、学校で剣術を学んだ。

よほど怠けてでもない限り、ある程度は剣やナイフを扱えるようになる筈だ。

しかし、男の構えは滅茶苦茶だった。

脇は開きすぎているし、肩に力が入りすぎだ。

隙をついてくれと言わんばかりに、無駄な動きも多い。

おそらくは、学校になど出ていなかったか、もしくはサボってばか

りいたのだろう。

ロアは床に落ちていた木の棒を拾った。
先ほど、男が壊した椅子の背もたれの一部だ。
切断された断面が、鋭利に尖っている。

「ウネウネよけてんじゃねエぞ、このガキイ!!」

叫び声と共に、男は懲りずにロアに襲いかかった。そしてロアの顔面へとナイフを向ける。

ロアは表情を一瞬も曇らせずに、トン、と男の腕を少し右へと押し出す。

ロアの右頬を、ナイフがかすめていった。

男が向き直った瞬間、男の眼前には鋭利に尖った棒の先が突き付けられていた。

「あ、ああ……」

腰の力が抜けて、男はその場にへたり込んだ。

「こ、こんなガキに……」などと呟いている。

「ロアに勝てるわけがないのにな」とルーノ。

アルニカは、

「本当よね。だってロアは、剣術だけは大人顔負けの才能の持ち主だもの」

【キャラクター紹介 01】 “ロア”

【種族】人間

【性別】男

【年齢】14歳

【髪色】ミディアム・ブラウン

アルカドール王国のとある小屋に一人で住む心優しい性格の少年。
孤児院出身であり、両親の所在は不明。

生活保護を受けながら、近所の果物屋でアルバイトをして暮らしている。

大人顔負けの天才的な剣術の才能の持ち主であり、習得難易度の高い高等剣術、「アルヴァ・イーレ」を習得している。

アルニカ、ルーノとは幼い頃からの仲で、今でも三人でいることが多い。

第4章　手紙

店に乗り込んできた強盗二人組みをアルカドールの騎士団へ引き渡して、

三人は再び城へと向かっていた。

多少予定は狂ったが、とりあえず時間を潰すことは出来たようだ。

「にしても、あのアルニカの踏みつけはすごかったな。あの強盗、足の骨にヒビ入ったんじゃないかな？」

笑い混じりにロアが言う、アルニカは両腕を組んで、

「ふん、あんな礼儀知らずな連中には妥当な制裁よ、ね、ルーノ？」

「まあな、あの店には獣人族もいたのに、平気で『メス』なんて言葉を使うヤツらだからな」

「メス」や「オス」などという言葉は、獣人族には差別用語である。どうやら、アルニカはまだご立腹の様子だ。

動物のように言われたことに腹を立てているらしい。

何かに気付いたのか、アルニカはロアの方を向いて、

「そついえばロア、王女様からの手紙は持ってきてる？」

「ん？」ロアはポケットから白い小さな封筒を取り出して、

「ああ、これでしょ？」

ロアは封筒を開いて、中から一枚の便箋を取り出す。
そこには、この国の王女の子が書き連ねてあった。

親愛なるロアへ

急で申し訳ありませんが、とても大切な話があります。

次の土曜日の12時に、アルニカとルーノと共に城へ来てくださ
い。

お待ちしています。

——ユリス。

「にしても……どうしてオレとアルニカまで？」

とルーノ、アルニカは「うんうん」と頷く。

ロアは少し考えてから、

「まあ、行ってみればわかることさ」

手紙をポケットへしまうと、再び歩き始める。

アルニカとルーノもそれに続いた。

アルカドール城の玉座には、一人の少女が腰掛けていた。

薄紫色のドレスを身に纏い、その首には何かの花をあしらった首飾
りがかけられている。

長く美しい金髪、澄んだ瞳、彼女からはどこか神々しさすら感じる。

しかしながら、「王女」と呼ぶには若すぎるかもしれない。
だが真正正銘、この少女こそがこの国の王女なのだ。

玉座の間の扉が開かれ、一人の鎧に身を包んだ兵士が入ってくる。

「女王陛下、失礼します!!」

天井の高い玉座の間に、兵士の声が響き渡る。

「どうしました？」

と、王女は兵士へ問いかける。
兵士は、

「女王陛下に会いたいと言う子供が三人、城の前へ来ています、
いかなされますか？」

「『子供が三人』……ロア、来てくれたのね」と王女は心の中で
呟いて、

「通してあげて下さい、私の友人達です」

と、答えた。

【キャラクター紹介 02】 “アルニカ”

【種族】人間

【性別】女

【年齢】14歳

【髪色】オレンジ

ロアの友達の子。肩まで伸びたオレンジ色の髪と左前髪の髪留めが特徴。

快活で明るい性格の持ち主で、他者を思いやる優しさを持つ。

裁縫や料理など、少女らしい事が得意。レストランで給仕の仕事をしながら、料理の勉強をしている。

将来は、自分のレストランを持つことが夢らしい。

武器は主にツインダガーを使い、パワーの低さを手数でカバーする剣術、「エレア・ディーレ」を習得している。

ロアには及ばないものの、その剣の腕は高く、学校内でも一、二を争う。

ロア同様、両親の所在は不明である。

第5章　～王女ユリス～

城の衛兵に案内されて、ロア達は玉座の間へと通された。

衛兵が大きな扉を開けながら、「どうぞ、王女様がお待ちです」とロア達に促す。

三人は玉座の間へ入る。すると、玉座に腰掛けた美しい少女が挨拶した。

「よく来てくれましたねロア、アルニカとルーノも……」

「久しぶりだねユリス、元気だった？」

赤い絨毯の上を歩きながら、ロアが答える。

ロアが口にした「ユリス」という名前、これが王女の名前だ。

「はい、皆も元気そうで」

王女ユリスは16歳、ロア達より二つ上だ。

何故こんなに若くして国を治める立場にあるかというと、前女王が亡くなり、

順当にいつて唯一王家の人間であつた彼女が王位を継ぐこととなつたからである。

王座に着いて以来、ユリスは、民主主義を方針に掲げてこのアルカドール王国を動かしてきた。

奴隷制度を廃止し、身寄りのない子供達のために孤児院を開設したり。

時にはその足で施設へと趣き、彼女自ら親のいない子供達を励まし

たりしていた。

彼女自身の美しさと慈愛に満ちた性格もあり、国民からは絶大な支持と信頼を受けていた。

「王女様、今日はどういったご用件で私達を？」

アルニカがユリスに問う。

「そうでしたねアルニカ、では早速本題へ入りましょう」

少し間を開けて、ユリスは話し始める。

「三人とも、『魔族』という種族のことを聞いたことはありますか？」

「……『まぞく』？」

初めて聞く言葉に、ルーノは首をかしげた。

「……ロア、聞いたことあるか？」

「んー、学校の授業でちょっと聞いたことがあるけど、詳しくは……」

どうやらロアとルーノは知らないようだった。

やはり説明すべきか、とユリスは口を開こうとする。

「私は聞いたことがあります」

アルニカがそう言う。皆の視線がアルニカへと向く。

「『人間』、『獣人族』、『竜族』、そのいずれにも属さない、かつて闇の力から生み出されたと言われる四つ目の種族ですよね？」

ユリスは頷いて、アルニカの言葉に補足する。

「その通りですアルニカ。そして魔族は数十年前、大軍勢を率いて三つの種族に戦争を仕掛けました」

「数十年前」、「戦争」、二つの言葉がロアとルーノの頭の中に、ある言葉をよぎらせた。

「それって……」ロアが言う。「……もしかして……!？」ロアの後にルーノが言った。

「そう、後に『第一次アスヴァン大戦』と呼ばれることとなる事件です」

「第一次アスヴァン大戦」、それは数十年前程遡り、ロアやアルニカが生まれる前に勃発したアスヴァンの歴史の中でも大きな戦争である。

この戦争は、闇の大魔導師によって生み出された四つめの種族、「魔族」によってもたらされた。

「人間」、「獣人族」、「竜族」、三つの種族は手を取り合い、「魔族」の侵攻に立ち向かったが、「魔族」の力は予想より遥かに強大だった。

大地を埋め尽くす程の「魔族」の大軍勢により「人間」と「獣人族」は次々とその尊い命を落とし、

「魔族」が生み出した翼を持つ魔物によって、「竜族」も次々と散っていった。

しかし、三つの種族も負けてはいなかった。

無数の軍勢を差し向けてくる魔族に、三つの種族は知恵と団結力で立ち向かい、互角と呼べる戦いを繰り広げていた。

そして、140日に渡るアスヴァンの命運を懸けた戦いは、三つの種族の勝利という形で終焉を迎えた。

——多くの人々の命と、街の破壊、そして当時のアルカドル国王、「第12代アルカドル国王」の命という、余りにも重すぎる代償と引き換えに……

「『魔族』は滅ぼされ、この世界には平和な時代が訪れました」

玉座の間の窓からは日の光、そして鳥のさえずる声が聞こえてきた。戦争の時代には、鳥の鳴き声に耳を傾けることなどとは無縁だっただろう。

ユリスは続ける。

「この平和は、多くの犠牲と引き換えにもたらされた、かけがえのないものです」

ユリスは三人の方へ向き直る。

その表情は真剣だった。

「しかし今、この平和が再び脅かされそうとしているのかもしれないのです」

「……どういうことだ？」

ルーノがそう聞いた。

ユリスは、

「数日前、私の心が感じたのです、『魔族』が今、力を取り戻しつつあることを……」

ユリスの言葉は耳を疑うものだった。

ロア達の表情に驚きが浮かぶ。

「『魔族』は戦争で滅ぼされたのではないのですか？」

アルニカが聞く。

「私もそう思っていました、しかし私の心に確かに映ったのです、間違いなくあれば、『魔族』の姿でした……」

アルカドールの王族は、代々悪しき物を感じる力を持っていた。王族であるユリスも、もちろんその力を有している。

「『魔族』が復活すれば、彼らは再び戦争を起こそうとするでしょう、それだけは絶対に避けなければいけません」

その言葉を言い終えると、ユリスはじっとロアの目を見つめた。

「……ロア」

「なに？」

ロアが返事してから少しだけ間を開けて、

「あなたにお願いしたいのです、『魔族』の根源を断つ役割を……」

「……………え？」

たった一文字、ロアは間の抜けた返事を発した。

「魔族」は闇の力を糧とする種族だ。

闇の力が供給されればいくらでも生み出すことができ、そのままでは滅ぼすことは不可能だった。

「魔族」を滅ぼすには、闇の力の根源を断たなければならない。

第一次アスヴァン大戦の中、三つの種族はその結論に至った。

そして彼らは、魔族を生み出した暗黒なる王、「ハードウラス」こそが闇の力の根源であることを突き止め、これを討ち取った。

闇の根源は倒され、闇の力は永久に断ち切られたはずだった。

しかし、それは間違いだった。闇の力は断たれてなどいなかったのである。

「それなら、本当の闇の根源で一体何なんだよ？」

腕を組みながらルーノが言う。

「……わかりません、ただ一つ言えることは、滅ぼされたと思っていた『魔族』が、徐々に力を取り戻しつつあるということですよ」

ユリスは続ける。

「ロア、改めてあなたにお願いしたいのです。魔族の根源を断ち切り、この世界の平和を保つては頂けませんか？」

ロアは戸惑っていた。急に「世界の命運を背負え」などと言われても、軽々しく首を縦に振れる筈はない。

アルニカは、

「でも王女様、どうしてロアのですか？　ロアはただの子供ですよ？」

アルニカの意見にユリスは首を小さく横に振って、

「いいえアルニカ、ロアの剣術の腕はあなたも知っているでしょう？」

確かに知っている。先ほど、喫茶店で強盗を返り討ちにしたばかりだ。

ロアが大人顔負けの剣術の才能の持ち主だということも知っている。

「この国は今、先のアスヴァン戦争で多くの兵士を失い、弱っています。万が一の時の為に、騎士団を遠くへ行かせることはできないのです」

アルカドル王国の治安維持は騎士団が行う。

戦争で兵士が減っている今、騎士団を遠くへ行かせたらこの国は丸

腰になってしまうのだ。

治安維持を行う組織がいなければ、犯罪も増えるだろう。

ユリスはロアの方へ歩み寄り、

「ロア、あなたにしか頼めないのです。この世界の平和を守る役割を、どうか……」

そう言ってユリスは小さく頭を下げる。
暫くロアは黙っていた。

「……ユリス、一日だけ考える時間をもらってもいいかな？」

それがロアの返事だった。

ユリスは小さく頷いて「わかりました。待っています」と答えた。

「じゃあ、明日の朝にまた来るから」

そい言い、ロアは玉座の間から出て行った。

ルーノもロアに続く。

アルニカは、ユリスにペコリと一礼して二人に続く。

「アルニカ、ルーノ、お待ちを」

不意に、出て行こうとしたアルニカとルーノをユリスが引き留めた。

【キャラクター紹介 03】 “ルーノ”

【種族】 獣人族

【種別】 兎

【性別】 男

【年齢】 14歳

【毛色】 コバルトブルー

ロアの友達で、兎の獣人族。見た目は背の小さい二足歩行の青い兎。マイペースで、基本はへそ曲がりな性格だが、内面は真っ直ぐでいいヤツ。

兎の獣人族の特性として優れた脚力を持ち、戦闘時にはこの脚力を活かして変幻自在に飛び回る剣術、「イルグ・アーレ」を駆使する。家は鍛冶屋で、父親と二人暮らし。

第6章　く仲間く

「今日は、風がないな」

宵闇、屋根の上に立つロアは一人呟く。

ごろん、と寝そべって無数の星が輝く夜空を見つめる。

《あなたにしか頼めないのです、ロア……》

ロアの頭の中に、昼間のユリスの言葉が蘇る。

「いきなりそんなこと言われてもなあ……」

ユリスの前では言えなかった本音が、言葉となって現れた。

そう、本当は不安だった。昨日までは誰とも変わらない日常を送っていたただの少年だったのに、

今日という日を境にそうではなくなった。

そもそもどうして、自分が選ばれたのだろうか？

大人顔負けの剣術の才能を持っているから？　では強くなったのが間違いだったのだろうか？

「魔族の根源を断ち切る」、それが簡単ではないことは分かっている。

それを引き受けた時、もうこれまでの日常には戻れないことも。

魔族の居城へ乗り込むことになるのだ、命を落とすことだってあるかも知れない。

「別に……僕じゃなくてもいいよね」

自分なんかが世界を背負う必要はない、これは僕の仕事ではない。
真に世界を背負うべきは、自分よりももっと強い人間だ。

ロアはそう自分に言い聞かせる。

「ユリスには悪いけど……しょうがないや。やっぱり断ろう」

そう一言発して、ロアは立ち上がる。

そのロアの言葉は、誰にも聞かれずに夜の闇へ消えていく筈だった。

「お前、そんな意気地なしだったのか？」

後ろから聞こえた声に、ロアは振り向く。

満月に照らされて、一人の獣人族の少年が立っていた。

薄暗くてわかり辛いが、青い毛並みをしている。

「……ルーノ？ 何でここに……？」

「ロアがシヨボくれてるだろうと思って、励ましにきてやったのさ」

ルーノは、ロアが考え事をする時は屋根の上に上がっていることが多い事を知っていた。

ロアはふと気づいた。ここは屋根の上なのに、ルーノが梯子を上がった音が全く聞こえなかったことを。

「ルーノ、お前どうやってここに上がったんだ？」

「ん？ ジャンプして」

……あーなるほど、とロアは心の中で呟く。

ルーノは兎の獣人族だ、その脚力は人間の10倍ある。

一階建てのロアの小屋の屋根に上がることなど、造作もないことだろう。

「で、結局どうすんだ？ ユリスへの返事……」

「……」

星空を見ながらルーノが問いかける。

隣に座っているロアは口ごもっていた。

ロアの表情は不安に満ちていた。

「……ああ」

ロアが返事する前に、ルーノが口を開く。

「そついや断るつもりだったんだっけか？」

ルーノはロアの方を見る。

ロアは何も言わずに、小さく頷いた。

ふー、とルーノはため息をつく。

そして屋根の上にごろんと仰向けになった。

二人の間に、少しの沈黙が訪れる。

「……ロア」

ルーノがロアを呼ぶ。

ロアはルーノと目を合わせた。

「この国を見捨てるのか？」

「……えっ？」

予想もしていなかったルーノの言葉、
ルーノはロアの返事を待たずに、

「お前、この国のおかげで今まで生きてこられたんだろ？」

確かにルーノの言う通りだ。

孤児だったロアを、この国は保護してくれた。学校へも行かせてくれた。

もしもそれがなければ、きっとロアは今ここにはいなかっただろう。

「また戦争が始まったら、このアルカドールも戦地になるかも知れないんだぜ？」

そんなことはわかっていた。

そしてこの国が戦地になれば、アルカドールは戦火に沈むかも知れないことも。

家や城は壊され、木々は倒され、花畑は踏み荒らされ、そして罪もない人々の血が流されるということも。

「……ぐっ……！！」

感情が声となって漏れ出した。

ロアは拳をぐつと握る。

「それなのにお前は、この国を見捨てるのか？　この国への恩を仇で返すのか？」

「……そんな事はわかってる！！」

黙っていたロアが、声を上げた。

「だったらルーノ、君はこの世界を背負えと言われたら、軽々しく頷けるのか！？」

頷けるはずはないだろう。

この世界の命運を背負うと言うのは、相当な重圧だ。

ロアはその重圧に耐えられないのだ。

そんなロアには、ルーノは自分のことなど所詮他人事と思っているようにしか思えなかった。

「他人事だと思って、軽々しく言わないでくれ！！」

ロアはルーノに背を向けた。

今は一人になっていたかった。

ルーノは何も答えない。

きつともう帰ったのだろう、ロアはそう思った。

その時、ロアの右肩に何かが触れた。

青色の毛が生えた手……ルーノの手だった。

「……他人事だなんて思っちゃいないさ、少しは友達を頼れよ」

「え……」

そのルーノの表情は、優しい表情だった。

「ロア、何でもかんでも一人で抱え込むな、お前が重い荷物を背負ってんなら、オレも一緒に持ってやる」

そのルーノの言葉が遠まわしになにを意味するのか、ロアには容易に想像がついた。

「ルーノ、まさか……」

ルーノはロアの目を見ながら頷いて、

「オレもお前と一緒に行く」

その言葉が何を意味するのか理解した上で、ルーノはそう言った。

「な……！？」

ロアは耳を疑う。

聞き間違いでないのなら、ルーノは「オレもお前と一緒に行く」と言った。

冗談かと思ったが、ルーノの目は冗談を言っている目ではなかった。

「ルーノ、遊びに行くわけじゃないんだぞ！？」

ルーノはじつとロアの目を見つめていた。

ロアは続ける。

「危険な目に遭うかも知れない、命を落とすことだってあるかも知れない、それに……」

「わかってる」後ろから発せられたその声に、ロアは振り向く。この声はルーノが発したものではなかった。

「けどもう決めたのよ」

梯子を上って、一人の少女が屋根に上ってくる。

オレンジ色の髪、彼女が誰なのか、ロアはすぐにわかった。

「ね、ルーノ？」

その声の主は、アルニカだった。
ルーノは頷く、ロアは、

「アルニカ、君まで何を……」

「だって、ロアを一人にしたら危なっかしいでしょ？ ロアって基本ドジだし……だから、私とルーノも一緒に行くことに決めたのよ」

わかってない、この二人は何もわかってない。ロアはそう思った。
危険な旅になるとわかっていて、どうして軽々しく「一緒に行く」と口に出来るのだろうか。

「アルニカ、ルーノ、君たちは何もわかってない！！ 君たちまで危険な目に遭うことはないんだよ……」

ロアは、ルーノとアルニカを巻き込みたくなかった。

これは本来、自分だけが背負う重荷の筈。

この二人には、これまでと変わらない日常を過ごして欲しかった。

「僕を心配してくれているのはわかる、もうそれだけで十分だから……」

ロアのセリフは、ただ強がっているだけのセリフだった。本当は不安で、心の底では救いを求めている。

ロアと長い付き合いのアルニカとルーノには、そんなことはお見通しだったのだろう。

「十分なんかじゃねえよ」

ロアの言葉を遮り、ルーノが言う。

「オレとロアとアルニカ、ガキの頃からずっと三人一緒だっただろ？ これからも一緒さ」

「ルーノの言う通りよロア。私達三人、運命共同体みたいなものじゃない」

反論する言葉が浮かんで来なかった。

自分の事をこんなに想ってくれているのだ、反論しても、この二人を説得することはできないだろう。

「それにロア、私達もロア程じゃないけど剣は扱えるのよ？ 足手纏いにはならないわ」

それは知っていた。

アルニカはツインダガーを使い、手数が多い剣術「エレア・ディーレ」を駆使する。

ロアには及ばないが、彼女の剣の腕は学校の同年代の少女たちの中でもトップクラスだ。

ルーノは、その小さな体と兎型獣人族が有する発達した脚力を活用し、変幻自在に飛び回る剣術、「イルグ・アーレ」を会得している。仲間としては、二人とも頼もしい存在だろう。

「だからロア、一人でウジウジ悩んでないで、いい加減私達を頼りなさい？」

「アルニカ……」

ロアはもう何も反論しなかった。

アルニカとルーノ、この二人の好意を素直に受け入れることに決めた。

「……わかった」

この二人が友達で良かった、ロアは思った。

「二人とも……ありがとう」

そのロアの言葉に、アルニカとルーノは小さく微笑んだ。

第6章　く仲間く（後書き）

人物の心の葛藤というものはなかなか書きづらいです。

文才のない初心者の自分には表現しきれているとは思いませんが、全力で書きました。

ベテランの方からのアドバイスや、感想を待っています。

第7章　く旅立ちの朝く

夜が明けた朝、アルカドール城の玉座の間。

玉座に腰掛けたユリスと、彼女に向き合う位置に立つロアとアルニカ、そしてルーノ。

三人は肩掛けカバンをさげていて、ロアとルーノは剣、アルニカは二本の短剣、ツインダガーをそれぞれ皮製の鞘に入れて、腰に下げていた。

どれも、各々が使い慣れた武器である。

「……それではロア、アルニカ、ルーノ、本当によろしいのですね？」

王座から立ち上がり、ユリスが三人に問う。

三人はなにも言わずに、小さく頷いた。

ロアは昨日の、ユリスからの申し出を受けることに決めた。その旨を令、ユリスに伝え終えた所なのだ。

「……わかりました。アルカドールの王女として、出来る限りの助けはいたします」

ユリスは三人の元へ歩み寄りながら、

「ロア、あなたにこれを……」

ユリスは右手に何かを握っていた。ロアは手のひらを差し出す。シヤラン、という音と共に、何かのペンダントがロアの手の上に落ちる。

手にとってみると、銀色のチェーンの先に小さな無色透明の水晶がついていた。

「これは？」とロアは問う。

「王族の力が込められた、魔の力を感じる石です。闇の力を感じると、つまり魔族が近づくとその石は紫色の光を発します」

つまり、この石を持っていれば王族のように魔族の力を感じることが可能になるということだろう。

ロアは、ペンダントを首から下げた。

ユリスは続ける。

「あなたたちには、まず最初にベイルークの塔へ向かって頂きます」

「ベイルークの塔？」

その地名に、ルーノが疑問を抱いた。

「今となってはもはや廃墟のあの塔になにがあるんだよ？」

そう、「ベイルークの塔」とはアルカドル王国の南に位置する塔で、

以前は魔法使いが住んでいたと言われている。

しかし、いつしかその魔法使いは塔を捨て、別地へ移っていった。以来、誰も塔を訪れることはなく、数十年に渡って放置されていた。

「……あの塔から、魔族の力を感じるのです。それも一際大きな力

を」

その言葉に、アルニカがある可能性を見出した。

「ということは、もしかしたらその塔に『魔族』の根源が……？」

ユリスはアルニカの目を見て頷き、

「その可能性はあります」

「魔族」の根源がわからない以上、可能性があるのならあたっておくべきだろう。

地理についての知識があつたルーノは、

「ベイルークの塔なら、ここから二日はかかるな……」

「え、そんなに遠いのか？」

ユリスは、

「塔へ向かう途中に、ラータ村という小さな村があります。食糧や水はそこで補給できるのでしょう」

「ラータ村か……」

ロアがそう呟く、ロアはこの地名に覚えがあつた。

「ロア、知ってるの？」

「うん。前に果物屋の仕事で仕入れに行ったことがあるんだ」

宿もあつたし、あの村なら休憩場所に最適だろう。

ロアはそう思った。

「それからもう一つ、ラータ村に「イルト」という兎の獣人族の子がいます。彼と合流してください」

その名前は、三人とも聞いたことがなかった。

「その人は誰ですか？」アルニカが問うた。

「私の側近の子です。彼をあなたたちと同行させます、彼にもそのことはすでに伝えました」

ロアが、その「イルト」という人物についての特徴を聞く、
ユリスによると、彼はルーノと同じ兎型の獣人族で、毛並の色は白。
両手首に金色の腕輪をつけていて、水色の水晶のペンダントをつけているという。

ユリスの側近ということだけあつて、剣の腕はかなりのものとのことだ。

「それじゃあ、その人と合流すればいいんだね？」

「はい、彼ならきつと、あなたたちの力となってくれるでしょう」

そう言うと、ユリスは両手を合わせて、

「それではロア、アルニカ、ルーノ、旅の無事を祈ります」

「わかった。それじゃあ行くよユリス」

ロアはユリスに背を向け、玉座の間の扉へと足を進める。
アルニカとルーノも、それに続いた。

【キャラクター紹介 04】 “ユリス”

【種族】人間

【性別】女

【年齢】16歳

【髪色】ハニーゴールド

アルカドール王国王女、16歳という若さでありながら国を治める立場にある。

背中まで伸ばした美しい金髪と、宝石のように澄んだ瞳が印象的。その民主主義の政治方針は国民から多大な支持を受けており、子供達や大人、種族関係なく幅広い年代から信望を集めており、その信頼は厚い。

王女という立場であるために、少女でありながら剣術の腕はかなりのものだが、

彼女自身が戦いを好まない性格の為か、彼女が戦う所を見たことのある人は少ない。
王族の人間だけが扱える、代々引き継がれてきた聖剣の継承者である。

第8章　く旅路く

アルカドールの正門、両端には二人の衛兵が槍を片手に立っていた。ロア達が門へ近づいて行くと、右にいた衛兵が「君、通行許可証を見せたまえ」とロアに一言。

ポケットから四つ折りにされた一枚の紙を取り出し、衛兵に手渡す。

衛兵はそれを広げる、「通行許可証」という見出し、

その下に「右の者達のアルカドール正門通行をここに許可する」とある。

その右に、「ロア」、「アルニカ」、「ルーノ」と名がある。

アルカドールの朱印も押されていた。

「……よかるう。君たち、通りなさい」

衛兵が三人へ告げた。

門をくぐると、三人の前には道があり、その脇に草原が広がっていた。

花の側には蝶が飛び、水の流れる音も聞こえる。近くに小川でもあるのだろう。

「そつえば私……アルカドールの街の外に出るのっていつ以来かなあ……」

アルニカが言った。

ふと考えてみると、アルニカは小さい頃以来城の外へ出た記憶がなかった。

「まあ、アルニカは僕やルーノと違って仕事で城の外へ出ることもないからね」

そうロアが答えた。

ロアは果物屋、ルーノは父親と共に家の鍛冶屋で仕事をしている。果物屋で働いているロアは果物の仕入れで、ルーノは鉱石や石炭の仕入れで街を出ることがあった。

「レストランで仕事してるんだし、無理もないだろうな」

とルーノ。

彼の言う通り、アルニカはある小さなレストランで主に給仕の仕事をしていた。

少なくとも、仕事で街の外へ出る機会はなかっただろう。

「さて、暫く歩くことになるな」

地図を広げて、ロアは大体の現在地を指で差した。
アルニカとルーノはそれを覗き込む。

「どれくらい歩くことになるの？」

アルニカがそう聞く。

ロアは、

「今僕たちがいるのが大体こちらへんだろ？」

そして指を動かして、今度はベイルークの塔を差した。

「ベイルークの塔、ここが目的地だ。そして途中に……」

ロアはまた指を動かす。

指が止まったところには、ラータ村と書かれた小さな村があった。

「ラータ村……この村に、王女様の言っていたイルトって人がいるのね？」

「そう。まずはこの村へ行ってその人と合流する」

「はあ、獣人族の体力でもラータ村まで歩くのはさすがにこたえるな……」

ルーノがそうぼやいた。

草木を眺めたり、鳥の鳴く声を聴いたりしながら、三人はラータ村へと足を進めていた。

街からあまり出たことのないアルニカは、珍しげにあたりを見回している。

「わー、こんな花初めて見たなあ……」道脇に咲いていた花を見たアルニカが小さくつぶやく。

歩き始めて数時間経っただろうか、夕焼けの太陽が辺りをオレンジ色に映し出していた。

ロアとアルニカの表情には疲れが出始めていて、かすかに息切れしていた。

「どうした二人とも、もう疲れたのか？」

それに気づいたルーノが二人に問いかける。ルーノには全く疲れた

様子はない。

「うん、少し……」

そう答えて、ロアは肩掛けカバンから水筒を取り出して、キャップをはずし、口をあてる。

ロアの乾いた喉を、冷たい水が潤していく。

「ルーノ、私も……」

ロアに続いて、アルニカが言った。

ルーノは腕を組んで、

「おいおい、オレはあと三時間は歩けそうだぞ？」

「……あたりまえでしょ？　だってルーノは獣人族だもの……」

額の汗をぬぐい、むっとした表情でアルニカが言った。

そう、ルーノは獣人族だ。獣人族は様々な動物の姿とその特性を持つ種族。

ルーノは人間のロアやアルニカよりも遥かにスタミナがあるのである。

「やっぱりうらやましいな、獣人族って」

ロアが言った。確かに獣人族の身体能力に憧れる人間は多い。

「だけどいいことばかりでもないんだぜ？　……身長とかな」

ルーノが言う。低い身長は彼の悩みの種でもあった。

兎型の獣人族は、成長しても必要以上に身長が伸びないのである。同じ14歳のロアとアルニカの身長が155センチ前後あるのに対し、ルーノは120センチ程しかない。

「熊とか狼の獣人族に生まれてきたかったな……」

はあ、とルーノはため息をついた。

そんな会話を交わしたり、時に休みながら歩いて、また数時間経った。

先ほどまでオレンジ色に輝いていた太陽は沈み、辺りは暗くなっている。

暗闇を歩き続けるのは危険だったので、三人は茂みの中で野宿をすることに決めた。

落ちていた木の枝をかき集めて、火を燃やす。

ルーノは寝袋を敷いて、横になった。

「……お腹すいてきたな」

そういえば、晩ごはんがまだだった。

ロアは、持参したパンを取り出そうとカバンの中を探る。

「ロア、ちょっと待って」

それをアルニカが制した。

「何？ アルニカ」とロアがアルニカに聞く。

側で横になっていたルーノも、アルニカへ視線を向ける。

アルニカはカバンの中からフライパンを取り出す。

まかせて、と言わんばかりの表情を浮かべながら、

「晩ごはんなら私が作るから、ロアとルーノは休んでて」

第9章 胸中

「では彼らを……行かせたのですか!？」

アルカドール城の一室に、その声が響く。

声の主は若い男、そして彼が声を向けていた相手は、

「ユリス様!!」

アルカドール王国王女、ユリス。

彼女は16歳の若さにして王位を継いだ少女だ。

窓から眺めていた三日月から、男性の方へ視線を移す。

シャラン、と彼女の首飾りが音を鳴らす。

「彼らしかいなかったのです、ロディアス……」

「し……しかし……!! 彼らはまだ三人とも14歳の子供ですよ!？ あんな年端もいかない子供達に……」

そこまで話して、男は言葉を詰まらせる。

この男の名はロディアス、アルカドール騎士団団長、ユリスの教育係であり、そして友人でもある。

自分より年下の少女に敬語で話しているのも、立場上の理由からだ。

「ロディアス、ロアはただの子供ではありません」

確かに知っていた。ロアが大人顔負けの天才的な剣術の持ち主だということも、

彼が14歳の若さにして、高等剣術「アルヴァ・イーレ」を習得し

ているということも。

しかし、剣術の腕があるからといって、闇の根源を断つ役割をこなせるのは、

彼に世界の命運を背負わせるのは、あまりにも荷が重すぎるのではないだろうか。

「それに、ロアには仲間がいます。アルニカ、そしてルーノ……彼らはきっと、ロアを助けてくれます」

アルニカ、ルーノ。ロディアスは彼らが幼かったころから二人を知っていた。

アルニカは、優しさと強さを兼ね備えた少女で、他人のために自分が痛い思いをすることを決して厭わない子だった。

ルーノはへそ曲がりだったが、ロアとアルニカとは種族の違いという壁を超えた仲だった。

彼ら三人は、幼い頃から一緒にいた。三人で剣術の稽古に励んでいたこともあった。

おそらくロア達は、自分には理解できない絆を持っているのだろう。ユリスは続ける。

「もしもの時の為に、イルトを彼らと同行させることに決めました」

「……イルトを……!？」

その人名は、ロディアスはよく知っていた。

ロディアスと同じく、ユリスに仕える獣人族の少年である。

イルトは強い、彼はきっとロディアスとも互角に戦えるだろう。

「イルトが共にいれば、ロア達は大丈夫でしょう。そしてロディア

ス、私達にも成すべきことがあります」

「それは？」

ユリスは再び、窓に視線を向ける。

「このアルカドール王国を……完全に復興することです」

数十年前の戦争で、この国は弱っていた。

兵が減り、民の心には戦争の傷跡が深く刻まれている。

戦争で親や住む場所を失った子供も大勢いるのだ。

もしも再び戦争が繰り返されるようなことがあれば、この国は滅ぶことになるだろう。

その為にも、一刻も早くこの国を復興し、そして闇の根源を断たなくてはならない。

「（ロア……）」

ユリスは心の中で、この国の、そしてこの世界の命運を託した少年の名を呼んだ。

【キャラクター紹介 05】 “ロディアス”

【種族】 人間

【性別】 男

【年齢】 35歳

【髪色】 ココア・ブラウン

アルカドール王国騎士団団長。孤児院出身であり、4歳の頃に当時のアルカドール国王に城に引き取られた。以降、アルカドール国へ忠誠を誓い、ユリスの教育係としてイルトと共に彼女に仕えている。

アルカドール王国騎士団団長の名に恥じない強さを持ち、使用する武器は主に長剣だが、弓や槍の扱いも得意とする。

第10章　く夜会く

「……アルニカ、これものすごくおいしいよ!!」

ロアが言う。

彼の左手には器、右手にはスプーン。

器には、アルニカが作ったシチューが入っていた。

人参に香草にジャガイモ、それに鶏肉が入られている。

「ありがとうロア、そう言ってくれるとうれしいわ」

そう言いながら、アルニカはもう一つの器を取り、それにお玉でシチューを注ぐ。

「はいルーノ、熱いから気をつけてね」アルニカはシチューを注いだ器をルーノに手渡した。

「ん、どうも……」

ルーノは器を受け取り、じーっと中のシチューを見つめている。彼の顔には「変な物が入ってないだろうな?」と言わんばかりの疑い混じりの表情が浮かんでいた。

「どうしたルーノ、食べないのか? お腹減ってないのか?」

そんなルーノを見て、ロアが声をかけた。

「いや、腹は減ってるんだけど……」とルーノは答える。

「心配しなくても、獣人族が食べられない物は材料に使ってないわよ?」

自分の分のシチューを注ぎながら、アルニカがルーノに言った。
ルーノは、

「……なあ、アルニカ」

「何？」

視線を目の前のシチューから、アルニカの顔に向けて。

「このシチューには……芋虫は入ってないよな？」

「……………は？」

たった一言だけ間抜けた返事を発して、アルニカは固まっていた。
聞き違いでなければ、ルーノは「芋虫は入ってないよな？」と言っ
た。

普通に考えて、そんな物が入ってるはずがない。

「な、何言ってるんだルーノ？」

ロアがそう聞く。

ルーノは今度はロアに視線を向けて、

「小さい頃だったんだけど、オレ、アルニカが作ったスープ飲んだ
んだよ……」

何年前の話かは定かではないが、アルニカはルーノを食事に招待し
た。

そしてアルニカは彼に自分が作ったスープをもてなした。

そのスープは見た目はおいしそうで、食欲をそそられた。

具材の野菜と一緒に一口口に入れて、

ルーノは何かこりこりとした食感のものが入っていることに気づく。スープに混ざって味はよくわからなかったが、かすかに苦い味がしたのを覚えている。

スープに入っていた、その「苦くてこりこりした何か」を不快に感じたルーノは、

洗面場を借りてそれを吐き出した。

それは緑色の液体に混ざった、何かの残骸だった。

その残骸が芋虫だと理解した瞬間、ルーノはアルニカの家中に響き渡る声で絶叫した。

「……………ということがあつてな……………」

「なっ……………！！　ちょ、ルーノ！！」

自らの失態を暴露されたアルニカは赤面して、手足をばたつかせる。先ほどもでおいしそうに食べていたロアは、

「まさか……………これにも！？」と言わんばかりの表情を浮かべていた。

「し、しょうがないでしょ！？　あの頃はまだ料理なんてしたこともなかったし……………！！　てか、そんなの何年も前の話じゃない！！」

まさか故意に芋虫を入れたわけではないだろうが、あの出来事はルーノにはトラウマものだった。

「ロア、変な味とかしなかったか……………」

「あ、ああ。僕はおいしいと思うけど……」

「だーからー、大丈夫だって言ってるでしょー!!」

恐る恐る、ルーノはシチューを一口。

口の中に、シチューの味や香草の味が広がる。

苦い味は……ないようだ。

「どうルーノ？ 芋虫なんか入ってないでしょ？」

むっとした表情で、アルニカが言う。

「ああ……てか、本当にうまいな……」

数秒前までの疑いはどこに行ったのか、ルーノはアルニカのシチューを普通に食べている。

人参や鶏肉はやわらかく、ルーの味も最高だった。

「ねえルーノ、私に何か言うことがあるんじゃないの？」

「あ、ああ……疑って悪かったな……」

数分後、夕食を終えた三人は寝袋の中に入っていた。
護身のために、武器は各々の側に置いてある。

この付近には獣が出ると聞いていたので、たき火は消していない。獣と獣人族は違う。獣にしてみれば、人間や獣人族は食欲の対象、つまり獲物なのだ。

獣人族と違い、獣は一切の感情を持っていないのである。

三人は気づいていなかった。彼らの側の木の上に、一匹の獣がいることに。

その獣が、三人に狙いを定めていることに……

火を消さずに眠りについたことは賢明だった。

もしも火を消していれば、この獣は夜の暗闇に乗じてすぐにも襲い掛かり、三人のうちの誰かが、

いや、もしかしたらロア達三人全員がこの獣の餌食になっていたかも知れない。

第11章 く急襲く

翌朝、三人はラータ村へと続く森の中を歩いていた。木が風にざわめく音と、遠くから鳥の鳴く声も聞こえる。

この森をぬければ、ラータ村まではあともう少しだ。

このまま進んで行けば、今日中には村へと辿り着けるだろう。

「ルーノ、どうかしたのか？」

今日のルーノはやけに静かだった。

何か話しても、「ああ……」としか答えない。

何かを観察しているように、じっと辺りを見回している。

「……ちよつとな……」

ロアの問いかけにそう一言だけ答えて、ルーノは再び辺りを見回す。

「どうしたんだろう、ルーノ？」

ロアがアルニカに耳打ちする。

「さあ……」

軽く首をかしげて、アルニカがそう答えた。

「うわつとー！」

不意に、ロアとアルニカの前を歩いていたルーノが立ち止まる。

ぼす、ルーノのしなやかで青い毛の生えた背中に、ロアはぶつかつた。

「ちょ……ルーノ!? いきなり止ま……」

アルニカが言いかけたのを遮り、
ルーノは人差し指を口元にあてながら、

「アルニカ、静かに……」

後ろにいたアルニカに静かにするよう促して、ルーノは二人に背を向けたまま立っている。

そのまま三人は一言も発せず、じっと立ち止っていた。
その状況が数十秒続いて、しびれを切らしたアルニカが、

「……ねえ、ルー……」

「くっ!!」

「ルーノ」と呼ぼうとした瞬間、背を向けていたルーノがいきなり振り向く。

アルニカの方へ手を伸ばしたと思うと、ぐっと彼女の手首をつかんだ。

そして力の限りに彼女の腕を引っ張って彼女に膝をつかせ、自らも姿勢を低くする。

次の瞬間、ガサツという草がざわめく音と共に、
巨大な影がアルニカの真上を飛び、そして草木が生い茂った森の中へと消えていった。

「っ！！」

脇にいたロアは、腰に下げていた剣を抜く。
そして影が消えた方を見るが、そこには何もいない。
ひとまずロアは、アルニカの元へ駆け寄った。

「アルニカ、大丈夫！？」

「え、ええ……ルーノのおかげで……でも今のは何……？」

ロアが手を貸して、アルニカは立ち上がった。
ルーノも腰の鞘から剣を抜いて、

「ちっ、やはり気のせいじゃなかったか……！！」

周りの様子に気を配りながら、そう言った。
ルーノはロアとアルニカの方へと振り向いて、

「ロア、アルニカ、走れ！！ここを離れるぞ！！」

二人に走るように促して、自らは駆けだす。
ロアとアルニカもルーノに続いた。

走り続けて数分経っただろうか、気が付くと森を抜けていた。
そこは崖の上で、下には川が流れているようだった。

「はあ、はあ……ルーノ、あの化け物は……？」

息を切らせながら、ロアがルーノに聞いた。
ルーノは、

「ありや『グール』だな……」

「……グール……!？」

いつだっただろうか、ロアは書物でその名を目にした記憶があった。アルニカが、

「でも、グールって山の奥深くにしかないはずじゃ……」

「……理由を探ってる余裕はなさそうだ、追ってきてるぞ!」

ルーノのその言葉に、ロアは身構えた。

アルニカは腰の鞘から二本のダガーを引き抜き、両手に逆手に構えた。

そして三人は、背を向けあう体制をとる。

あの化け物はいつ、どこから来るかわからない。

しかしこれならば、少なくとも後ろから不意を突かれる心配はないだろう。

森の中から、そいつは現れた。

四本の脚、狼と豚を足したような風貌、土色の体色。

その体長はロア達よりもはるかに大きい。

口の脇には、長く伸びた犬歯がはみ出していた。

この化け物は「グール」と呼ばれている。

気性が荒い肉食動物だ。

三人を視認した瞬間、グールは巨体に似合わずかなりの速さで突進してきた。

「避ける!!」

ロアがそう叫んだ、三人はそれぞれ別の方向へと飛びのき、突進をかわす。

三人のすぐ横を、グールが猛スピードで駆け抜けて行った。あの突進を一度でも喰らえば、それで終わりだろう。

目標を失ったグールは、突進を止めて辺りを見回している。そして、一番手近にいたアルニカへと狙いを定めた。

「っ……!!」

自分が狙われていることに気付いたアルニカは、地面から一握りの砂を掴む。

次の瞬間、グールが砂埃を上げながら突進して来た。

アルニカは立ち上がると、突進してきたグールの顔に向かって思い切り砂を投げつけた。

投げつけた砂は、グールの顔面へと直撃した。

「ガアアアアアア!!」

グールは突進を止めて、暴れ馬のように体を震わせている。今あの怪物の両目には、かなりの痛みが走っていることだろう。

その隙を突いて、ロアがグールへと走り寄る。

直にこいつの目は回復する、この化け物を沈黙させるには今しかない。そう思った。

「だああああ!!」

グールの背中に、ロアは力の限りに剣を振り下ろした。

「……？」

剣がグールの背中に食い込んだ時、ロアは違和感を感じた。
手ごたえを感じない。

この化け物は、厚い脂肪にでもおおわれているのだろうか、そう思った瞬間だった。

「がッ！！」

ロアの腹部に凄まじい痛みが走った。まるで大木で殴られたような、
激痛。

それは、グールのタックルによるものだった。
視覚を奪われていても、おそらく今のロアの攻撃で場所を察知した
のだろう。

「がはッ！！」

ロアは数メートル飛ばされて、砂埃を上げながら地面へと転げた。

「「ロア！！」」

アルニカとルーノがロアに駆け寄り、彼を助け起こす。
「大丈夫か？」ルーノがそう言う。

第12章 くグール

アルニカとルーノに手を借りて、ロアは立ち上がった。まだタツクルを喰らった腹部の痛みは引かないが、骨までは折れていないだろう。

それに、痛がっている余裕などなかった。というのも、目の前の化け物の目がいつ回復して、そして襲い掛かってくるかわからないからだ。

「どうする、三人がかりでも勝てるかどうか……」

ルーノが言う。確かにその通りだった。

三対一といえど、グールのスピードと攻撃力はけた違い。それに、剣での攻撃は通じなかった。

ロア達が束でかかって、勝てる見込みは薄いだろう。

このままでは、「全滅」という最悪の結末もありうる。

「……ロア！！ ルーノ！！」

アルニカが大声で二人を呼んだ。

同時に、彼女は数メートル先にいる化け物を指で指す。

その化け物は、先ほどまで目の痛みで暴れていたグールは、完全に平静を取り戻し、三人を凝視していた。

両目が回復したのだろう。

「……ヤバいぞ」

ルーノがそう漏らした瞬間、両目を攻撃されたことで怒り狂ったグールが、
先ほどよりも大きな雄叫びを上げながら、先ほどよりも遥かに早いスピードで突進してきた。

「くっ……ロア!!」

そう叫んで、ルーノはすぐさまロアに体当たりをして、彼をグールの突進の軌道上から逸らせた。

ロアは先ほど負傷している、自分の力でグールの突進を避けるのは酷だろうと考えたのだ。

二人は地面に倒れ込んだ、そのすぐ後ろを、グールが駆け抜けていった。

そしてルーノは直ぐにグールを目で追う、グールがこちらに再び突進してくる可能性がある。

しかし、グールはこちらに向かって来てはいなかった。

グールはそのまま走り続けている。その先には……

「!!! アルニカ!!!」

地面に座り、腹部を押さえたままロアが叫んだ。

そう、グールが突進している先にはアルニカがいた。

恐らく、グールは先ほど彼女に目を攻撃されたことに怒っているのだろう。

アルニカは全力で走っているが、人間の足と獣の足ではまるで勝負にならない。

グールとアルニカの距離はどんどん縮まっていき、そしてグールがアルニカに追いつこうとした瞬間、

「たあぁッ!!」

そうかけ声を発し、アルニカは思い切り横へと飛び込み前転、グールの突進から逃れる。

グールは突進は速く、パワーもあるが、反面小回りがきかない。それにあの巨体だ、エネルギーの消費も凄まじいだろう。

アルニカは、運動神経には自信があつた。学校での持久走も、皆がへたばつていてもアルニカはまだ走っていた。

彼女は、グールにわざと無駄に突進をさせてエネルギーを消費させ、体力切れに追い込もうと考えていたのだ。

彼女は、肩掛けカバンを地面へと投げた。これでもっと身軽に動ける筈だ。

突進をかわされたグールは立ち止まって方向を修正し、再びアルニカに向かって一直線に突進してくる。

「（速くてもただ真っ直ぐ走ってくるだけ、これなら避けられる）」
アルニカは心の中で呟き、またグールの突進の軌道上から飛びのくうとした。

その時だった、アルニカは自分の側の地面に深くぼみがあつた事に気付かず、そのまま走りだす。

次の瞬間、そのくぼみに右足をひっかけてバランスを崩し、転倒した。

「うつ!!」

不意のアクシデントに、アルニカは冷静を失う。

こうしている間にも、グールは迫ってきているのだ。

慌てて立ち上がろうとした瞬間、彼女の右足に痛みが走った。

「痛っ……！！」

恐らく、今転んだ時に足をくじいたのだろう。

「アルニカ、危ない！！」

次の瞬間、アルニカの耳に入ったのはそのロアの声、そしてグールが突進してくる音。顔を上げた瞬間、アルニカの数メートル先にまで、グールが迫ってきていた。

第13章 別離

「くそっ!!」

邪魔だと感じたのか、ロアは肩掛けカバンを地面へと投げる。

そして両足に力を込めて、ロアは駆けだした。

自分の足でグールに追いつけないことはわかっている、

仮に追いつけたとしても、ロアの力ではグールを止めることなど到底できる筈はない。

しかし、今グールが突進している先にはアルニカがいる、それに彼女の後ろは断崖絶壁だ。

何もできないとわかっていても、手を拱いて見ていることなど出来なかった。

ロアは剣を握り、そして全力で走り、グールを追う。

「（頼む、間に合ってくれ……!!）」

グールはあと数メートルの距離までアルニカに接近している、もはや一刻の猶予もない。

このまま間に合わなければ、アルニカがグールの突進を喰らってしまう。

それだけでも命の保証はないのに、後ろの崖に落ちたりでもしたら、助かる見込みは恐らく無いだろう。

だが、グールの足の速さは馬以上だ。ただの人間であるロアが追いつける筈がない。

グールとロアとの距離は縮まるどころか、どんどん開いていった。

「（ちくしょう……！！）」

ロアの中に、悔しさと無力感がこみ上げる。

大人顔負けの剣術の才能など、相手が人間でなければ何の役にも立たなかった。

「これまでか……！！　ごめん、アルニカ……」走りながらそう心の中で呟いた。
その瞬間だった。

「！？」

ロアの右隣を、「青い何か」が走り抜けて行った。

アルニカは立ち上がろうとするが、くじいた右足が言うことを聞かない。

グールは怒り狂った鳴き声をあげながらすでに目前にまで迫っている。

立ち上がったところで、この化け物の突進をかわす猶予もないだろう。

「（助けて！！　誰か……！！）」

そう心の中で叫んで、突進してくるグールからまるで親に殴られる直前のように両腕で顔を覆い隠すこと。

それが、その時のアルニカにできた全てのことだった。

「うがああああああッ！！！！！」

次の瞬間、その声がアルニカの耳に飛び込んできた。
その声は、グールの鳴き声ではない。
さらにその声に混ざって、「ザザザザ……！！！」とまるで地面を
スライディングするような音。

「……………！？」

目を瞑り、両腕で顔を覆っていたアルニカは自分の目の前の状況が
わからなかった。

恐る恐る目を開けて、目の前の状況を確認する。

アルニカの目に映ったのは……

「……………！！！」

しなやかで青い毛並み、丸くて綿のようにふわふわした尻尾。

「ル……!!」

それは見慣れた後ろ姿だった。

「ルーノ……!?!」

目を疑う光景だった。

アルニカの目の前にはルーノがいた。彼はグールの上あごと下あごを掴んでいる。

グールがアルニカへ突進していた時、間一髪でその間にルーノが入り、強引にグールの突進を止めたのだ。

ルーノの両足元のえぐれた地面と、血のにじんだ彼の足がそれを物語っている。

「うぐっ……!!　　ロア!!　　アルニカを頼む!!」

両手と両足に全身の力を込めながら、ルーノはそう言った。

ロアは急いでアルニカに駆け寄り、アルニカに肩を貸して立ち上がり、彼女を安全な場所へと移す。

「ルーノ!!」

そして、ロアはルーノを呼んだ。

ルーノはロアの方を向かずに、

「ロア、アルニカ、こいつはオレが押さえておく、お前らは早く逃げろ！！」

「ルーノ、何を言ってるの！？ そんなこと出来るわけないでしょ！？」

自分が囿になってこの化け物を足止めする、ルーノはそう言っている。

だが、アルニカが反論したように、かんたんに頷ける訳がなかった。

「こいつはオレ達三人がかりでも倒せる相手じゃない、このままじや全滅だぞ！！」

ルーノがそう叫ぶ、グールはルーノに噛み付こうと、全力で顔面を前に押し出す。

ルーノはそれに両腕と兎型獣人族の持つ脚力で対抗していた。力を込めるたびに、ルーノの両足が地面にめり込んでいく。

「だけどルーノ、君一人残していくことは……！！」

「ロア！！ ここで全滅するよりいいだろ！！」

確かにルーノの言い分にも筋は通っている。

グールから逃げるのは人間の足では不可能、ならば誰かが残って足止めをし、その間に逃げるしかない。

だが、人間の力でグールを足止めすることは到底出来ないだろう。

しかし、人間よりも遥かに強い脚力を持つ兎型獣人族のルーノならば、可能だった。

全滅という最悪の結末を回避するためには、自分が残ってこの化物を足止めするしかない。

ルーノはそう考えたのだ。

「……それにロア、オレはただこいつに食われるつもりはないさ」

「え……！？」

心配した表情を浮かべるロアに、ルーノは少し微笑んだ。
グールの力が強くなってきた、もう限界は近かった。

ルーノはグールの口蓋を掴んでいた両手に思い切り力を込める。
そして、右足を上げて――

「ロア、アルニカ、後は任せるぞ」

そう言って、上げた右足を思い切り地面に叩きつける。
叩きつけた場所を起点に、ビキビキと音を立てながら地面にヒビが入り始めた。

「ま、まさか……ルーノ!!」

ロアとアルニカは、ルーノが何をしようとしているのかを理解した。ルーノはグールと共に崖から落ち、グールと共に心中するつもりなのだ。

「ダメよルーノ!!」

アルニカがルーノに駆け寄ろうとした瞬間、地面は崩れ始めて、轟音と共に砂埃が起こり、崖が崩れ始めた。崩れた岩盤が岩雪崩となり、崖を転がり落ちていく。

「うつ!!」

巻き起こった砂埃に、ロアとアルニカは思わず両手で顔を覆う。

「ゴホッ、ゴホッ……」

砂埃にむせながら、ロアは目を開く。目の前には、欠けた断崖があり、そこにはグールも、そしてルーノもいなかった。

ロアは断崖から下を見下ろす、崖下の川でバシャーン……と二つの大きな水しぶきがあがった。

第14章 くラータ村

その後、ロアとアルニカは崖下に降りてルーノを探した。何度も何度も、彼の名前を呼びながら。

二人とも、ルーノが「死んだ」等とは思いたくはなかった。

仮に、万が一にも億が一にも彼が命を落としたとしても、せめてその姿だけでも見届けておきたかった。

だけど、何時間探してもルーノは見つからなかった。

付近で見ると、彼が落ちた川はかなり急流だった。もしかしたら下流に流されてしまったのかもしれない。

だとしたら、彼が助かっている見込みは薄いだろう。絶望的な状況だった。

「ルーノ……」

アルニカの瞳には涙が浮かんでいた。

ルーノの身を案じると、涙が溢れて出てくる。

きっとロアも同じ気持ちなのだろう。

「……アルニカ、行こう」

長らく黙っていたロアが口を開いた。

そして彼は足を進める。

「……え……！？」

彼の後ろ姿を見ながら、アルニカはそう返事する。

ロアは確かに「行こう」と言った。

「でもロア！！ ルーノはどうするの！？ この近くにいるかもしれないのよ！？」

アルニカの問いにロアは答えず、歩いていく。

そのロアの様子はルーノの事など、気にもとめていないようにも見えた。

「ロア！！」

アルニカは声を張り上げた。

ようやくロアは立ち止る。

そしてゆつくりと、アルニカの方へと振り返った。

「……アルニカ」

そのロアの表情は不安に溢れていた。

「ルーノは体を張って僕たちを助けてくれたんだ。」

「……」

アルニカは思い出す。ルーノが崖から落ちる前に言った、彼の言葉を。

「ロア、アルニカ、後は任せたぞ」という言葉を。

そう、ルーノは自らの命を賭して、自分たちに託したのだ。

この世界の命運を。

彼がいなければ、自分たちは今頃グールの餌食となっていたかもしれない。

「あいつの想いを無駄にしたくないだろ？　だったら前に進むしかないんだ」

その通りだ、もしも他のグールが襲って来たりでもしたら、今度こそ全滅だ。

そうなったら、ルーノの想いは無駄になってしまう。

「……行こう、ラータ村に」

そう言い、ロアは再び足を始め始める。

強がっていたが、本当はロアもルーノが心配だった。

心配で心配で、その気持ちを表に出さないよう必死に抑えていた。

「あいつがこんな所で死ぬもんか！！」　歯を噛みしめ、ロアは自分にそう言い聞かせる。

「……」

ロアの気持ちを察したアルニカは、ロアの後ろ姿に何も言わずに頷いた。

もう一度川を振り返る。そしてロアの方へと走り寄り、彼に追いつく。

それから、数時間――

陽が落ち始めた頃、ロアとアルニカはラータ村へと着いた。

村の門をくぐり、二人は村の中に足を踏み入れる。

「……？」

ロアは、どこか違和感を覚えた。

以前、果物屋の仕事でこの村を訪れた時はもっと人通りがあったような気がした。

うまく言葉では言えないが、以前はもっと活気があったような気がするのだ。

まるで、この村で戦争でも起こったかのような有様だった。（そんな筈はないが）

壊された家に、踏み荒らされた畑、一言で表現するならば、「廃墟」という言葉がしっくり来る。

「…… ロア……！」

アルニカが何かに驚いた様子で、ロアを呼んだ。

ロアはアルニカの指差した方向を向く。

「…… これは……！！！」

アルニカの指した方を向いて、ロアは驚愕した。

そこにあったのは、たくさんの墓標だった。

そこらの木で作った粗末な十字架がいくつも立てられ、その前で泣き崩れる人々、それも一人や二人ではない。

一体この村で何があったと言っただろう？ 何かの伝染病が流行っていたりでもしたのだろうか？

いや、伝染病では家は壊れないし、畑が踏み荒らされたりはしない

だろう。

だとしたら、考えられるのは――

「お前達、何者だ」

不意に、ロアとアルニカの後ろからその男の声が響く。

ロアが振り向いた瞬間、彼の目の前に鈍い銀色に輝くサーベルが突き付けられていた。

「――！」

反射的に、ロアも腰の鞘から剣を引き抜こうとする。

「動くな――！」男はサーベルを突き付けたまま、それを制した。

そして、「質問に答えろ、お前達は何者だ？」とロアに命じる。

ロアは答えずに、男の顔を見つめる。

その男は狼の獣人族だ。左目を黒い眼帯で隠しており、右目は鋸のように鋭い目つき、ロアとアルニカよりも背は高い。

灰色の毛並に、左の頬には切り傷がある。

その風貌からは、どこか冷徹さを感じさせる。

「答えろ、小僧――！」

狼型獣人族の男は怒鳴った。

とりあえず、いきなり切りかかってくる様子はなさそうだ。

質問に答えておけば、彼に害意はないようだ。

「……アルカドール王国のロア」

ロアがそう答える。

「アルカドール王国のアルニカ」

続いて、アルニカがそう答えた。

「……アルカドール王国？」と男は小さくつぶやく。

そして、珍しいものでも観察するように二人を見つめる。

「……どうやら、『ヤツら』の仲間ではないようだな」

そう言いつと、男はサーベルを鞘に納めた。

「アルカドール王国のロアとアルニカ、刃を向けたことをここに謝罪する」

「俺はガルフ、この村の保安活動を行っている者だ」

第15章　く語られる事実く

「保安官の人が、どうして私たちにいきなり剣を向けたりしたんですか？」

アルニカがガルフに強い口調で問う。

初対面の相手にいきなり剣を向けるなど、礼儀知らずどころか、無礼極まりない行為だ。

「……今、この村では余所者を警戒しているんだ」

ガルフが答える。

「どういうことだ？」

そうロアが問う。

ガルフは腕を組んで左に視線を向ける。

彼と向かい合う位置に立っていたロアとアルニカはそれを追いついて、視線を右に向けた。

その先には、先ほどから気になっていた墓標があった。

墓標に花を添えたり、手を合わせたりする人、

墓標の前で泣き崩れる沢山の人の声が、合唱のようにこちらまで聞こえてくる。

「あの墓標の数……村で伝染病でも流行ったんですか？」

アルニカの問いに、ガルフは首を横に振った。

「伝染病などではない」

「だったら、一体何が……？」

ロアがそう聞く。

これだけの死者を出す程の出来事は、伝染病以外には思い当たらなかった。

地震などの自然災害ならば、アルカドル王国の方にもその影響が及ぶ筈だ。

「二日前の事だ、この村に『ヤツら』が現れたのは」

「ヤツらって？」

ロアがそう聞く。

「化け物共だよ、人間でも獣人族でもない」

「……！？」

ロアとアルニカの表情に緊張が走る。

ガルーフの言った、「化け物」、そして「人間でも獣人族でもない」という言葉に、二人には思い当たる事があった。

「そいつらは何十人も数でこの村を襲い、破壊と殺戮を欲しいままにして去って行った。お前達も見ただろう？ 壊された家を」

それは耳を疑う話だった。

「じゃあ、あの墓標は……まさか!？」

「そう、全員その犠牲者達だ。幼い子供から大人、老人、人間も獣人族も関係なく無差別に襲われた」

ガルーフの話にロア達は戦慄した。

この平和な村に、何故そのようなことが起こるというのだろうか。

「生き残ったのは偶然村の外へ出ていた者、すぐに地下へ避難してヤツらから逃れた者、そして剣を扱えてヤツらと戦えた者だけだ」

アルニカは再び墓標を見る。

墓標の前で泣き崩れる一人の老婆が目にとまった。

彼女は息子、もしくは娘の命を奪われたのだろうか……

「……ひどい……!!」

感情が、声となって表れた。

「……そういえば、お前達は何用でこの村に？」

ガルーフが二人に聞く。

ロアは思い出した。そう、この村で、「イルト」という人物と合流する予定だった。

「人を探しにきたんだ。『イルト』っていう獣人族の人はこの村に？」

ガルーフは、

「……その名を聞いたことはないな、その者は余所者か？」

「そう、僕たちと同じアルカドル王国の人なんだ」

ガルーフは少し考えて、

「余所者なら、恐らく宿に泊まっていただろう。宿は全て壊された」
しかし、イルトという人物はユリスの側近と聞いている。
それなりに剣の腕はあるだろう、殺されたと決めつけるのは早い。
きっと、この村のどこかにいるのだろう。

「ところでお前達、今日はどこへ泊るつもりだ？ 宿は全て壊されていて使えないぞ？」

余所者なのだから、きっと村の宿へ泊るつもりだったと思い、ガルーフが言った。

「あ……！！ どうしよう、アルニカ！！」

「どうしようって……！！ また野宿しかないんじゃない？」

「野宿は危険だ。この付近では近頃獣が出てる」

あわてる二人に、ガルーフが話を割って入った。

「……何なら、俺の家に来るか？」

【キャラクター紹介 06】 “ガルーフ”

【種族】 獣人族

【種別】 狼

【性別】 男

【年齢】 18歳

【毛色】 ストームグレー

ラータ村の保安活動をしている隻眼の狼型獣人族。

その風貌からはどこか近づきたい雰囲気を感じさせるが、内心は優しい心の持ち主で、村の者からは信頼されている。

家には二人の弟と一人の妹がいる。両親は数年前に流行り病で亡くなった。

狼型獣人族としての能力は、人間の数万倍の嗅覚と三日三晩休まずとも走り続けられるスタミナ。

武器は主にサーベルを使用する。

第16章 くガルーフの家く

知り合ったばかりの者の家に泊めてもらうというのもどうかと思うが、

ガルーフの話では村の宿は全て壊されていて使えない。

かと言って野宿などすればグールのような獣に襲われる危険があった。

この村は今余所者を警戒している、民家に泊めてもらうというのもまず無理だろう。

ロアとアルニカは、ひとまずガルーフの好意に甘えることにした。

「ねえロア、大丈夫かな？ あの人を信じてても……」

ガルーフの後ろ姿を見ながら、アルニカがロアに耳打ちする。

アルニカはまだ、ガルーフに対して警戒心を抱いているようだった。

「わからない、けど……」

ロアは歯切れの悪い返事を返した。

「けど？」アルニカがそう返す。

ロアは視線をガルーフの後ろ姿に向けて、

「あの人、悪い人じゃない気がするなあ……」

数分程歩いて、三人は道脇に立っている木造の小屋の前にいた。その小屋の前に立っていた柵は倒れ、小屋の横の畑は滅茶苦茶に踏み荒らされていた。きつとここも、襲われたのだろう。

「ここが俺の家だ」

そう言つて、ガルフは玄関の扉を開ける。ロアとアルニカにも、入るように促す。

「おかえり、ガルフにいちゃん!!」

家に踏み入ると、その声が耳に入る。

その声の主は、まだとても小さな、狼型獣人族の少年だった。年の頃四く五くらいだろうか、その容姿は狼と言うよりも、小犬に近い。

「おうカイル、いい子にしてたか？」

そう言つてガルフは、その「カイル」と呼んだ幼子の頭をなでる。ガルフとカイルのやり取りを聴きつけたのだろう、階段を下りてもう一人の幼子が降りてきた。

「ガルフにい、お疲れ!!」

そう言つた少年も幼いが、カイル程幼くはない。おそらく年の頃、八く九くらいだろうか。

「おうラクル、……カールはどうした？」

「カーラねえなら、二階の掃除をしているよ。……ところで、ガルフにい」

「なんだ？」

ラクルは、その小さな指でドアの側にいたロアとアルニカを指差した。

「その人間の人たち……どちらさま？」

ラクルが問う。

「お、ああ」ガルフは、はつとした表情を浮かべて、

「この二人は、俺の客人だよ」

「へえ……」

ラクルはロアとアルニカをまじまじと見つめている。

客人が珍しいのか、あるいは人間という種族が珍しいのだろうか。

「僕はロア、よろしく」

ロアがラクルにそう挨拶する。

「ラクルです、よろしくね。ロアにい」と、ラクルは返事を返した。どうやら、このラクルという子は人に慣れているようだった。

「私はアルニカ。よろしくねラクル君」

「うん。えっと、アルニカねえ」

ラクルはそう返事する。

「それと……」

次にアルニカは、ガルフの足にしがみつくように立っているカイルへと視線を向けた。

びく、驚いたのかカイルは一瞬身を震わせる。

「カイル君……だつたっけ？」

「……！！」

一言も発せず、カイルはガルフの足の後ろに隠れてしまった。

「あちゃ、嫌われちゃったかな？」

とアルニカが言う。

「カイル、挨拶くらいしろよ」ガルフが足元のカイルに促すが、カイルは動かない。

「悪い、こいつ人見知りするんだ」

とガルフがアルニカに告げた。

「カ、カイルです……」

ガルフの足にしがみついて、とても小さな声でカイルが言う。

だが、ガルフにしてみればそれだけでも上出来だった。

いつものカイルなら、見知らぬ人が相手ならその人と目を合わせる

ことすらできない。

「よろしくね」

微笑みながら、アルニカがそうカイルに言う。

カイルはガルーフの足にしがみついたまま、ぎこちなく頷いた。

「ん、そっぴやそろそろ昼飯の時間か……」

壁に掛かった時計を見て、ガルーフがそう呟いた。

「カイル、ラクル、飯の準備だ。薪割って火を起こせ」

「わかったよ、ガルーフにい」ラクルは外へ出る。カイルもガルーフの足から離れ、ラクルに続いた。

次いでガルーフはロアとアルニカの方に視線を移して、

「お前たち二人は、その椅子に座って待っていてくれ。すぐに昼飯の準備するから」

と、テーブルの側の椅子を指差す。

しかしロアとアルニカはそれには従わず、

「いや、泊めてもらう身だし、僕も何か手伝うよ」

「私も!!」

ロアとアルニカが言う。

ただで人の家の厄介になるというのは、どこかフェアではなく思えた。

「ガルフ、何か手伝えることはない？」ロアがガルフに催促する。

「それはありがたいな……では、ロアはラクル達と一緒に薪割りを頼む。荷物はテーブルの上にも置いといてくれ」

「よしきた！！」とロアは返事を返して、肩掛けカバンと、腰に下げていた剣をテーブルに置く。

先ほどラクルとカイルが外へ出たドアへ向かう。

「アルニカはカーラの手伝いをしてくれ。あいつ今二階で掃除してるらしいから」

「了解！！」アルニカも肩掛けカバンとツインダガーをテーブルの上に置いた。

そして、階段を上って二階へ上がる。

階段を上がるとそこは短い廊下、正面と左側にドアある。右には窓があつて、そこから日の光が射している。

正面と左側、二つのドアがあつたが、アルニカはどちらを開けるか迷っていた。

ここは人の家だ、好き勝手なことはできない。

不意に、左側のドアから「コトン」と花瓶をどけるような物音がした。

カーラという人はこっちの部屋だろう。とアルニカは思い、そつとドアを開ける。

「誰？ お兄ちゃん？」

ドアを開ける音に気付いて、部屋の掃除をしていた獣人族の少女はドアの方へと振り向く。

振り向いた方には、見慣れない人間の少女が立っていた。

「……えつと、どなた？」

ガルフの妹で、獣人族の少女のカーラがそう聞いた。

アルニカから見て、カーラはその容姿から14歳から15歳くらいに見えた。

もしかしたら、私よりも年上かもしれない。アルニカはそう思う。

「あ、アルニカという者です。ガルフさんの友達で……」

彼女がそこまで言いかけた瞬間だった。

アルニカとカーラの耳に、突然大きな悲鳴が響いた。

どうすれば、そのような大きな声を出せるのかと思う程の、悲鳴だった。

「！？」

アルニカは驚く、その悲鳴はこの家の外から響いてきた。すぐに窓に駆け寄り、村の様子を見る。

何十人もの、鎧に身を包んだ者が村に押し入っている。

彼らは家に火を放ち、丸腰の村人に剣を振るい、村を襲っていた。

戦争——そう、その光景は戦争と呼ぶにふさわしかった。

「これは……!!」

アルニカがそう漏らす。

何人もの人が悲鳴を上げながら、彼らから逃げるように必死に走っている。

先ほどアルニカとカーラの耳に響いてきたのは、村の人の悲鳴だったのだろう。

「まさか!!」

そう言ったのはカーラ、彼女も、窓から村を見る。

「あれは……!! 二日前の……!!」

カーラがそう言った。

どうやら彼女には、思い当たる節があるらしい。

第17章 く戦いく

その時、ロアは何が起きたのかわからなかった。

ラクルとカイルと共に薪割りをしていた時、いきなり遠方から大きな悲鳴がこだまし、

何十人も鎧に身を包んだ一団が村へと押し入り、家に火を放ち、そして村人を襲い始めた。

ロアは暫く状況が理解できなかったが、

ラクルの呟いた「アイツら……二日前のヤツらだ……!!」という言葉によって、全てを理解した。

そう、あの一団こそがガルフの言っていた一団なのだ。

二日前にこのラータ村を襲い、家に火を放ち、畑を踏み荒らし、そして何十人も村人の命を奪った一団なのだ。

ロアの頭の中にその光景が蘇る。

先ほど見た、何の罪もないのに命を奪われていった数多の人々の墓標、

そしてその墓標の前で泣き崩れていた数えきれないほどの人々の姿。

「……くそッ……!!」

ロアは歯を噛みしめる。

彼の表情には、煮えたぎるような怒りが浮かんでいた。

「女子供、ジジイでも関係ない!! 一人残らず殺せ!! 根絶やしにするのだ!!」

一団を率いているリーダーと思しき人物がそう怒鳴る。

その男は周りの者がかぶっている物とは違う棘のような装飾のついた兜で顔を隠し、

ボロボロの灰色のマントを纏っていた。

「……！！ オイ、あのガキ共を殺れ！！」

男が、手近にいた二人の部下へと命令する。

その視線の先には、ロア達がいた。

命令を受けた二人が、鞘から剣を抜き、ロア達の元へと歩み寄ってくる。

「……！ ラクル、カイルを連れて逃げるんだ！！」

それに気づいたロアが、後ろにいたラクルへと告げる。

「え！？ で、でもロアには……！！？」

ラクルはそう反論する。

「僕なら大丈夫だ、だから君は早く逃げろ！！」

ロアは強めの口調でラクルへ命じた。

この状況では、もはや議論をしている暇などなかったからだ。

「……わかった。行こう、カイル」

ラクルはそう答えて、カイルの手を取り、駆けだした。

それを横目で確認して、ロアは自分へと歩み寄ってくる二人の賊へと向き直る。

「大人しくしてろよガキ、すぐに済むから……」

内の一人が剣を振り上げて、そう言いながらロアへと歩み寄る。

「なあッ!」

その声と同時に、ロアの頭へと剣を振り下ろした。

「……うぶッ!？」

それと同時に、男の脇腹を凄まじい痛みが突き抜けた。

「ご……ぼ……ッ!!」男は泡を吹きながら地面へと崩れ落ちた。

男の剣はロアには当たらなかった。

いや、当たるはずだったが、ロアが避けたのだ。

そしてロアは、隙だらけになった男の側面へと周り、鎧が途切れた男の脇腹に向けて肘を突き入れたのだ。

「……ガキ、少しはやるようだな」

それを見たもう一人の賊の男が、ロアへと歩み寄る。

ロアは、地面に落ちていた賊の男の剣をボールのように蹴り上げて、それをキャッチした。

そして、彼は剣を構える。

「……？ 貴様、それは一体何のつもりだ？」

賊の男がそう言う。

ロアの構えは、まるで賊の男を挑発しているようにも見えた。

そもそもそれは「構え」と呼べるのか、ロアは攻撃してくれと言わんばかりに、両手を広げていた。

「そんなに死にたいなら、望み通りあの世へ送ってやる!!」

男はロアに走り寄り、彼に剣を振るう。

大振りの動作ではさっきのように隙を突かれると思い、男は小振りの動作でロアへと襲い掛かった。

ロアは男の剣を受け止める。「ガキイン……!!」と金属音が鳴り響く。

男は即座に剣を弾き、今度は横から切りかかる。しかし、ロアはその攻撃も防いだ。

「この……ガキ……!!」

男は何度もロアに切りかかるが、その剣がロアへ届くことはなかった。

ロアは一瞬も表情を曇らせることなく、男の剣を受け流し、防いでいた。

ロアと男では体格にも差がある、力の差だつてある筈だ。

だが、男が剣に込めた力は穴の開いた瓶に水を注ぐように全て受け流され、全くダメージになっていなかった。

「あの剣術……『アルヴァ・イーレ』か？ あんなガキがあのアルカドールの高等剣術を……」

その戦いを見ていた賊のリーダーの男が、そう呟く。

「か……………ッ!!」

二人目の男は、脇腹に剣の柄を突き入れられて倒された。

「……………さあ、次は誰だ？」

ロアはそう呟く。

この小僧は只者ではない、賊の人間達はそう感じていた。
ロアの周りに賊の人間達が集まり、彼に武器を向ける。

「お前達、手を出すな!!」

その声が響く。賊の人間達を押しつけて、一人の男がロアの前へと出てくる。

ボロボロのマントに、棘のような装飾が施された兜、賊のリーダーの男だ。

「このガキは、俺自らの手で葬り去る!!」

そう言うと、男は纏っていたボロボロのマントを捨てる。

「な……………!？」

ロアの表情に、驚きが浮かんだ。

その理由は、マントを捨てた男の姿。

全身を鎧で固めていたのはいい、ロアが驚愕したのは、男の腕が四本もあったことだった。

そして、男の両腰に二本ずつ、合計四本の剣が下げられていた。

「ハハハハハ！　　どうした小僧、表情から余裕が消えたぞ！？」

そう言うと、男は四本の腕で四本の剣を握り、鞘から引き抜く。

「……望むところだ！！」

ロアも、剣を構えた。

第18章　く魔族く

村の状況を窓から見ていたアルニカは、ロアの姿を見つけた。彼は剣を振るい、戦っている。その相手は……

「な、何なのよ、アイツ……！？」

アルニカは思わずそう漏らす。

ロアが戦っていた相手は、なんと四本の腕を持ち、四本の剣でロアに襲い掛かっていた。

まるでタコの足のように、四本の腕を自在に動かしている。

兜で顔が隠れているが、明らかに人間ではなかった。

ならば獣人族かとも思ったが、腕を四本持つ獣人族など今まで聞いたことがない。

「……あれは化け物よ、そして周りのヤツらも全て……」

隣にいたカーラが、そう言った。

「二日前にも大人数でこの村を襲いに来たわ、そして何人もの人を手当たり次第に殺していった……」

「どうして……！？　どうしてそんなことを……！？」

アルニカの疑念は当然だ。

この村の人に恨みでもあるというのだろうか？

いや、仮にあったとしても、それで村の人々を襲っていい理由になるはずがなかった。

「わからない、アイツらが何者なのかも、どうしてこんなことをするのかも……」

カーラは今度は、四本の腕を持つ男と戦っている少年に視線を向ける。

その茶髪の少年は、四本の剣を操る男と互角に戦っている。

彼は自分とそう歳も変わらなさそうだが、それなりに剣の腕はあるようだった。

「化け物と戦っているあの子、なかなかの剣の使い手みたいだけど、このままじゃ負けるわよ」

「……え!？」

ロアを見ると、四本の剣の攻撃を防ぐので精いっぱい様子で、一度も攻撃をしていない。

いや、攻撃を「していない」のではなく、「出来ない」のだろう。さらに、アルニカはロアが使っている剣に気付く。

あれはいつもロアが使っている、彼が使い慣れた剣ではなかった。

カーラの言う通り、このままではロアは負けるだろう。

「っ!」

いても立つてもいられなくなったアルニカは、部屋を飛び出した。

四本の剣の攻撃をさばくので手一杯で、ロアは反撃するタイミングがつかめない。

どうやら、男は四本の腕を攻撃と防御に振り分けて使っているようだった。

二本の腕でロアの剣を防ぎ、その隙を突いてもう二本の腕で攻撃してくる。まるで二対一だ。

ふと、ロアは男の剣から透明な水滴が滴っていることに気付く。恐らく、剣に毒を塗りこんでいるのだろう。あの剣がかすっただけで致命的だ。

「（卑怯者め……!!）」

ロアはそう思った。

それに、ロアが今使っている剣は、賊の男から奪取した剣。大人用に作られた剣だ。柄はロアの手には太すぎて持ちづらく、刀身は長くて重い。せめて自分の剣だったなら、もう少し楽に戦えただろう。

「ぐふっ!!」

ロアの剣を受けたまま、男は彼の腹に蹴りを入れた。バランスを崩したロアは剣を落とし、緑色の草が生えた地面に倒れ込む。

「ごほっ……かはっ……!!」

腹から背中まで突き抜けた痛みに、ロアは腹部を押さえて咳き込む。口の中には、血の味が広がっていた。

男は、地面に座り込んだロアを見下ろしながら、

「『アルヴァ・イーレ』の使い手といえど、所詮はガキ、この程度か……」

「く……!!」

男は止めを刺そうと、ロアに向けて剣を振り上げる。

蹴りを入られた際に、剣は落としてしまった。

今のロアには、男の剣を防ぐ術はない。絶体絶命の状況だ。

「死ね!!」

男はそう言い放ち、ロアに向けて剣を振り下ろそうとする。

「!？」

その時、ブーメランが風を切るような音と共に、男に向けて銀色に輝く物が飛んできた。

男はロアに向けて剣を振り下ろすのを止め、飛んできたそれを剣で弾いた。

弾かれた物、それは一本のダガーだった。

「あれは……!!」

地面に落ちたダガーを見つめて、ロアが呟く。

そのダガーに、ロアは見覚えがあった。

「ロア！！」

ロアはその声の方へ振り向く。

一人の少女が、ロアに向かって走り寄って来る。

「！！ アルニカ……！！？」

そのダガーに見覚えあつて当然だ。男に向けてダガーを投げたのは、アルニカだったのだ。

彼女の手には、先ほどガルーフの家に置いてきた、ロアの剣が抱えられていた。

「これを！！」

そう言い、アルニカは抱えていた剣をロアに向かって放り投げる。

ロアはそれを受け取ると、勢いよく立ち上がる。

剣を鞘から引き抜いて、男に向かって切りかかる。

ロアの不意の攻撃に、男は飛びのいてかわした。

「ロア、大丈夫……？」

「ああ、助かったよ。ありがとう、アルニカ……」

ロアは、再び腹部に手を当てる。

痛みは引いてきたようだ。

「……？」

「チャリ」と音がする。衣服越しに、ロアの手になにかが当たった。それは、旅に出る際にユリスから渡されたペンダントだった。

ロアは、そのペンダントを首からはずして手の上へ乗せる。

ペンダントについた透明の水晶が、紫色の光を放っていた。

「これって……」

アルニカが呟く。

ロアもアルニカも、ユリスの言葉を思い出す。

このペンダントについた水晶は、闇の力を感じると、例えば魔族が近づくと紫色に輝く。ユリスはそう言っていた。

「じゃあまさか……！！ アイツは……！！」

賊のリーダーの男に視線を向けて、アルニカがそう言う。
ロアは頷いて。

「うん、間違いない……」

「魔族だ」

第19章 くイルトく

「はっ……はっ……はっ……はっ……！！」

一人の幼い村人の少女が、息を切らせながら逃げ惑っていた。
数人の賊の人間達が、その少女を捕らえようと追いかける。

足が疲れて、呼吸が苦しくても、彼女はその逃げ足を止めようとはしない。

もしも捕まれば、それはそのまま死につながるからだ。

「きゃっ！！」

幼い村人の少女が、石に躓いて転んだ。

「鬼ごっこはもう終わりにしようぜ？ お嬢ちゃん」

後ろから賊の男の声。

「！！」少女の表情が、再び恐怖に塗り潰される。
転んだ拍子に膝が擦り？けて血がにじんでいたが、痛がっている時間はない。

少女は痛みをこらえて立ち上がり、走ろうとする。
その少女の前方に、賊の男が立ちふさがった。

「あっ……！！」

少女は振り返り、逆方向へ逃げようとする。
しかし、後ろにも賊の男が立ちふさがっていた。

気が付いた時には、前、後ろ、右、左、四人の賊が少女を取り囲んでいた。

「あああつ……！！」

もう少女に逃げ場はなかった、いや、相手は大人の男だ。逃げ出したところで、すぐに追いつかれるだろう。

「さんざん手こずらせやがって……」

正面に立っていた賊が、剣を鞘から引き抜きながら少女に近づく。少女はもう、声を上げることも、逃げ出すこともなかった。ただ地面にへたり込み、涙を流して恐怖に震えるだけだった。

「じゃあな、お嬢ちゃ」

少女に剣を突き付けて、そこまで言いかけた時、

「ぐっッ！！」

男の首の後ろ辺りに、大きな衝撃が走った。

途端に男の視界が砂嵐のようになり、周りが見えなくなった。

「か……」泡を吹き、男は地面へ倒れ伏した。

男の後ろには、一人の獣人族の少年が立っていた。

灰色の毛並に、左目には黒い眼帯。

その右手には、サーベルが握られていた。

「そんな子供一人を大人四人で追い掛け回すとは、勇敢だな」

その少年、ガルーフは吐き捨てるように言った。
彼は先ほど、このサーベルの柄で賊の後ろ首を打ったのだろう。

「ガ、ガルーフお兄ちゃん……！！」

幼い少女が、ガルーフをそう呼ぶ。

「立てるか？」

ガルーフは少女へと駆け寄り、手を差し伸べる。

少女はそのガルーフの灰色の毛の生えた手を取り、立ち上がる。

「さあ、早く逃げろ」

ガルーフは少女にそう命じる。少女は頷いて、走り去って行った。
それを確認したガルーフは、三人の賊の男の方へ向き直る。

「（三対一か……分が悪いが、やるしかないな）」

ガルーフは心の中で呟く。

先ほどの一人は不意打ちだったから簡単に倒せたが、あとの三人は
そうはいかないだろう。

三人の賊が、剣を抜いた。ガルーフもサーベルを構えなおす。

「……行くぞ！！」

ガルーフは右足に力を込めて、地面を蹴り、賊の男に近づこうとする。

とその時、ガルーフは上の方から気配を感じた。

「!?!」

ガルーフは足を止める。

彼の眼前に、大きくて、そして雪のように白い物が落ちてきた。

その白い物には、長い耳、綿毛のような尻尾があった。

ガルーフは気づく、それは「白い物」ではなく、「白い毛並をした
兎型獣人族」だった。

「……あなた一人の手には余る相手だ。手を貸そう」

ガルーフに後ろ姿を向けたまま、その白い毛並の獣人族はそう言った。

どうやら敵ではないようだが、この村の者ではないようだ。

「お前は？」

ガルーフはそう問う。

白い毛並の兎型獣人族はガルーフを横目で見つめて、

「アルカドール王国の、イルト」

「イルト」、白い毛並の兎型獣人族は、自らをそう名乗った。

彼の胸元についた水晶のペンダントが、日の光を受けて輝いていた。

ロアとアルニカは、賊のリーダーと剣を交えていた。アルニカが加わって二対一となったが、四本の剣による攻撃を防ぐのは容易ではなかった。

腕の長さや力の差もあり、二人は押されていた。

「うっ!!」

アルニカの腕を、敵の剣がかすめた。

かすめた部分の衣服が破れ、そこには血が滲んでいる。

「アルニカ!!」

ロアはアルニカを呼ぶが、彼女を気遣っている暇はなかった。

アルニカに手傷を負わせると、賊のリーダーの男はその四本の剣を、全てロアへと向けてきた。

「雑魚が一人増えた所で、何が出来る!?!」

そう言い、男はロアへと激しい攻撃を仕掛けてきた。

アルニカは傷のついた腕に包帯代わりに衣服の切れ端を巻きつける。

そしてアルニカはダガーを拾い上げて男へと走り寄り、後ろから切りかかる。

「!?!」

男は、アルニカの背後からの攻撃を受け止めた。それも、少しも後ろを見ずに。

後ろに目があるとしても言うのだろうか、アルニカの動きは完全に読まれていたようだった。

「無駄なことよ、貴様ら軟弱な人間ごときに、魔族の将たるこのドルーグが負ける筈がない」

【キャラクター紹介 07】 “ドルーグ”

【種族】 魔族

【種別】 人間

【性別】 男

【年齢】 - Unknown -

【髪色】 - Unknown -

戦い以外で死ぬことのない不老不死にして第四の種族、「魔族」の将。

数十人の魔族の兵を率い、ラータ村を襲撃した。

全身を兜や鎧で固め、その四本の腕で四本の毒剣を振るい、ロアとアルニ力を苦しめる。

何故、ラータ村を襲撃し、罪のない人々の命を次々と奪っていくのか、その理由は謎である。

第20章　く決着く

戦闘が始まってからおよそ20分ほど経過していた。

ロアとアルニカの表情に疲れが浮かんできているのに対し、四本もの腕を激しく動かしているにも関わらず、ドルーグには全く疲れた様子がない。

そのスタミナといいあの四本の腕といい、

「魔族」という種族はロア達「人間」よりも高い身体能力を持っているようだった。

だが、ロアとアルニカもドルーグに劣ってはいなかった。アルニカが先ほど受けた手傷以外、二人はまだ攻撃を受けてはいない。

「うるさいハエが……!!」

アルニカのツインダガーによる手数が多い攻撃が目障りに感じたドルーグは、
全身の力を込め、まずロアに向けて蹴りを放った。

「うつ!!」

ドルーグの蹴りは彼の腹部を狙っていたが、ロアはそれを右腕で防御し、直撃は避けた。

しかし、直撃を避けたとはいえそれは大人の蹴りだ。

ロアの体制を崩させ、地面に尻餅をつかせるには十分だった。

「く……!!」

ロアは右手首を負傷した。
蹴りを受けた部位が、あざになっている。

「死ね、小娘!!」

標的をアルニカへと絞り、ドルーグは彼女へと攻撃をかけてきた。
学校で剣術の訓練は受けていたとはいえ、四本の腕による攻撃をさばくのは容易ではなかった。

さらに、少女であるアルニカに対してドルーグは大人の男、一撃の重さはかなりのものだ。

もしアルニカが攻撃を「受ける」のではなく「受け流す」技術を学んでいなかったら、その四本の剣の餌食となっていただろう。

いや、それ以前にその四本の腕の攻撃に目を追いつかせることすら出来ない。

「（どうすれば……!!）」

攻撃を受けながら、心の中で呟く。

アルニカが使っているのはツインダガー、二本の短剣だ。

軽くて扱いやすい分、リーチは短い。反撃するには、敵の懐へと潜り込むしかない。

つまり、ドルーグの攻撃をかいくぐる必要がある。

だが、それは言うほど簡単なことではなかった。

「（ガキの娘の割に中々剣術に長けているな……こいつもアルカードールの者か）」

攻撃を防いでいるだけとはいえ、人間の、それもこんな少女に手こずらされるとは思わなかった。

無駄な動きはなく、ツインダガーの扱い方も上手い。きっと、相当な練習を積んだのだろう。

「……だが!!」

次の瞬間、ドルーグの攻撃が激しさを増した。より一層素早く、より一層重く。

「!?!」

アルニカは驚く。ここにきて攻撃の激しさが増すとは思っていなかった。

多少剣が扱えるといえども、所詮相手は人間の少女。力で突き崩せば、倒すことなど容易い。

ドルーグはそう考えたのだ。

本気を出したドルーグには、アルニカは太刀打ち出来なかった。数分間はドルーグの攻撃を防いでいたが、彼女の細い手首にはすぐに限界が訪れた。

「ぐあっ!!」

ドルーグの剣の一振りで、アルニカは右手のダガーを弾き飛ばされた。

弾かれたダガーは宙を舞い、虚しく地面へと落ちる。

アルニカは、左手に持っていたもう一本のダガーを利き手である右手へと持ち替える。

そして、ドルーグの追撃に備えようとした、その瞬間だった。

「——ッ——!!」

途端に、アルニカは自分の体が重くなったのを感じた。まるで、巨大な岩盤でも背負ったように。

そして今度は、彼女は自分の体がどんどん熱くなっていくのを感じる。

まるで体の中で炎が燃えているような感覚だった。

「うッ……!!」

耐え切れず、アルニカは膝を付き、そして地面へと崩れ落ちる。

「うッ……!! はあ……はあ……」

倒れ込んだ瞬間、アルニカの体を猛烈な苦しみが襲ってきた。体中が熱く、まるで空気に酸素がないように呼吸が苦しい。

「（一体、何が……？）」

苦しみで意識を失いそうになる中、アルニカは心の中で呟く。そして思い出した。先ほど、ドルーグの剣で肩を傷つけられたことを。

「まさ……か……」

荒い呼吸と共に、そう漏らす。

アルニカの頭には、一つの言葉がよぎっていた。その言葉は、「毒」。

そう、剣で傷つけられた傷は浅かったものの、問題はその剣に毒が仕込まれていたことだった。

「フン、ようやく効いてきたようだな……」

アルニカの耳が、かすかにその声を聞いた。

彼女の口からは返事はない。返事の代わりに、喘ぐような荒い呼吸を吐くだけだった。

地面に倒れ伏している今、ドルーグにとってアルニカはただの無力な人間だ。

「終わりだ、小娘」

武器を持つどころか、立つことすら出来ない今のアルニカを殺すことなど、ドルーグには造作もないこと。

ドルーグは、彼女に向けて剣を振り上げる。

朦朧とする意識の中、アルニカはそれを感じていた。

「ぐッ!？」

途端に、ドルーグの左肩を凄まじい痛みが突き抜けた。

剣を振り下ろすのを止め、ドルーグはゆっくりと視線を左に向ける。

「な……ッ……!？」

ドルーグは驚愕した。

彼の左肩には、一本の剣が突き刺さり、そこから血液が滲んでいた。それも、鎧の隙間を正確に狙っている。

視線を後ろに向ける。そこには一人の少年がいた。

「まさか僕の存在、忘れてたわけじゃないよな？」

「……！！ 貴様……！！」

アルニカに止めをさすことに気を取られていて、ドルーグは彼の存在を忘れていた。

——ロアという少年の存在に。

間一髪の所で、ロアはドルーグに向けて矢のように剣を投げ、その左肩に突き刺したのだ。

ロアは立ち上がり、先ほど弾かれたアルニカのダガーを拾う。
そして、ドルーグへと走り寄る。

「チー！！」

ドルーグはすぐさま右の二本の腕で剣を振るうが、所詮は二本だけの剣、ロアは容易くかわした。
剣をかわすと、その隙を突き、

ロアはドルーグの腕のうち一本に狙いを定めて、アルニカのダガーで切り付ける。

「ぐわあああッ！！」

それはドルーグの叫び声、
ドルーグの手のひらに切り込みが入り、血液と一緒に彼が握っていた剣が上空へと弾かれ、地面へと落ちる。

「ウぐウウウ……ッ！！」

ドルーグが左肩と手のひらの痛み悶えている間に、ロアはアルニカを背負い、

ドルーグから離れた場所まで走ると、優しく地面へと寝かせる。その表情からは、苦しみが溢れていた。

「はあ、はあ……!!」

アルニカの顔は赤く、呼吸が荒い。

ロアは片膝を立てて、彼女の額に手を当てる。

「……すごい熱だ……!!」

ロアはそう呟く。

しかし、アルニカに構う余裕はなかった。

ドルーグが再び、ロアへと歩み寄って来ていたからだ。

「……殺す!!」

そう叫ぶように言うと、ドルーグは走り寄ってきた。

ロアはまたアルニカのダガーを手に取ると、立ち上がる。

今、アルニカは戦えない。せめて彼女だけでも守らなければ……

ロアがそう思った瞬間、彼の前に一人の獣人族が割って入った。

「!!」

後ろ姿だけで分かる。灰色の毛並に、尻尾、耳。

「ガルーフ……!?!」

ロアはそう呟く。

と、次にもう一人、白い毛並をした兎の獣人族も現れ、彼もガルーフの隣に並ぶ。

その白い獣人族には、ロアは見覚えは無かった。

「君は……？」

「……アルカドール王国のイルト」

彼が名乗った名前は、この村で合流する予定だった人物の名前だった。

「……！！じゃあ、君が……！？」

後ろ姿のまま、イルトは小さく頷いて、

「アルカドール王国王女、ユリスから命を受けている。君たちを守る」

イルトの両腕についた金色の腕輪が、日の光を受けて煌めく。

「……チツ、邪魔が入るか……！！」

左肩に刺さったロアの剣を引き抜いて、その様子を見ていたドルーグが言う。

傷を負った上に、相手は三人。しかも内二人は獣人族だ。勝てる見込みが薄いことは、十分に分かった。

「やると言うのなら相手になるぞ？」

腰に下げられたサーベルの柄を握り、ガルフがドルーグを激しい形相でにらみつけて言った。

淡々とした口調だったが、ガルフは怒りを抱いていた。

あのドルーグこそが、この村を襲撃した者たちの首領だからだ。

「…………お前ら！！　引き上げだ！！」

ドルーグが、自分の配下の魔族の兵達に命令を飛ばし、村の門へと向かう。

命令を受けた兵たちは、破壊や殺戮行為を止めると、ドルーグに続き、村の門へと一斉に走っていく。

どうにか、この場をおさめることに成功したようだ。

「アルニカ！！　すっかりしてアルニカ！！」

高熱にうなされているアルニカに、ロアが言う。

しかし、答える筈もない。彼女は喘ぐような呼吸をしているだけだった。

「どうした？　彼女に何があった？」

イルトがロアに問う。

「ドルーグの…………！！　あいつの剣で傷をつけられたんだ、その剣

には、毒が……！！」

ロアは地面に落ちているドルーグの剣を差す。

その剣は、彼がドルーグの手から弾き飛ばした剣だった。

「……毒だと！？」

側にいたガルフがロアにそう返す。

彼は地面に落ちたその剣に歩み寄ると、それを手に取り、剣の刀身を鼻で嗅ぐ。

「……ナジメ草か！！」

ガルフはそう言った。そして彼はその剣を投げ捨てる。

「ナジメ草」とは猛毒を含む植物で、ほんの少し摂取しただけでも人を死に至らしめる植物だ。

煎じればほぼ無味無臭、そして無色透明になる。

人間の鼻で嗅ぎ分けることは不可能だが、ガルフは狼型獣人族。その嗅覚は人間の数万倍だ。

「ナジメ草！？」

イルトがそう返す。

どうやら彼は、その毒草の名前に憶えがある様子だ。イルトが続ける。

「まずい、数時間で人を殺せる毒草だ……！！」

「どうすればいいの！？」

ロアがイルトに問う。

「『テリの花』の花弁を煎じて飲めば、ナジメ草の毒を中和できる。だけど、この辺でテリの花が自生している場所は……僕にはわからない」

「ガーナ湖のほとりだ。そこに生えている」

そのガルフの言葉に、ロアとイルトは彼に視線を向ける。

「三日前、カラと一緒にガーナ湖に魚を釣りに行った。その時、確かに生えていたのを見た」

「それじゃあ、すぐにそこへ行つて……！！」

ロアが言う、いつになく彼は焦っている様子だった。
アルニカの命の危機だ。焦って当然だろう。

「うん、それしかないな」

イルトが頷いて、ロアに同意する。
ガルフも頷き、

「人間の足では時間が掛かり過ぎる、俺が連れて行こう」

ガルフはそう名乗り出た。

確かに、狼型獣人族のガルフは脚力こそ兎型獣人族に劣るが、それでも人間よりは遥かに足は速い。

さらに、スタミナならば兎型獣人族を凌ぐだろう。

「わかった。ガルーフ、アルニカを頼むよ」

ロアの言葉にガルーフは頷く。

「だけど、大丈夫か？」

そう言ったのはイルト、彼は続ける。

「じきに日が落ちる。この辺りは日が落ちると獣が出るぞ？」

「……心配いらない、大丈夫だ」

ガルーフは即答する。

彼はアルニカを背負う。彼女の喘ぐような呼吸が、ガルーフの耳に聞こえてくる。

「ガルー……フ……さ………ん………」

「ガルーフさん」、荒い呼吸に混じって、アルニカは確かにそう言った。

ガルーフは彼女の顔を見つめる。顔は赤く、汗をかいている。そんな彼女の顔を見て、彼は言った。

「必ず助ける。だからそれまで死ぬんじゃないぞ」

第21章 くガルーフの戦い

ガルーフはアルニカを背負い、生い茂った雑草を蹴り、土を巻き上げながらガーナ湖へ続く草原を走っていた。

時はもう夕暮れ、夕焼け空が草原をオレンジ色に染めていた。

ラータ村を出て、馬以上のスピードで走り続けて30分ほど経ったが、ガルーフの表情に疲れは浮かんでいない。

人間ならすでに体力を使い果たしていてもおかしくはないが、狼型獣人族であるガルーフにはこれくらいの距離は苦にすらならない。

「はあ、はあ……」

ガルーフの背中で、アルニカが喘ぐような呼吸を漏らす。

摂取した量にもよるが、ナジメ草は摂取してから約二時間で人の命を奪う。

アルニカがナジメ草を塗り込んだ剣で傷つけられた正確な時間はわからない。

わかるのは、とにかく一刻を争う状態だということだけだった。

「う……っ……」

アルニカの、喘ぐような呼吸の音が止んだ。

そして彼女は、ガルーフの背中で眠った赤子のようにぐったりとしている。

「……おい、アルニカ!？」

走ったまま、ガルーフはアルニカに言う。

……返事はない。どうやら彼女は気を失ったようだ。

「……………くそっ!!」

「急がなければ!!」そう思ったガルーフは両足に一層力を込めて、草原を駆ける。

このペースであと30分ほど走り続ければ、ガーナ湖へと着く筈だ。

その時、

「!?!? この臭い……………」

ガルーフの鼻が、その臭いを捉えた。

人間の数万倍の嗅覚を持つ彼の鼻には、草や土、そして花、虫から動物の臭いまでも嗅ぎ分けられる。

その彼の鼻が捉えたその臭いとは、

複数の生臭い獣の臭いと、強い血の臭いだ。

「出やがったか……………!!」

ガルーフがそう漏らした瞬間、彼に向けて一匹の獣が飛びかかってきた。

「グワアアアアッ!!」

「くっ!!」

その獣の臭いでいち早くその場所を察知できたことが幸いした。

ガルーフの首めがけて飛びかかってきた獣を、ガルーフは姿勢を低めてかわす。

しかし、気を緩めることは許されなかった。

獣の臭いの数が、徐々に増えていき、そして近づいて来ているからだ。

一匹、二匹、三匹、四匹。先ほどガルーフに飛びかかってきた一匹を数に加えれば、全部で五匹いる。

「ラグナールか……それも群れ、厄介だな……!!」

ガルーフはそう漏らす。

「ラグナール」とは獣の名だ、小柄な獣で個々の力はさほど強いもの、その性質は獰猛。

狡猾でずる賢く、日が落ち始めた頃に集団で行動するという特徴がある。

「ッ!？」

不意に、ガルーフの右側から一匹のラグナールが飛びかかって来た。ガルーフは地面へと転げ、ガルーフが背負っていたアルニカも地面へ転げる。

だが、気を失っているアルニカは痛みを感じなかった。

ラグナールは、手近のガルーフへと狙いを定め、彼めがけて走り寄ってきた。

「……!!」

それに気づいたガルーフは立ち上がり、腰からサーベルを外す。

鞘からサーベルを引き抜かず、突進してきたラグナールの腹部を剣の鞘の先で突き飛ばした。

突き飛ばしたラグナールは落石のように地面へと転がり落ち、泡を吹いて気絶を失っていた。

「!!! アルニカ!!!」

ガルーフはそう叫ぶ、地面に倒れ伏したアルニカに、残りの四匹のラグナールが群がっていた。

迂闊だった、今のアルニカは反撃することはおろか、立つことすらできないのだ。

時間もない、もう手加減している余裕などなかった。ガルーフはサーベルを鞘から引き抜く。

「こつちだ、ケダモノ共!!!」

そのガルーフの声に反応した四匹のラグナールは、視線をアルニカからガルーフへと移す。

ガルーフは鞘を投げ捨て、サーベルを片手にラグナール達へと走り寄る。

飛びかかってくるラグナール達を、ガルーフは一匹、また一匹とねじ伏せていく。

群れとはいえ、個々の力は弱い。一匹ずつ確実に倒せば、脅威になる相手ではない。

ましてや、獣人族であるガルーフの反射神経を以てすれば、もはや敵ではなかった。

数分で四匹のラグナールを倒したガルーフは、先ほど投げた鞘を拾

おうと、サーベルを片手に地面に落ちた鞘へと歩み寄る。
邪魔は消えた。あとはアルニ力を背負ってガーナ湖へと走り、そして彼女にテリの花の花弁を飲ませればいいだけだ。

ガルーフは左手にサーベルを持ち替え、右手で鞘を拾おうとした。

その瞬間だった。

「ぐッ！……！」

途端に、ガルーフの左腕に鋭い痛みが走った。

左腕がちぎれてしまうのではないかと言うような、激痛。

左手から力が抜けて、彼の手から離れたサーベルが地面へと落ちる。

「う……ぐ……ッ!？」

ガルーフは地面へと仰向けに倒れる。

痛みに耐えながら、視線を左へと向ける。

そしてガルーフは驚愕した。

彼の左腕には、ラグナールが噛み付き、その鋭利な牙を突き立てていた。

ガルーフの灰色の毛並の腕を、彼の血が赤く染めていた。

「があッ……！」

左腕に噛み付いたラグナールを振り払おうとした瞬間、今度は右腕にも同じ痛みが走った。

ガルーフの右腕にも、ラグナールが噛み付いていた。

油断した、先ほど倒した五匹のラグナールは囷だったのだ。
この二匹は自分の隙を伺っていたのだろう。

「ぐ……！！　こ……の……野郎！！」

そう叫び、ガルフはまず右腕に噛み付いたラグナールを蹴り飛ばし、

次に左腕に噛み付いたラグナールを同じように蹴り飛ばした。

そして立ち上がり、サーベルを拾おうとするが、

「うつ……！！」

サーベルを握る手に力が入らない。

両腕を見ると、噛み付かれた傷から血が流れ、彼の灰色の毛が生えた腕を流れ落ちていた。

「くそッ……！！」

こうしている間にも、アルニカの命の危機が迫っている。

目の前にはラグナールが二匹、だが今のガルフは両腕が使えない。

両腕が使えない以上、サーベルを握ることは出来なかった。

「ガアアアアアッ！！」

両腕を使えないガルフを見て今が好機だと感じたのか、二匹のラグナールが吠えながらガルフに向かって走り寄り、彼の首目がけて飛びかかってきた。

「！！」

猛烈な両腕の痛みに耐えながら、ガルーフはそれに気づいた。

——次の瞬間、悲鳴を上げる間もなく、数秒前まで生きていた生命体はその命を無くし、命を持たない亡骸となって地面に転がった。少しも動かず、その瞳からは生気が消え失せている。

しかしそれは、ガルーフではなく、二匹のラグナールの方だった。

「ハア、ハア……」

ガルーフは荒い息を漏らす。

彼の口には、彼のサーベルが銜えられていた。

間一髪の出来事だった。ラグナールが飛びかかってくる瞬間、ガルーフは地面に落ちていた自分のサーベルを足で蹴り上げ、その柄をまるで骨を銜える犬のように自分の口で受け止めた。

そして、飛びかかってきたラグナール二匹を薙ぎ払ったのである。

狼型獣人族には、そのスタミナと嗅覚の他にも、顎の力が強いという特徴があるのだ。

他の種族が剣を口で銜えて扱おうとすれば、短剣でもない限り剣の

重さを支えられないか、もしくは歯が折れてしまっだろう。

それからまたガルーフはアルニカを背負って走り、ガーナ湖へと着いた。

アルニカを木に寄り掛かるように座らせて、彼は湖のほとりに生えたテリの花を摘み、その花弁を小さくちぎってアルニカの口へとあてがう。

「さあ、こいつを飲め……」

「……ん……」

わずかに意識を取り戻したアルニカは、ガルーフの声に従い、その花弁を飲んだ。

すると、それまで彼女を苦しめていた熱も、息苦しさも、岩盤が乗っているような体の重みも消えた。

アルニカは再び意識を失った。だが、その表情からはもう、苦しみは完全に消えていた。

——間に合った。それを側で見ていたガルーフは安堵した。

「……良かった……」

もしも間に合わなかったら、ロアに合わせる顔が無かっただろう。……ガルーフはとりあえず今はそのことは考えないことにした。

【キャラクター紹介 08】 “ イルト ”

【種族】 獣人族

【種別】 兎

【性別】 男

【年齢】 15歳

【毛色】 ホワイト

ユリスの友人であり、そして彼女の側近でもある雪のように白い毛並の兎型の獣人族。

両腕についた金の腕輪と、首にかけられた水晶のペンダントが特徴。基本的に冷静沈着な性格だが、時折情に厚い一面も。

ユリスからロア達と同行し、彼らを守るという命を受け、先にライタ村へと赴いていた。

同族であるルーノ同様、彼も兎型獣人族としての優れた脚力を持ち、使用する剣術も彼同様に「イルグ・アーレ」である。

第22章 くベイルークの塔へく

「……!!」

目を覚ました時、アルニカはガルフの家、二階の部屋のベッドの上にいた。

ベッドの側の机の上のランプに灯された炎が、辺りを照らしていた。壁の時計は10時を示していて。窓の外には夜の闇に包まれている。どうやら時刻はもう夜中のようなのだ。

アルニカはベッドの上で体を起こす。
と同時に、彼女の腕に鈍い痛みが走った。

「うつ……」

反射的に腕に手をあてる。その腕には包帯が巻かれていた。

「（そうか、私はあの魔族の將軍と戦って、それで……）」

アルニカがそこまで思い出した時、ガチャン。と扉を開く音がする。扉の方に視線を向けると、一人の獣人族の少女がピッチャーを片手に部屋に入ってきた。

「あ、目が覚めた？」

「……カーラ……さん？」

カーラ、狼型獣人族の少女で、ガルフの実妹だ。
彼女はベッド脇の椅子に腰かけ、テーブルの上のカップにミルクテ

イーを注いでいく。

「あの、私……」

「まったく」

アルニカは、カーラの横顔に話しかける。

カーラはアルニカの言葉を制し、アルニカに横顔を見せながら、

「お兄ちゃんに感謝しなさいよ？　あなた、もう少しで死んじゃう所だったんだからね？」

「……あ……」

返す言葉がなく、アルニカは黙り込む。

カーラはピッチャーをテーブルに置く。

彼女は椅子から立ち上がり、ミルクティーを注いだカップをアルニカへと手渡す。

「これを飲みなさい、よく眠れるわ」

「……ありがとう」

カップを受け取ったアルニカはそう返事を返す。

カーラはピッチャーを持って立ち上がり、扉の方へ歩み寄る。

「あ、それと……」

カーラが何かに気付いたように足を止めて、アルニカの方に振り返る。

「あのロアって男の子にもね。あの子、あなたの危ない所を助けたのよ？」

「ロアが……？」

カーラの言うことは本当だ。

アルニカが毒に倒れ伏した時、ドルーグはアルニカに向けて剣を振り下ろそうとした。

絶体絶命だったアルニカ、そこでロアが剣をドルーグに向けて投げつけ、彼女を救ったのだ。

「そうよ」と、カーラは小さく頷く。

「それじゃあ、お休みなさい」

カーラのその言葉にアルニカは頷く、カーラは部屋から出た。部屋には再び、アルニカが一人になった。

アルニカは、先ほどカーラから手渡されたカップに注がれたミルクティーをすすする。

「……おいしい」

「つつ……！！　そうか。お前達、ベイルークの塔へ行くのか……」

ピンセットと脱脂綿を使って自分の両腕に消毒薬を塗り付けながら、ガルーフが自分の向かいに座ったロアとイルトに言う。
傷口に消毒薬が染みるのだろう。ガルーフはしきりに表情をしかめている。

ロアとイルトはガルーフに説明した。

「魔族」のことや、自分達がその「魔族」の根源を断つ役割を担っていること。

そして、ベイルークの塔に「魔族」の力の源があるかも知れないことを。

「俺も手を貸してやりたいが、カイル達の面倒を見なきゃならんからな……」

ガルーフはそう言い、口で包帯を銜えて腕に巻きつけた。

村を襲い、何人もの人々の命を奪った「魔族」にはガルーフも怒りを抱いていた。

「魔族」を滅ぼすためならば力になりたかったが、彼には三人の弟妹がいる。

もしもガルーフが命を落とすようなことがあるものなら、彼らの面倒をみるものはいなくなってしまう。

それに、ガルーフには村の治安を守るといふ役目があるのだ。この村を離れることは出来ない。

「いつてて……!!」

両腕の痛みに、ガルーフは体を強張らせる。
そのガルーフの様子を見たイルトが、

「大丈夫か？ その両腕……ラグナールに噛み付かれたんだろ？」

「ああ、両腕を食いちぎられずに済んだのはラッキーだったな……」

そう言い、ガルーフは包帯と消毒薬を戸棚の引き出しへと戻した。

「ガルーフ……」

そんな彼の後ろ姿を見て、ロアがそう呟く。

ガルーフは、「何だ？ ロア」と返す。

「ごめん、僕がアルニ力を守っていれば……」

ロアは責任を感じていた。自分がドルーグからアルニ力を守りきれなかったばかりに、自分が力が及ばなかったが為に、ガルーフまで危険な目に遭わせてしまったと思っていた。

「僕のせいで、君まで危険な目に……」

と、ロアが続ける。

ガルーフは、再びロアに向かい合うように腰掛ける。

「……お前が責任を感じることはない、あんな化け物が相手だったんだ」

「……」

ロアは無力感を感じていた。

「アルヴァ・イーレ」を習得していても、ドルーグの四本の腕によ

る攻撃にはまるで歯が立たなかった。

これまで必死に剣術の稽古に励んできたのが、まるで無駄なことだったようにすら思える。

「ロア、そんなことはないぞ」

「え？」

ロアの気持ちを察したのか、イルトがロアに声を掛けた。

「あれが『魔族』という種族なんだ。ヤツらに『人間』や『獣人族』の常識は通用しない」

イルトの言う通りだ。

ロアやアルニカが学んできた剣術は、「人間」や「獣人族」と戦うことを前提としたもの。

四本の腕を持つ相手と戦うなど、想定されている筈はないのだ。

大人ですら成すすべもなく倒されてしまっても不思議はないが、ロアとアルニカは生き残った。

さらにロアはドルーグに蹴りを喰らったものの、剣による攻撃は全てさばき、一度も受けていない。

そればかりか、不意打ちとはいえドルーグの剣を弾き飛ばすことに成功しているのだ。

そこは称賛すべきだろう。

「……それとロア、君に一つ聞きたいことがある」

「え？」

イルトは、

「僕はユリスから君たちは三人でこのラータ村へ来ると聞いていた、君とアルニカ、そしてあともう一人はどこにいる？」

「あ……」

そのイルトの言葉が、ロアの頭に「彼」の姿を蘇らせた。

そう、それはこの村へ来る最中の事だった。

ロアとアルニカと、そして「彼」と共にこの村へ向かっていた時、三人はグールの急襲を受けた。

三人はグールに立ち向かったが、グールは獣。所詮は人間の少年や少女に太刀打ちできる相手ではなかった。

ロアとアルニカでは、グールを倒すことはおろか、傷一つ付けることすら出来なかったのだ。

だが、「彼」だけは違った。

「彼」は窮地に立たされていたアルニカを救った。

彼女に向けて暴走していたグールの突進を強引に止めて、アルニカを庇ったのだ。

そしてそのすぐ後の事、彼はロアとアルニカを生かす為に……

「あいつは、兎型獣人族のルーノは、この村に来る途中に獣と戦って……崖から……」

「……！？」

声には出さなかったが、イルトの表情には驚きが浮かんでいた。そ

んな答えなど、予想していなかった。

「……僕はもう休む。イルト、明日は早いから、君も早く休んだ方がいいよ」

そう言うと、ロアは立ち上がり、寝室の方へ歩いていった。

——その次の日の朝、ロアとアルニカ、そしてイルトの三人は村の門の前にいた。

彼らと向かい合うように立っているのは、四人の狼型獣人族、ガルフとカーラ、ラクルとカイルだ。

「色々ありがとうな三人とも。気を付けて行けよ」

「ありがとうガルフ、元気だね」

ガルフの言葉に、ロアがそう返す。

「じゃあねロアにい、アルニカねえも」

ラクルがそう言う。

アルニカは、

「元気でねラクル君、カイル君、カーラさんも」

「あなたも元気でね、アルニカ」

アルニカの言葉に、カーラがそう返す。

カイルは相変わらずガルーフの足の後ろに隠れたままだった。

「それじゃあ二人とも、行こう」

イルトがロアとアルニカにそう告げて、自らは足を進める。

ロアとアルニカも彼に続く。

そして三人はラータ村の門をくぐり、ベイルークの塔へと向かう道を歩み始めた。

「……」

ロアの表情には、誰かを心配するような想いが現れていた。それに気づいたアルニカが、

「ロア、どうかしたの？」

そのアルニカの声に反応したイルトが、

「ルーノという兎型獣人族の友達の事が心配なのか？」

そうロアに聞く。

ロアは答えなかった。ただ、小さく首を縦に振っただけだった。

今までは、ルーノの事は出来る限り考えない事にして、気丈に振る舞っていたロアだったが、

内面では彼の事が気になって、心配で仕方がなかった。

やはり、この旅に出る際にルーノが「オレもお前と一緒に行く」と

言った時に断っておくべきだったのだろう。

万が一彼の身にもしものことがあったら、それは自分の責任だ。と、ロアは思う。

ルーノを心配しているのは、アルニカも同じだった。

「大丈夫」

イルトのその言葉に、ロアとアルニカは彼に視線を向ける。彼はロアに、

「獣人族は崖から落ちたくらいじゃ死なない、君の友達は生きている」

「僕たちは一刻も早くベイルークの塔へ向かわなければならぬ。友達を心配する気持ちはわかるが、それを忘れないことだ」

第23章　　ルーノ

同刻、ベイルークの塔からほど遠くないとある村の中に立つ一軒の小屋。

小屋の中のベッドで、一人の獣人族の少年が眠っていた。

長い耳に、まるで綿のような尻尾、彼は兎型獣人族だ。

しなやかで、やわらかい青色の毛並をしている。

彼の両足と右手には、包帯が巻かれていた。

「ん……」

その獣人族の少年、ルーノはうつすらと目を開く。

彼の目には、木で組まれた小屋の天井が映った。

どこかの家の中、だということはわかるが、具体的にどここの家なのかはわからない。

ルーノには、見覚えのない場所だった。

「……ここは……?」

ぼんやりとしながら、ルーノはベッドの上で体を起こす。

そして、今の自分の状況を理解しようと、手帳のページをめくるように記憶を辿る。

「オレは確か、グールと戦って……」

頭をかきながら、ルーノは思い出していく。

そう。彼はグールの突進を強引に止めて、アルニカを庇った。

その後、グールの口蓋を掴んだまま自ら崖を踏み碎き、グールと共に

に崖下へと落ちていった。

崖下へ落下していく中、不意に頭の後ろに衝撃が走った。恐らくは、崖の岩にでも頭を打ったのだろう。

直後に視界から光が消え、ルーノは意識を失い、大きな水しぶきをあげて崖下の川へと落ちた。

その後自分がどうなったのかは、ルーノにはわからない。
しかし今こうして生きているということは、自分は助かったのだらう。

「そうだ!!」

何かを思い出したのか、ルーノは辺りを見回す。
どうやら、彼は探し物をしているようだ。

テーブル、机、そして椅子。ルーノは部屋の中に視線を泳がせる。
ルーノが探しているのは、彼の愛用の剣だ。

そして見つけた。ベッドの側の椅子の上に、鞘に納められた状態で置かれていた。

鞘の部分を掴み、剣を自分の元へと引き寄せる。

そして柄の部分で、ルーノは剣を鞘から勢いよく引き抜いた。

「……はあ……」

ルーノは部屋に響き渡るほどのため息を漏らす。
その理由は、彼が握っている剣によるもの。

ルーノの愛用の剣は、刀身のちょうど真ん中あたりの場所で折れていた。

崖下へ落ちていく間、ルーノは崖の岩面へと剣を突き立てた。

剣で体を支えて、崖下へ落ちるのは免れようとしたのだ。

しかし、剣はルーノの体重を支えきれず、折れてしまったのだ。

「オヤジにどやされちまう……」

そう独り言をつぶやいて、ルーノは折れた剣を鞘へと納める。

ルーノの家は鍛冶屋、そして彼の父は少しは名の知れた職人だ。

「剣はお前の命、そう思って大切に扱え」それがルーノの父の昔からの口癖だった。

今まで何度かルーノは自分の剣を折ってしまったことがあった。

そのたびに、ルーノの父は家の隅々々に響き渡る声で彼を怒鳴り散らした。

「ん？ いや、待て……」

ふと、ルーノは思い出す。剣が折れた時、自分は間一髪で折れた剣の先を掴んだことを。

右手に巻かれた包帯は、その時についた手のひらの傷を保護するための物だろう。

だとしたら、この剣の折れた先は……

「あつた……！！」

剣の折れた先は、ベッドの脇のテーブルの上に置かれていた。

ルーノはベッドから降りると、そのテーブルに歩み寄り、折れた剣

の先を手取る。

そして少しの間それを見つめて、

「工房があれば、直せそうだな……」

と言。

鍛冶屋の息子のルーノは、跡を継ぐ為に父から鍛冶を学んでいた。今までにも数回、折れた剣を自分で直したことはある。

とにかく、工房を探して剣を直し、そしてロアとアルニカと合流する必要がある。

崖から落ちる前、三人でバイルークの塔へと向かっていた。きっと二人はそこに来るだろう。

その為にも、まず初めにここがどこなのか、ルーノにはそれを知る必要があった。

とその時、不意に部屋のドアを開く音が響く。

「!?!」

ルーノは驚き、ドアの方に視線を向ける。

ドアを開けて、一人の人間の女性が小屋の中へと入ってくる。

ルーノから見て歳の頃19〜20くらいで、長く赤い髪の毛をポニテールにしている。

背は高く、顔だちも整っていて、胸もある。なかなかスタイルはいい。

その女性はベッドから立ち上がっていたルーノを見て、

「お、目が覚めたの、獣人族の坊や？」

とルーノに一言。

「だ、誰だオマエ!？」

そうルーノは返事を返す。

女性は腰に手を当てて、

「あらあら、命の恩人に向かってずいぶんなご挨拶だねえ？」

「……命の恩人？　どういう意味だよ？」

相手が初対面で、年上の人間ということも厭わずに、ルーノは雑な口調で問う。

「命の恩人」、女性は確かにそう言った。彼女はふー、とため息を漏らす。

そして後ろ手でドアを閉めて、

「あんた、この村の近くの川の岸に打ち上げられてたんだよ？」

「!？　本当か……？」

ルーノはそう返した。

つまり、崖下の川へ落ちた後、ルーノは川に流されて、岸へと流れ着いたということだろう。

あの急流で沈むこともなかったのは、運が良かったとしか言いようがない。

「まあ、あんたを見つけたのはあたしの弟だけだね」

「そうだったのか……」

女性はベッドの側の椅子に腰かける。彼女の長い赤毛がふわりとなびく。

「あんた、名前は？ 出身はどこ？」

彼女は、ルーノにそう尋ねた。

「……ルーノ、出身はアルカドールだ」

「？ アルカドールって……」

女性は少しだけ考え込む。

「アルカドール」という地名は、どこかで聞いた覚えがあった。

そう、それはこの「アスヴァン」という世界の中でも絶大な力と規模を誇る、

「アスヴァン三大国」と呼ばれる三つの国家のうちの一つ、「アルカドール王国」のことだった。

「もしかして、あのアルカドール王国！？」

「まあ、他に『アルカドール』っていう地名はないからな」

「へえ」と、女性はまじまじと、珍しい物を見るようにルーノの顔を見つめる。

少し間を開けて、「オレの顔に何かついてるか？」とルーノが彼女に尋ねた。

「ごめんごめん、ちょっとね。あたしはライラ、出身はこのルナフ村」

「このルナフ村」、ということは、どうやらここはルナフ村という場所のようだった。

ルーノには聞いたことのない地名だった。

出身地ということは、きっと彼女は多少なりこの村には詳しいだろう。

そう考えたルーノは、

「じゃあライラ、一つ聞いていいか？」

と、ルーノは早速先ほど聞いた彼女の名前を呼ぶ。

「何？」

ライラはそう答える。

ルーノは、

「この村に、鍛冶工房はあるか？」

第24章 剣

ルナフ村に立つ、一軒のボロボロの木造の小屋。

その小屋の割れた窓から、オレンジ色の光が漏れている。

それと同時に、小屋から「ガキーン……………」という、金属を叩く音が響く。

今はもう使われていない鍛冶工房、熱気に包まれたその場所で、ルーノは自分の折れた剣を直していた。

炎の中でオレンジ色に染まった刀身を、ルーノは金槌で思い切り叩く。

刀身を叩くことで刀身から酸素を追い出し、錆びることのない強い刃が出来るのだ。

金属音と共に、無数の火花がまるで花火のように辺りに飛び散る。

「ふう……」

ルーノは額の汗を拭う。そしてまた、刀身を金槌で叩き始める。

「うわ熱っ……………!!」

とそこに、その女性の声が響く。

ルーノは一時手を止めて、その声の方へと振り向く。

「あんだ、こんなくそ暑い場所でよく休まないでやってられるね？」

声の主はライラ。彼女がルーノをこの鍛冶工房へと案内したのだ。

「ま、オヤジから嫌ってほどに仕込まれてるからな」

ルーノはそう返す。

窓から陽の光が差している上、刀身を熱する為に炎を燃やしているのだ。

小屋の中の温度は、ゆうに40度を超えている。

常人ならば、こんな場所に長時間いては倒れてしまっだろう。

だが、ルーノは獣人族。人間よりも体力はある。

それに彼は父から鍛冶を学んでいたため、これくらいの熱気には慣れていた。

「で、何の用だ？　こんな所にいると火傷するぞ？」

ルーノはライラにそう問う。

「あ、あんた朝飯食べてないでしょ？　腹空かしてるんじゃないか
と思って……」

ライラはズボンのポケットを探り、葉に包まれたサンドウィッチを取り出した。

「ほら、これ」そう言い、それをルーノへと手渡す。

「じゃあ、あたしは家にいるから」

と言って、ライラは工房から出て行った。

こんな熱い場所からは、一刻も早く退散したかったのだろう。

ルーノは金槌を置いて、工房の中に置かれていた椅子に腰かける。

そして、ライラから渡されたサンドウィッチの包みの葉を解く。

剣の修復を初めてからかれこれ二時間が経過していた。

ルーノは、あのアルニカのシチュー以降、自分は何も食べていなかった事を思い出す。

それを思い出すと、急に腹が空いてきた。

ライラから渡されたサンドウィッチを、ルーノは一口頬張る。

そして、もぐもぐと口を動かす。

「（……………お）」

ルーノは心の中で呟く。

「これ結構旨いな……………」

熱気と炎、そしてオレンジ色の光が広がる工房の中で、今度は声に出してルーノは一人呟いた。

それから数時間。剣の修復を終えたルーノは、ルナフ村の草原へと歩いていった。

一体どこから持ってきたのか、彼はその右肩に太い丸太を担いでいた。

左手には、鍛え直された剣が鞘に収められ、ルーノの手に握られている。

「よっこらせ……………」

と、ルーノは担いできた丸太を立てる。

風に煽られて倒れないように、地面へとねじ込んで固定する。

丸太から手を離す。そして、ルーノは剣の柄を右手でぐっと握り、一気に剣を鞘から引き抜く。

刀身と鞘が擦れあう音と共に、銀色に輝く刃が現れた。

「……………」

ルーノは自らが鍛え直した剣の刀身を自身の眼前に掲げる。陽の光を受けて、鍛え直されたばかりの刀身が眩く銀色に輝いていた。

剣の柄を両手で握り、それを構える。

ルーノの視線は、目の前に立てられた丸太に向いていた。

「…………ふ……………」

深呼吸をするように息を吸い込み、大きく息を吐く。

「でああああっ！！」

その掛け声と同時に右足を後ろに下げて力を込め、ルーノは目の前の丸太を一刀両断した。

切断された丸太が地面へと落ち、轟音と砂煙が上がり、小さな地震が起きたように地面が一瞬揺れた。

ルーノは剣の刀身を見つめる。どうやら刃こぼれはしていないようだ。

今度は、切断した丸太の断面を見て、

「……よし、最高の切れ味だな」

我ながら上手く修復できたな。ルーノは得意げにそう思った。

家の居間にいたライラは、窓際に置かれた写真立てを手に取って眺めていた。

写真は相当古く、淵がボロボロになっている。

そこに映っていたのは、一人の男性と、一人の女性。

幼い少女と、幼い少年。合わせると四人の人間が映っている。

写真の背景には、ライラの家が大きく映っていた。

「（……父さん、母さん……）」

ライラはそう心の中で呟く。

「ただいま、おねえちゃん!!」

とそこに、玄関のドアを開ける音と共に、一人の少年の声。

「……」

はつとした表情を浮かべて、ライラは手に持っていた写真立てを窓際へと戻す。

そして、先ほど自分の名を呼んだ少年を出迎える為に、玄関へと向かう。

玄関には、一人の幼い少年がいた。

「おかえりノイ、今日は早かったね」

「うん、今日は学校は午前中で終わりだから」

少年の名は「ノイ」、彼はライラの実弟。

ライラと12歳が離れており、彼は七歳。見た目的にも年齢的にも、まだ子供だ。

「ところでおねえちゃん、あの獣人族の人は？」

彼はライラにそう問う。

今朝、ノイは学校へ行く道をいつものように歩いていた。

その途中、ふと川岸にびしょびしょに濡れた青い布のようなものが落ちていたのに気付いた。

「（……なんだろう？）」「そう思ったノイは、その青い布を注意深く見てみた。

遠くから石をぶつけてみたり、長い木の棒でつついてみたりしたが、なにも反応はない。

とりあえず、危険な物ではなさそうだと思ったノイは青い布に近づき、もう一度観察して、

その青い布には長い耳があり、顔があり、腕もあり、尻尾もあり、足もあつたことに気付いた。

ようやくノイは理解した。それは「青い布」ではなく、「青い毛並をした兎型獣人族」だということに。

どうやらその青い毛の獣人族は気を失っているようだった。

驚いたノイは歩いてきた道を引き返して、ライラを呼びに行った。

そして、今につながるというわけである。

「ああ、あいつは今出掛けてるよ。けどもつじき帰ってくるんじゃない？」

ノイの問いに、ライラはそう答えた。

【キャラクター紹介 09】 “ライラ”

【種族】人間

【性別】女

【年齢】19歳

【髪色】レッド

ルナフ村に暮らす赤毛が印象的な女性。崖から川に落ちたルーノを手当てした。

両親は家に不在で、何年間も一人で弟のノイの世話をしてきた。優しくしっかり者な性格をしている。

背の高さや胸の大きさ、どちらにも優れており、整ったスタイルの持ち主。

彼女の様子を見る限り、彼女の両親に何かあったようだ。

第25章 く盗賊く

ルーノはライラの家へ戻ろうと、ルナフ村の道を歩いていた。彼の右手には、鞘に納められた彼の剣が握られている。

「……………んん？」

彼は小さくそう呟く。

ルーノは、村民からの視線がやけに気になった。

畑を耕している人、馬に牧草を与えている人、果樹園で果物を摘んでいる人。

周りの人々が、皆ルーノに視線を向けていた。

中には、ルーノを指差して、ひそひそと話をしている人もいる。

「（何ジロジロ見てんだ？ コイツら……………）」

自分が余所者だから？ ルーノは最初はそう考えたが、まさか村民の顔を一人残らず覚えていないだろうか。

「（だとしたら……………）」

そう心の中で呟いた時、

「（……………お？）」

ルーノは気づいた。

周りを見渡すと、この村にいるのは人間だけだ。獣人族が一人もいない。

「（ああ、なるほどな）」

自分に向けられている視線の理由を、ルーノはようやく理解した。余所者だから人の目を引いているのではなく、自分が獣人族だから人の目を引いているのだろう。

理由はわからないが、このルナフ村には獣人族が一人も住んでないらしい。

だから、この村の村民には獣人族であるルーノが珍しいのだ。

「やめて！！ それは大事な物なの！！ 持っていないで！！」

不意に、ルーノの耳にその女性の声が響く。

「（……？）」彼はその声の方向へと振り向いた。

その方向には、一軒の家。その前には先ほどの声の主の若い娘と、その娘の隣に立つ一人の老人、

そして、その二人を取り囲んでいる三人の男達。

三人の男の左腕には、黒い布が巻かれていた。

「何だ、アイツら？」

ルーノはライラの家へと向かっていたその足を止めた。そして、彼らのやり取りを見る。

「やかましい小娘、お頭の言いつけだ、逆らうな！！」

そう言って、男の一人が自分の脇に置いていた大きな樽を自分の肩に担ぐ。

家の隣にブドウ園があるところを見ると、あの樽の中身はおそらくワインだろうか、

どうやら、あの娘と老人はブドウ酒造のようだ。

「よし、行くぞ」

リーダー格と思われる男が、周りの二人へとそう命令を飛ばす。そして、樽を担いだまま歩き始める。二人もそれに続く。

「頼む！！ それを納品しなければ、わしらは……」

娘の隣にいた老人がそう言い、樽を担いだ男にすがりつく。

「わしらは無一文になってしまっ、お願いだ、どうか勘弁してくれ！！」

「チッ……うるせえんだよ、このクソジジイ！！」

そう叫び、男は老人の腹部目がけて蹴りを入れた。

「ぐふっ！！」老人は体制を崩し、地面へと倒れ込む。

「おじいちゃん！！」

娘は老人に駆け寄る。老人は蹴られた腹部を押さえながら、苦しそうな声を上げていた。

「大丈夫！？ しっかりして！！」

蹴りを入れた男は、その様子を見て鼻で笑っていた。娘は、老人からその男方へと視線を移す。

「……何だよその目は？」

男がそう言う。

娘は、険しい表情で男を睨みつけていた。

彼女のその目には、理不尽な暴力に対する凄まじい怒りがあふれ出ていた。

「その目……気に入らねえな……」

そう漏らし、男は仲間の二人に「殺れ」と命じる。

命令を受けた二人は、懷に手を入れながらゆっくりと彼女に歩み寄っていく。

男達が懷から取り出したものを見て、周りでその様子を見ていた人々は悲鳴を上げた。

彼らの手には、鈍い銀色に輝くナイフが握られていた。

周りの人々は、皆悲鳴を上げるか、その場から走り去っていくだけ。そこにいた者達は、誰一人として娘を守ろうとはしなかった。

「おいおい、誰も止めないのかよ……！？」

その状況を見て、愕然としたルーノがそう漏らす。

ナイフを持った男は、娘の栗色の髪の毛を鷲掴みにし、彼女の目前にナイフを突きつけた。

しかし娘の目には恐怖は浮かんでいない。その目にあるのはやはり、理不尽な暴力に対する凄まじい怒りだけだった。

「その小娘の顔、ズタズタに切り刻んでやれ……！！」

リーダー格の男にそう言われて、男はナイフを娘に向けて振り上げる。

「おい」

とそこに、その少年の声。

男は娘に向けてナイフを振り下ろすのを止めて、その声のした方を見る。

「何だデメエは？ 獣人族か？」

声の主は、ルーノだった。

娘と老人と野次馬達、そして男三人の視線がルーノへと向く。しかしルーノはそんな事にも止めずに、

「そんな女とジーサン相手にカツアゲかましてんじゃねえよ……みつともないって思わねえのか？」

そう呆れたような口調で、頭を掻きながら返す。

「……邪魔だ、殺れ」

リーダーの男が、手下の二人に命じた。

「殺れ」という言葉は、つまりはルーノを殺せという意味だ。

二人の手下はナイフを片手に握り、ルーノを囲むように立つ。ルーノにナイフを向けて、手下の一人が口を開いた。

「俺たちに立てつくとは、命知らずな小僧だな。悪く思っなよ」

続いてもう一人の手下がナイフの切っ先を舐め、

「一瞬で終わらせてやるから……よぉ!!」

二人の手下が地面を蹴り、やかましい足音を立てながら両側からルーノへと走り寄る。

「（『俺たち』ってことは、コイツらは何だ？ チンピラか何か？）」

手下二人の方を向くこともなく、ルーノは心の中で呟いた。

先ほど手下の一人が口走った「俺たち」という言葉、

そしてこの三人が同じ黒い布を腕に巻き付けていることから見て、何らかの賊であることは間違いないだろう。

盗賊か山賊かはわからない……が、

「（まあ、コイツらに聞いてみりゃわかるか）」

そう心の中で呟き、ルーノは両足にぐつと力を込め、その場でジャンプをした。

「「な!?!」」

その瞬間に、手下二人だけでなく周りの野次馬達もが驚きの声を漏らした。

ルーノが、自分の身長の数十倍の高さにまで飛び上がったからだ。それは、常人が跳べる高さを遥かに超えている。

獣人族のいないこの村では、ルーノの身体能力は驚愕に値するよう
だ。

野次馬の大衆の中からは、「何者なんだあの兎……？」等といった
声が聞こえてくる。

「おい！！」

「うわあっ！！」

二人の手下が叫ぶ。

彼らは、ルーノの両端から彼に襲い掛かった。

だがルーノが飛び上がった為に目標を失い、

間抜けにも彼らは正面衝突の形で、勢い余って激突した。

「うごっ！！」

「ぐふっ！！」

間抜けな声と共に、手下の二人は地面へと崩れ落ちた。

彼らの間抜けさが滑稽に思えたのか、群集に笑いが巻き起こる。

「畜生、ブツ殺してやる！！」

派手にぶつけた頭を押さえながら手下の一人が立ち上がる。

「オマエら……ぶぶ、だっせ……！！くく……」

そして、側で口に手を押さえ、顔を赤くして笑いをこらえていたルーノを見つけ、彼へと走り寄る。

「死ね！！ このクソガキがあああああああ！！」

どうやら、男は恥をかかされた（実際は自業自得だが）ことに逆上しているらしかった。

と言っても、相手は所詮口先だけのチンピラ、ルーノは剣を抜くまでもなかった。

「逆恨みしてんじゃねえ……」

もう一度、ルーノは両足に力を込める。

今度は相手の顔の高さにまで飛び上がった。

「よっ！！」

その声と同時に、ルーノは男の右の頬目がけて回し蹴りを放った。

「ぐっブあッ！！」

クリーンヒット、手ごたえはあった。

男の口からは唾液と、数本の折れた歯が飛び、地面へと落ちる。それでもルーノは手加減していた。

彼が本気で蹴りを放てば、おそらく歯の数本では済まず、男の顔は原型を留めていなかっただろう。

「……お前ら、引き上げだ」

突然、リーダーの男が肩に担いでいた樽をその場へ下ろし、手下の二人にそう命じた。

ルーノには敵わないと悟ったのだろうか。

「!? し、しかし……」

「構わん!! さっさと立て!!」

手下の言葉を遮り、リーダーの男は足を進める。

ルーノに回し蹴りを喰らった手下もふらつきながら立ち上がり、その後を追って行った。

「あ!!」

走り去っていくその三人の後ろ姿に、ルーノは手を伸ばした。
しかしながら、それは何の意味もなさない行為だった。

「……何処の賊なのか聞く前に逃げやがって……」ルーノはため息をつく。

第26章 く怒りと悲しみ

「……………っていうヤツらと今日一戦交えてな……………」

ライラの家の居間、ルーノはライラとノイに今日の出来事を話していた。

今日自分が相手にした、腕に黒い布を巻いた三人組の事を。

「アイツらは一体何なんだ？ この村の連中からは大分恐れられるようだったが……………」

手下の一人が娘に向けてナイフを突きつけても、この村の人間は誰一人止めようとも、助けようともしなかった。

恐らくは、あの三人組を恐れるが故だろう。

それほどまでに恐れられている賊ならば、それなりに名は知られている筈だ。ルーノはそう考えた。

「……………ライラ？」

だが、ルーノの問いにライラの後ろ姿は答えなかった。ルーノに後ろ姿を向けたまま

ライラではなく、側にいたノイが「ねえちゃん……………」と小さく呟いただけだった。

「……………うつうつ……………!!」

暫しの沈黙を破り、ルーノとノイに後ろ姿を向けたまま、ライラがすすり泣く声を漏らした。

「!？」

突然の出来事に、ルーノは驚いた。

彼には、彼女が涙を流すようなことを言っただつもりなどなかった。

「おいライラ……!？ どうし……」

「ダルネス盗賊団」

ルーノの言葉を遮り、ライラが後ろ姿のままそう言った。

「ルーノ、あんたが戦った連中が属してる盗賊団だよ……」

涙が混じった声でライラはルーノにそう告げる。

彼女によると、ルーノが戦った一団は「ダルネス盗賊団」という一団らしい。

しかし、ルーノにはもう一つわからない事があった。

どうしてライラは泣いているのだろっ、その盗賊団と何か関係があるのだろっか？

他人の傷口に塩を塗る趣味はなかったが、ルーノは彼女にその理由を尋ねてみることにした。

「……ライラ、その盗賊団と何かあったのか？」

ライラは窓際に歩み寄り、窓際に置かれていた写真立てを手取る。その写真に写っているのは、一人の女性と一人の男性、そして幼い少女と、女性の腕に抱かれている赤子。

ライラの目は、写真の女性と男性に向いていた。

その二人の男女は、今のライラと同じ赤毛をしている。

「あいつら、殺したんだよ……あたし達の父さんと母さんを……！」

「……！？」

声には出さなかったが、ルーノの表情には驚きが現れていた。

「それも、恨まれるようなことをしたわけじゃない。ただそこにいたってだけで、面白る半分にアイツらは……ッ！」

ライラの脳裏に、その時の光景が鮮明に蘇る。

それはライラがまだ幼かった頃、当時ノイはまだ生後間もない赤子だった。

その日は、ライラの12歳の誕生日だった。彼女の誕生日を祝う為に、彼女の両親はライラを村のとあるレストランへと連れて行った。ライラの母は、彼女へのプレゼントを用意していた。蝶を象ったブローチ、幼いライラが以前から欲しがっていた品である。

ライラがバースデーケーキの蝋燭を吹き消したら、彼女の母はブローチを彼女に渡すつもりだった。

本当はすぐにでも渡したかった。しかし後から渡した方が喜びも大きい、とライラの母は考えたのだ。

「（この子、飛び上がって喜ぶんじゃないかしら？）」

ライラの母は、プレゼントの箱を開けたライラがどれほど喜ぶのか楽しみだった。

それと同時に、娘が喜ぶ姿を見ることが出来ると思うと、嬉しくて

たまらなかった。

だが、ライラの母のその想いは無残にも踏み躪られる事となってしまうた。

レストランに乗り込んできた、ダルネス盗賊団によって。

邪魔な者は殺す、それがダルネス盗賊団のやり方だ。

強盗に乗り込んだ彼らにとって、レストランにいた客などただの邪魔者でしかなかった。

ライラの両親は、盗賊団による殺戮の標的となってしまったのだ。

両親がナイフで刺された瞬間、ライラは自分の周りの時間が急激に遅くなっていくのを感じた。

周りで人々が上げる悲鳴、けたたましい足音、テーブルや椅子が倒れる音、床に落ちたグラスが砕け散る音。

どんな音も耳に入らなかった。

——やだ……！！ お父さん、お母さん、死なないで、あたしとノイを残して行かないで！！

床に倒れ伏し、胸を赤く染め、冷たくなっていく両親の顔に少女は必死に叫んだ。

もう一度、その目で自分を見て欲しかった。もう一度、その腕で自分を抱きしめて欲しかった。

だが、ライラの悲痛な涙声の叫びに、両親は答えることはなかった。

涙で歪んだ視界、ライラはレストランの床に一つの赤い箱が落ちていたことに気が付く。

それは、彼女の母親がライラの為に用意した、彼女へのプレゼントの箱だった。

ライラはその箱に手を伸ばした。もう少しで箱に手が届きそうになった瞬間、黒い靴がその箱を踏み潰した。

彼女は視界を上へと移動していく。箱を踏んでいる黒い靴から、その人物の顔へと。

その人間はライラと目を合わせて、返り血が散った顔を不気味に歪めて笑った。

そして、殺戮と略奪を欲しいままにして、ダルネス盗賊団は去って行った。

ライラは、男に踏みつけられてボロボロになった箱を開けた。

その中には、踏みつけられて砕け、最早原型を留めていない蝶を象ったブローチが入っていた。

「そして、今もアイツらはこの村で同じことを繰り返しているんだ……！！」

そのライラの声には、怒りと悲しみが溢れ出ている。

ルーノは、彼女にどんな言葉を返したらいいかわからず、

「悪い、ライラ。嫌なことを思い出させちまったみたいで……」

「……いや、別にいい」

そう返し、ライラは居間のドアの方へと歩み寄りながら、

「ルーノ、ノイ。ちょっとした間だけ、一人にさせてくれ」

そう言って、ライラは居間から出て行つた。
居間にはルーノと、ノイだけが残っている。

第27章　　ルーノとノイ

居間に残ったルーノとノイ。

二人とも一言も発せず、彼らの間には重い空気が流れていた。ライラからあのような話を聞かされた後だ、無理もないかも知れない。

「……なあオマエ、『ノイ』って言ったか？」

暫くの沈黙の後、ルーノがノイに話しかける。

ルーノのその声に、ノイは振り向いた。

ノイと目を合わせながらルーノは、

「この村の連中は、なんであの盗賊団を放っておくんだ？」

その問いに、ノイは「えっ、どういう意味？」と答えた。

「ヤツらの横暴を、何で黙って見逃してるんだって聞いているんだよ」

ライラの話では、ダルネス盗賊団は今もこの村を荒らし回っているとのこと。

きっと、彼女の両親のような目に遭った者も数え切れない程いるだろう。

村人は何故、黙っているのだろうか。何故、盗賊達を放っておくのだろうか。

ルーノは、盗賊団の手下達が酒造の老人と娘を恐喝していた時の様子を思い出す。

手下がナイフを抜いても、周りの人間達は止めようとしなかった。止めるどころか、皆手をこまねき、中にはその場から逃げ出す者もいた。

もしもルーノが割って入らなければ、あの娘は今頃どうなっていたのだろう。

「……仕方ないんだよ」

ルーノから視線を逸らせて、ノイはそう呟いた。

「仕方ない？」ルーノはそう聞き返す。

「みんな、ダルネス盗賊団が怖いんだ……」

彼は続ける。

「あの盗賊団に逆らったらひどい目に遭わされるんだよ。だから村の皆は逆らわないんだ」

ノイによると、ダルネス盗賊団は数年前からこの村の近くの森の中に拠点を置き、

ルナフ村には騎士団のような治安維持を行う団体が存在しないこと、そしてこの村には人間よりも強い身体能力を持つ獣人族が一人も住んでいないことに目を付け、

この村で略奪や殺戮を欲しいままにしているらしい。

さらにルーノが驚いたこと、それはダルネス盗賊団を率いている首領、「ダルネス」という男がアルカドル王国出身ということだった。

自分と同じ国出身の者が、盗賊団の首領などという外道な行いをし

ているとは思ってもみなかった。

アルカドールでは、学校で剣術を学ぶことが義務付けられている。子供達の中にはロアのように、14歳にして大人顔負けの剣術の才能を発揮する者もいる。

ダルネスという男がアルカドールで真面目に剣術を学んでいたとすれば、

恐らくこんな田舎の村で彼に剣術で敵う人間はいないだろう。

「なるほど。で、この村の連中は全員泣き寝入りしてわけか」

そう言うと、ルーノは長椅子にごろんと寝転がる。

「泣き寝入りして……！！」

そのルーノの言葉に、ノイは振り向いた。

「そんな言い方ってある！？ 本当は皆悔しいんだよ、盗賊団に家族を傷付けられて、好き勝手なことをされて……！！」

ノイの脳裏に、ダルネス盗賊団に殺された父と母の姿が蘇る。

両親が殺された時、まだノイは赤子だったが、鮮明に覚えていた。

何の罪もなく、ただレストランにいたというだけで命を奪われた両親の姿を。

さらに盗賊団は自分ただ一人の家族のライラに、癒えることのない悲しみを植え付けたのだ。

それを思い出すたびに、ノイの胸の奥から全身にかけて、盗賊団に対する激しい怒りが巡っていく。

「だったら」

ノイの言葉を遮り、長椅子に寝転がったまま、

「村の連中はなんで盗賊団に立ち向かわない？ どうして怒りの声を上げないんだよ？」

「えっ……」

ルーノのその言葉に、

ノイは返事を詰まらせる。

「家族を傷つけられて、好き勝手なことをされて悔しいのなら、なんで黙ってるんだって聞いているんだよ」

「だ、だって……！！」

ノイの表情に、いつしか動揺が浮かんでいた。

「仕方ないだろ！？ ダルネスはものすごく強いんだ！！ あんなヤツ相手に」

「また言っ たなオマエ」

突然、ルーノがノイの言葉を遮ってそう言った。

ノイは言葉を発するのを止める。

ルーノは寝転がったまま、ノイの目を見つめて、

「その『仕方ない』って言葉だよ。オレはその言葉が大嫌いなんだ」

ノイの返事を待たずに、ルーノは続ける。

「悔しい気持ちとか、そういうのを『仕方ない』って一言で片づけるヤツの事、何て言うか教えてやろうか？」

ルーノが淡々とした口調でそう言う。ノイは何も答えなかった。

ノイの瞳には、かすかに涙が浮かんでいる。

その彼の目を見つめてルーノは、

「『意気地なし』、って言うんだよ」

相手が幼い子供だということも厭わずに、そう言い放った。

ノイからしてみれば、その言葉は「お前は意気地なしだ」と言われたように聞こえた。

「……違う……!!」

ノイが小さくそう言う。

その声には、涙が混じっていた。

「ああ？」とルーノが返答する。

「違う!!」

ノイはそう怒鳴り、居間を飛び出して行った。

ルーノはその彼の後ろ姿を見つめていたが、止めようとはしなかった。

ルーノの耳に玄関のドアを開ける音が響く。次に閉める音。どうやらノイは外へ飛び出して行ったようだった。

「……ちつと言い過ぎちまったか？」

寝転がったまま天井を見つめ、一人居間にのこったルーノはそう呟く。

「フン、何オヤジみたいなこと言ってんだろうな、オレ……」

多少言い過ぎたとは思ったが、ルーノは先ほどの言葉を取消しはしなかった。

第28章　く決意く

あれから、数時間。

ライラの家の居間に掛けられた時計の針は、午後五時半を差していた。

外は日が落ち始め、ルナフ村の人々は帰路についている。

「ルーノ、ルーノ!!」

ライラは、目の前の長椅子の上で寝息を立てているルーノの体を揺すりながら彼の名を呼ぶ。

しかし反応はなかった。どうやら彼は、完全に夢の中に行ってしまったようだった。

「まったく……!!」とライラは呟く。そして彼女は、ルーノの長い耳に口を寄せて、

「起きろ!!!」

と、力の限りに叫んだ。

「おわあ!？」その瞬間、数秒前まで夢の世界にいたルーノは、突然のライラの怒鳴り声に驚き、長椅子から派手に転げ落ちた。ドシャン、けたたましい音が家中に轟く。

「いつてて……!!」

ルーノはぶつけた頭をさする。

次に、目の前にいたライラに視線を向けて、

「おい、オマエ!!　いきなり人の耳元でデカい声出すな!!」

ライラに向かってそう叫ぶ。

しかしライラは、そのルーノの言葉に怯むどころか、

「そんなこと言ってる場合じゃない!!」

と、ルーノにも負けない程の声で返した。

寝起きでボーツとしているルーノの頭に、彼女の大声が響いた。

「うるせーな……何だってんだよ？」

目をこすりながら、ルーノはライラに問う。

「あんた、ノイがどこに行ったか知らないか!？」

「……はあ？」

ルーノは思い出す。

時計の時間を見ると、午後五時半を回っていた。どうやら、自分は長椅子の上で数時間程眠っていたらしい。

家の中を見渡すが、ノイの姿はない。

「……あいつ、帰ってないのか？」

「そうなんだよ!!　あたしにも言わないで、一体どこに行ったんだか……!!」

ライラはそう言って赤い髪の毛を掻きむしる。

ノイには、外出するときには必ず行き先をライラに伝えるように言っていた。

今までは一度もライラに無断で外出することなどなかったが、今日のノイは何も言わずにどこかへ行った。

何があるかと一人では行動せず、どこへ出かける際も四時までには帰ってくるという約束もある。

だが、ノイはその門限を一時半もオーバーしていた。

こんな事は、今まで一度たりとも無かった。

「もしかして、ダルネス盗賊団に何か……!?!」

ライラがそう言う。彼女の頭には、恐ろしい予感が浮かんていた。

それは、ノイがダルネス盗賊団に連れ去られたのかもしれないという予感。

そんなことは考えたくもなかった。が、考えずにはいらなかった。

「ノイにもしものことがあったら……!!」

ライラの声に涙が混じっていた。彼女の瞳にも涙が溜まっている。

ノイはライラの弟であり、そしてライラのただ一人の家族だ。

両親に続いて彼まで失ったら、ライラは本当に一人ぼっちになってしまう。

「（あいつ、もしかして……）」

ルーノは心の中でそう呟く。彼には、思い当たる節があった。

そう、先ほどルーノはノイにきつめの口を利いてしまった。

もしかしたらノイは、それを真に受けてしまったのかも知れない。

「（……チッ）」

彼は心の中で舌打ちをした。

ルーノは立ち上がると、長椅子の脇に立てかけていた自分の剣を掴んだ。

そしてそれを片手に、玄関の方へと歩いて行く。

「！？ ルーノ、アンタどこに行くの！？」

ライラはルーノにそう言った。

こんな場合に、彼は一体どこに行こうとしているのだろうか。

「ああ、ちょっと剣術の練習にな」

そう答えて、ルーノは玄関の扉を開けた。

「アンタ、こんな時になに言っ……！！」

ライラにしてみれば、ノイの身が危ぶまれているこの状況で「剣術の練習に行く」、などと言うルーノの思考は意味不明だった。

「アイツはオマエの弟だろ？ だったらオマエがなんとかしろ。オレには関係ない」

ルーノはそう言い放つ。

それは、ライラにとってあまりにも冷たい言葉だった。

「な……！！」

ライラはそう声を発したが、それ以上は何も言わなかった。
ルーノはライラの返事を待たずに、玄関の扉を閉め、外へ出た。

「さてと……」外に出たルーノはそう呟く。

ルーノは目を閉じた。

そして、まるで瞑想でもしているかのようにじっとしている。

「……………」

ルーノは一言も発せず、ピクリとも動かない。
それが数分の間続いた。

「……………よし」

何かに気付いたように、ルーノはそう漏らす。
そして、閉じていた両目を開く。

鞘に収まった剣を片手に握り、両足に力を込める。次の瞬間、ルーノは自分の背の何倍もの高さまで飛び上がった。
彼は、手近にあった民家の、赤い屋根の上に着地した。
着地すると、助走をつけて、隣の家の屋根へと次々に飛び移っていく。

屋根の上に着地する、そのまま助走をつけて、また別の家の屋根へと飛び移る。

目的の場所を目指して、ルーノはそれを繰り返していた。

「たく、世話の焼けるガキだぜ!!」

ジャンプしながらルーノは吐き捨てるようにそう言う。

汚い言葉だったが、その言葉には思いやりが籠っていた。

またルーノは屋根を蹴り、自分の背の何倍もの高さにジャンプする。

同刻、ルナフ村のはずれの森の中。ノイは一人森の中を歩いていた。彼の表情には、何かを決意したような想いが浮かんでいる。

彼は、森の中にあつた洞窟の前で足を止めた。

洞窟の入り口からは明かりが漏れ、何人かの人間の笑い声が聞こえてくる。

そう、この洞窟こそが、ダルネス盗賊団が根城にしている場所なのだ。

「意気地無しなんかじゃないって……証明してやる……!!」

そう呟いて、ノイは拳をぐつと握る。

再び足を動かし、彼は洞窟の中へと足を進めて行った。

第29章 くノイの叫び

森の中の洞窟の中、中央に置かれたランプに灯された炎が、暗い洞窟の中をぼんやりと照らしている。

十数人の目付きの悪く、腕に黒い布を巻いた柄の悪そうな男達が、大きな木箱や樽を抱えていた。

彼らが抱えている木箱や樽には、ルナフ村の村民達から強奪した金品や、村の武器屋から奪った剣やボウガン等の武器。そして村の特産物の果物や酒が入っている。

つまりは、全て盗品だ。

「この村はよく肥えてますなあ、お頭」

内の一人の男が、目の前の男にそう話しかける。

「お頭」と呼ばれたその男は、頬杖をついて足を投げ出す姿勢で岩の上に座り、葉巻を燻らせていた。

目にかかるほど長く伸びた前髪に、目の下にはクマが出来ている。どこか不健康そうに見えるが、その瞳には冷酷な雰囲気漂っていた。

その男は、その冷酷な瞳で辺りを見回した後、

「……こんなもんじゃねえな」

葉巻を口から落とさないように、男はそう小さく呟く。

男は葉巻を口からはずし、それを片手に持って、

「この村にはまだ、金品や武器や酒、他にも金目の物が腐る程ある筈だ!!」

そう怒鳴るように、他の男達に叫ぶ。

「逆らう奴には容赦するな、この村には俺達に敵う奴は誰一人としていやしない！！」

その言葉に、他の男達は洞窟に響き渡る威勢のいい返事を返した。

男の名は「ダルネス」、彼こそがダルネス盗賊団の頭だ。

数年前からこの洞窟を拠点に、ルナフ村で殺戮や略奪を欲しいがままにしてきた。

どんな屈強な男でも、ルナフ村、そして盗賊団の中にもダルネスに敵う者はいなかった。

というのも、彼はアルカドル王国出身であり、幼い頃から剣術を学んでいたからだ。

ダルネスは剣を使った戦いには相当な年季が入っている。

剣に触れたことすらないルナフ村の村民が、彼に敵う筈などなかった。

最も、力、スタミナ、反射神経、全てにおいて人間よりも遥かに高い身体能力を持つ獣人族ならば

ダルネスに敵う者もいたかもしれないが、ルナフ村には獣人族は一人も住んでいなかった。

「……？ 誰だ！！」

不意に、ダルネスが洞窟の入り口の方を向いてそう叫ぶ。

その彼の声に反応した周りの男達もダルネスの視線を追い、入り口の方に視線を移す。

「その奴、出て来やがれ!!」

ダルネスのその言葉から数秒、岩陰から、一人の幼い少年が姿を現した。

その少年は赤毛だったが、その他にはこれと言った特徴はない。

周りの男達の視線が、一斉にその目の前の少年、ノイに浴びせられる。

だが、ノイは周りの男達からの視線など気にもしていない。

彼の目は、ダルネスだけを見つめていた。

幼い子供には不釣り合いな、怒りに満ち溢れた目で。

「……おい餓鬼、俺の顔に何か付いてるか？」

ノイの目付きが気に入らなかったのか、ダルネスがノイを睨めつけながらそう言う。

だが、ノイはダルネス冷酷な瞳に怯むことなく、

「もう二度と、僕たちの村に来るな!!」

ダルネスの瞳を睨みつけ返し、そう叫んだ。

返事をさせる暇を与えず、ノイは続ける。

「お前らのせいで、何人もの人が傷ついたんだ!! 悲しんでいるんだ!! 泣いているんだ!!」

彼は洞窟中に響き渡る程の声をダルネスに向けて張り上げた。

ノイの頭に、先ほどのライラの顔が過ぎる。

涙を流していた、自分の姉の顔が。

——どうして、ライラが涙を流さなければならぬのだろうか。自分の姉が、何か悪行を働いたとでも……いうのか？

いいや。ノイにとってライラは最高の姉だ。

ノイが風邪をこじらせた時はろくに寝ずに看病してくれたし、自分がいじめられると、いつもいつも助けてくれた。

そんな彼女があんな悲しみを背負わされる理由など、あるはずがなかった。

「もうこれ以上、おねえちゃんのように悲しむ人を増やすな——！」

怒りを胸に抱き、ノイはそう叫ぶ。

「……言いたいことはそれだけか」

ダルネスはそう呟く。

「その餓鬼を殺せ。お前等の好きなやり方でな」

と、ダルネスは十数人の手下の男達にそう命令した。

命令を受けた男たちは、剣や斧を片手にノイへと歩み寄る。

「……！！」

ノイの表情が、恐怖に染まった。

彼の先ほどもまでの威勢は消えていた。盗賊の男達からすれば、ノイは所詮無力な子供に過ぎないのだ。

「ガキ、ここに乗り込んだことをあの世で後悔するんだな」

男の一人が剣を片手にノイの目前まで迫る。

ノイはただ、自分の無力さを呪っていた。

口では偉そうな事を言えても、結局自分には何の力もない。何も変えることなど出来ない。

ダルネスを倒すことなど出来なければ、ライラの悲しみを癒してあげること出来ない。

ルーノに言われたように、自分はただの意気地なしだ。

ノイの胸の辺りから広がった悔しさと無力感はたちまち彼の小さな体を覆い尽くし、涙となって彼の瞳から零れ落ちた。

涙で歪む視界の中、ノイは男が剣を振り上げたのを見た。

彼は、死を覚悟していた。

「!？」

その時、ノイは自分の腹の辺りが何か温かい物に覆われたような気がした。

次の瞬間、体が何かに引つ張られるように宙に浮き、先ほどまで自分が立っていた地面がどんどん遠ざかって行く。

そして、地面から数メートル離れた、洞窟の壁の突き出た岩の上に着地した。

「……ったく」

その声は、ノイも聞いたことのある声だった。

「盗賊団潰しに行くんなら、オレに一声掛けろっての」

ノイはその声の主に視線を向ける。

「あ……！！」彼はそう漏らした。

「獣人族の……おにいちゃん……」

青い毛並に長い耳、見間違える筈はなかった。ノイの視線の先には、ルーノの横顔があった。

先ほどのノイの腹を覆った物、それはルーノの腕だった。

男の凶刃がノイに届こうとした時、間一髪でルーノがノイを抱えて、この岩の上まで飛び上がったのだ。

「アルカドールの孤児院で、オマエぐらいの歳のガキは何人も見てきた」

ノイに視線を向けて、ルーノはそう言った。

「え……？」と、ノイは漏らす。

「けどな、オマエほど手のかかるガキは初めてだ」

「……………」

ノイは返す言葉が見つからなかった。

ルーノが来ていなかったら、今頃自分は……

そう考えていた時、

「まあその……何だ……」

ポリポリと頬を掻き、ノイから視線を逸らし、少しだけ頬を赤らめながら、

ルーノがそう言った。

「？」

ノイは疑問に思いつつ、ルーノの方を見る。

「……悪かったな。意気地なしとか言つて……」

突然、ルーノがノイに詫びの言葉を告げた。

「撤回する。オマエは意気地なしなんかじゃねえよ」

次いでルーノはそう言う。

確かに無謀と言えるが、大人でも恐れるダルネス盗賊団の根城に乗り込むというのは、並大抵の度胸ではなかった。

「へへ……わかってくれた？」

ノイは涙と鼻水を拭って、笑みを浮かべながらルーノにそう言った。

「……うるせえ」

そつばを向いてそう答えると、ルーノは下の方を見る。

剣や斧を片手に持っている男たちが数十人、こちらの方を睨みつけている。

そして、一人だけ椅子に座って、頬杖をつき、足を投げ出す姿勢で座っている男が一人。

見たところ、あの男がリーダー格のようだった。

「なるほど、アイツが『ダルネス』か……」

そう呟き、ルーノはノイに「その辺に隠れてろ。絶対に出てくるなよ」と告げた。

ルーノは岩の上から飛び降りる。空中で一回転、そして十数人の男達、さらにダルネスの前に着地した。

第30章 対峙

十数人の手下、そして彼らの頭であるダルネスの視線が、ルーノへと向けられていた。

視線だけではない。浴びるような殺意がルーノへと向けられている。剣、モーニングスター、ボウガン。盗賊団の男たちは皆、物騒な武器を手にしている。

「逝かせてやる前に、一つだけ聞いておくか」

ルーノを見下ろし、葉巻を吸いながら、

「獣人族ってことはお前、余所者だろ？ 何故この場所が分かった？」

ダルネスはルーノにそう問うた。

このルナフ村には獣人族はいない。つまり獣人族であるルーノは余所者ということになる。

余所者ならば、村のはずれの、それも深い森の奥に位置するこの洞窟の場所が分かる筈がない。

「フン、これのお蔭さ」

そう言い、ルーノは自分の頭の上の長い耳を指差した。

兎型獣人族の能力は、その強靱な脚力に加えてもう一つ。

それは人間よりも遥かに優れた聴力。

彼らは自分の意思で鼓膜を開閉することが可能で、

鼓膜を全開にすれば、数キロ先のコインが落ちる音も聴くことができる程の聴力を発揮する。

「コイツでノイの足音を拾って、それを追っ掛けてここまで来たんだよ」

ルーノはノイから「ダルネス盗賊団は森の中の洞窟を根城にしている」ということは聞いていたものの、

その洞窟の正確な場所までは聞かされていなかった。

そこで彼は鼓膜を解放し、一人の子供の足音を拾った。

あの時間帯に、一人で、子供の、それも盗賊団の根城があるという森の中から聞こえてきた足音、

状況的に考えてノイのものだろう、ルーノはそう判断した。

彼のその判断は、的中していた。

「……それと、オレもアンタに聞きたい事がある」

ルーノは左手で鞘に納められた剣を握り、右手でダルネスを指差し、

「アルカドール出身のオマエが、何で盗賊の頭なんかやってんだ？」

「……」ダルネスは火のついた葉巻を銜えたまま、ルーノのその質問には答えなかった。

ルーノが続ける。

「大方、強くなった自分に酔っちゃって悪の道へ。そういうクチか？」

剣術を学ぶことが義務付けられているアルカドールでは、そう言っ

た人間も少なからずいた。

手に入れた力の使い方を誤り、犯罪に手を染めた者達。

目の前にいるあのダルネスという男もその一人なのだろうか、とルーノは思った。

「もういい」

ルーノの問いに答えずに、ダルネスはそう吐き捨てる。

火のついたままの葉巻を洞窟の地面へ投げ捨てて、手下の一人に、

「殺せ。ガキもろともな」

そう命じた。

その命令を受けた手下の男のゴツゴツした右手には、手斧が握られていた。

「全くバカなガキだ、格好つけてここに乗り込んできたつもりだろうが……」

男は手斧を振りかざし、ルーノへと歩み寄る。

そしてルーノ目がけて手斧を振り上げながら、

「まさかオレタチに敵うとでも……」

そこまで言いかけた時、男の眼前に、「青い何か」が迫っていた。

「（え……？）」避ける暇など無かった。男が出来たのは、心の中でそう漏らすことだけだった。

それから僅か一秒にも満たない時間の後、ルーノのサマーソルトキ

ツクが男の顔面を直撃した。

「ぐぶアツ!!」

男のその声と、「ゴキヤツ」という鈍い音と共に、男の鼻血と折れた数本の歯が地面へと落ちる。

そのすぐ後に、その男が洞窟の地面へと仰向けに倒れ伏した。

「敵うつて分かってたから乗り込んだんだろうがよ、バカはオマエだ」

ルーノはそう言うが、蹴りを受けて気を失った男にはもはや聞こえてはいなかった。

「このガキ!! よくも!!」

仲間を倒された事に激怒したのか、ルーノの背後からもう一人の手下が剣を振り上げながら走り寄って来る。

「にいちゃん危ない!! 後ろ!!」上の方から、ノイの声が聞こえた。

だがルーノは振り向かない。振り向かずに、彼はぐつと両足に力を込めた。

「死ね!!」

叫び声と共に、男はルーノ目がけて横向きに剣を振るう。

全力の力を込めている。命中すれば、この剣はルーノの体を切り裂くだろう。

その瞬間だった。男の視界から、ルーノの後ろ姿が一瞬にして消えた。

男の剣は目標を失い、風切り音と共に空気を切り裂いただけだった。

「ふぐツ!？」

途端に、男の背中から腹部にかけて、まるで太くて重い丸太で突き上げられたような衝撃が走った。

体が反るように「く」の字に曲がり、背骨と腰の辺りから変な音がした。

「か……ッ……」

男はうつ伏せに倒れ、白目をむいて気を失っていた。

剣が届こうとした直前、ルーノはその場で飛び上がり、男の背後へと回り込んだ。

そして、隙だらけだった男の背中に向けて空中でドロップキックを見舞ったのだ。

とりあえず手加減はしたつもりだったが、男の様子を見ると予想以上に効いたようだった。

「……ヤベ、そんなに効いたか？」

まさか背骨が折れてしまったりはしていないだろうか、とルーノは思うが、

相手はどうせ悪人だ、多少大目にみてもいいだろう。と自分に言い聞かせる。

「で、次は誰だ？」

盗賊団の男達の方へと向き直り、ルーノはそう言った。

「ヒッ……！！」

「ば、化け物……！！」

先ほどまでとは打って変わって、盗賊団の男たちはルーノの強さに恐れをなしている様子だった。

「負ける」ということを知らなかったダルネス盗賊団にとって、目の前の光景は異常事態に等しい。
仲間二人が、それも一人の少年によってねじ伏せられることなど、未だかつて無いことだった。

それにルーノは、まだ剣を抜いていなかった。

体術だけでこの強さ。彼が剣を抜いたら、一体どれだけの力が発揮されるのだろうか？

「た……助けてくれ——ッ！！」

一人の男が、叫びながら洞窟から走り去っていく。

「ま、待て！！俺も……！！」

もう一人の男が、それに続く。

恐らくは、ここにいた盗賊の手下の男全員が、ルーノが剣を抜いた時のことを考えていたのだろう。

彼らは怖気づき、洞窟から皆走り去って行ってしまった。

その様子は、村で殺戮と略奪を欲しいがままにしていた盗賊団とは

とても思えなかった。

まるで、親とはぐれた子犬のようだった。

「……で、残ったのはオマエだけか」

ルーノがダルネスにそう言う。

あれから数分、静まり返った洞窟の中には、ルーノとダルネス。そして岩の上にいるノイの三人がいた。

「まさか、オマエは手下みたいに逃げたりしねえよな？」

「……」

ダルネスは何も言わずに、椅子から立ち上がった。

そして、腰の鞘から剣を引き抜き、銀色に輝く刃をルーノへ向ける。

「いいだろう。その糞生意気な口……二度と利けなくしてやるよ」

ダルネスは剣を構えた。

「……望むところだ」

ルーノはそう返す。

相手はアルカドル出身の者だ。それにこれまであれほどの人数の手下を従えていた者。

舐めてかかるのは危険だろう。

ルーノは左手に握りしめていた剣の柄を握る。

剣を鞘から引き抜いて、鞘を無造作に投げ捨てる。

ルーノも剣を構えた。

第31章 く危機く

ルーノとダルネス。

彼らは剣を構えたまま、お互いに睨み合っていた。

双方とも一言も発せず、洞窟の中には張りつめた空気が漂っている。

「（大丈夫かな、にいちゃん……）」

その様子を上から見ていたノイが、心の中でそう漏らした。

ルーノは盗賊団の手下二人は簡単に退けたが、ダルネスは手下達とは格が違う。

これまで、ルナフ村の者でダルネスに敵う者は誰一人としていなかった。

「……行くぞ」

数分の沈黙を先に破ったのはルーノ。その声と共に、彼は足に力を込める。

次の瞬間、彼は洞窟の地面を勢いよく蹴り、飛び上がった。

およそ数メートルの距離を一瞬で詰め、ルーノはダルネスに向けて剣を振った。

ダルネスはルーノの剣を受ける、ルーノの小柄な体格からは想像もつかない程の重い一撃。

ルーノは即座に剣を弾き、体をコマのように一回転させて勢いをつけ、追撃を浴びせる。

「チツ!!」

隙を突いて、ダルネスはルーノに向けて横に薙ぎ払うように剣を振った。

その瞬間、ルーノは斜め前方へと飛び上がった。
ダルネスの剣はルーノに命中せずに、数秒前までルーノが立っていた地面をえぐる。

「ラア！」後方から、ルーノのその声が響く。

ダルネスが声の方へと視線を移した瞬間、銀色の刃が自分の目前に迫っていた。

攻撃を避けた後、空中でルーノが剣を振ったのだろう。

その攻撃をダルネスは反射的に姿勢を低くしてかわす。彼の真上を、ルーノの剣がかすめた。

一旦着地したルーノは素早い動作で再び飛び上がり、空中から攻撃を浴びせる。

前方と思ったら、今度は後方、次は真上、その高さは一定ではなかったが、ルーノは何度もアクロバティックに跳ぶ。

時には跳躍に回転も加えて、ダルネスに向けて不規則ながらも素早く、激しい攻撃を仕掛ける。

ルーノは決して闇雲に攻撃を仕掛けているつもりではない。

「イルグ・アーレ」、ルーノが用いている剣術の名称である。

兎型獣人族が持つ強靱な脚力と、その小柄な体格を活かして変幻自在に飛び回りながら相手を攻撃する剣術だ。

自分の体格の何倍もの高さにも何度も飛ぶ分、スタミナの消費は激しいが、獣人族の体力ならばその欠点はある程度はカバーできる。

ルーノの表情に疲れた様子は無かった。

対して、彼の攻撃をひたすら受け続けていたダルネスの表情には疲

れが見え始めている。

「（このままでは、スタミナ切れに持ち込まれるのがオチか……）」

そう考えたダルネスは、ポケットから葉に包まれた、トマト程の大きさの玉を取り出した。

「！！」それを見たルーノの動きが一瞬止まる。

「（何だ、爆薬か何かの武器か……！？）」彼は心の中で呟く。

次の瞬間、ダルネスはその玉を勢いよく地面へと叩きつけた。

玉が弾ける。小さな爆発音と共に、灰色の煙が洞窟の中を満たしていく。

「（これは、毒煙玉か……？）」

ルーノは腕で鼻と口を覆う。

ダルネスが後方へ飛び退いて行くのが見えた。

数十秒で灰色の煙は洞窟の中を満たしたが、どうやら毒煙ではなく、ただの目くらましのようだ。

「（こいつでオレの視界を奪って、不意打ちでもする気か……？）」

ルーノはそう思った。

もしもそうだとするならば、それは無駄な事だ。

視界を奪われていたとしても、ルーノには耳がある。ダルネスがルーノに近づこうとすれば、足音ですぐに分かる。

不意に、ルーノの背後から先ほどの煙玉を叩きつける音が響いた。

「！？」振り返ると、充滿していた灰色の煙が、さらに濃くなつて

いる。

どこから投げたかはわからないが、ダルネスが煙玉をもう一つ投げたようだ。

煙が充満し、数メートル先も見えない状態になっている。

やはりダルネスはルーノの視界を奪い、彼の不意を突くつもりのもうだった。

「そんな小細工が、オレに通用するとも思ってたのか？」

しかし、ルーノの表情には余裕が浮かんでいた。

彼は鼓膜を開き、ダルネスの足音を探す。

「（さて、どこから来る？）」

心の中で呟き、ルーノは耳を澄ませる。

右、左、上、前、後ろ……近づいて来るような物音は、しない。

「（まさかアイツ、勝てないと踏んで逃げたのか？）」

そう思った瞬間、ルーノは自分の足元に葉に包まれた玉が落ちてきたことに気付く。

鼓膜を開いていたせいで、その音は先ほどよりも鮮明に聴こえた。視線を下に向ける。どうやら、ダルネスが三個目の煙玉を投げたようだ。

学習しないヤツだ、こんなもので視界を奪っても無意味だというのに。とルーノは思う。

「また煙玉か？　こんなもので……」

と、そこまで言いかけた時、

「！！」

ルーノの表情から、一瞬にして余裕が消え去った。

「（しまっ……！！）」とルーノが心の中で漏らした瞬間、煙玉だ
と想像していたその玉が、爆発した。

爆発した玉が放ったのは灰色の煙ではなく、「音」だった。

ガラスをクギで引っ掻いた音を何百倍にも増幅したかのような、頭
中に響き渡る音。

「ぐうっ……！！」

ルーノは耳を押さえ、地面に倒れ込んだ。彼の耳から、赤い血が流
れ出している。

——油断した。全てはこのための伏線だったのだ。

ダルネスが投げた二つの煙玉、あれはルーノから視界を奪い、彼に
鼓膜を開かせるための、

そして今の爆音を放つ玉を煙玉だと錯覚させるための罠だったのだ。

「くっ……！！」

ルーノはそう漏らす。

兎型獣人族の聴力が仇となった。

人間の鼓膜を破く程の音を、ルーノの耳が一点に集束してしまった。
それも、こんな至近距離で。

頭の中に異物が入り込んだかのような感覚に捕らわれる中、ルーノはうつすらと目を開く。

彼の耳は相当なダメージを受けたのだろう。視界が歪んでいた。

その歪んだ視界の中、ルーノは自分の前に一人の男が立っていることに気付く。

地面に倒れ伏したルーノを嘲笑う男……その男は、ダルネスだった。

【キャラクター紹介 10】 “ダルネス”

【種族】 人間

【性別】 男

【年齢】 28歳

【髪色】 デイープロイアルパープル

ルナフ村を荒し続け、略奪や殺戮を続けていた盗賊団、「ダルネス

盗賊団」の首領。

口数は少ないがその性格は残忍を極めており、罪のない人の命を奪うことを一切躊躇しない。

ロアやアルニカと同じアルカドール王国出身であり、自分の力に酔った末に道を違えたようだ。

剣の勝負ではルーノに劣っていたものの、煙玉や爆音を放つ「マンドレイク玉」を使い、ルーノを追い詰める。

第32章 くダルネスの囁き

煙にむせながら、岩の上からノイは下の様子を見つめていた。先ほどまではルーノがダルネスを圧倒していたが、一体ダルネスに何をされたのだろうか、ルーノは地面にねじ伏せられている。

「（にいちちゃん……！！）」

なにがあつたのかはわからない。

ただはつきりとわかることは、このままではルーノが危ないということだけだった。

「（どうにかしなきゃ……！！）」

ただ手を拱いて見ていることなど出来なかった。

ノイは出来るだけ音を立てないように、ぎこちなく岩の上から降り始める。

どこへ向かうと言うのか、彼は洞窟の中から走り去っていった。

ルーノの頭の中には、未だに先ほどの音が響き続けていた。頭の中をかき回されているような感覚を感じ、吐き気がする。視界が歪み、立つこともままらない。

「オマエ、まさか……マンドレイク玉を……」

地面に這いつくばりながら、ルーノは目の前に立っている男に言った。

マンドレイク玉とは、獣や獣人族の聴覚に強烈なダメージを与える程の周波数を持つ音を放つ玉。

本来は獣を威嚇し、追い払う為に用いる品だ。

「……フン」ダルネスは鼻で笑う。ルーノに答えは返って来なかった。

答えの代わりに、ダルネスはルーノの腹部目がけて蹴りを放った。命のある者に対して向けられたとは思えない、無慈悲な蹴りだった。

「ごほッ!!」腹部にダルネスのつま先がめり込む。

腹部から背部にまで突き抜けた痛み、呼吸が苦しくなった。

咳き込みながら、ルーノは両腕を腹部へ当てようとする。

その瞬間、彼の頭が踏みつけられた。

「ぐッ!?!」

未だに音が響いている頭を踏みつけられ、気を失いそうになる。

だが、ルーノはこらえた。ここで意識を失ってしまえば、自分は負ける。

それに、あの岩の上にいるノイの身も危うくなる。

「なあお前、獣人族の能力が時には仇になることもあるって知ってるか?」

ルーノの頭を踏んだまま、ダルネスが言った。

「何……だと……!?」

頭と耳、そして腹部の痛みを堪えながら、ルーノは絞り出すように言った。

「つまりはだ、今お前が置かれてる状況は、お前の能力の所為じゃねえか」

ダルネスが、ルーノを見下ろしながら言う。

獣人族は、人間が持っていない能力を持っている。兎型獣人族のルーノは、強靱な脚力と、優れた聴覚。

それらはとても便利だ。実際、ルーノはこれらの能力を駆使して、ノイの窮地を救った。

聴覚でノイの居所を突き止め、強靱な脚力を駆使してノイの元へ駆けつけた。

これらの能力がなければ、間に合うかどうか以前に、ノイの居場所を突き止めることすら出来なかっただろう。

それに、ルーノの能力は日常の中でも大いに役に立っている。

梯子を上る手間など必要ないし、人の話を聞き逃すこともまず無い。

しかしながら、ダルネスの言う通り、時には獣人族の能力が弱点となることもある。

ルーノのような兎型獣人族は、鼓膜を開いた状態で大きな音を聞かされると耳や頭に多大なダメージを受けてしまうし、

他にも、犬や狼の獣人族は刺激の強いにおいをかがされると鼻が潰されてしまう。

そう、獣人族は人間が持っていない能力を持っているが、同時に人間が持っていない弱点も持っているのだ。

「だから何だつてんだ、このクソ野郎が」

ダルネスを睨みつけ、ルーノはそう吐き捨てる。

彼の態度が癪に障ったのだろうか、ダルネスはルーノの頭を踏みつけている足に一層の力を込める。

「うツ……!!」

ダルネスは、

「お前、今自分がどういう状況に置かれているのかわかってないのか？」

と、ルーノに向かって憎々しげに問いかける。

返事は返ってこなかった。代わりに、ルーノが呻く声が返ってきた。

「まあつつても、お前はなかなか頑張ったと思うぜ？ なんせ俺の手下を二人も叩きのめしたんだからな」

ルーノの返事を待たず、ダルネスは続ける。

「けどよ、一つわからねえことがある」

「……？」

ダルネスの言葉に、ルーノは視線をダルネスの方へと向ける。

「それだけの力を持っているのに、何でお前はあんなガキのお守なんかにしてんだ？」

理解が出来ない、意味不明な言葉だった。

「ああ……？」痛みに耐え絞り出すように声を出し、ルーノは返事を返す。

「一体何言ってるんだ、オマエ……」

「（やはり分かってないようだな）」

ダルネスは心の中で呟き、大きなため息を漏らす。

「わかんねえか、それだけの力があれば何だって思いのままなんだけ？」

ルーノの頭を踏む足の力を弱めつつ、ダルネスは、

「この村には俺に敵う奴どころか、逆らおうとする奴すらいねえ。だから金も物も好きな時に欲しいだけ手に入る」

アルカドール王国で何年も剣術を学んできたダルネスは、それなりに剣術の腕が立つ。

そのダルネスの剣の腕の前では、ルナフ村の人々は無力だった。

ルナフ村の人々の中に、剣術でダルネスに敵う者は誰一人としていなかったのだ。

誰もがダルネスを恐れ、彼に畏怖の念を抱いていた。

そしていつしか、ダルネスに挑みかかる者はおるか、彼に逆らおうとする者すらも、ここ数年は現れなかった。

この洞窟に一人で乗り込んで来たノイト、そして今日の前にいるル

ーノを除いて。

「なあお前、俺と手を組まないか？」

ダルネスはルーノにそう言った。

目の前で倒れ伏している獣人族の少年は、自分と互角に渡り合える程の強さを持っている。

殺すよりも、仲間にしたほうが自分には有益だ。ダルネスはそう考えた。

「どうだ、お前にとっても別に悪い話じゃないだろ？」

ダルネスは姿勢を低くして、踏みつけられて砂だらけになったルーノの顔を覗き込む。

「あんなガキのお守をしているより、よっぽどおいしいと思うぜ？」

そのダルネスの顔を見て、ルーノは思った。

この男は、今まで自分の力を奮い、逆らう者だけでなく、気に入らない者も例外なくねじ伏せて来たのだろう。

そう考えると、ルーノには思うところがあった。

「……」何も言わず、彼はただダルネスの目を見る。

《ゴミ種族の人間のクセに、オレをイラつかせるんじゃないか！》

ルーノの頭の中に、その怒鳴り声が過る。

それは何年も前、まだ幼かったルーノが学校で同級生の人間に向かって放った言葉だ。

「……ダルネス」

暫く口を開かなかったルーノが、ダルネスに向かって口を開いた。
ルーノは、

「オマエ……友達いなかっただろ？」

同刻、ノイはルナフ村の中を走っていた。
息を切らせながら彼が向かっているのは、自分の家。

ノイは勢いよく家の扉を開いた。

「!? ノイ……!?!」

その音に驚き、ライラは振り向く。その先には、弟のノイがいた。

「あんだ、一体今までどこに……!?!」

「大変なんだ!! ねえちゃん!!」

ライラの言葉を遮って、ノイは怒鳴った。

「にちゃんが、あの獣人族のにちゃんが……！！　このままだと、死んじゃう……！！」

「何だつて……！？」ライラはそう返す。

ノイは確かに、「このままだと死んじゃう」と言った。

ライラはノイに駆け寄り、彼の両肩を掴む。

「まず落ち着けノイ！！　いいか、何があつたのかあたしに話すんだ」

第33章 く記憶く

「……………何？」

ダルネスはそう答える。

ルーノは、彼の表情に動揺が浮かんだのを見逃さなかった。

「その様子だと、ひょっとして凶星か？」

このような状況の中にも関わらず、ルーノは笑みを浮かべながら問う。

数秒の沈黙の後、

「……………黙れ！！」

ダルネスが、初めて感情の籠った声を発した。

その声と共に、彼はルーノの腹部に、二度目の蹴りを入れた。

「ぐッ！！」

ルーノの口の中に、酸っぱい味が広がる。

収まりかけていた痛みが蹴りによって再びり返し、ルーノは腹部を抑えて、うつ伏せの体制で咳き込む。

ダルネスがそのルーノの背中をさらに踏みつけようとした時だった。

「何で……………ごほッ！！ 分かったのか……………教えてやろうか？」

その咳混じりのルーノの言葉が、ダルネスの足を止めた。

ダルネスからの返事は無かった。ルーノは腹部の痛みを堪えながら

言う。

「オマエのその考え方な……ガキだった頃のオレとそっくりなんだよ」

「セルドレア学院」アルカドール王国の中でも一際大きな教育施設だ。

初等部、中等部、そして高等部が存在し、ここに入学した生徒は計12年間の間、ここで学ぶことになる。

人間に獣人族、孤児院出身の者から貴族の子まで、ここに通う者達の種族や身分は様々だ。

ルーノがこの学院に入学したのは、八年前。彼が六歳の頃。

その年の入学者は、ほぼ九割以上が人間の子供だったらしく、獣人族は非常に少なかった。

入学当初にルーノが所属していたクラスには20人ほどの子供が所属していたが、そのクラスには、ルーノを含めて獣人族は三人だけで、残りは全員人間の子供だった。

幼い人間の子供たちにとって、獣人族は好奇心の対象でしかなかった。

ルーノ以外の二人の獣人族の子供は、周りから好奇心の目で見つめられることに耐えられず、不登校に。

出来ることならば、ルーノも学校には行きたくなかったが、彼の父はそれを許さなかった。

クラスに一人だけの獣人族となったルーノは、クラスの中では浮いた存在だった。

皆が誰かと話している時も、一人ぼつんと教室の隅の席で椅子にふんぞり返り、

昼食の時も、教室では食べずに、一人中庭のベンチに寝転がりながらサンドイッチをかじっていた。

「（ま、こういうのも悪くないかもな）」

いつの日からか、ルーノはそう思うようになっていた。

友達と呼べる人間は一人もいなかったが、別に欲しいとも思わなかった。

よくよく考えて見れば、周りから向けられてくる視線も所詮は気にしなければいいだけの話だと。

誰からも必要とされていないが、同時にこちらも誰も必要としない。

つまりは、おあいこだった。

入学してから三ヶ月が過ぎた頃、事件が起こった。

ルーノの前の席の少年のノートや教科書が盗まれ、ぼろぼろに切り刻まれた状態で発見された。

そして、それらが発見された場所に、兎型獣人族の足跡が残っていたのだ。

それに加えて、被害に遭った少年は日ごろからルーノにからんでいることが事が多かったという。

これらを根拠に、クラスの大半の少年がルーノを取り囲み、彼に詰め寄っていた。

「（誰だよ、オレのせいになれんだろ……）」

そんな状況でも、ルーノにあせるような様子は無かった。無実であることは自分がよくわかっていたが、彼はそれを言おうとはしなかった。

言ったところで、信じてもらえる筈もないだろうから。

「お前だろ！！」「お前しかいないんだよ！！」

少年達がそう詰め寄っても、ルーノは認めなかった。

それ以前に、彼は少年達を相手にすらしていなかっただろう。

少年達の言葉など全て聞き流し、欠伸も漏らしていた。

ルーノのそんな態度に苛立ち、彼に詰め寄っていた少年の一人がルーノの胸ぐらを掴んで、彼を無理やり椅子から立たせた。

「お前がやったんだろ！？ この兎野郎！！」

そして彼は、ルーノをそう糾弾する。

周りの少年達も、ルーノに疑いの視線を向けていた。

「（こいつら……）」

しかしながら、何人もの人間に疑いの視線を向けられていてもなお、ルーノはなお平常心を保っていた。

「（単にオレを犯人にしたいだけじゃねえのか？）」

そう心の中で呟く。

「どうなんだよ！！」そのすぐ後。ルーノの態度に怒りが限界に達し、少年はルーノの頬に向けてパンチを放った。

「！！……っ」

痛みと共に、顔が横を向く。

頬に手を当てると、殴られた部分が熱を持っていた。

「（証拠もねえクセに殴るとか、ケンカ売ってやがんのか、コイツ……）」

声には出さずに、心の中でそう呟き、ルーノは先ほど自分を殴った少年の方に向き直る。

彼の目には、怒りが浮かんでいた。

そのルーノの目は、他の少年達を恐怖させるほどの威圧感があった。

「な、何だよ……！！ お前が悪いんだぞ……」

ルーノは少年に歩み寄る。その分だけ、少年は後ずさる。

「お前が、やったって言わないから……！！」

最早、少年の言葉など耳には入っていないかった。

ルーノは、頬を殴られたことのお返しのため、無言のまま少年の胸あたりに蹴りを入れた。

「ぶッ！！」

予想だにしない出来事が起きた。

蹴りを受けた少年は、後ろにいた少年達や、周りの机や椅子を押し退けながら、床に倒れ込んだ。

そして彼は、床の上で泡を吹きながら気を失った。

「（……！？）」

誰よりも驚いたのは、蹴りを放ったルーノ自身だった。

先ほど自分が受けたパンチ程の痛みを与えれば十分だと思っていた。こんなにも吹っ飛び、気絶する程の力を込めたつもりは無かったのだ。

「ば……バケモンだ……！！」

周りにいた少年達のうちの誰か一人が、そう呟いた。

「化け物」、その言葉で、ルーノは理解した。

そう。自分は彼らとは違うのだ。

彼らは「人間」で、そして自分は「獣人族」。

外見が違えば、力の強さも彼らとはまるで違うのだ。

ここにいる「獣人族」は、自分一人だけ。他は全員「人間」。

少なくとも自分は、このクラスにいる少年少女、誰よりも強いだろう。

それならば、今回のように自分に噛み付いてくる者は全員ねじ伏せてしまえばいい。

自分が持つ強さを以てすれば、負けることなどないのだから。

ルーノはその結論に達した。

その考え方は、今のダルネスと全く同じ考え方だった。

第34章 くライラの助けく

「オマエを見てるとよ、その頃のオレを思い出すんだよ」

ルーノがダルネスに語っていた間、ダルネスは何も言わなかった。ダルネスががどう思っているのかはわからない。

しかしながら、黙って聞いてくれていることはルーノにとっては好都合。

別に、ダルネスの心を動かそうなどと考えた訳ではないし、そんなつもりもない。

時間を稼げたお蔭で、マンドレイク玉の音を響かされた耳が、ようやく聴こえるようになってきた。

「下らねえ話はそれで終わりか？」

長らく黙っていたダルネスが、口を開いた。

「だったらそろそろ、俺の質問に答えてもらおうか」

地面にうつ伏せに伏しているルーノを見つめながら、

「仲間になるのか、あるいはここで死ぬか……」

そう言い、ダルネスは剣を握り直す。

長々とルーノの話を聞かされて、苛立っているようにも見えた。

「（チッ、もう少し黙ってオレの話聞いてろよ……！！）」

耳は完全に回復してはいないし、頭がグラグラしてまだ立つことも出来そうにない。

この状態では、ルーノは抵抗することなど出来なかった。どうにか話を引き延ばせないか、とルーノは言葉を探すが、

「答える」

彼の思考を遮る言葉を、ダルネスが言った。

たった三文字だけの言葉に、凄まじい程の殺気が感じられた。これ以上余計な事を言えば、すぐにでも殺されそうな雰囲気だ。

時間を稼ぐのは、もう諦めることにした。

「……クソくらえだ」

その一言で、ルーノはダルネスの誘いを跳ねのけた。

「オマエみたいなゲス野郎と組まなくなつて、オレにはもう友達が出来たんだよ」

もしもルーノが八年前のまま何も変わっていなかったとしたら、ダルネスの誘いに乗っていたかも知れない。

だが、あの頃のルーノはもういない。彼は変わった、今の彼には、大切な友人が出来た。

「……そうか」

ルーノの言葉を聞いたダルネスは、大きなため息を漏らす。理解が出来なかった。助けるチャンスを与えたにも関わらず、目の前の少年は死を選んだ。

ダルネスにしてみれば、ルーノの思考は全くもって理解出来なかった。

それから数秒、ルーノに向けて銀色に鈍く輝く刃を振り上げる。

「だったら、ここで死ね」

仲間にならないと言うならば、敵と見るしかない。

殺すには惜しい相手だったが、ルーノは自分と同等か、それ以上に強い。

生かしておけば、いずれダルネスにとって邪魔者となるだろう。

「くっ……!!」

ルーノは必死に立ち上がろうとしていた。ここで死ぬわけにはいかなかった。

ロアとアルニカと合流しなければならぬ、そして彼らを守らなければ……

しかしそんなルーノの思いも虚しく、マンドレイク玉によるダメージが彼を立ち上がらせることを許さなかった。

ルーノは風を切り裂くような音を聞いた。ダルネスが剣を振り下ろす音だろう。

「!!」反射的に目を瞑る、両腕で顔を覆う。

「……………?」

数秒が経つ、ルーノは痛みを感じなかった。

風切り音が聞こえたのは確かだ。ということは、ダルネスの剣が振り下ろされたのは間違い無い。

だったらどうして生きている？　もしや、痛みを感じる間もなく逝ってしまったのだろうか？

しかし、一撃で殺すよりも、あのダルネスならばじわじわと痛めつけるような殺し方を選びそうに感じるが……

恐る恐る目を開く。そして、目の前にいたダルネスの様子を見て、ルーノは驚愕した。

「！？」

ダルネスの背中に、一本の矢が突き刺さっていた。

「ぐ……！！」彼は地面に膝をつき、呻くような声を漏らしている。

ルーノは後ろに視線を向ける。その方向、洞窟の入り口の近くには、ずっと岩の上にいたと思っていたノイと、そしてライラがいた。

「オマエら、何でここに……！！」という言葉が出かけたが、その言葉を発することは中止を余儀なくされた。

彼女の、ライラの手に大きなボウガンが握られていたから。

背中に矢が刺さったダルネス、大きなボウガンを手にしたライラ、ルーノはようやく理解した。

そう、先ほど聞こえた風切り音は、ダルネスが剣を振り下ろしたことによるものではなく、ライラが放った矢が風を斬る音だったのだ。

「にいちゃん！！」

地面に倒れ伏しているルーノを見つけたノイが、彼に駆け寄る。そして、ルーノを助け起こす。

「ノイ……オマエがライラを連れてきたのか……？」

何も言わずに、ノイは頷いた。

ライラはボウガンに新しい矢をかけながら、背中に矢が刺さったダルネスへと歩み寄る。

ダルネスの側まで寄ると、ボウガンの先を彼の頭へと向けた。

彼女は、あの男の頭に矢を射るつもりなのだろう。

「ねえちゃん……！！」

ライラの方へ行こうとしたノイを、ルーノは彼の腕を掴んで止めた。

「やめる。オレ達が口を出す問題じゃない」

ダルネスを見つめるライラの目には、凄まじいまでの怒りが溢れていた。

自分の目の前にいる男は、有無を言わずに眉間に矢を射こんでもおかしくない相手。

何年も前の話でも、その顔は忘れていなかった。

幼かったライラの目の前で、彼女の両親を殺した——この男。

蝶のブローチが入った箱を踏み躪りながら、返り血の散った顔で笑みを浮かべていた——この男。

ダルネス盗賊団がルナフ村を荒し始めてから、一体どれだけの人間が傷つけられたのだろうか。

財産を奪われた者、畑を台無しにされた者、子供を殺された親もいる。

そしてライラは——両親を殺された。

ライラの頭に、あの頃の記憶が蘇る。
母と過ごした日々の記憶だ。

ライラの母は優しくった。誰よりも自分の事を気にかけてくれて、
誰よりも自分の事を想ってくれた。

その優しい母の命を……目の前のこの男は奪ったのだ……！！
理由もなく、ただそこにいたというだけで、まるで虫ケラのように
！！

「う……う……！！　　うわああああああああああああ
ッ……！！」

爆発した怒りが、凄まじい叫び声となってライラの口から漏れ出した。
た。

だが、彼女はボウガンの引き金を引くことはなかった。
引き金から指を外すと、ライラはボウガンが無造作に投げ捨てた。

投げ捨てると、彼女は足を踏み込んで、力の限りに右手の拳を握りしめる。

次の瞬間、ダルネスの顔面を全身の力を込めて殴り飛ばした。

「ぐほッ……！！」

骨のきしんだような音と共に、ダルネスは地面に伏した。
女性のパンチとは思えない程の力が籠っていた。いや、そのパンチに籠っていたのは、力だけではなかった。
恨み、憎しみ、そして——凄まじいまでの怒り。

「はあ……はあ……はあ……！！」

ライラは荒い息を漏らす。

そして、目の前に倒れ伏した両親の仇の男に、

「ここから去れ……！！ もう二度と、この村に現れるな……！！」

そう言った。

「……！？」

驚いたのはダルネスだ。

今なら自分を殺せる筈なのに、見逃そうというのだろうか。

ダルネスの方も、ライラを見てすぐにわかっていた。

この女は、いつか自分が殺した女の娘だと。

ここで殺せるにも関わらず、両親を殺した相手を見逃すなど、寛容過ぎるどころではないだろう。

「いいのか……後悔するぞ……？」

背中 of 矢を引き抜くと、ダルネスはフラフラと立ち上がった。

「とつとと消えろ！！ 次にあたしの前に現れたら、その眉間に矢を射こんでやるぞ……！！」

「くっ！！」そのライラの権幕に圧されて、ダルネスは洞窟から走り去って行った。

その後ろ姿を見届けた瞬間、ライラは急に全身から力が抜け落ち、その場にしゃがみ込んだ。

「ねえちゃん……！！」

ノイはルーノに肩を貸して、彼と共にライラへと歩み寄る。
歩み寄って初めて、ノイとルーノはライラの両目に涙が溜まってい
ることに気付いた。

「……………いいのか？　アイツ……………親の仇なんだろう？」

ルーノがそう問う。

どうして、あの時ボウガンを持てたのか。

親の仇を討つことが出来たのに、どうして見逃したのだろうか。

「……………なんていうかさ」

ライラは、先ほどダルネスを殴り飛ばした右手の甲を見る、赤くな
っていた。

「あの男を殺したって、残るのは虚しさだけだと思うし……………」

「……………」ノイとルーノは、黙って聞いていた。

「それにさ、お母さんもお父さんも、きつとあたしに復讐なんか望
んでないと思ったんだ」

ダルネスにボウガンを向けた時、ライラはこの男を殺してやりたい
と思った。

しかし、同時に気付いた。この男を殺しても、両親が戻ってくるこ
とはないと。

そして、両親はそんなことを望んでなんかいないと。

「……………何だか、これで一つ終わった気がするよ……………」

清々しげに、ライラはそう呟いた。
そして彼女は立ち上がり、

「ノイ、ルーノ、家に帰ろう」

「うん、ねえちゃん」

ノイはルーノに肩を貸しながら、ライラの後ろ姿に続き、ダルネス盗賊団が根城にしていた洞窟を後にした。

第35章 く謎の人物く

ライラの家机の上で、ルーノは古びた地図を見ていた。その地図は、アスヴァンの世界地図。

彼が探しているのは、「ベイルークの塔」。ロアとアルニカと離ればなれになる前に目指していた場所。

程なくして、ルーノはその塔を見つけた。地図の縮尺からすると、このルナフ村からさほど遠くない。

どうやら川に落ちて流されたせいで、ベイルークの塔に大分近づいたようだ。

「運がいいんだか、悪いんだか……」

ルーノはそう呟く。

とりあえず目的の場所は近いことが分かった。ここはひとまずラッキーだったと思うことにした。

地図を折り畳むと、彼はそれを側にいたライラに手渡した。

「なあ、本当に行っちゃまうのか？」

ライラはそう問いかける。

ルーノは机の上に置いてあった自分の剣を握り、

「ああ、行かなきゃならない場所があるんでな」

そう答えると、彼は玄関の方へ行こうとする。

「あ、ちょっとー！」そのルーノを、ライラは引き留めた。ルーノはライラの方を振り返る。

「もうちょつと休んでけば？ その両耳、まだ完全に治ってないんだろ？」

ルーノの長い両耳には、包帯が巻きつけられていた。

ダルネスがマンドレイク玉を放った時、寸前でそれがマンドレイク玉と気付いたルーノは、すぐに鼓膜を閉じた。

間一髪で直撃は避けたものの、受けたダメージは軽くはない。

今は立ち上げられる程に平衡感覚が戻ったが、今も彼の耳には異音が鳴っていた。

「それにさ、村の連中は皆あんに感謝してるよ。あんたのお蔭で盗賊団は壊滅したって」

ライラは続ける。

「それにあたしもね、やっと両親の無念を晴らせた気がする。全部あんたのお蔭だ」

「感謝なんかされる覚えはねえ。オレはただ、ノイを助けようとしただけだ」

そんなルーノを見て、ライラはかすかに笑みをこぼした。

「何だよ？」とルーノが彼女に問う。

「あんたつてさ、一時は冷たいやつだと思ったけど……内面は結構いいやつだよな」

「……はあ！？」

そのライラの言葉にルーノの頬がかすかに赤く染まる。

どう見ても、照れているのが見え見えだった。

そんなルーノが可笑しくてたまらず、ライラはまた笑みをこぼした。

「……それじゃあ、困った事があつたらまたいつでも来いよ。ノイも喜ぶだろうしさ」

そう言つて、ライラは机に伏せて眠っているノイに視線を向ける。

先ほどまでは起きていたが、今日彼はあの洞窟まで二往復した。

きつと疲れが溜まつたのだろう。ライラはその背中に毛布をかぶせた。

思い出せば、ルーノをダルネスから救つたのはライラだが、彼女を呼んで来たのはノイだ。

彼の働きがなければ、ルーノはダルネスの刃の餌食になつていただろう。

「ああ。ノイが起きたら礼を伝えといてくれ」

起こさないくらいの声で、ルーノはライラにそう頼んだ。

「それじゃあ、色々と世話になつたな」そして彼は、玄関から外へと出て行った。

「（さて、急ぐか……！！）」

心の中で呟く。ルーノは、全速力でベイルークの塔へと向かう道を駆け出し始めた。

ラータ村を出てから一日。ロア、アルニカ、そしてイルトの三人はようやくベイルークの塔へ辿り着いた。

「やつと着いたな……」

目前にある巨大な石造りの塔を見上げながら、イルトがそう呟いた。その塔の高さは、アルカドール王国の時計塔などとは比較にならないだろう。

「ロア、水晶が……！！」

そう言ったのはアルニカ。ロアは自分の胸元に掛けられた水晶を見る。

「あ……！！」水晶が紫色に輝いていた。それも、ラータ村の時よりも遥かに強く。

強い光を放っているということは、それだけ強い闇の力を感じているということ。

目の前の塔に、その闇の力を放っている者がいるのだ。

「二人とも、準備はいいか？」

イルトが、ロアとアルニカにそう言う。彼は剣を鞘から引き抜き、塔の入り口の扉に手をかける。

ロアも剣を鞘から引き抜き、アルニカも両手にツインダガーを構えた。

そして、二人はイルトの顔を見て小さく頷いた。

「よし……行くぞ!!」

イルトが扉を押し開ける。そして彼は塔の中へと走り込む。ロアとアルニカも、彼に続いた。

塔の中に何が待ち受けているのかはわからない。

ラータ村で戦ったような魔族の人間がいるのかもしれないし、もしかしたら、教科書で呼んだ巨大な魔物が潜んでいるのかも知れなかった。

しかし、塔の中には何もいなかった。

「……!? 何もいない……」

辺りを見回しながら、ロアが呟く。

胸元の水晶は、紫色の光を放ったままだった。

この水晶が感じ取っている闇の力を放っている者が、必ずこの近くにいる筈だ。

「……変だな」

イルトはそう漏らす。

もしか、こちらの存在を感じ取って、身を潜めているのかもしれない。

そう考えたイルトは、耳の鼓膜を開いた。

兎型獣人族が持つ聴力ならば、人が呼吸する音も聴きとることが出来る。

姿を隠すことが出来ても、音を隠すことは出来ない筈だ。

鼓膜を開いた瞬間、イルトの耳にたくさんの音が入り始める。

風が吹く音、鳥の鳴く声、木の葉が落ちる音。

そして、

——真上から聞こえてくる、巨大な鳥が羽ばたくような音。

「!? 上だ!!」

そのイルトの声に、ロアとアルニカも視線を上に向ける。羽ばたく音を発していたのは、翼を持った巨大な生き物だった。

「な、何なのよあれ……!?」

そう言ったのはアルニカ。

全身黒い皮膚、そして翼、ミミズを何倍にも太くしたような首。

その顔に目のようなものは見当たらない。代わりに、三日月のように裂けた口がついていた。

「化け物」、そう呼ぶに相応しい容貌。

あんな気味の悪い生き物など、今まで見たことがなかった。たった一人だけ、イルトを除いて。

「『ガジュロス』だ!! 来るぞ!!」

その瞬間、怪物は羽ばたくのを止めて、空中から三人の前へと降りて来た。

近くで見ると、その化け物——ガジュロスの容貌は一層不気味に思えた。

三人を確認すると、怪物はイルトに向かって突進してきた。

そのミミズを太くしたような首をくねらせながら、彼に噛み付こうとする。

イルトは両足に力を込めて、斜め前方へと飛び、ガジュロスの突進をかわす。

目標を失ったガジュロスは、塔の壁に派手に激突した。

「（さて、こいつをどう倒す……！？）」

ガジュロスの横に着地したイルトは、心の中でそう呟く。

この怪物は「魔物」だ。三人がかりでも、倒せるかどうか……

そのイルトの思考を断ち切る音が、鼓膜を開いた状態だった彼の耳に入る。

「！？」「誰かの足音だった。しかしロアのもでも、アルニカのものとも違っていた。

音が聞こえた方向を振り向く、塔の柱の陰から、こちらを見ている人物がいた。

その人物は、仮面で目のあたりを隠している。

「誰だ！！」

イルトがそう怒鳴る。その声に反応したロアとアルニカもその方向を向き、その仮面の人物に気付いた。

「……フッ」

特に焦る様子も無く、仮面の人物は口元に笑みを浮かべている。柱の陰から出たと思うと、仮面の人物は塔の階段へと走って行った。どうやら、塔の上の階へと逃げたようだ。

「ロア、アルニカ、追うんだ！！」

イルトは二人にそう告げた。

恐らくただの人間ではないだろう、もしかしたら「魔族」かも知れない。逃がすことは出来なかった。

「だ、だけどイルト、君は……!？」

自分達がここを離れれば、イルトはあの怪物と一人で戦うことになる。

獣人族で、そしてユリスの側近を務めるイルトと言えども、あまりに危険ではないだろうか。

「大丈夫、あの怪物を片づけたら、僕もすぐに行く!!」

「……わかった」

ロアはそう答える。「行こう、アルニカ」

そして二人は、先ほど仮面の人物が上って行った階段を駆け上がり始める。

ベイルークの塔の最上階の広い部屋。その割れた窓の側に、二人の人物がいた。

一人は、先ほどの仮面で顔を隠した人物。もう一人は、異様に白い肌に青い瞳。そして腰まで届く程に長い暗い青色の髪をした少女だ。少女は歳の頃17、18歳くらいに見え、とても美しい容姿をしている。

しかしながら、彼女の背中には彼女には不釣り合いな物があった。それは大きな大剣だ。しかも、彼女の身長ほどもある。

「この塔にもう用はないネ。じゃあボクは先に行ってるヨ」

仮面の人物は、独特の口調で長髪の少女にそう言った。

「……………」長髪の少女は無言のまま、何も答えない。

「フウ、相変わらず無口だねエ。ヴィアーシェは」

「ヴィアーシェ」、それが長髪の少女の名だ。

その時、この部屋への入り口のドアが勢いよく開かれた。

仮面の人物とヴィアーシェは、ドアに視線を向ける。

そこには、ロアとアルニカが立っていた。

「オヤ、わざわざ追ってきたのかい。ご苦勞なことだね」

仮面の人物はそう漏らした。

続いて彼は、

「じゃあ、アイツらはヴィアーシェにあげるヨ、キミの好きなように始末しちゃって」

ヴィアーシェにそう言うと、仮面の人物はロアとアルニカの方を向きながら、

「バイバイ」と、笑いながら両手を振った。

仮面の人物の後ろには割れた窓があった、逃げるつもりなのだ。

「待て!!」

剣を片手に、ロアが仮面の人物へと走り寄る。アルニカもそれに続いた。

どうしてだかわからないが、あの人物だけは逃がしてはならないような気がした。

しかし、ロア達の間にはヴィアーシェが立ち塞がった。

「!!」二人は足を止める。

その隙に、仮面の人物は割れた窓から飛び降りて行った。

「何者だ……!?!」

ロアがヴィアーシェに言う。

だが彼女は答えなかった。答えずに、彼女は今まで自分の背に掛けていた大剣の柄を握り、その刃をロア達に掲げた。

どうやら、彼女には話をする気などさらさらないらしい。

「問答無用みたいね……」

アルニカがそう言った。

彼女が何者なのかわからない。

しかし、ただ一つだけわかることがある。

ロアの胸元の水晶が、未だ紫色に輝いていた。

それが意味することはただ一つ。今目の前にいる、異様に白い肌に、腰まで届くほどの長髪を持った少女は、「魔族」であるということ。

「女っていつでも『魔族』だ。アルニカ、油断はするなよ」

「わかってる。ロアもね」

ロアとアルニカも、それぞれの武器を構えた。

第36章 ヲヴァーシェ

ヴァーシェは大剣を振りかざし、地面を蹴る。

かなりの速さで走り、一気に間合いを詰める。大剣のリーチまで近づくと、彼女はロアとアルニカに斬りかかって来た。

ロアの剣、アルニカのツインダガー、そしてヴァーシェの大剣。四本の剣による戦いが始まった。

ベイルークの塔の最上階の部屋に、金属がぶつかり合う音が何度も響く。

「（この人……強い……！！）」

剣を交えながら、アルニカはそう思った。

同じ「魔族」と言えども、ヴァーシェはラータ村で戦った魔族の將軍、ドルーグとは比べ物にならない強さだった。

ロアと二人がかりで戦っているのはドルーグの時と同じだったが、ドルーグと違い、ヴァーシェは剣を一本しか使っていない。

にも関わらず、ロアもアルニカも、剣を彼女に命中させる隙を見いだせなかった。

彼女がロアの方に向いている時にアルニカが後方から斬りかかって、彼女は後ろに目があるかのようにそれを防いでしまう。

ドルーグが力で圧す戦い方をとっていたのに対し、ヴァーシェは力だけでなく、技もあった。

さらに、ロアとアルニカと戦っている間、彼女は一言も発せず、一瞬たりとも表情を曇らせなかった。

その様子から、彼女はかなり戦闘慣れしているようだった。

何よりも驚いたのが、ヴァーシェがあの大剣を自在に使いこなし

ていること。

あの細い体のどこにそんな力があるというのだろうか、彼女は自分の身の丈程もある大剣を使いこなしていた。

ロアの剣を受けたまま、ヴィアーシェは後方にいたアルニカに向けて、少しも後ろに目を向けることなく後ろ蹴りを見舞った。

予想できる筈もない、不意の一撃だった。

ヴィアーシェの蹴りは、アルニカの胸の辺りに命中した。

「ぐっ！！」

少女の蹴りとは思えない威力に、アルニカは地面へと倒れ込んだ。

「アルニカ！！」

ロアが叫ぶ。次の瞬間、今度はヴィアーシェはロアの両腕に向かってハイキックを放った。

反応する暇も与えない程のスピードで繰り出された蹴りはロアの両腕を打ち、彼が握っていた剣を弾き飛ばした。

さらに両腕が上に払われ、ロアに隙が生まれる。

「（しまった！！）」

ロアがそう思った瞬間だった。

ヴィアーシェは大剣の柄から右手を離し、その右手の平をロアへとかざした。

その瞬間、予想だにしないことが起こった。

強風が巻き起こったような音と共に、ロアとヴィアーシェ、お互い

の髪や服がなびく。

「うつ！？」

途端に、ロアは強い風が全身にぶつかってくるのを感じた。

ここは塔の中、風など起こる筈がない。しかしそれは、間違いなく風だった。

何が起こったのか全くわからない。恐らくは、ヴィアーシェが何かしたのだろう。

「うわああっ！！」

その風に煽られ、ロアの足が地面から離れた。

そして彼は、その風に押されるような形で塔の壁へと飛ばされ、激突した。

「がッ！！」

後頭部と背部に大きな衝撃を感じた。

「あ……っ……」

次の瞬間に急に意識が遠のき、彼は気を失い、塔の地面にうつ伏せに倒れ伏した。

それを確認すると、ヴィアーシェは大剣を握り直し、アルニカの方を向いた。

「次はお前だ」、ヴィアーシェは何も言わなかったが、アルニカには彼女がそう言っているように思えた。

ロアは気絶してしまっている。ならば、自分一人でも戦うしかない。アルニカは、ツインダガーの柄を握り直した。

一人だけ塔の一階に残ったイルトは、不気味な風貌の魔物、ガジュロスと対峙していた。

その長い首をくねらせ、ガジュロスはイルトに噛み付こうとする。彼を丸呑みにするつもりなのだ。

「簡単にエサにありつけると思うなよ……！！」

イルトは上、横、時には後ろに跳び、噛み付きを避けていた。だが避け続けているだけで、彼に反撃をする様子はない。一瞬でも立ち止まれば、たちまちあの怪物の腹の中だ。

「（兎型獣人族じゃなかったら、とつくに死んでいるな）」

イルトはそう思った。

噛み付きを避け続けていられるのは、獣人族のスタミナと兎型獣人族としての脚力があってこそだ。

そうでなければ、今頃はあの裂けた口で丸呑みにされて、胃袋の中で溶かされていただろう。

とにかく、このままではただスタミナを消費し続けるだけだ。

獣人族のスタミナは人間よりも遥かにあるが、決して無限ではない。一旦、距離をとることにした。

両足に力を込めて、イルトは後方へと飛び退いた。

一時しのぎに過ぎないが、ガジユロスの首のリーチから外れた。

「アスヴァン大戦で多くの『竜族』を葬ってきただけのことはあるな……」

数メートル先の距離で蠢いている魔物を見ながら、イルトは呟いた。

【キャラクター紹介 11】 “ ヴィアーシェ ”

【種族】 魔族

【種別】 人間

【性別】 女

【年齢】 - Unknown -

【髪色】 ミッドナイトブルー

ベイルークの塔でロアとアルニカの前に立ちふさがった、「魔族」

の少女。

異様に白い肌と、腰まで伸びた暗い青色の髪が外見上の特徴で、非常に無口かつ無表情。

永遠の命を持つ「魔族」であるために本来の年齢は定かではないが、外見年齢は17〜18歳。

その異様に白い肌を除けば人間となんら変わらない容姿をしているものの、

華奢な体で自分の身の丈程もある大剣を使いこなしたり、ロアとアルニカを相手に互角以上に戦っていることから、

「魔族」という種族の強さが、いかに「人間」とかけ離れているかを感じさせる。

風を操る謎の力を使ってロアを気絶させたが、詳細は不明。

第37章 くアルニカの戦い

数秒の睨み合いの後、先に仕掛けたのはヴィアーシェだった。塔の床を蹴り、アルニカへと走り寄る。

彼女が振りかざしてきた大剣を、アルニカは両手のツインダガーで受け止めた。

ヴィアーシェはすぐさま剣を弾き、今度は上から斜めに大剣を振り下ろした。

「――」アルニカは右へと飛び退いて避ける、数秒前までアルニカが立っていた地面に、ヴィアーシェの大剣が突き刺さった。

あの攻撃を一撃でも喰らえば、死は免れない。

石造りの床に刻まれた大剣の跡を見て、アルニカはそう思った。

これ程の威力を持つ攻撃を、今まで彼女は何人の人々に向けてきたのだろう。

その大剣で、どれだけの無力な人々の命を奪い去ってきたのだろうか。

「あなた達は、『魔族』はどうして……！！」

ロアの水晶が反応したことから分かるように、今目の前にいる少女は「魔族」だ。

しかし肌が異様に白いことを除けば、アルニカには何ら「人間」と変わらなく見えた。

歳も17、18くらいだろうか、自分とそう離れていないように見える。

「何の罪もない人達を、襲うようなことを!？」

ラータ村で、無数の墓標の前で泣き崩れていた人々を思い出しながら、アルニカはヴィアーシェに言葉をぶつける。

彼女も、あのラータ村を襲った魔族の兵士達と同じなのか。

「人間」と変わらないのは容姿だけで、その心は残忍で、冷酷で、命を奪う事に何も感じない程に、冷たく凍り付いているのだろうか。

「……………」

ヴィアーシェは答えなかった。

答えるどころか、アルニカの叫びに表情一つ変えることすらなく、アルニカはまるで人形に話しかけているように手ごたえを感じなかった。

次の瞬間、ヴィアーシェは再び大剣を振りかざし、アルニカへの攻撃を再開した。

「!?!」

アルニカはツインダガーを構え直し、応戦する。

「答えてよ!?!」

それでもヴィアーシェがアルニカに返事を返すことはなく、返事の代わりに、大剣による攻撃が返ってくるだけだった。

アルニカはもう、ヴィアーシェに言葉を放つことはなかった。

もはや、戦う以外に道はないと、彼女は察したのだろう。

「う……ぐ……」

ロアはうつすらと意識を取り戻していた。
手の平に、塔の床の石が触れる感触がする。

「（……何が起こったんだっけ……？）」

地面に倒れ伏したまま、痛みが充満している後頭部を抑えつつ、心
の中で呟く。
気を失う前に、確かヴィアーシェが自分に向けて手の平をかざした。
その後に、確か風が起こり……

朦朧とする意識の中でそこまで考えていた時、ロアの思考を遮る音
が響いた。

剣と剣がぶつかり合う、金属音だった。

「……！…… そうだ……！……」

その音を聞いた瞬間、ロアは思い出した。
自分が気を失っているということは、アルニカが一人でヴィアーシ
エと戦っているという事を。

「（アルニカを助けないと……！！）」

ロアは手足に力を込めて立ち上がろうとしたが、手足はなかなか言
うことを聞かなかった。

恐らくは、先ほど受けたダメージの影響だろう。

「ぐうつ……!!」

剣を交え初めてから、三分程経過していた。

アルニカとヴィアーシェ、双方とも傷を負ってはいない。

ヴィアーシェがアルニカの足目がけて大剣を振る。アルニカはその場でジャンプをしてかわす。

右から斬り掛かってくる攻撃は右手のダガーで受け止め、左からの攻撃は左手のダガーで受け止めた。

ヴィアーシェの攻撃は一撃の威力は大きいものの、予備動作が大きい為にかわすことは難しくはなかった。

だがそれでも、アルニカのスタミナは徐々に削られていっていた。

互角に戦っているようには見えるが、少しずつ、だが確実にアルニカは追い詰められている。

対して、ヴィアーシェには全く疲れている様子はない。

少しも表情を変えることなく、彼女はアルニカに攻撃を浴びせていく。

ギリギリまで間合いを詰めて、ヴィアーシェは大剣の柄を使い、アルニカの頬を打ち上げた。

「あぐつ!!」

その衝撃に顔が横を向く。口の中を切り、血の味がする。

思わず目を瞑り、一瞬だけ視界が黒くなる。途端に、アルニカの右足の膝の上辺りに痛みが走った。

アルニカ目を瞑ったその隙を突き、ヴィアーシェが彼女の足を切りつけたのだ。

「うっ!!」

右足を傷つけられ、アルニカは地面に倒れ伏した。

傷口を抑えながら視線を上に向ける。ヴィアーシェが、その青色の瞳で彼女を見下ろしていた。

「……………」

ヴィアーシェは何も言わなかった。アルニカに止めを刺そうとせず、

ただ黙って自分の眼前に倒れ伏しているアルニカの目を見ているだけだった。

しかしアルニカには分かった。今ここで彼女に殺されると。

「ぐっ…………!! あああっ!!」

アルニカは、右手に握っていたダガーをヴィアーシェに向けて投げつけた。

ダガーは一直線に飛び、ヴィアーシェの頬に傷をつけた。

しかしヴィアーシェはそんな事を気に留める様子もない。

アルニカは立ち上がろうとするが、足に力を込めるたびに先ほどつけられた傷が痛み、立ち上がることは出来なかった。

——それから一分程経過したが、未だヴィアーシェはアルニカに止

めを刺そうとはしなかった。

「……………」相変わらず無言で、じっとアルニカの目を見つめているだけだった。

「（どうして……何もしないの……！？）」

いつでも殺せる筈なのに、ヴィアーシェは動かない。

もしかしたら地面に伏している自分の様子を見て面白がっているのかとも思ったが、表情に変化がない所為でその心中を読み取ることが出来ない。

「（一体、何で…………）」

その時、アルニカの思考を断ち切る声が、横から聞こえた。

「だあああっ！！！」

「！？」地面に伏したまま、アルニカはその声の方へ向く。

その声の主はロアだった。剣を片手に握り、彼はヴィアーシェへと走り寄っている。

それに気付いたヴィアーシェは視線をアルニカからロアへと移し、大剣の柄を握り直した。

それから数秒後、ロアの剣とヴィアーシェの大剣が激しくぶつかり合った。

「ロア！！！」

アルニカが叫ぶ。

しかしロアはその言葉には答えずに、目の前のヴィアーシェの目を見て、

「僕が相手だ」

そう一言だけ言った。

第38章 魔物

「やっと着いたか……」

目の前にそびえ立つ塔を見上げながら、ルーノはそう呟く。
ルナフ村から全速力で向かって来た為に息があがってしまったが、
随分早く着くことが出来たようだ。

ベイルークの塔、ロアとアルニカと離ればなれになる前に目指していた場所。

あれから二人がどうなったのかは分からないが、きっと二人はここに来る、もしくは来ている筈だ。

足元をみた瞬間、ルーノの予感確信に変わった。

地面に真新しい足跡が残されている。つけられてから、まだそう経っていないようだった。

数を数えると、全部で三人。

「人間」の足跡が二人分と、それから自分と同じ兎型獣人族の足跡が一人分。

当初の目的では、ラータ村で「イルト」という兎型獣人族と合流する予定だった。

この足跡がその人物のものだとすれば、どうやらロアとアルニカは予定通りにラータ村に着き、その人物と合流したのだろう。

ルーノの耳が、獣が鳴くような声を捉えた。

同時に、瓦礫を砕くような音。

その両方が、目の前の塔から聞こえてくる。

「……もう始まつてるみたいだな」

腰の鞘から剣を引き抜き、ルーノはベイルークの塔の入り口へと駆け出した。

互いの武器を構えて対峙するロアとヴィアーシェ。
アルニカは右足の傷をおさえながら床に座り込み、その二人の様子を見つめていた。

「（私には勝てなかった。だけど、ロアなら……）」

アルニカは強い。

彼女の強さは、セルドレア学院の生徒達の中でも五本の指に入る程だった。

初等部、中等部、高等部、学院には合わせて2000人近くの生徒がいたが、男子ですら彼女に敵う者は数える程しかいなかった。

剣術の授業で、二人一組になって剣を交え合うというものがあった。基本的には男子は男子と、女子は女子とペアを組むことになっていたが、常にアルニカは剣術担当の教師の言いつけで、強制的にロアとペアを組まされた。

その理由は簡単。クラスには、ロア以外に彼女に太刀打ち出来る生徒が誰一人としていなかったからである。

しかし、つい先ほど戦った「魔族」の少女の強さは、アルニ力を超えていた。

「魔族」という種族の強さを思い知らされる程の強さだった。

だけどそれでも、希望が無くなった訳ではない。

目の前には、アルニ力が自身よりも強いと認める少年、ロアがいる。授業で何度も剣を交え合ったアルニ力は、彼の強さをよく知っていた。

「大人顔負けの剣術の才能の持ち主」、伊達や酔狂でロアがそう伝わっている訳ではなかった。

実際アルニ力は、学院の生徒の中でロアを超える強さを誇る者をただ一人しか知らなかった。

その生徒は、学院の2000人近くの生徒の中で最も優秀な剣術の才能の持ち主。

つまり、2000人近くの生徒の中で、最も「強い」者である。

その者は、「1000年に一人の逸材」と呼ばれていた。

「（『あの人』程強くはないけど、ロアならきつと……！！）」

ロアに望みを託して、アルニ力は心の中で呟いた。

イルトは走りながら、後ろを追ってくるガジユロスから逃れていた。格好の良い状況ではなかったが、あの巨大な怪物と真正面から戦うのは無謀だ。

「不意を突くしかないか」ガジユロスの雄叫びを背に受けながら、

イルトは小さく呟く。

真正面の壁に向かって飛び、壁を蹴る。「く」の字を描くようにジャンプし、イルトはガジユロスの背中に飛び乗った。

ガジユロスは雄叫びを上げながら、彼を振り落とそうと暴れ始める。「うっ！！」イルトはよろめき、ガジユロスの背中に片手をつく。

「少し大人しくしてろ……！！！」

振り落とされないように気を付けながら、イルトは剣を逆手に持ち替える。

そして彼は、怪物の背中目がけて力の限りに剣を突き刺した。鈍い音が響き、怪物特有の黒くて生臭い血が噴き出す。

「シャアアアア！！！」

イルトを背中に乗せたまま、ガジユロスはガラスを引っ掻くような甲高い鳴き声を上げた。

まともに聞けば耳を潰されそうな鳴き声、イルトは耳を塞いだ。

「（効いたか？）」「怪物の様子を見ながら、彼は思う。

次の瞬間、イルトの眼前にガジユロスの大きく開かれた口が迫っていた。

「！？」」

驚愕と困惑を感じ、同時に命の危機が迫っていることを察した。このままでは、怪物に丸呑みにされてしまう。

剣を引き抜かず、イルトはガジユロスの背中を蹴り、横へと飛び退いた。

彼の数センチ真横を、ガジユロスの首が通過していく。

塔の床に落下し、イルトは背中に衝撃を感じた。
噛み付きを避けることだけを考えていたために、その後のことを考える余裕は無かった。

油断していた。ガジユロスの皮膚は軟体質で伸縮自在。先ほどのように「V」の字を描くように首を曲げることも出来る。
背中に飛び乗ったと言えども、その噛み付きから逃れられる訳ではないのだ。

イルトの剣を背中に刺したまま、怪物は目の前にいる白い毛並の兎型獣人族の様子を伺っている。

「(まさか……効いてないのか?)」

ガジユロスの背中に突き刺さったままの剣を見る。
手ごたえはあった筈、浅かったのだろうか。

いや、仮に深く突き刺していたとしても、効果は無かったかも知れない。

目の前にいるのは、「魔族」が生み出した怪物、「魔物」だ。
剣で一突きすれば殺せる、などと言う普通の生き物の常識は通用しないのだ。

「(どうする、どうやって戦う……)」

イルトが心の中で呟いた。

その時、塔の入り口の扉が強引に蹴り破られた。

「!?!」

扉の方を振り向く。木製の扉が碎け、その後ろから一人の人物が姿を見せる。

その人物は、青い毛並みをしている。そしてどうやら、自分と同じ兎型獣人族のようだ。

彼はイルトを見る。白い毛並み、両腕の金色の腕輪、水晶のペンダント。

「……オマエが『イルト』か？」

彼は、自分にそう問いかけてきた。

【キャラクター紹介 12】 “ガジュロス”

【種族】 魔族

【種別】 魔物

【性別】 - U n k n o w n -
【年齢】 - U n k n o w n -
【体色】 ブラック

「魔族」によって生み出された「魔物」。不気味な風貌を持つ。

大柄な体格に大きな翼を持ち、自在に空を飛びまわることが可能。

その顔に目は存在せず、かわりに嗅覚と聴覚が非常に発達している。

「人間」や「獣人族」と戦う時にはその大きな口で獲物に喰らい付き、一気に丸呑みにする戦い方を得意とし、

大きな獲物を捕食する際には首などの急所に噛み付き、徐々に弱らせる。

「アスヴァン大戦」では多くの「竜族」がその餌食となった。

ちなみに一体だけではなく、複数の個体が存在する。

ガジュロスとは、アスヴァンの言葉で「噛み付く者」の意。

第39章 く戦いの行方く

「だあつ！！」

ロアはヴィアーシェに斬りかかる。

下手な小細工をしても、おそらく彼女には通じないだろう。

スピード、攻撃力、リーチ、スタミナ、そのどれも彼女が勝っている。

アルニカと二人がかりでも敵わなかった相手だ。真正面から勝負を挑んでも、勝てる可能性は限りなく低い。

しかし限りなく低くとも、可能性はゼロでは無かった。

ロアには、高等剣術「アルヴァ・イーレ」がある。

この剣術は、相手の攻撃を見切り、その勢いを逆手に取り、隙を突く剣術。

幸い、ヴィアーシェの武器はあの巨大な大剣ただ一本。見切る自信はある。

「（でも、油断はしたら駄目だ）」

ロアは思い出す、先ほど喰らった謎の攻撃を。

ヴィアーシェが自分に向けて手のひらをかざした瞬間、急に風が巻き起こり、吹き飛ばされた。

それに相手は「魔族」だ。他にも自分達「人間」の知り得ない力を有しているかも知れない。

ヴィアーシェが半円を描くように大剣を横に振る、ロアはその場で姿勢を低くして避ける。

一瞬の隙を見逃さず、ロアは姿勢を低めたまま、彼女の足目がけて

剣を振った。

「（捉えた！！）」彼は心の中で呟いた。

「！？」次の瞬間、ロアは驚愕した。ヴィアーシェは前方に、地面に手をつかずに側転をするようにジャンプし、彼の攻撃を避けた。同時に、ロアの背中に衝撃が走る。

どうやら、ロアの後ろをとったヴィアーシェによって蹴りを入れられたようだ。

「うわっ！！」

バランスを崩し、前に倒れ込みそうになる。ロアが無意識に手を伸ばした先には、塔の壁があった。

壁に手をつき、転倒することは回避した。だが気を抜くことは許されなかった。

後ろから響く足音が耳に入る、ヴィアーシェが迫って来ている。

振り返った時、彼女が振りかざした大剣の切っ先がロアの目前まで迫っていた。

寸前で反応したロアはすぐさま横へ飛び退き、射程から離れる。ヴィアーシェの大剣が、後ろの壁に傷を刻んだ。

一旦後ろへと飛び退き、距離をとる。ロアは剣を構え直した。

「（本当に……まるで人形みたいだな）」

数メートル先にいる「魔族」の少女を見て、ロアは思った。

そう思ったのは、彼女が人形のように美しい容姿をしているからというだけではなく、

戦闘中に一瞬たりとも表情を曇らせるところか、眉一つ動かす様子

も無かったからだ。

戦闘馴れしている、というだけでは言い表せなかった。

戦いは数分続いた。「魔族」である分、単純な強さはヴィアーシェのほうがロアに勝っていたものの、
ロアが習得している高等剣術がその差を埋めていた。

これならば、勝機はあるかも知れない。ロアがそう思い始めた瞬間だった。

ヴィアーシェが塔の壁際へと飛び退き、大剣を使って塔の壁を破壊した。

轟音と共に、砂煙、そして壁に人一人が通れるくらいの穴が開く。

吹き入ってきた外の風が、ヴィアーシェの長い髪をなびかせる。

「……何のつもりだ？」ロアはそう問うが、やはりヴィアーシェは答えなかった。

答えずに、彼女は右手の人差し指と親指を口にあてて、「ピイイイ……」と甲高い指笛を鳴らした。

イルトとルーノは驚いていた。

数秒前まで、今にも襲い掛かってきそうだった目の前の怪物が、突然その場で翼を広げて飛び上がった。

「!？」

イルトとルーノは視線を上に向ける。

ガジュロスは塔の壁を噛み砕いて大穴を開け、その穴から塔の外へと出て行った。

二人の兎型獣人族の少年達はそれを見届けた。

「……逃げたのか？」

剣を鞘に納めて、ルーノがそう呟いた。

「いや、見逃してもらったと言っべきだな」

イルトはそう答えた。

ガジュロスが飛び去って行く直前、たまたま鼓膜を開いたままにしていたイルトの耳は、上の階から聞こえたその音を捉えていた。誰が鳴らしていたのかはわからないが、恐らくは指笛。ガジュロスに対する合図だったのだろう。

「……上に行こう」

イルトはルーノにそう言い、階段の方へと駆け出した。

ルーノはその後ろ姿を追いながら、

「あの化け物を追うのか？」

その問いにイルトは、

「いや、ひとまずロアとアルニカと合流する。二人とも君の事を心配していたよ」

第40章 くアルカドール王国へく

目の前のロアに視線を向けたまま、ヴィアーシェは大剣を背中へと掛けた。

どうやら、彼女にはもう戦意はないらしい。

対してロアは剣を握ったまま、その構えを解こうとはしない。

数秒の後、ヴィアーシェは後ろに飛び退き、自らが塔に開けた大穴から飛び降りた。

「……!?」ロアは驚いた。ここは塔の最上階だ。飛び降りたりしようものなら、死は免れないだろう。まさか、気でもふれたのだろうか。

そのロアの考えは、彼が大穴に駆け寄った瞬間に打ち砕かれた。

「うつ!!」

凄まじい風圧に、ロアは両腕で顔を覆う。

大穴の向こうには、その大きな翼を羽ばたかせながら滞空する怪物がいた。

塔の下の方で遭遇した、黒い体色に三日月のように裂けた口を持つ「魔物」、ガジュロスだ。

裂けた口を開き、何十本もの鋭く尖った歯を露わにしながらロアを威嚇するガジュロス。

その化け物の背中には、ヴィアーシェが乗っていた。

「……………」

彼女は長い髪を風になびかせながら、ガジュロスの背中の上でロア

を見下ろしていた。

ロアはヴィアーシェを睨み返す。

アスヴァン大戦を仕掛け、多くの命を奪い去った種族、「魔族」のヴィアーシェ、

その「魔族」の根源を断つ為に立ち上がった「人間」のロア。

文字通り、「敵同士」の二人は無言のまま対峙し合う。

数十秒の後、ヴィアーシェを乗せたガジュロスは、どこかへと飛び去って行った。

開けられた大穴から、ロアは飛び去っていく怪物の後ろ姿を見つめていた。

怪物の後ろ姿が遠くへと消えた後、ロアは剣を鞘に納め、アルニカへと駆け寄る。

「アルニカ、大丈夫？」

ヴィアーシェに右足を切り付けられたアルニカは、その傷口を押さえながら地面に座り込んでいた。

「うん。痛みもひいてきたし……」

そう言い、アルニカは立ち上がろうとする。

「痛っ……」途端に、右足の傷に再び痛みが走った。

その痛みを堪え、アルニカは立ち上がる。傷口を見ると、血も止まっているようだった。

後ろから扉を開く音が響く、ロアとアルニカは、扉の方を振り返った。

二人の兎型獣人族が走り寄って来る。

一人はイルト。そしてもう一人、青い毛並をした兎型獣人族。

「あ……！？」

ロアが声を上げる。その青い毛並の兎型獣人族は、ロアとアルニカがよく知る、彼だった。

グールから自分達を庇い、川に落ち、急流に飲み込まれたと思っていた、彼だった。

「ル……！！」

アルニカがそう漏らす。

次の瞬間、ロアとアルニカは同時に、その兎型獣人族の少年の名前を呼んだ。

「「ルーノ……！！」」

「よう、久しぶりだな」ルーノは右手を上げて、ロアとアルニカに応えた。

彼が生きていてくれたことが、嬉しくてたまらなかった。

ロアとアルニカは、ルーノへと駆け寄る。

「助からなかったとばかり思ってた……！！」

ロアが言う。

「……オイ、勝手に殺すな」

笑い混じりに、ルーノはそう答えた。

彼は続ける。

「大体な、このオレがあれくらいでくたばるとでも……んぐ!？」

ルーノがそこまで言いかけた瞬間、後ろからアルニカが抱きついてきた。

まるで兎のぬいぐるみを抱っこするかのようになり、彼女はルーノの小さな体を持ち上げる。

少女のアルニカでも持ち上げられる程、ルーノの体は軽かった。

「よかった、ホントに無事でよかったよルーノお!!」

耳元に聞こえるアルニカの声。

彼女の両腕は、ルーノの腹部に食い込んでいた。

「ちょ、アルニカ、やめろ!! 苦し……!!」

手足をばたつかせるが、アルニカは彼を離さない。

嬉しさのあまり、目の前のルーノの状態が見えていないのだろうか。このままでは、今度こそルーノは天に召されることになってしまうのでは、ロアは思った。

「アルニカ。嬉しい気持ちはわかるが、喜びに浸るのはもう少し先に延ばしてくれないか？」

ロアと同じことを思っていたのか、側にいたイルトがアルニカに言った。

「あ、すみません。イルトさん」

そう答えて、アルニカはようやくルーノを解放した。
ルーノは腹部を抑えてむせながら、

「今度こそ死ぬかと思ったぞ……！！」そう漏らす。

「三人とも、これからの事を話すから聞いてくれるか？」

そう言ったのはイルト、ロア達は彼に視線を向ける。

「これから一度、僕達はアルカドール王国に戻る」

イルトは三人にそう告げる。

どうやら、彼は今回の事をユリスに報告しなければならいらしい。
「魔族」が村を襲撃したこと、このベイルークの塔に「魔物」がいたこと。そして、あの仮面で顔を隠した人物のことも。

三人は反対しなかった、この塔にはもう用はない。

さらに、アルニカはヴィアーシエの剣で傷をつけられている。

ドルーグの時のように、毒が仕込まれている可能性も否定は出来なかった。

しかし、一つだけ気になることがあった。

「でもイルト、ここからアルカドール王国へはすごく遠いよ？」

ロアがそう問う。確かに、アルカドール王国からここに来るまでは二日の時間を要した。

「心配はない」イルトはそう答えて、手の平サイズの丸い鏡を取り出した。

「『転位の鏡』、これを使う」

「転位の鏡」とは、アスヴァンに数ある魔法道具の一種だ。

使い方は簡単。一人が鏡を持ち、一人で使う場合は自分一人を、多人数で使う場合はその全員を映す。

そして鏡を持った者が行きたい場所の地名を念じ、鏡を割ればいい。割った瞬間に、鏡に映っていた者全員が念じた場所へと転位される。

便利な道具だが、貴重な物であるために入手は簡単ではない。

加えて一度きりの使い捨てであり、さらに鏡を持つものが一度行つたことのある場所でなければ、行くことは出来ない。

イルトによれば、彼はラータ村へ来る前にこの鏡をユリスから渡されたらしい。

「それじゃあ始めよう。皆、この鏡に映るように」

ロア、アルニカ、ルーノにそう告げて、イルトは「アルカドール王国」という地名を念じた。

第41章 く魔族の帳く

アスヴァンの遙か東に位置する、「魔族」の王国「モルディーア」。
どこに行こうとも光など無く、黒い水を吸ったような雲に覆われた
空には常に雷鳴が轟いている。

王国の中心にそびえ立つのは、「魔族」の者達の本拠地とも言える
城、「モルディーア城」。

その城のバルコニーに、一人の男が立っていた。
漆黒のローブを纏い、そのローブのフードを被っている。

目元はフードに隠れていて見えないが、顔の下半分の肌が異様に白
いことから見て、どうやら彼も「魔族」のようだ。

彼は腕を組み、視線を下へと向けている。その様子を見ると、誰か
を待っているようにも見える。

「（……来たか）」

その男は心の中で呟いて、視線をバルコニーの床から黒い雲に覆わ
れた空へと向ける。

雷鳴を背に受けて、一匹のガジュロスがこちらへ向かって飛んでき
ていた。

ガジュロスの背中には、ヴィアーシェが乗っていた。バルコニーか
らでも、彼女の長い髪がなびいているのが見える。

それから数秒後、ガジュロスの背中から飛び降り、ヴィアーシェは
バルコニーの上、

男から数メートル程離れた場所へと着地した。

「待ったぞ」

男は、彼女にそう声を掛けた。ヴィアーシェは男の方を向く。ロープのフード越しに、二人は視線を合わせた。

「例の物を渡してもらおうか」

男が手を伸ばし、その手のひらを上へ向ける。ヴィアーシェはポケットから何かを取り出す、彼女が取り出したのは、紫色の光を放つ石だった。周りが暗いせいで、その光は鮮明に見える。

石を片手に男へと歩み寄り、ヴィアーシェは差し出された手のひらにその石を乗せる。

男は受け取った石をポケットにしまう。

そして、バルコニーと城の内部をつなぐドアへと歩いて行く少女を見て、

「ヴィアーシェ」

彼女の名前を呼び、その後ろ姿を引き留めた。

ヴィアーシェは振り向かず、その場で男の声に耳を貸す。

「何故、奴らを殺さなかった？」

男はそう問いかけた。

どうやら、男は何らかの方法でベイルークの塔での出来事を見ていたようだった。

「……………」

男の問いに、ヴィアーシェは答えなかった。双方とも口を開かず、一時の沈黙が流れる。

「……まあいい、お前に伝えることがある」男は再び口を開く。
ヴィアーシェの後ろ姿を見ながら、

「もうじき戦いが始まる。我々『魔族』がアスヴァンを支配するた
めの、戦いがな」

男は続ける。

「まず手初めに、我ら『魔族』は『イシユアーナ共和国』を落とす。
この戦いには、お前も参加することが決定した」

「……………」

ヴィアーシェは男の方を振り向いた。しかし、やはりその表情には
変化が無かった。

無口な所といい無表情な所といい、相変わらず人形のような奴だな。
男はそう思った。

「わかったな？ お前は我々の貴重な戦力の一人なのだ」

男はそう確認する。

ヴィアーシェは答えずに再び男に背を向けて、バルコニーから出て
行った。

「……相変わらず、可愛げのない奴だ」

ヴィアーシェが出て行った扉を見つめて、男はそう呟いた。

——同刻。アルカドール城、玉座の間。

玉座に腰かけたユリスと、彼女の側にはロディアス。その前にはイルトがいた。

「それでは、やはり『魔族』が……」

「うん。ユリスが感じた通り、力を取り戻しつつあるみたいだ」

ユリスの言葉に、イルトがそう答えた。

ついさっき、イルトがユリスへの報告を終えた所だ。

「魔族」がラータ村を襲撃したこと、ベイルークの塔で遭遇した「魔物」、それから仮面の人物のことも。

「……どうやら、恐れていた事態のようですね」

ロディアスがユリスに言う。

ユリスは小さく頷いた。

ユリスの予感はずしかった。

滅ばされたと思っていた「魔族」が、その力を取り戻しつつあるのだ。

彼らが準備を整え、アスヴァンの侵略行為に及ぶのも時間の問題か

も知れない。

「ユリス様、ロア君達に警告をしますか？」

ロディアスはそう続けた。

ロア、アルニカ、ルーノ、この三人は「魔族」と戦い、生き残った。「魔族」の者達がその強さを警戒し、彼らを標的にしてくる可能性がある。

「……いいえ」

ユリスは首を横に振った。

「ロア達に、無用な気を煩わせたくはありません。今は、ゆっくりと休ませてあげましょう」

彼女の言う通りだった。ロア達は「魔族」と戦い。疲れ、傷ついている。

中でもアルニカは、「魔族」によって毒を受け、一時は命の危機に立たされたと聞いた。

彼らが余計な心配事を増すような事を告げるのは、適切とは言えないだろう。

「さて……」

ユリスは、玉座から立ち上がった。そして、玉座の間の入り口の方へと歩き始める。

「イルト、ロディアス、一緒に来て下さい」そして、後ろの二人を呼んだ。

「何用です？」 ロディアスは王女の後ろ姿に問いかける。

「来たるべき時に備えて、私も剣術の腕を磨いておこうと思います」

第42章 くセルドレア学院く

次の日の朝、朝食や洗顔を済ませたロアは学校に行く準備をしていた。

ベイルークの塔に向かっていた間、ロア達は休学届を出して学校を休んでいたが、今日は数日ぶりに登校することにした。

ロアは壁に貼られた時間割表を見ながら、

「（……数学）」ロアは机の上の本立てに置かれていた数学の教科書を手に取り、それをカバンに詰める。
もう一度、時間割表に視線を向ける。

「（次に……アスヴァン史か）」
今度は本立てからアスヴァン史の教科書を取り、同じようにカバンに入れた。

「あとは……ん、剣術」

今日は剣術の授業がある日だった。

ロアは勉強嫌いではなかったが、ただ座って教師の話を聞き、黒板を書き写すだけの授業は退屈だった。

しかし、体を動かして剣の技を学ぶ、剣術の授業は好きだった。

鞘に納められた愛用の剣を掴み、それもカバンに入れる。

剣術の授業に教科書はない。使うのは、生徒達が使う武器だけだ。

ちなみに、生徒が持ち込んだ武器は朝一番でクラスの担当教師に預けることになっている。

これは安全面を考慮しての規則だ。

「さてと……!!」

準備は出来た。ロアはカバンを肩に掛けて立ち上がる。

教科書に加えて剣も入れているせいだろう、カバンはなかなか重い。窓を閉めて戸締りを済ませ、ロアは玄関へと向かった。

ロアやアルニカ、そしてルーノが通うセルドレア学院は、アルカドール王国の中でも一際大きな教育施設だ。

「人間」に「獣人族」、孤児院出身の者や貴族の子息まで、様々な種族、身分の者が通っている。

初等部、中等部、高等部が存在し、総生徒数は2000人近くにもなる。

その校舎は豪華かつ荘厳な造りで、中庭には庭園に噴水、その外観は「学校」というよりも王族が住むような「宮殿」に近い。

教室や購買の他にも音楽館や美術館、運動場、剣術の訓練場。

そして講堂など、充実した施設が揃っており、入学したばかりの新生が校内で迷子になることも珍しくなかった。

規模だけではなく、学力も剣術の強さもアルカドール王国の教育機関の中でトップクラス。卒業生の中には学者として名を馳せたり、アルカドールの騎士団に入団した者も多い。

現在のアルカドール王国騎士団団長、ロディアスもその一人である。

「あ、先生!!」

自分のクラスに向かっている途中、ロアは自分の前を歩いていた後ろ姿にそう呼びかけた。

呼びかけられた男性は後ろを振り向く。

「おおロア、久しぶりだな」

ロアの顔を見て、その男性はそう返した。

男性は犬の獣人族で、背が高く、毛並の色は快晴の空のような水色。ラータ村で出会った狼型獣人族のガルフに似た容姿をしているが、彼に比べて毛の量は少なく、すっきりとした感じがする。

犬歯も、ガルフ程鋭くはない。

この犬型獣人族の男性の名は「ヴルーム」。彼はセルドレア学院所属の教師であり、ロアのクラスの担任を受け持っている。その担当科目は、「アスヴァン史」と「剣術」だ。

「休学の理由は知っている。怪我はないのか？」

ロアと共に廊下を歩きながら、ヴルームは隣を歩くロアに言う。

ヴルームは知っていた。ロアがユリスの命を受けてベイルークの塔へ赴き、「魔族」と戦ったことを。

教師として、自分の生徒の身を案じているのだ。

「心配してくれてありがとう、無傷です」

ロアはそう答える。

気が付くと、自分の教室の前に着いていた。

「……そうか、だがくれぐれも無茶はするなよ。お前が相手にして

いるのは……」

「ひいひいゝゝっ！！ 遅刻遅刻、ちよつと待ってゝゝっ！！」

ブルームがロアに言いかけた時、ドタドタと廊下を走るけたたましい音と共に、その少女の声が響く。

二人ともその声の方を向くと、ショートヘアをたなびかせながら一人の少女がこちらへと走ってくる。

少女は二人の目前でスライディングをするように止まると、

「ん？ ロアじゃん！！ おひさー！！」

その少女は、近くで見ると大きな瞳が印象的だった。

活発そうな外見をしているが、内面はもつと活発な性質のようだ。

「何かここ数日、アニーもロアも、あとルーノも学校に来ないからちよつと心配してたところだよ？」

無駄に大きく、そして抑揚の入った声で少女はロアにそう言った。小さい子供だったら物陰に逃げ隠れてしまいそうな程に高いテンション。

ちなみに、彼女が口にした「アニー」という名前は、彼女が付けたアルニカへの愛称。

と言っても、アルニカをその愛称で呼ぶのは彼女だけだが。

「あ、うん。久しぶりだね、リオ……」

相変わらず元気だな、ロアは心の中で呟く。

いきなりの出来事に呆氣をとられつつも、ぎこちなく返事を返す。次の瞬間、少女の視界にロアの隣にいた空色の毛並の獣人族の男性

が映った。

「おっ！？ ラッキー！！ ヴルム先生よりも先に教室に入れば滑り込みセーフっ！！」

ブルームを視界に捉えると、少女はチャンス到来、と言わんばかりに目を輝かせ、教室のドアに手をかけた。

「あー！！ おいこら待てりオー！！」

「はーっはっはっはー！！ 待てと言われて待つバカはいないっ！！」

高笑いと共に捨て台詞を残し、自分の担任の制止も聞かずにドアを開ける。

大地を揺るがすようなパワフルな走りで、まるで飛び込むように教室の中へと駆け込んで行ってしまった。

静けさを取り戻した廊下、ブルームは大きなため息をついて、

「……しょうがない奴だな」

教室のドアを見つめ、あきれ気味に漏らすブルーム。

その隣で、ロアは「あははは……」と苦笑いを浮かべる。

「まったく、あれでも貴族の娘か。なあロア？」

「んー、まあでも、リオのああいいう元気満々な所、僕は嫌いじゃないですよ？」

授業開始の時刻を示す鐘の音が鳴り響いた。

ヴルームはロアに告げる。

「ロア、教室に入れ。授業始めるぞ」

第43章　く授業く

「アスヴァン大戦で最も猛威を振るっていたとされる『魔物』が、この……」

ブルームは黒板にチョークで書き込み、教室の奥まで届き渡る声でその内容を読み上げていく。

教室の中の30名ほどの生徒達の中には、ブルームの話を聞いている者や、羽ペンで黒板を写している者もいる。

そしてロアは机に頬杖をついて、教室の天井を見上げていた。

「早く剣術の授業にならないかな……」

ロアは教室の壁の時計を見つめ、人差し指で机を叩きながら小声で呟く。

時よもっと早く進め。と念じてみても、時計の秒針が進む速さは変わらない。

不意に背中を指か何かでつつかれたような感触がして、ロアは後ろを振り向いた。

「休んでたんだし、ちゃんと授業に集中しなきゃダメよ？」

周りに聞こえないよう、小声でそう言ったのはアルニ力だった。

彼女の席はロアの後ろで、腕を伸ばせば背中をつつけるくらいの距離だ。

ロアは小声で呟いたつもりだったが、彼女には聞こえていたのだろうか。

「……だってアスヴァン史なんて黒板を写すだけだし、ヒマだよ」

欠伸混じりに、ロアはアルニカに答える。
アスヴァン史の教科書を手に取り、パラパラとページをめくりながら、

「それにこんなの、実際の生活には必要ないと思うし……」

「でも、『魔族』の事とかを知っておくのは私達にとっては役に立つんじゃない？」

アルニカの言うことにも一理あった。

確かにアスヴァン史の授業が終われば次は剣術の授業だし、今は我慢しておこうかな。ロアはそう思った。

ふと、ロアは自分の隣の席が空席になっていたことに気づき、アルニカに問う。

「そういえば今日、ルーノは？」

ロアの隣はルーノの席だが、彼は欠席だった。アルニカは両掌を上に向けて首をかしげ、

「わかんない。来る時も会わなかったし、寝坊したのかも？」

アルニカが答えた後、不意に「く……」と、いびきをかく声が聞こえた。

ロアとアルニカはその声の方を向く。
いびきをかいていたのは、ロアの斜め後ろ、アルニカの隣の席に座っていた少女、リオだった。

頬杖をつき、ショートヘアの髪を揺らしながら、かくんかくん、と規則正しいリズムで頭を揺らしている。

彼女は夢の世界に行ってしまったているらしい。

「リオちゃん、リオちゃん？」

アルニカが呼びかけたが、反応は無かった。
彼女は手を伸ばし、リオの肩を軽くゆする。

「ふえっ！？」

夢の世界から引き戻されたリオは、電撃が走ったように体を震わせた。
起きたばかりで眠気の覚めない意識のまま、視線を隣のアルニカへと向ける。

「どうかした？ アニー」

目をこすりながら、リオはアルニカに言った。
どうして彼女はアルニカの事を「アニー」と呼ぶのか、ロアはかねてから疑問に思っていた。

何度かその理由を尋ねたことはあるが、リオ曰く「秘密」とのこと。

「リオちゃん、いびきかいて寝てたよ？」

さらにアルニカは、リオの口元を指差して、

「それと口の下によだれついてる」

「げ！！ ほ、ほんとに！？」

赤面し、リオは慌てて衣服の袖で口元を拭う。

紫色がかったピンク色のショートヘアが印象的なリオは、ロアやアルニカのクラスメートだ。

底抜けに明るく、かつ嫌味の無い性格の持ち主で、クラスではムードメーカー的な存在である。

成績は悪くないものの、学院の教師達の間では「遅刻居眠り常習犯」という通り名で有名。

遅刻を繰り返したせいで、一時は進級に危機感を覚えたこともあるらしい。

その墮落した生活態度からはにわかに信じがたいが、彼女はアルカドール王国でも名の知れた貴族の娘。

普段は衣服で隠しているが、左肩に家紋の刺青がある。

「えー、まだこれしか時間経ってないの？」

リオは教室の時計を見て、落胆したように言った。

彼女は机に頬杖をつき直し、

「あーあ、早く槍術の授業やりたいなあ……」

憂鬱そうな表情で、ぼそりとロアのようなセリフを漏らす。

「槍術」とは、槍を扱う武術だ。

セルドレア学院の生徒の大半は剣を武器として使うが、リオは槍を使う。

彼女曰く、「剣は皆使ってるし、槍の方が格好良さそう」とのこと。

ロアもアルニカも、リオが槍を振るっている所は見たことがないが、リオと一緒に槍術の授業を受けている者からは、「強い」と聞いて

いる。

「同感だよ、リオ」

頷きながら、ロアはリオに言った。

「もう……」アルニカはあきれ気味に、

「リオちゃんもロアも、アスヴァン史は苦手なんですよ？ 真面目に授業受けてないと、本当に落第しちゃうわよ？」

「どうせ真面目に受けてたって……」ロアがそこまで言った時、

「誰だ！？ 喋ってる奴は！？」

教室の中に、グルームのその声が響いた。

黒板に書き込む手を止めて、グルームは視線をロア達のほうに向ける。

「ロア、リオ、お前等か？」

静かな口調ながら、どこか威圧感のあるグルームの声。

グルームは普段は優しく生徒に接するものの、私語などの授業を妨害するような行為には厳しい教師だ。

怒らせた時の怖さは中等部でも有名で、毎年学院で行われる「怒ると怖い先生ランキング」で、常に三位以内にランクインする程。

「あ、いや……あたし達は、その……」

手をばたつかせながら、リオは弁解する。

グルームから視線を逸らし、言葉を探すように視線を泳がせる。

「僕達は、えっと……」

ロアも同様だった。

「すみません」不意に、リオの隣でアルニカが立ちあがった。

ロアとリオは、アルニカの顔を見上げる。

「私の独り言です」

見かねたアルニカが、助け舟を出した。

「……独り言？」ヴルームは答える。

「アルニカ、お前そんな癖があつたのか？」

教壇の上に置いてあつた教科書を開き、犬型獣人族の教師は、

「ではアルニカ、教科書112ページの『デルズロイ』という魔物について簡潔に説明してみろ」

「はい」アルニカは頷く。

もしかしたら自分に回ってくるかもしれない、ロアもリオも同じ事を思い、教科書の112ページを開く。

ページの上半分に、魔物の絵が描かれている。一緒に描かれている人間の大きさからみて、非常に巨大な体格の魔物のようだ。

その頭から生えた「S」の字を描くように湾曲した角、不気味な光を放つ両目。

「災厄」という言葉を、そのまま形にしたような姿の魔物だった。

「『デルズロイ』は、アスヴァン大戦で最も多くの「人間」や「獣人族」の命を奪ったとされる魔物で……」

教科書に描かれた「デルズロイ」の絵を見つめながら、ロアとリオはアルニカの説明を聞いていた。

第44章 くイワンく

「はあくあ、疲れたあ……」

午後12時頃。セルドレア学院の中庭、色とりどりの花が植えられた花壇の側のベンチに腰かけて、ロアは伸びをしていた。

終わった、ようやく終わった。今日のアスヴァン史の授業は異様に長かった気がする。疲れを感じていたものの、同時にロアは嬉しさも感じていた。

なぜなら、この昼休みが過ぎた後は待ち焦がれた剣術の授業だからだ。

購買で買ってきたハムとレタスのサンドイッチをかじっていると、喉が渴いてきた。

水分補給をしようと思ったその時、ロアは気付いた。飲み物を買いは忘れていたことに。

「(……仕方ないな)」

ロアは立ち上がった。もう一度購買に戻るのには面倒だったが、それよりも今は水分を摂りたかった。

ジュースでも水でも、とりあえず喉を潤せられれば何でもいい。もう一度購買へ戻ろうと、ロアは歩き始める。

「ロアー!!」

後ろからの呼び声に足を止めて、ロアは振り向く。

彼を呼んだのはアルニカだった。オレンジ色の髪をたなびかせながら、彼女はロアへと走り寄って来る。アルニカは、両手に学院の校

章が入った紙コップを持っていた。

ロアの側に来ると、アルニカは右手の紙コップをロアに差し出しながら、

「お疲れ、はいカフェラテ。私のおごり」

「ん、ありがとう……」

少年に紙コップを手渡すと、アルニカはベンチに腰かける。

ロアも、彼女の隣に腰かける。アルニカは、

「購買でこのブラックコーヒー買ってたら、ブルーム先生に呼び止められてね。ロアに伝えて欲しいことがあるって」

「伝えて欲しいこと？」

アルニカは「うん」と頷いて、

「今日の剣術の授業、槍術と合同だって」

「合同？ 本当に？」

初耳だった。通常、授業が合同になったり教室が変更されるような事があれば、掲示板にでもその内容が掲示される筈だが、アルニカによると、ブルームが唐突に合同授業をすることに決めたらしい。

何で急に合同授業なんか？ ロアは真っ先にそう思ったが、同時にある人物の名が浮かんだ。

それは、ロアもアルニカもよく知っている少女の名前。槍術と合同

ということとは、彼女と一緒に授業を受けることになるだろう。

「もしかしたらロア、リオちゃんと戦うことになるかもね」

そう。リオだ。

ロアやアルニカは剣術、リオは槍術。専攻している科目が違う為にこれまで剣を交え合う機会はなかったが、合同授業となれば話は別だ。

「いや、アルニカが戦うことになるかも知れないよ？」

「ん、だとしたら私は勝てないかなあ、リオちゃん、強いらしいし……」

「遅刻居眠り常習犯」という不名誉な名で知れ渡っているリオだが、彼女の槍術の強さも同時に有名だった。

聞いたところによると、男子三人がかりでも彼女に敵わなかったらしい。

「まあ、リオは貴族の娘だから。きっと小さい頃から槍術の練習を積んできたんだろうし」

そう言うと、ロアは紙コップに口につけて、中の液体を口に含んだ。

「それにリオちゃん、なんたって『あの人』の妹だもんね」

アルニカはそう続けた。

「……ん？」隣に座っていたロアが、その一文字を呟いた。どうかした？ そうアルニカが問いかけようとした瞬間だった。

「んぶうつ!!」

まるでタコがスミを吹くかのごとく、ロアは数秒前に口に含んだブラックコーヒーを吹き出した。

そう、ブラックコーヒーを。アルニカはカフェラテと言っていたが、彼女がロアに渡した紙コップには、とてつもなく苦い液体が入っていた。

カフェラテだと信じて疑っていなかったロアは、無防備にも紙コップのおよそ半分程のブラックコーヒーを口に入れてしまった。

ロアは、超が付く程にブラックコーヒーが苦手なのだ。

「けほ、けほ、に、にが……!! これって、ブラック……!!」

瞳に涙を浮かべながら、ロアは口の中の苦い味を吐き出す。

「え!?! あれ? あれ?」

驚いたのは、ロアよりもアルニカのほうだったかもしれない。いたずらを仕掛けたつもりはなかった。

ロアに渡したのは、確かにカフェラテ……と思っていた。

「あ!! ま、間違えた……」

アルニカは気づいた。カフェラテではなく、ブラックコーヒーの入った紙コップを渡していたことに。

カフェラテとブラックコーヒーならば色の違いで普通は気付く筈だが、話に気が傾いていた為か、ロアは気付かなかったようだ。

つまるところ、故意ではないにしても、ブラックコーヒーをカフェラテと偽ってロアに渡してしまった、アルニカのミスだ。

「アルニカ〜〜っ!!」

口の中に充滿しているブラックコーヒーの味にむせびながら、呻くような声でロアは言う。

「ぐ、ごめんロア!! 口直しにこっち飲んで!!」

アルニカがカフェラテの入ったコップを差し出す。ロアはそれをひったくるように受け取ると、甘口のカフェラテを一気に口へ流し込んだ。

そのカフェラテはとても甘かった。角砂糖三つ……いや、四つは入っていたかもしれない。ブラックコーヒーの苦い味を中和するには十分な甘さだった。

購買でこのカフェラテを買った時、ロアは苦い味が苦手だということを知っていたアルニカは、角砂糖を多めに入れてもらっていた。

「もう……僕の舌はアルニカのように頑丈じゃないんだ。気を付けてよ」

「ははは……ごめんごめん。今度から気を付けるね」

ロアの使った「頑丈」、という表現は若干気になったものの、紙コップを渡し間違えたこちらに落ち度があったと思うので、アルニカは突っ込まないことにした。

「よお、元気だったか二人とも」

真後ろから聞こえてきたその声に、ロアとアルニカは同時に振り向いた。声の主の男は背が高く、長めに伸ばした髪を金色に染めている。

その胸元についた数本のペンダントが触れ合い、チャリチャリと音を立てている。そのペンダントといい金髪といい、男の見た目を一言で言い表せば、「チャラ男」だ。

「あ、イワンさん」

アルニカはそう返事をした。「イワン」、それが彼の名だ。

その容姿や背の高さから人によつては20歳以上に見えるかもしれないが、彼は18歳だ。

セルドレア学院の高等部三年生で、ロアやアルニカにとって彼は先輩的な立場にあたる。

イワンはリオの実兄、すなわち彼は貴族の御曹司なのだ。

リオ同様に、彼も肩に家紋の刺青があるが、左肩に刺青があるリオに対し、イワンは右肩に刺青がある。

彼は左利きだ。もしかしたら、そのことが関係しているのかもしれない。

「ロア、今日リオのやつはちゃんと遅刻しないで学校来たか？いくら叩いてもつついても踏んづけても起きねーからほつといて一人で来たんだよ」

イワンは、自分の妹がロアやアルニカと同じクラスということを知っていた。

「ちゃんと来てましたよ。遅刻寸前でしたけど」

今朝のことを思い出しながら、ロアはそう答えた。

「そうか、ありがとな」と、イワンは返す。

……というか、叩いたりつついたりするのはわかる気がするが、踏んづけるといっのはやりすぎではないか、とロアは思ったが、そこまでされても起きないリオは、どれだけしぶといのだろうとも思った。

昼休みの終わりを示す鐘の音が鳴り響いた。

「んじゃ、午後の授業頑張れよ」

ロアとアルニカに手を振って、イワンは走り去って行った。授業頑張れよ、そういうイワンも午後の授業はある筈だが、まるで他人事のような言い方。

「イワンさん、また授業サボるつもりかな？」

ロアはアルニカに問いかける。

「……多分。あの人大分面倒くさがりだから」

苦笑いを浮かべ、アルニカは答えた。

「遅刻居眠り常習犯」という異名を持つリオ。そして彼女の兄のイワンは、「サボり常習犯」という異名を持っていた。

聞いたところによると、出席日数ギリギリでどうにか高等部まで進級してきたらしい。

妹のリオと兄のイワン。貴族という極めて高貴な育ちの二人だが、兄妹揃って学院では問題児扱いされている。

しかしながら、リオと同じくイワンも嫌味がなく誰とでも分け隔てなく接する性格の持ち主で、学年や種族関係なく、友人は多い。さらにこれもリオと同じく、イワンはその不名誉な異名よりもむしろ

る、剣術の強さで有名だった。

セルドレア学院の2000人の生徒達。剣術だけを見れば、イワンはその中で最も優秀な生徒だ。すなわち、学院の生徒達の中で一番強い。彼の強さは、「100年に一人の逸材」と呼ばれる程。恐らくは、ロアですら敵わないだろう。

普段の生活態度に難があるという共通点を持つ兄妹。

それと同時に、リオとイワンは「強い」という共通点も持っている。

「ロア、もうすぐ剣術の授業始まるよ？ 行こう」

アルニカはロアに促してベンチから立ち上がり、歩き始めた。

「わかった」ベンチの脇に置かれていたくず籠に紙コップを投げ入れて、アルニカに続く。

第45章 〈特別授業〉

「…………あれ？」

学院の剣術修練場に足を踏み入れると同時に、ロアはその声を漏らした。

「どうしたの？」後ろにいたアルニカがロアに問いかけたが、修練場の様子を見た瞬間、「…………あれ？」と、彼女もロアと同じ声を発した。

その理由は、修練場の中にいた人物が余りにも少なかったからだ。両手の指で数えられる程の人数しかない。

剣術を専攻している生徒だけでも数十人いる。さらに槍術と合同となれば、この修練場には数えきれない程の生徒達がいても不思議ではない。

……四人、修練場にいるのは四人だ、男子生徒と女子生徒がそれぞれ二人づついて、ロアとアルニカを含め、全部で六人になる。

場所を間違えたかと思ったが、この修練場はいつも授業で来ている場所。間違えたくても間違えられない。

さらに、修練場にいる四人の少年少女達は皆、ロアとアルニカのクラスメートだ。

皆、各々の武器を手にしている。その中には、二人がよく知る少女もいた。

「遅刻居眠り常習犯」こと、リオだ。そして彼女の手には、その身長よりも長い槍が握られている。

どうやら、あの槍がリオの武器のようだ。

「あ、やつと来た。ロア、アニー」

リオが二人に声をかけた。

「リオちゃん、何でこんなに人が少ないの？」

「わかんない。ひょっとして皆サボるつもりかな？」

冗談交じりにリオは答えた。

「いやいやリオ、流石にそれはないでしょ？」

ロアが答える。

学院の生徒達は皆、基本的に真面目な者ばかりだ。（リオやイワンを除けばだが）集団で授業をサボることなどまずないだろう。

「むー、わかってるよう。じゃあ何でこれしかないっての？」

リオは槍を床に立てるようにし、銀色に輝く槍頭を修練場の天井へ向ける。

そうすると、彼女の槍が一層長く見えた。

リオは身長155センチ前後で、ロアとアルニカより数センチ程高い。

そこから見ても、あの槍の長さはゆうに200センチを超えるだろう。

本当に、こんなに長い槍を使いこなすことが出来るのだろうか、とロアは思った。

背後からの扉を開く音、修練場にいた生徒達は視線を扉へと向ける。

扉を開けて入って来たのは、青い毛並をした犬型獣人族の教師、ヴルームだった。

「……全員揃っているな」

修練場の中を見回して、そう呟く。

「よし、剣術の授業を始めろ。全員黒板の前に集まれ」

生徒達に声をかけると、ヴルームは壁にかけられた黒板へと歩み寄り、白いチョークを手に取る。

手に取った白いチョークで、黒板に何かの文字を書き始めた。ロア達を含む六人の生徒達は、黒板の近くへと歩み寄る。

「ヴルーム先生」後ろから、アルニカが話しかけた。

ヴルームは書いていた手を止め、後ろを振り返る。

「何だ？ アルニカ」

「あの、何だか今日は、いつもより人が少ない気がするんですけど……？」

普段の剣術の授業は30人ほどの生徒がいるのに、今日は六人だけ。実際、「いつもより人が少ない」程度の数ではないだろう。

「もしかしてヴルーム先生、集団ボイコットされちゃったんじゃないんですかあ？」

「馬鹿言ふなりオ、生徒からボイコットされるような教師になった

覚えはない」

少々真面目気味に、ブルームは答えた。

怒らせれば怖いものの、ブルームは生徒達からとても評判の良い教師だ。

生徒が悩みを抱えていたら親身になって相談の相手になってくれるし、学習でわからないことがあれば丁寧に教えてくれる。

自分よりも生徒のことを第一に考える思考の持ち主で、「教師の鑑」と呼ばれるほど。

普通に考えれば、彼がボイコットされるような要素は一切ない筈だ。

ブルームは教師であり、さらにアルカドール王国騎士団の副団長。

団長のロディアスとは同じ年で、幼なじみだ。

その剣術の腕はロディアスと肩を並べる程で、ロアを超える「アルヴァ・イーレ」の達人なのだ。

「ああそうか。そういえばまだ説明していなかったな」

ブルームはチョークを置き、目の前の六人の生徒達に、

「『合同授業』と銘打ったが、今日の剣術の授業はお前達六人だけ『特別授業』だ」

「ぼ、僕達だけ!？」ロアが返す。「と、特別授業!？」続いて、リオが返した。

『お前達六人だけ』、そして『特別授業』。これら二つの言葉に、何やらただならぬ物を感じた。

もしか、これから行うのは成績が芳しくない生徒の為に行う、言う

なれば補講のような役割を持つ授業ということだろうか。

いや、ロアとアルニ力は剣術の成績は極めて優秀だ。リオはロア達と違って槍術だが、彼女も優秀な成績だと聞く。（他の科目は遅刻と居眠りのしすぎで落第寸前だが）

それに、ここにいる他の三人の生徒も剣術の成績は悪くはなかった筈だ。

では一体、どういうことなのだろうか？

「まあそう騒ぐな、とりあえず俺の話聞け」

ざわめく生徒たちにそう告げて、ブルームは再びチョークを手に取り、黒板に書き始めた。

数秒後、ブルームはチョークを置くとロア達の方を振り返り、トン、と黒板を叩きながら、

「今日の剣術の授業の内容は、これだ」

黒板に書かれていた内容は、

「三対三の団体戦……？」

アルニ力が、黒板に書かれた内容を読み上げた。

【キャラクター紹介 13】 “ブルーム”

【種族】 獣人族

【種別】 犬

【性別】 男

【年齢】 35歳

【毛色】 スカイブルー

空色の毛並みを持つ犬型獣人族の男性。セルドレア学院の教師で、

ロア達のクラス担任。

教師という職業に誇りと信念を持っており、ロア達だけでなく、生徒からの信頼は厚い。

担当科目は剣術とアスヴァン史で、遅刻や居眠りを繰り返すリオに手を焼いている。

教師であると同時にアルカドール王国騎士団の副団長であり、ロディアスやイルトと同じくユリスに仕える身である。

中でも団長のロディアスとは幼い頃からの仲で、共に「第一次アスヴァン大戦」を乗り越えた戦友。

ロアを凌ぐ、「アルヴァ・イーレ」の達人。

第46章 く団体戦く

ヴルームによると、この授業はヴルームによって選ばれた六人の生徒の為の特別授業だという。剣術と槍術、その二つの科目からそれぞれ優秀な成績を収めている生徒を集めて行われる授業とのこと。ヴルーム曰く、不定期に彼の気まぐれに応じて実施されるらしい。

「『気まぐれ』って……そんなテキトーなことでもいいのお？」

若干笑い混じりに、リオが漏らした。

「まあそう言うなりオ、ここにいる六人は全員、俺が選り抜いた『精鋭』だ。退屈はさせないぞ？」

そこまで言うと、ヴルームはリオが持つ槍を指で指して、

「その槍、今日は思い切り振るわせてやる。何たつてここには、大人数負けの剣術の才能の持ち主がいるんだからな」

「……」その言葉を聞いたロアは気づいた。

その台詞から考えて、どうやらヴルームは自分とリオを戦わせるつもりのもうだった。

「ヴルーム先生、ロアとリオちゃんを戦わせるつもりみたいね」

同じことを考えたのだろうか、後ろからアルニカがロアに耳打ちする。

「みたいだね」とロアは返した。

「さて、団体戦のルール説明を始めるぞ」

再びヴルムが口を開き、六人の生徒達にルールの説明を始めた。その説明によれば、どうやらこれから行われるのは『勝ち抜き戦』。六人を三人一組の二つのチームに分けて、それぞれのチームから一人づつ戦い、勝敗が決したら負けた方は次の者と交代する。

勝敗の基準は、『地面に膝をついたらその瞬間に負け』とのこと。ヴルム自らが止めに入る可能性もあるらしい。

三人全員が負けたら、そのチームは敗北。逆に負かしたチームは勝利となる。

負けない限り、最初に出た者は相手チーム三人全員を相手にすることも可能な為、一人に相手チーム全員が負かされるということも起こりうる。

「……とまあ、こんな感じだ。じゃあ早速始めるぞ」

まずは、ここにいる六人の生徒を三人一組に分けて、二つのグループを作る必要がある。

ヴルムは修練場の中を見回して、初めてその事実が付いた。今ここにいる生徒は、男子が三人と女子が三人ということに。

「丁度いいな。よし、男子三人と女子三人でチームを作る、それぞれから一番手を決める」

そう告げた。男子三人対女子三人では力の差もあり、不平等に感じるかも知れないが、特に誰も意義は唱えなかった。

剣術が教育科目に取り入れられているセルドレア学院には、剣の勝負なら大の男さえ退けられる実力を持つ少女も少なくはない。

喫茶店で強盗の男を退けたアル二カ、男子三人がかりでも敵わないという槍術の実力者のリオ。彼女たちがその良い例だろう。男子対女子だから不平等。そんな概念はこの学院には存在しないのだ。

「んじゃ最初は、誰が行く？」

男子三人が集まっている中で、そう言ったのは「エカル」という少年。ロアのクラスメイトだ。

専攻科目は剣術で、ロアには及ばないが、この特別授業に呼ばれるだけの腕はある。

「それじゃあ……」ロアがそこまで言いかけた時、

「僕が行きましょう」

ロアの言葉を遮って、もう一人の少年が敬語で名乗り出た。

短めの髪型と、銀の淵の眼鏡が印象的で、どこか知的な雰囲気漂わせている少年。

彼の名は「カリス」。専攻しているのはリオと同じ槍術だ。

「いいの？ カリス」

カリスの後ろ姿に、ロアは問いかける。

一番に出ると名乗り出たのは、何か理由があつてのことなのだろうか。

「ロア君は僕たちの大将です。出るなら一番最後でしょう」

カリスはそう答えた。

彼の言う通り、この三人の中で一番強いのは恐らくロアだろう。彼は槍を片手に、修練場の中央へと歩み寄りながら、

「まあ、リオさんが出てきた場合、完全に僕に勝ち目はないでしょうが……」

カリスは弱気な台詞を漏らした。リオと一緒に槍術の授業を受けているカリスは、彼女の強さをよく知っているらしい。

「そんな弱気でどうすんだよカリス。気合いだ、気合い入れて頑張れ!!」

エカルがカリスを激励した。

「はあ……」カリスは小さくため息をついて、人差し指で眼鏡に触れながら、

「まあ、僕が負けたら頼れるのは君だけですから。その時は頼みましたよ、ロア君」

そう言い残して、彼は修練場の中央、戦いの場へと歩いて行った。

「……そりゃ一体どういう意味だよ」

後ろからエカルの声が聞こえた気がしたが、カリスは無視した。

「男子チームからは、カリスだな」

修練場の中央で、二人の生徒が向かい合う形で立っていた。男子チーム一番手のカリスと、女子チーム一番手のアルニカ。その脇にはブルームが立っている。他の生徒達は、修練場の隅でその様子を見守っていた。

「（とりあえず、リオさんが一番手ではなかったのは幸運でしたね……）」

目前に立っているアルニカと目を合わせて、カリスは思った。もしもリオが一番手だったら、負けは確定していただろう。しかし、油断はしては駄目だ。クラスメイトなので顔を合わせる機会は度々あったものの、カリスはアルニカの強さについては何も知らなかった。

もしかしたら、彼女はリオよりも強いかも知れない。

「お手柔らかにね、カリス君」

アルニカはそう言うと、ツインダガーを鞘から引き抜く。彼女は使い慣れた二本のダガーの刃を、カリスへと掲げた。

「こちらこそ、アルニカさん」

カリスも槍を構えて、ひし形の槍頭をアルニカへと掲げる。

「カリス、アルニカ、二人とも準備はいいか？」

ブルームがカリスとアルニカに問うと、二人は口を揃えて「はい」と答えた。

「よし。それでは第一戦、カリス対アルニカ、始め！！」

戦闘開始を示すブルームの声、それと同時にカリスは地面を勢いよく蹴り、姿勢を低めつつアルニカへと走り寄る。

「！！」それに気付いたアルニカは、迎撃の構えに移った。

第47章 くカリス対アルニカく

槍のリーチまで距離を詰め、カリスはアルニカへ向けて右から左に薙ぎ払うように槍を振るった。

片手のダガーだけでは受け止め切れないと思ったのだろう、アルニカは両手のダガーを「×」の字に交差させ、槍を受ける。

カリスはすぐさま槍を引き戻し、今度は左から右へと槍を振るうが、この一撃もやはり、二本のダガーで止められてしまった。

「（……！？ この感じ……）」カリスは、槍を受け止められた時の感触に違和感を感じた。

そして、その違和感はすぐに確信へと変わり、カリスはある結論を導き出した。

「なるほど、『エレア・ディーレ』……僕の攻撃の威力を殺しているわけですね」

普通に考えれば、男性で力もあるカリスの攻撃を、アルニカがあんなに簡単に受け止められる筈がない。

その疑問を解消する答えは、アルニカが用いている剣術、「エレア・ディーレ」にあった。

「エレア・ディーレ」は主にツインダガー使いの女性が用いる剣術。女性は基本的に力が弱く、男性と比べると攻守両面で脆弱になりがちだ。

これはそのような弱点を補う為に考案された剣術で、攻撃面は力の弱さをスピードとツインダガーの手数で補い、

防御面では、相手からの攻撃を正面から受け止めるのではなく、攻

撃を受け流し、ダメージをほぼゼロにしてしまう。

威力の強い攻撃を受けても、これならば腕や手首への負担は少ない。正しく、女性向けの剣術だ。

アルニカは指を使ってツインダガーをくるくると回しながら、

「正解。こんなに早く気付くなんて、流石カリス君だね」

「お褒めの言葉をどうも。では、続けますよ」

槍の柄を握り直し、カリスは再びアルニカへ槍を振るう。

「（カリス君って……こんなに強かったんだ……）」

アルニカは心の中で呟いた。

彼女の印象では、普段のカリスは物静かで、常に冷静沈着。休み時間にはよく一人でベンチに腰掛け、本を読んでいるのを見たことがある。

その知的な見た目に違わず、クラスの中でも博識で、語学や地理のテストでも毎回上位の成績を収めていた。

いつだったろうか、ロアやルーノのレポート課題をカリスが代わりにやっていたのを見たことがある。

戦いが得意な方ではないと思っていたが、彼がここまで槍の扱いに長けていたのは、アルニカにとっては意外だった。

波のように繰り出される槍の攻撃を、アルニカはツインダガーで受け続ける。

戦況は、どう見てもカリスが圧しているように見えた。

「カリスはなかなかの使い手だよ。さあどうする？ アニー……」

修練場の片隅で試合を見ていたりオが、そう呟いた。

「行けカリス！！ その調子で一氣にやっちまえ！！」 続いて響いたのが、エカルのその声。

「……いや」

その二文字の呟きと同時に、カリスは攻撃の手をピタリと止めて、距離をとるように後方へと飛び退いた。そして槍を構え直して、

「まるで効いていませんね」

対戦相手のアルニカに、そう呟いた。アルニカは微かに笑みを浮かべる。その様子からは、余裕すら感じられた。

「え、は！？ 何で止めちまうんだよ！？」

カリスの言葉の意味が、エカルには意味不明だった。

エカルには、カリスがアルニカを圧倒しているように見えた。あのまま行けば、倒せたかもしれない。側にいたロアは、

「いや、カリスは間違っていない。攻撃を止めて正解だよ」

冷静に試合を見ていたロアには分かっていた。

実は、カリスの攻撃は一撃残らず受け流されていて、まるでダメージになっっていなかったのだ。

圧倒しているように見えて、実はカリスの方がスタミナを無駄に消費させられていた。

ロアの言った通り、攻撃を止めたのは賢明だっただろう。

「（さて、どうしたものでしょうか……）」

カリスは思考を巡らせていた。

このまま下手に攻撃を続けても、受け流されてスタミナを無駄に消費するだけ。

スタミナが切れれば、恐らくはその瞬間を狙われてしまうだろう。

槍はリーチが長い、小回りが悪く、攻撃を受け続けるには不利だ。特に、ツインダガーのように手数が多い武器は天敵と言える。もしも接近戦に持ち込まれたら、勝てる見込みは薄い。

「（この状況を打開するには……）」

さらに思考を巡らせ、カリスは一つの打開策を思いついた。

「……これしかなさそうですね」

今度は声に出して呟く。カリスは再び、アルニカとの距離を詰め始めた。

攻撃を受け流されているのならば、受け流しきれない程の威力を乗せた攻撃を繰り返せばいい。

スタミナは減り始めている。次の一撃で、一気に勝負を付けよう。彼はそう結論付けたのだ。

全身の力を槍に込めて、カリスはアルニカに向けて槍を振るう。これならば、受け流し切れないだろう。

「ねえ、知ってる？ カリス君」

槍が迫って来ているというのに焦る様子もなく、アルニカは言った。彼女は二本のダガーで、カリスの槍の、槍頭の付け根辺りを挟み込んだ。

だが、繰り出されたのは全身の力を込めた攻撃、この程度では止まらなかった。

「エレア・デイレにはね、こういう使い方もあるんだよ？」

次の瞬間、アルニカはツインダガーで槍を挟んだまま、両腕で勢よく槍を引き寄せた。

「っ！」ようやくカリスは気付いた。アルニカがしようとしている事に。

アルニカは、別に槍を受け止めようとしていた訳ではない。槍の威力を逆手に取り、カリスの体制を崩そうとしているのだ。

気付いた時には、もう遅かった。カリスは引つ張られるように、前方によるける。

「わっ！！ と……」

数秒の後、カリスは地面に膝をついてしまった。

勝負の敗北条件は、「地面に膝をついたら負け」。つまりこの勝負、カリスの敗北だ。

何とも、あっさりとした決着だった。

「勝負あり！！ 第一戦、女子チームの勝利！！ 男子チームの二

番手は準備するように」

ブルームの声が響いた。

「はあ……僕もまだまだですね……」

座り込んだまま、カリスはため息交じりに呟く。
不意に後ろから、

「だけど、槍の扱いはすごく上手かったよ？ 私も受け流すの大変だったし」

その声の方を振り返ると、目の前にはアルニカが立っていた。

「またいつか対戦しよう？ カリス君」

「ええ。むしろこちらからお願いします」

その後、アルニカ対エカルの第二戦が行われたが、開始数秒で決着がついた。

アルニカに接近しようとしたエカルがつまづいて転び、地面に膝をついてしまったからである。

女子チーム二勝、あと一勝で、この団体戦は女子チームの勝利だ。

アルニカとリオは、ぱちんとハイタッチを交わした。

「ナイスファイトアニー、これであたし達、勝利までリーチだよ！」

「うん、リオちゃん。だけど……」

アルニカは、男子三人の方へと視線を向ける。

カリス、エカル、その二人が敗れたということは、次出てくるのは、間違いなく彼だ。

「大人顔負けの剣術の才能の持ち主」、そう知れ渡っている彼。

これまで、アルニカが一度も勝てたことのない彼。

彼一人に女子チーム全員が倒され、大逆転。そんなことだって起こりうる。

「次はちょっと……気が抜けないかな？」

男子チームの隠し玉、大将、切り札、エース。

そう、ロアだ。

第48章 くロア対アルニカく

第三戦は、ロア対アルニカ。その二人とも、学院の中等部を代表する剣術の実力者だ。

この修練場にいる者達にとっては、この戦いは注目の一戦だろう。ブルーム、リオ、カリス、エカル。皆、ロアとアルニカの様子に入っている。

「（『大人顔負けの剣術の才能の持ち主』かあ。ロア、その实力、見せてもらっよう）」

ロアの横顔を見つめながら、リオが心の中で呟いた。ロアが戦う所を見るのは、リオは今日が初めて。

この戦いでアルニカが負けたら、次にロアと戦うのはリオだ。その為にも、ロアの強さが如何ほどなのかを見ておきたかった。

リオは視線をアルニカへと移して、

「（頑張ってね、アニー）」

第一戦から続けて戦っているアルニカは、すでにツインダガーを手にしていた。

ロアは彼女に向かい合うように立ち、剣を鞘から引き抜く。

「カリス、持ってて」

剣を引き抜いた後、ロアは鞘をカリスへと投げ渡した。

カリスが鞘を受け取ったのを確認して、ロアはアルニカに向き直ると、両手で柄を握り、剣を構える。

アルニカも、ツインダガーを構えた。

「今までと同じように、お互い手加減はなしね。ロア」

「わかってる。いつも通り全力で行くよ」

ロアとアルニカ。二人は剣術の授業で何度も戦ったことがあった。これから始まる戦いで、何度目なのだろうか。

それすら思い出せないが、二人にとってそんなことは取るに足りないことだった。

なぜなら、二人にとって一番大事なものは、今これから始まる戦いだからだ。

ロアとアルニカは互いに向き合い、他の者達はそれを見守る。いつしか修練場の空気は、緊張で満たされていた。

「（……さつさと始めると言わんばかりの空気だな）」

ヴルームは心の中で呟く。

『いつでもいい、早く初めてくれ』。剣を構えて向かい合う二人の横顔が、そう言っているような気がした。

「……よし。第三戦、ロア対アルニカ、始め！」

何度目なのかもわからない二人の戦いが、今始まった。

二人同時に地面を蹴り、一気に相手へと走り寄る。一秒の後、ロアの剣とアルニカのツインダガーがぶつかり合った。

先ほどのカリスとの戦いでは守りに徹していたアルニカ、今度は積極的に攻めていた。

ツインダガーによつて繰り出される、俊敏で無駄の無い攻撃。アルニカの動きを見ていた誰もが、改めて彼女の實力の程を実感しただろう。

「（やっぱり強いな、アルニカ）」

前に戦つた時は、彼女はこんなに強かつただろうか。戦っている最中にも関わらず、ロアもアルニカの強さに關心した。

だが、そう簡単にはロアも譲らない。アルニカの攻撃を受けつつも、反撃を繰り出している。

アルニカの二本のダガーによる攻撃を一本の剣で防ぐだけでも精いつぱいの筈だが、合間のわずかな隙を見切るのは正に至難の業。さらに、その数秒にも満たない隙を突いて攻撃を繰り出すのは、もっと至難の業だ。

ロア程のセンスがあつて、初めて成せる業だった。

「すつごいなあ……ロアもアニーも……」

傍らで戦いを見ていたリオが、感嘆の声を漏らした。

アルニカの素早い動き、その素早い動きから繰り出される攻撃を見切るロア。

恐らく今までリオが戦ってきた相手とは、二人とも段違いの強さだ。

「よく見ておけリオ。あの二人は、中等部きつての剣術の實力者だ」
声の方を振り向く。

リオにそう促したのは、ブルームだった。

「ブルーム先生。あの二人つて、あんなに強かつたんですね……」

「ああ、槍術のお前は知らなかっただろ？」

ヴルムは腕を組み、二人の戦いを見る。何度見ても、二人の強さには光る物があつた。

何人もの生徒に剣術を教えてきたが、あれほどに剣を扱える生徒は数える程しかいなかっただろう。

「（……やはり、ロアを選んだユリス様の目に、狂いはなかったか）
」

教師であり、アルカドル騎士団副団長のヴルム。
生徒の身を案じる立場故に、ロアが「魔族」を滅ぼす役目を負つたと聞いた時は、驚きを隠せなかった。

確かにロアが強いことは知っていたが、まだ彼は14歳の少年だ。
その彼に背負わせるには、余りに重すぎる荷だと思った。

しかし、彼が戦っている様子を見れば、それは無用な心配だったかも知れない。

それに彼は決して一人ではない。彼には、アルニカにルーノ、リオも、他にも沢山の友達がいる。

ロアの横顔を見ながら、

「（ロア。入学した頃と比べると、活き活きとした表情をしているな）
」

ヴルムは心の中で呟いた。

「先生、ロアをうちの兄と戦わせてみたらどう？　ロアなら勝てる

かも知れないですよ？」

「いや、イワンの強さはまた別格だ。おそらくロアは勝てない」

リオは視線をロアの方に向けて、「そーかなあ……」と小さく呟く。ヴルムの方を通り、イワンの強さはロア以上だ。今のロアでは、まず敵わないだろう。

「ところでリオ、お前もいずれはイワンと共にセイヴィルトの名を背負うことになるんだ」

『セイヴィルト』とは、リオとイワンの名字。アルカドール王国でも名の知れた、貴族の家系だ。ヴルムは続ける。

「その肩の刺青に恥じないよう、しっかり精進しろよ」

「……」 リオは左肩に手を当てた。

不意に、剣を弾くような金属音が修練場に響き渡る。戦況に変化があったのだろうか、リオとヴルムはロア達の方に向く。

ロアは剣を持っていたが、アルニカの両手に握られていた筈のダガーが、二本とも無くなっていた。

それから数秒。カランカラン、という金属音と共に、アルニカの二本のダガーが床に落ちた。

ロアが、アルニカのツインダガーを弾き飛ばしたのだ。

「あ……」

アルニカは呆然とする。それは一瞬の出来事だった。

「そこまで！！ 第三戦は男子チームの勝利！！」

ブルームが試合を止めた。試合の決する条件は「膝をついたら負け」だったが、ブルームの判断で試合を止めることもあるとのことだった。

その基準は定かでは無かったが、武器を弾き飛ばされることは、試合を止める条件になるようだった。

女子チーム二勝に対し、男子チーム一勝。ようやく男子チームが一勝した。

「あゝあ、やっぱりロアには勝てないなあ……」

二本のダガーを拾って鞘に収め、アルニカがリオの元に歩み寄る。リオは、槍を片手にその場に立ち上がった。

「お疲れアニー、あとはこのリオちゃんに任せて休んでなさい」

アルニカにそう声をかけて、リオは修練場の中央へと歩み寄る。

「リオ」不意に、ブルームがリオを呼び止め、彼女の近くに歩み寄って来た。

そして周りに聞こえないくらいの声で、

「わかっているとは思うが……『あの力』は使うなよ」

リオにそう耳打ちした。ブルームは、真剣な面持ちだった。

「わかってるよ先生。いくらなんでもこんな所で使ったりしない」

そう返答すると、リオは再び中央へと歩を進める。

ロアの前に立ち、槍を構えた。

「第四戦、ロア対リオ、始め!!」

前置きは必要ないと思ったのだろう。ブルームはすぐに、試合開始の合図をした。

第49章　く動き出す運命く

所変わり、アルカドール城中庭、剣術小修練場。

そこにはアルカドール王国の歳若き王女、ユリスの姿があった。

彼女は身に纏った薄紫色のドレスや、その美しい黄金の髪をたなびかせ、剣を振るっている。

ユリスが剣を交えている相手は、純白の毛並を持つ兎型獣人族の少年、イルト。

イルトはユリスの側近であり、最も親しい友人でもある。

幼い頃にユリスの遊び相手として城に住み込み、彼女の親友として10年以上の時を城で過ごしている。

いつもイルトが首にかけている水晶のペンダントは、彼の12歳の誕生日にユリスから贈られた物だ。

イルトは今、その両足に足輪を付けている。石で作られた、見るからに重そうな足輪だ。

この足輪は特に特別な物ではない。一個につき重量が70キログラム程あるだけの、ただの足輪。

両足にこの足輪を付けているので、彼の両足には、合計して140キロの重みがかかっていることになる。

140キロ。兎型獣人族の脚力を封じるには、十分な重さだ。

イルトがその脚力を封じているのは、主に人間のユリスと対等に戦う為。

脚力が封じられていれば跳躍も出来ないし、俊敏な動きも出来なくなる。

勿論の事、ジャンプを駆使して戦う剣術、「イルグ・アーレ」も使えなくなる。

そしてもう一つの理由は、脚力に頼らずに戦う訓練をする為だった。脚力に頼り切らなければ戦えないようでは、王女たるユリスの側近は務まらないだろう。

「けど、側近など必要なのだろうか？」ユリスと剣を交えながら、イルトは心の中で呟く。彼がそう思ったのは、ユリスの強さ故だ。

王女という一国を治める立場故に、幼い頃から剣術の稽古を積んできた彼女は、イルト以上に強かった。側近などいなくとも、十分に自分の身は守れると感じる。

「っ!!」

気が付いた時、イルトの目前に銀色に輝く刃があった。少しでも顔を動かせば、その刃に顔が触れそうだった。ユリスがイルトに剣を突きつけたのだ。この状況ではもはや、成す術は無かった。

「……僕の負けだ。降参する」両腕を上げて、イルトは宣言した。完敗と認めざるを得なかった。脚力を封じた状態でなかったとしても、敵わないかも知れない。

ユリスとイルトは剣を鞘に仕舞い、互いに一礼した。

「また強くなりましたね、ユリス様」

脇で二人の戦いを見ていたロディアスが、ユリスにそう告げた。

「私が剣術を教えていたあの頃とは、まるで別人のようです」

アルカドール王国騎士団団長のロディアスは、ユリスの教育係でもある。

彼もまた長年ユリスに仕え、剣術だけでなく語学や数学、他の学問もユリスに教えてきた。

ユリスにとって最も信頼のおける騎士であり、イルト同様に親友のような存在である。

「いいえ、勝てたのはイルトが本来の力を封じていたからこそ。彼が錘を外して戦えば、私は到底敵わないでしょう」

穏やかな口調で、ユリスは謙遜した。

「だとしても、貴方は強くなられた。それは私が保障いたします」

「それでも、まだ私は未熟です」

ユリスは自分の右手の平を見つめながら続ける。

「一国を治める者として。そして、『あの剣』の継承者としても……」

彼女のその言葉に、ロディアスとイルトは思う所があった。

「ユリス様。貴方が『あの剣』を抜く日が来ないことを祈ります」

「僕も同じく。ユリス」

ロディアスの後に、イルトが続けた。ユリスは二人の方を振り返る。

「……ありがとう」

ユリスが二人に感謝の言葉を告げた、その瞬間だった。

突然、頭に突き刺すような痛みが走り、狩り取られるように意識が遠のいてゆく。

「うつ……！！」頭を押さえて。ユリスはその場に膝をついた。

「ユリス……！？」

「ユリス様！？」

二人の声が聞こえた気がした。しかし、それに応える余裕など無かった。

頭の中に焼き付けられるように、ある光景が浮かび上がって来る。

——街が、かつては美しかったであろう大きな街が、無残に燃えている。

無数の「魔族」や「人間」の兵士達や、巨大な魔物が街に火を放ちながら、無力な街の人々を襲っている。

彼らの悲鳴や断末魔の叫びが、四方八方から、まるで合唱のように響いてきた。

王女という立場であるユリスにとって、罪もない人々が襲われているその光景は、地獄さながらだった。目を覆いたくなかったが、目をどれだけ固く閉じて、頭の中に浮かぶ光景は消えてはくれなかった。

最期にユリスが見たのは、その街に面した大きな海だった。
急激に視界が白い光で満たされ、意識が現実の世界へと引き戻される。

「はっ……はっ……!!」

その光景がようやく頭から消えてくれた時、ユリスは息を切らしていた。

彼女の両瞳には、涙が浮かんでいた。

もしも自分の知人が今の光景のような目に遭ったらと思うと、涙が止まらなかった。

「ユリス、大丈夫か……!？」

イルトの声が今度は鮮明に聴こえた。

「何が……『見えた』のです？」

ユリスの背中に手を触れながら、ロディアスが優しく語りかけるように問いかける。

「うっ……う……」

ロディアスの問いかけに、ユリスは答えなかった。彼女は途切れ途切れに涙声を漏らす。

王女と言えど、ユリスは16歳の少女だ。その彼女には、余りに「酷」と言える光景だった。

まるで虫ケラのように人の命が奪われていく、理不尽で、不条理な光景。思い出すと、怒りと悲しみで気が狂いそうになる。

だが、ユリスは直ぐに王女としての使命感を取り戻した。
今の光景を、絶対に現実にしてはならない。

「……広大な海……イシユアーナ共和国……」

囁くように二つの言葉を呟く。ロディアスは聞き取れなかった。
聞き返そうとした瞬間、ユリスが突然ロディアスの方を向き、真剣な眼差しで、

「ロディアス、直ぐにロア達を呼んで来て下さい」

そう告げた。

ロアは度肝を抜かれていた。リオが猛スピードで接近し、槍を振り上げてきたからだ。

槍の届く範囲まで接近するのに要した時間、まばたき一回分。ロアは剣を構える時間すらなかった。

「うわあっ!!」

無意識に、口からそんな叫び声が出た。

腕ではなく、足が先に動いた。ロアは左へと飛び退き、振り下ろされたリオの槍を避ける。

数秒前までロアが立っていた床に、槍頭が突き刺さった。

リオはすぐさま槍を構え直し、ロアへと攻撃を仕掛ける。
槍頭だけでなく、柄の部分も打撃の武器として使い、流れるように
繰り出されるリオの攻撃。

「（強いなりオ……反撃する暇がない）」

ロアは思う。リオが強いとは聞いていたが、彼女はすでに「強い」
という段階を超えていた。

身のこなしに、槍の扱い方、どこを見ても文句のつけようが無い。
洗練し尽された彼女の動きは、芸術的ですらあった。

ほぼ毎日のように遅刻を繰り返し、授業ではいつも居眠りをしてい
る普段のリオからは、想像もつかない強さだった。リオが戦う様子
を見ていたヴルームは、

「あれで普段の授業を真面目に受けてくれれば、完璧なんだがな……」

リオは真面目にやれば優秀な生徒だ。担任のヴルームはそのことを
よく知っている。

だが、如何せん彼女は好き嫌いが激しいのが問題だった。

「でも先生、それだとリオちゃんじゃなくなっちゃいますよ?」

「ふっ、確かにな」

アルニカの言葉に、ヴルームは笑い混じりに答える。

試合開始から十分程経過していた。戦況は、ほぼリオの一方的な攻
撃だった。

剣に比べて遥かにリーチの長い槍、さらにリオが用いている手数が多い槍術。

反撃することはおろか、ロアはリオに近づくことすら出来ない。

しかしながら、リオは何度も攻撃を仕掛けているものの、ロアはまだ一撃も喰らっていないかった。

「（こんなに攻撃を防がれたのは、初めてだなあ……）」

一旦攻撃を止めて、リオは心の中で呟く。

いつもならば、ここまで攻撃を仕掛ける必要もなく、相手を倒せていた筈だ。

流石はロア、と言った所だろうか。

『大人顔負けの剣術の才能の持ち主』。彼の強さが伊達でそう伝わっている訳ではないようだった。

「（『あの力』を使えば勝てるだろうけど、先生に止められてるし、それにこんな所で小火起こしたくないしね……）」

リオは再び槍の柄を握り直し、ロアの方を向く。

ロアもまた、剣を構え直していた。

「（リオ……もしかしてアルニカより強いんじゃないか？）」

対人戦でここまで苦戦を強いられたのは、あまり覚えがなかった。覚えがあるとするなら、あの「魔族」の少女、ヴィアーシェと戦った時くらいだろうか。

さて、どう戦う？ やはり、あの槍の攻撃をかいくぐる以外に方法

は――

ロアがそこまで考えた時だった。修練場の入り口の扉が勢いよく開かれたのだ。

試合中だったロアとリオだけでなく、修練場にいた者全員が扉に視線を向ける。

扉を開けて修練場に足を踏み入れた男性の顔を見て、ヴルームは驚きの表情を浮かべた。

「ロディアス……！？ どうした？」

ロディアスだった。アルカドル王国騎士団団長で、副団長のヴルームとは旧知の仲。

「ヴルーム、少しいいか？」

ロディアスはヴルームを自分の元に来させる。

そして、ヴルームに何かを話し始めた。

小声だったので何を話しているのかは聞き取れなかったが、最後の「本当なのか……！？」というヴルームの声だけが聞き取れた。

ロディアスとの話を終えた後、ヴルームは生徒達の方を向いて、

「すまない。悪いが、今日の授業はここで終わりだ」

突然、授業の中断を宣告した。

「え、何で！？」リオは驚きを露わにする。

戦いの決着はまだついていないのに、どういふことなのだろうか？

「ロア、アルニカ」

リオの問いに応えずに、ブルームはロアとアルニカを呼んだ。

「はい？」アルニカが返事を返した。

ブルームは二人に告げる。

「お前達はこれから直ぐに城に行け。ユリス様がお前達を呼んでいる」

第50章 くそれぞれの決意く

モルディーア城。ここは「魔族」の者達の王国、モルディーア王国の中心に位置する城。

城の玉座の間に続く薄暗い廊下で、二人の人物が歩を進めていた。

一人は、黒いローブを身に纏った「魔族」の男性、そしてもう一人、男性の隣で歩を進めているのは、ヴィアーシェだった。

彼女が足を進めるたびに、その腰まで伸ばされた暗い青色の髪が波打つように揺れている。

二人は玉座の間へと続く扉を開き、玉座の間へと足を踏み入れる。玉座の間もやはり薄暗くて、灯りは壁の燭台に灯された炎だけだった。

《待ちかねたぞ……ダフィウス、ヴィアーシェ……》

洞窟の中で反響するように聞こえたその声に、二人は地面に片膝をつく。

次いで二人は左手のひらを右胸に当てて、恭順の意を示す姿勢をとる。

「申し訳ございません。我らが主君、ハードウラス大王」

恭順の姿勢をとったまま、『ダフィウス』と呼ばれた男性が答える。

《……まあよい、本題へと入ろう》

この玉座の間には、ダフィウスとヴィアーシェ以外の者は誰一人いない。

その声は、誰も座っていない筈の王座の方から聞こえてくる。

《このモルディールには今、5000人の『魔族』の兵が待機している》

実体を持たない声だけの存在は、二人の返事を待たずに続ける。

《さらにバラヌーンから、6000の『人間』や『獣人族』の兵を得ることが出来た。合わせれば総勢11000の軍、『アスヴァン三大国』に次ぐ力を持つイシュアーナと言えど、この数でかかれは一溜まりもあるまい》

「しかし、我が主君よ」

ダフィウスは言う。

「イシュアーナは、あのアルカドールと同盟を結んでいる国、イシユアーナを落とそうとすれば、アルカドールが黙ってはいないかと」

《その為に、お前達のような戦士が生み出されたのだ》

ダフィウスの問いに、声だけの存在は間髪入れずに答える。

《開戦は明日の夜明けだ。ダフィウス、ヴィアーシェ、今回の戦い、そなたらの働きに期待しておるぞ》

アルカドール城の玉座の間、王座に腰かけたユリスと、その両脇に立つイルトとロディアス。

彼らと向かい合う位置にロア、アルニカ、そしてルーノがいた。

今日ルーノが学校を休んだのは、鍛冶屋の仕事の関係とのことらしい。

ロア達がここに足を踏み入れたのは、あの旅立ちの朝以来のことだった。

「『魔族』は……イシュアーナ共和国に攻撃を仕掛けようとしています」

ユリスが語る。

「モルディール王国にはすでに、5000人の『魔族』の兵が集結しています」

「5000人？ それだけの兵であのイシュアーナに攻め入る気なのか？」

そう答えたのはルーノ。

イシュアーナ共和国は、アスヴァンの南側に位置する沿岸国で、アルカドール王国の同盟国だ。

海洋貿易によって栄えた国で、魚類等の海産資源の生産量はアスヴァンでも随一。

さらに、その領土と兵力はアスヴァン三大国にも匹敵すると言われ、少なく見積もってもおよそ7000程の兵力を保有していると言われる。

ルーノが言うように、5000の兵で攻め落とせるとは考えにくかった。

「イシュアーナに攻め入るのは『魔族』だけじゃない」

そう言ったのはイルト。皆は彼に視線を向ける。

「バラヌーンの『人間』や『獣人族』の兵もいる。それを加えれば、敵は合計11000の軍勢になる」

数十年前のアスヴァン大戦時、「魔族」の持つ邪悪な力に魅入られ、「人間」や「獣人族」でありながら、「魔族」の傘下に下った国家も少なからずあった。

これらの国家や、『魔族』に下った者達を総称して、「バラヌーン」と呼ぶ。アスヴァンの言葉で、その意味は「奴隷」だ。

「それから、『魔族』には『魔卿五人衆』という人智を超えた恐るべき力を持つ五人の配下がいる」

ロディアスが言った。

「この者達の強さは、一人で『人間』の兵士500人と対等に戦えると言われている程だ」

一人で『人間』の兵士500人と対等に戦える強さ……ロア達には、全く想像がつかなかった。

ユリスの説明によれば、『魔族』はイシュアーナの襲撃に『魔卿五人衆』のうちの二人を送り込むつもりらしい。

5000人の『魔族』の兵士に、6000人のバラヌーンの兵士。合計11000人の兵士に加えて、500人の『人間』の兵と対等に戦える程の強さを持つと言われる者が二人。

その二人の人物を一人で500人分として、二人で1000人。

単純計算すると、敵の総兵力は12000、イシュアーナの兵力を大きく上回っている。

「『魔族』は、本気でイシュアーナ共和国を滅ぼすつもりってこと？」

「……おそらく」

ロアの問いかけに、ユリスは小さく頷きながら答えた。

「でも、その目的は？ イシュアーナを滅ぼして、『魔族』に何の利益があるんです？」

アルニカがユリスに問いかける。

ユリスよりも先に、アルニカの隣にいたルーノが口を開いた。

「ただ単に暴れたいってだけじゃねえのか？ 『魔族』ってのは破壊や殺戮を好む種族なんだろう？」

「それは私にも分かりません。しかし、イシュアーナ共和国はこのアルカドールの同盟国、ただ手を拱いて見ている訳にはいきません」

ユリスは思い出す、先ほど頭に浮かんできた光景を。

イシュアーナ共和国の美しかった街が見る影もなく壊され、火を放たれ、罪のない人達の命が奪われていた、あの地獄のような光景。このままでは、あの光景は現実のものとなる。他国と言えども、イシュアーナは同盟国だ。見過ごすことなど出来る筈がない。

それならば、この状況でユリスがすべきことは、一つだった。

「救援として、このアルカドール王国からイシュアーナに3000の兵騎士団を送ることを決定しました」

そう。救援の兵を送ること。

アルカドール王国の現在の兵の総数は、およそ11000。アスヴァンの国家の中でも一、二を争う数だ。

11000人も兵を保有しているのなら、半分にも満たないたった3000だけでなく、もっと送ってもよいのではないかと思うかもしれない。

だがもしもの場合を考えると、アルカドール王国から余りに多くの兵を離れさせすぎるのは危険だった。

兵をイシュアーナに送るということは、それだけアルカドール王国にいる兵が少なくなり、王国の守りが手薄になる。

もしも『魔族』がその瞬間を狙い、アルカドール王国へと標的を変更したりでもしたら、取り返しのつかない事になってしまう。

イシュアーナは守れたけれど、自分の国は滅ぼされてしまった。そんなことでは話にならないだろう。

アルカドール王国の王女たるユリスが何よりも優先すべきなのは、自国民の安全なのだ。

「でもユリス、3000の兵士だとまだ、『魔族』達の兵力には届いていないよ？」

イシュアーナの保有する兵士は7000、そこに3000のアルカドールの兵が加わっても、合計10000。

ロアの言う通り、敵の兵力の12000を下回っている。

「その通りです。だから3000の兵に加えて、エンダルティオの戦士達も援軍としてイシュアーナに送ることに決めました」

ユリスが言った瞬間だった。

ロア達三人の後ろから、玉座の間への扉を開く音が響く。

後ろを振り向くと、無数の足音と共に何十人もの人物が玉座の間へと入ってきた。

いや、何十人どころではなかった。百人以上はいるだろう。

その全員が、13〜18歳くらいの「人間」や「獣人族」の少年少女だ。その殆どが、ロア達には見覚えのある顔ぶれだ。特に、少年少女達の先頭に立っていた二人の人物には。

「あ、イワンさん……?」

ロアが漏らす。

「それにリオちゃんも……」

続いてアルニカ。

「よっ、親愛なる我が後輩達よ」片手を上げて、イワンがロア達に挨拶した。

イワンはロア達に歩み寄る。すると、彼の隣を歩いていたリオや、後ろの少年少女達も、そろそろとイワンに続いた。

「まあ大体は王女さんの説明通りだ、今回は俺達も一緒に戦うつーことさ」

ロア達にそう告げると、イワンは金髪をかきあげた。すると、彼の右耳についたひし形のピアスが露わになった。

無駄に長い髪型に、金髪、それにあのピアス。貴族の御曹司っていう立場なのに、相変わらずチャライ格好だな。ルーノは思わずそう

突っ込みそうになった。

しかし、その突っ込みは止めざるを得なくなった。イワンの隣にいた少女が、ルーノに先んじて言葉を発したから。

「そつ、アルカドール王国の、エンダルティオの戦士としてね」

イワンに続いてそう続けたのは、彼の隣にいた少女。イワンの妹のリオだった。

エンダルティオとは、20歳未満の少年少女達によって組織された騎士団の名称だ。

元は、アスヴァン大戦で多くの兵士を失った国が、兵不足を補う為に組織した騎士団。

現在では、アスヴァンの三分の二以上の国家が、このエンダルティオという、少年少女達の騎士団を有している。

エンダルティオに所属する少年少女達は、普段はそれぞれの生活を送り、有事の際には召集を受け、国の為に戦う。

歳が若くとも、彼らは立派な『兵士』として扱われるのだ。

ちなみに、エンダルティオとはアスヴァンの言葉で『盾となる者』の意。

イワンは、アルカドール王国のエンダルティオの団長である。

彼はロア以上の優れた剣術の腕を持っていただけでなく、統率力、リーダーシップにも優れていた。

それらの点を評価されたことが、イワンがエンダルティオの団長に選ばれた理由だ。

リオも槍術の腕前を評価され、兄のイワン同様にエンダルティオに所属している。

「ここにいるのは全員ではありませんが、彼らエンダルティオの戦士は総数2500人、10000の兵に加われれば全部で12500。僅かながらも、敵の勢力を上回ることが出来ます」

「いや、まだいるよ。僕も戦う」

ロアが名乗り出た。

「僕は『魔族』を許せない。奴らと戦うのなら、僕も力になる！！」

そのロアの言葉は、とても力強い言葉だった。

彼は思い出していた。ラータ村で見た、あの無数の墓標を。そして、その墓標の前で泣き崩れていた何人もの人々を。

人の命をゴミのように扱う『魔族』を、ロアは赦すことが出来なかった。出来る筈がなかった。

「私も戦います！！　ロア程強くはないけど……私も力になってみせます！！」

アルニカが言った。彼女も、ロアと同じ気持ちだったのだ。

「オレも一緒に戦う。ロア達が戦うのに、オレ一人だけ黙ってるなんてこと出来るか」

続いてルーノが言った。

ユリスは三人の目を見る。皆、その瞳に確固たる意志を宿していた。

「……そう言ってくれることを願っていました。ロア、アルニカ、ルーノ」

そのユリスの言葉に、三人は小さく頷く。

ユリスは王座から立ち上がり、ロア達三人だけでなく、ここにいるエンダルティオの少年少女達全員にも告げる。

「開戦は明日の夜明けです。準備が整い次第、貴方達には騎士団と共にイシュアーナへと赴いていただきます」

アルカドールからイシュアーナへは、歩いておよそ二時間。

馬を使えばもっと早いだろうが、騎士団はともかく、少年少女達には馬は行きわたらないだろう。つまり、二時間かけてイシュアーナへと歩くしかない。

だが、リオやイワンを含め、少年少女達は、誰一人としてそんなことを気にする素振りも見せない。

「イワン」

ユリスはイワンの名を呼び、彼と目を合わせる。

「2500人のエンダルティオの戦士、皆のご武運を祈ります」

「……」無言のまま、イワンは小さく頷いた。

イワンは後ろを振り返り、エンダルティオの少年少女達を見つめる。歳の幅や種族の違いもあるが、彼らは皆、例外なくイワンの仲間であり、かけがえのない友だ。

「いいか、俺達はエンダルティオの戦士。戦地に赴くからには、最後の最後まで死に物狂いで戦え」

彼は、皆の顔を一しきり見つめた後で、

「くじけそうになった時は、自分の友達や家族のことを思い浮かべる。そして思い出せ、自分は決して独りではないということをする」

これから戦場へと赴く何百人もの少年少女達を、言葉だけで奮い立たせるイワン。

ロアやアルニカは、そのイワンの姿にただ驚いていた。

いつもの、授業をサボり、学院から問題児扱いされているイワンからは、余りにもかけ離れた姿だった。

「ロア……イワンさんって、あんなに頼もしい人だったっけ？」

アルニカがロアに耳打ちする。ロアは無言のまま、小さく首を横に振った。

「行こう、俺達の戦いへ」

静かな口調ながらも、決意に満たされたイワンの一言に、少年少女達は皆同時に「戦いへ！」と勇ましく声を上げた。

少年少女達はその場で踵を返し、玉座の間を後にする。イワンとリオも、彼らに続いて行った。

「僕たちも行こう、アルニカ、ルーノ」

ロアは二人を呼び、玉座の間を後にしようとする。

「ロア」

その彼の後ろ姿を、ユリスが引き留めた。

ユリスを振り向くと、ユリスはロアに一言だけ告げた。

「」武運を」

「……うん」ロアは頷いた。

そして、ロア達三人も玉座の間を後にした。

【キャラクター紹介 14】 “リオ”

【種族】人間

【性別】女

【年齢】15歳

【髪色】マゼンタ

ロア達と同じクラスの少女で、イワンの実妹。

アルカドール王国のエンダルティオに所属している。

アルカドール王国の貴族、『セイヴィルト家』の第二子であり、本名は『リオ＝セイヴィルト』。

大きな瞳に、紫がかったピンクのショートヘアが印象的で、非常に明るく、活発な性格の持ち主。

友人は多く、特にアルニカとは仲が良い。彼女のことは『アーニー』という独自の愛称で呼ぶ。

『遅刻居眠り常習犯』という通り名を与えられているものの、その槍術の腕は極めて高く、ロアと互角以上に渡り合う程。

ヴルムスの発言からして、彼女は何か特別な力を有しているようだ。

【キャラクター紹介 15】 “イワン”

【種族】 人間

【性別】 男

【年齢】 18歳

【髪色】 トパーズ

セルドレア学院高等部三年生で、リオの実兄。本名は『イワン＝セイヴィルト』。

『セイヴィルト家』の第一子で、貴族の御曹司だが、その長めの金髪や耳のピアスからは想像もつかないだろう。

殆ど授業に出ていないことから『サボリ常習犯』という通り名を付

けられ、リオと兄妹揃って問題児扱いされている。

しかしながら、その性格は極めて誠実で、妹のリオ同様に嫌味が無く、ロア達にとっては良き先輩と言える立場にある。

友人も多く、クラスでの信頼も厚い。

エンダルティオの団長を務めており、その剣の腕はロアを超え、学院の生徒の中でも最強と言われる。

『魔族』の侵攻に立ち向かう為、2500ものエンダルティオの少女達を率い、イシユアーナへ向かうこととなった。

第51章 くイシュアーナ正門く

ロア達や騎士団や、イワン率いるエンダルティオの戦士達がアルカドール王国を発ち、イシュアーナへと向かっている頃。

イシュアーナ共和国の丘の上に立つ、宮殿のような外観の巨大建造物。

イシュアーナの街や海を一望に出来る場所にあるこの建物は、『イシュアーナ聖堂』と呼ばれている。

その聖堂の会議室で、六人の人物が円卓を囲んでいた。

その六人のうちの四人は、60歳くらいの初老の男性。あとの二人は他の四人とは違い、若い男女だ。

一人はピューマ型獣人族の男性、そしてもう一人は、長いポニーテールを後頭部で丸くまとめた髪型の、人間の少女だ。

一般的に『シニヨン』と呼ばれる髪型だ。少女の髪は緑がかった明るい青色で、見ているだけで涼しく感じそうな色をしている。

「先程、ユリス女王からの知らせがあった。『魔族』の侵攻に対し、この国に騎士団や、エンダルティオを送るそうだ」

男性がそう告げると、『本当ですか、議長閣下……』『それは朗報だ……！』『今の我々にとって、何よりも嬉しい知らせですな……』

と、他の三人の男性がざわめく。ピューマ型獣人族の男性と、シニヨンの少女は、黙ってその様子を見つめていた。

『議長閣下』と呼ばれた、白髪の目立つ初老の男性の名はチェザーシ。

イシュアーナは『共和国』だ。アルカドール王国等の君主国と違い、王ではなく、国民全体で国を所有している。

つまりは、『王がない国』なのだが、国民によって選出された政治家は存在する。

それが、この会議室にいる四人の初老の男性だ。

そして、チェザーレはその四人の内の最高権力者である。

「ヒュウ、そしてミロル。この戦いに負ければ、伝統あるこのイシュアーナ国は終わりを告げることとなる」

チェザーレは、ピューマ型獣人族の男性と、シニヨンの少女に告げる。

「承知しております、チェザーレ様」

答えたのは、ピューマ型獣人族の『ヒュウ』。

暗めの緑色をベースに、所々黒い模様が入った毛並、そしてガラス玉のように大きな、瑠璃色の瞳が特徴だ。

ヒュウは23歳、そして、イシュアーナ共和国の騎士団の団長だ。

「わたしも同じく……」

ヒュウの後に、シニヨンの少女は囁くような小さな声で答えた。

チェザーレは彼女を『ミロル』と呼んだが、それは彼女の正しい名前ではない。正しい彼女の名は、『ミローイル』だ。

ミローイルは17歳、彼女はイシュアーナのエンダルティオの団長である。

「望みは、そなたら若者達に託された。アルカドールと協力し、ど

うかこのイシュアーナ共和国を『魔族』から救ってくれ」

「御意に」ヒュウが答えた。

ミローイルは声には出さずに、チェザーレと視線を合わせてこくりと小さく頷く。

「……では、これにて閉会とする。あと30分もすれば、アルカドールからの援軍が到着するだろう」

会議の終わりを告げるチェザーレの言葉。円卓を囲んでいた六人は椅子から立ち、会議室の入り口へと向かう。

会議室を後にし、ヒュウとミローイルは聖堂の回廊を歩いていた。回廊からは、街並みやイシュアーナの近海が一望に出来た。

イシュアーナ騎士団団長のヒュウと、イシュアーナのエンダルテイオ団長のミローイル。二人とも、国を背負って戦う者達の代表だ。その立場故に、不安も大きかった。特に、歳若い少女のミローイルは。

「どうした？」

隣を歩いていたミローイルが、急に足を止めた。

彼女は視線を横へ向けて、海を見ている。

「このように、聖堂から海を眺められる日は、また来るのでしょうか……」

「……不安なのか？ ミロル」

ヒュウの言葉に、ミローイルは答えなかった。

答えずに、彼女はただじつと海を見つめているだけだった。

「不安は誰しも同じことだ、それに私達にはまだ希望がある。かの『三大国』の一つ、アルカドールが味方についてくれるんだ」

ミローイルの背中に、ヒュウは語りかける。

「だから、アルカドールと共に、最後まで望みを捨てずに戦い抜こう。このイシュアーナを守るために」

「……はい」

少女はゆっくりとヒュウを振り向き、小さく頷きながら返事をした。

「門へ行こう、アルカドールの者達を迎えに」

そつミローイルを促し、ヒュウは再び歩を進める。

ロア達三人、ヴルム率いる騎士団、そしてイワン率いるエンダルティオ。

彼らがイシュアーナ共和国の正門の前に到着した頃、時刻は午後五時過ぎだった。

海が近いからだろう。海鳥の鳴く声や、強い潮の香りがする。

「ここが……イシュアーナ共和国」

眼前にそびえ立つ門を見つめ、ロアが呟く。

「そう。そしてアルカドールの同盟国だ」

ヴルームがそう続けた。

本来、騎士団を率いるのは団長のロディアスだが、彼は今回、万が一の場合に備えてアルカドールに残った。イルトも同様。

そこで、副団長のヴルームが騎士団を率いて来たということだ。

「イワン」

「はいよ」

ヴルームはイワンを呼び、後ろの者達を残し、彼と二人で正門へと歩み寄る。

「アルカドール王国王女、ユリスの命の下に、貴国の救援に参った
！！ 開門願う！！」

正門に近づくと、ヴルームは門に向かって叫んだ。

後ろのアルカドールの騎士団や、エンダルティオの少年少女達、一人一人の耳に届く程の声。

そのヴルームの声が、門の向こうにいる誰かに届いたのだろう。

石造りの巨大な門がゆっくりと開かれる。その向こうから二人の人物が姿を見せ、ヴルームとイワンの元に歩み寄って来る。

一人は暗い緑色の毛並のピューマ型獣人族。もう一人は、シニヨンの髪型の『人間』の少女だ。

「初めまして。イシユアーナ共和国騎士団団長、ヒュウです」

ヒュウは、ヴルームに右手を差し出して、握手を求める。
ヴルームはその手を取り、

「アルカドール王国騎士団副団長、ヴルームです。よろしく」

そう挨拶を返す。

彼らの隣では、イワンとミローイルが向かい合っていた。

「イシュアーナ共和国のエンダルティオ団長、『ミローイル』ウィ
オラ』です……『ミロル』と呼んで下さい……」

イワンは内心驚いていた。まさか、女の子がエンダルティオの団長
を務めているとは思わなかった。

それに、こんなにおとなしそうな子にエンダルティオの団長が務ま
るのだろうか？

失礼だと思ったが、エンダルティオの団長を務めているイワンは、
その大変さをよく知っている。

だから、そう思わずにはいらなかった。

「『イワン』セイヴィルト』、エンダルティオの団長同士、よろし
くな」

フルネームで自己紹介されたので、無意識にフルネームで自己紹介
を返していた。

「あ……」

すると、ミローイルがイワンの顔をじっと見つめていた。
まばたきもせず、まじまじと。

「何？　もしかして俺の顔に何かついてる？」

「あー！！　い、いえ！！　すみません……」

顔に手を当てながらイワンが聞き返すと、ミローイルは慌てながら答えた。

彼女は視線をイワンから逸らし、微かに頬を赤らめているように見える。

「はるばる、遠路をお疲れでしょう。兵士達を国の中へどうぞ、ホテルへとご案内致します」

ヒュウが、ヴルムにそう促す。

「気遣いをありがとう、助かる」

ヴルムは後ろを振り返り、騎士団やエンダルティオの少年少女達に合図を送る。

『こちらへ来い』という意味の合図だ。

「では、私について来て下さい」

そう言うと、ヒュウとミローイルは踵を返し、門の向こうへと歩き始める。

ヴルムとイワンはその後ろに続き、騎士団やエンダルティオはその後ろへ続いた。

「（何でさっき、俺の顔をじっと見てたんだ？）」

イワンは歩を進めながら、前を歩くシニヨンの少女の背中を見つめて心の中で呟いた。

第52章 く開戦前 その1

ヒュウに案内されたホテルは、イシユアーナでも五本の指に入る高級ホテルだった。

純白の石から造り出された建物は、まるで神が祀られた『神殿』のような佇まい。

外観は一目で見渡せない程に大きく、エントランスの柱一本一本にも細部まで装飾が施され、優雅な雰囲気漂っていた。

「すごく綺麗な建物……」

アルニカが感嘆の声を漏らした。

「このホテルのデザインは、かの有名な『モナン＝ベルアーヌ』によるものです」

「『モナン＝ベルアーヌ』……！？」

ヒュウの説明に、リオが反応した。

『モナン＝ベルアーヌ』、この名前に、リオは覚えがあったのだ。リオだけでなく、ここにいた者達の大半はその『モナン＝ベルアーヌ』という名前を知っていた。

ごく一部の者、例えばルーノを除いて。

「誰だ？ そのモナカ……何とかって」

「ルーノ、『モナカ』じゃなくて『モナン』。アスヴァンで一番と言われた彫刻師よ」

「てか、『モナカ』だったら食い物だろ……」

アルニカがルーノに説明して、イワンが笑い混じりにルーノにつっこんだ。

彫刻師とは、石や木を彫って模様を刻みつけたり、立体物に加工するなどして、素材を芸術作品へと仕上げる人のこと。

そして、アルニカが言うように、『モナン＝ベルアーヌ』はアスヴァンーと言われた彫刻師だ。

彼は彫刻師として生涯を全うし、その斬新な発想や持ち前の器用さで、数々の芸術作品を世に送り出した。

しかし、残念ながら彼の作品の大半は、『アスヴァン大戦』の戦火で焼け落ちてしまった。

故に、現存する彼の作品は多くなく、状態によっては一生遊んで暮らせる程の値段で取引されているという。

ロア達がこれから泊るこのホテルも、数少ない『モナン＝ベルアーヌ』の現存する作品として知られている。

このホテルを見たいが為に、イシュアーナを訪れる者も少なくないそうだ。

「でも、宿代は大丈夫なんですか？ このホテル、結構高そうだけど……」

「ご心配なく。宿代は全て、我々イシュアーナの者が負担します」

ロアの問いかけに、ヒュウが答えた。

「どうして、そこまでしてくれるんだ？」

「あなた方は、わたし達イシュアーナの希望……」

イワンの問いに、ヒュウの代わりにミローイルが答えた。
呟くような小さな声で、彼女は続ける。

「出来る限りの最高のおもてなしをしろと、チェザーレ様より言
い使っております……」

様づけで呼んでいることから、チェザーレとはこの国の権力者のこ
とだろうか。

イワンは首を縦に振りながら、「なるほどね」と答えた。

その後、ヒュウによって皆はホテルの中へと通され、それぞれの部
屋へと案内された。

綺麗なテーブルや椅子、磨かれた鏡、精巧な細工の施されたランプ。
外観以上に、ホテルの中は豪華だった。

さらに、窓からはイシュアーナの近海が一望に出来た。

「すごいゴージャスな部屋……！！ ほらアニー、早く早く」

「ほんと、広い……！！」

部屋に入ったりオとアルニカ、二人はほぼ同時に呟いた。

リオとアルニカが二人部屋で、その隣の三人部屋に、ロア、ルーノ、
そしてイワンが入ることになった。

「さてアニー、これからどうする？」

リオは槍を壁に立てかけて、背中からベッドに飛び込む。
アルニカは腰のツインダガーをはずして、テーブルの上へと置いた。
腰が一段と軽くなった。

そして、アルニカもベッドに腰掛ける。

「そーだなあ……とりあえず汗かいたし、軽くシャワー浴びてこよ」

「オツケー、じゃああたしはちょっと昼寝するから、上がったら起こして」

「うん、お休み」アルニカはベッドから立ち上がり、部屋の入り口脇の浴室へと向かう。

リオはアルニカの後ろ姿を見送って、ベッドの上に横になる。
程なくして、リオは気持ちよさそうな寝息を立て始めた。

一方その頃、ロア達三人。

「じゃ、オレちょっと散歩行ってくるわ」

剣や手荷物をベッドの上に置いて、ルーノはロアとイワンに告げた。
ヴルムによれば、夕食の時間までは各々自由行動だった。

戦いに備えて武器の手入れをしたり、ゆっくりと体を休めるようにと告げられている。

しかし、ルーノは休む必要など無かった。獣人族故に、二時間歩き続けた程度では少しも疲れないからだ。

このイシュアーナは、滅多に来る機会はないだろう。

せっかくの機会だ。ルーノは、この国を見ておこうと思ったらしい。

「夕飯までには帰ってこいよ、じゃねーと飯抜きだぞ」

「わかってる。じゃあ後でな」

ルーノは軽く手を振って、部屋から出て行った。

それを見送って、イワンはベッドの上に仰向けになる。そして、壁にかかった時計に視線を向ける。
時計は、午後五時を指していた。

「夕飯まであと二時間あるな……ロア、お前はどつすんだ？」

「うーん、僕は休んでようと思います」

ロアも、イワンの隣のベッドへ腰掛ける。

「ずっと歩きっぱなしで疲れたし。イワンさんは？」

「俺も別に用はないしな……それに」

イワンは体を起こして、鞘に収められた自分の剣を手取る。
左手で柄を握って、剣を鞘から引き抜いた。

「こいつの手入れも、もう済んでるしな」

磨き上げられた銀色の刃を見つめる。

この剣を購入したのは、イワンが15歳だった頃。高等部に進級した時だ。

三年間愛用し続けている、相棒だ。

「ふッ!!」

ベッドに腰掛けたまま、イワンは剣を横に振った。ヒュン、と空気を切る音が響く。

今度は上から下に、次は斜め下から斜め上に。

一しきり振った後、イワンは剣を鞘に収め、それをベッド脇のサイドテーブルの上に置いた。

「お前はもう準備出来てんのか？」

イワンは持参した水筒に口をつけながら、ロアに問いかける。

「うん、あとは休んで、ご飯食べて力を付ければ、準備完了です」

「そうか」

答えると、イワンは水筒から口を離し、キャップを閉めて、それをカバンの中に仕舞う。

再びベッドに横たわって、仰向けになる。

「ロア、茶でも淹れてくれ」

イワンが指した先には、丸い木製のテーブルがあった。

その上には陶器製のピッチャーと、同じく陶器製のティーカップが三つ置かれている。

このホテルのサービスだろう。

「えー、イワンさんが淹れて下さいよ」

「ほざけ。俺はお前の先輩だぞ？ それに俺はお前より強いんだぞ」

「？」

イワンはロアよりも強い。確かにそれは事実だ。学院の生徒の中でも最強と謳われるイワンの強さは、ロアを超えている。

従うしかなかった。しづしづロアはベッドから立ち上がり、テーブルに歩み寄る。

「はあ。『サボリ常習犯』と呼ばれてるくせに、こんなときばかり先輩づらして……」

「あ？ 何か言ったか？」

そこらへんの埃でも拾って入れてやろうか、カップに紅茶を注ぎながら、ロアは思った。

まず一つ目のカップに注いで、次に二つ目を注ぐとする。その時だった。

隣の部屋から、絶叫するような少女の悲鳴がこだましたのだ。

「！？」

ロアは、紅茶を注ぐとした手を止める。

イワンは、ベッドの上で弾けるように体を起こした。

「今の声、アルニカじゃないか！？」

イワンが言った時、すでにロアは部屋の入り口へと走っていた。ベッドから降りて、イワンもロアに続く。

「どうしたのアルニカ、今の悲鳴は!？」

ロアがアルニカ達の部屋の扉を開けると同時に叫んだ。

「あ、ああ、あ、あ……」

扉のすぐ側にいたアルニカは答えなかった。

答えずに、途切れ途切れに「あ」と漏らし、部屋の床を指差していた。

ロアとイワンは、彼女が指す場所を視線で追う。

すると、ゴキブリが一匹。床の上を行進していた。

「……………は？」

ロアが気の抜けた声を漏らした。

どうやら、先ほどのアルニカの悲鳴は、このゴキブリが原因らしい。

「こんな虫一匹で大声出すなよ……」

ぺしっ、イワンがスリッパで叩いて気絶させ、のびている黒い生命体を窓から投げ捨てた。

「あんな凄惨な悲鳴出すから、何があつたのかと……」

ため息と共に、ロアが呟く。

「ああ。てつきり、『魔族』の奴らが部屋に乗り込んで来たのかとでも……」

そこで、イワンの言葉は止まった。

「あ……………」同時に、イワンの隣で、ロアが一言だけ呟いた。

ロアとイワンの目の前には、アルニカがいる。それは問題ではない。問題だったのは、アルニカがいつもの服装ではなく、体にバスタオルだけを巻いた格好だったことだった。

濡れた髪や、所々水滴のついた白い肌。シャワーを浴びたのだろう。その胸元の三分の一程が、バスタオルから覗いていた。

三人の思考は、完全に停止した。否、止まらざるを得なかった。

「ちょ……………」

そして、三人の中で一番最初に思考を回復させたのは、アルニカだった。

彼女の顔が、まるでグラスにトマトジュースを注ぐように赤くなっていく。

「ちょっと、やだ！……！」

次の瞬間、アルニカはロアとイワンに向けて、空気を一刀両断する程の勢いのピンタを見舞った。

バチイイイイイイイイイイイイイイ——ン！……！！

先ほどの悲鳴にも勝る程の、渴いた音が響き渡る。

「痛ああああああああ——っ！……！！」

「いい痛ってええええエエエ——ッ！！！！」

アルニカが繰り出したビンタが、ロアとイワンの頬を直撃した。

第53章 く開戦前 その2

午後七時、ホテルの大食堂でロアとイワンと合流したルーノ。二人の顔を見るなり、彼は開口一番に言った。

「どうしたんだその顔……？」

ロアとイワンは答えなかった。

二人揃ってテーブルに頬杖を立てて、目に涙を浮かべていた。その原因は、二人の頬にくつきりと付いた手のひらの跡。大きさをらして、少女の手だろう。

「ふん!!」

向かい側に座っていたアルニカが、そっぽを向いた。

……怒ってる。彼女の横顔を見れば、それは明白だった。

ロアとイワンの頬に付いた手のひらの跡、怒っているアルニカ。

この状況が意味することは一つ。アルニカの逆鱗に触れるようなことをロアとイワンがやらかし、

その制裁として、彼女のビンタを喰らったということ。

「何があっただよ？」

ルーノがロアに耳打ちすると、

「どうか聞いてくれるな」という返事が返ってきた。

「ルーノ、お前にはまだ早い」

次いで、イワンにそう告げられた。

「いてて……」彼は頬をさすりながら、表情をしかめている。

一体二人が何をしたのか、ルーノは余計に気になったが、それ以上の言及はしないことにした。

うつすらと自分に向けられた、アルニカの視線が痛かったからだ。

「（……知りたかった）」

残念に思いつつ、ルーノはロアの隣の椅子に腰かけた。

ホテルの大食堂は、アルカドールの城の玉座の間以上に広がった。

その広さたるや、2500人のエンダルティオの少年少女達を収容できる程。

それでもまだ余裕がある。

数十本のテーブルを並列させてその上にテーブルクロスをしき、一つの大きなテーブルのようになってる。

「ふあゝ、お腹空いたな……まだかなあ、ご飯」

アルニカの隣、イワンの真向いの席に腰かけたリオが、欠伸混じりに呟いた。

「なありオ、お前いまだに授業中居眠りしてんのか？」

「へ？　だつてしょうがないじゃん。眠くなんだもん」

実兄、イワンの問いかけに、リオは開き直った様子で答える。

「てか、イワン兄だつて授業サボつてばっかいんでしょ？ あたしのこと言えないじゃん？」

「授業出てない分、俺は家でちゃんと勉強してる。落第しかけのお前とは違つんだよ」

「なにおう！？ キモロンゲ金髪ピアスのチャラ男のクセに！！」

「言つたな！！ この羽つ歸りネボスケ娘！！」

周りの視線も気にせず、イワンとリオはその場に立ち上がって喚き合いを初めてしまった。

ギャーギャーと、端から聞けば訳のわからない言葉を互いにぶつけ合っている。

その様子は微笑ましいと言えば微笑ましい、子供っぽいと言えば子供っぽくも見える。

「イワンさんてさ、精神年齢そんなにリオと変わらないよね」

ロアがルーノに問いかける。

「確かに」頷きながら、ルーノはそう答えた。

「あ、あの……」

囁くような小さな声が、ロアの耳に入った。

声の方を振り向く。その声の主は、ミローイルだった。

彼女は、その両手にパスタの乗った陶器の皿を持っている。

「お料理をお持ちしたのですけれど……」

ミローイルは、視線をロアからイワンとリオに移す。
二人はミローイルに気付かず、依然わめき合いを続けていた。

それから数分。人数分の料理が揃ったのを確認し、ロア達は食事を始めた。

ロア達に出されたパスタには、野菜の他にイシュアーナの特産物のエビや貝が入っていた。

さらに味付けの香辛料までもがイシュアーナ特有の物だったらしく、アルカドールの物とは違った風味を醸していた。

「オリーブオイルも胡椒もアルカドールのとは違った風味、野菜はテフヌ産、それからかくし味は……」

「さすがアニー、グルメだね」

レストランでバイトをしているアルニカ。

リオの言う通り、舌を使う仕事をしているだけあって、彼女の料理に対する批評は的確なものだった。

「ルーノ。このパスタ、すごくおいしいね……」

「ああ……正直今まで食った物の中で、一番旨いかも……」

ロアとルーノ。彼らは海産物パスタの味に感嘆していた。

「初めての味だけど、めっちゃ旨いな……」

パスタを一口口に運んで、イワンがそう呟いた。
貴族の御曹司のイワン。アルカドールで外食することは幾度もあった。

パスタ専門のレストランにも足を運んだ記憶はあるが、これほど美味なパスタは初めてだった。

「お口に合ったようで、何よりです……」

イワンの側で立っていたミローイルが、小さく頭を下げた。

「ミロル……だったっけ？ 君らは一緒に食わないのか？」

周りを見渡すと、席に着いてるのはアルカドールの面々だけ。

イシュアーナの者達は料理や空き皿を運んだり、空になったグラスを預かり、水を注いでいる。

そのイシュアーナの者達の様子はまるで、レストランのウェイターのようにだった。

「わたしたちはアルカドールの皆さんが食事を終えた後で頂きます。これはイシュアーナの習わしなのです……」

「へえ……規律を重んじる国なんだな」

イワンが返事を返すと、ミローイルは「ごゆっくり……」と告げ、歩き去って行った。

本当にあのおとなしい女の子が、この国のエンダルティオの団長なのだろうか？

歩き去るミローイルの後ろ姿を見つめながら、イワンは思った。

エンダルティオとは、何千もの少年少女達によって組織された騎士団。
その団長を務めるということは、少年少女達を纏め上げるだけの優れた統率力と、リーダーシップが必要不可欠。

イワンには、物静かで大人しそうなミローイルが、それらを持ち合わせているように思えなかった。

「……ま、明日になれば分かることか」

「ん、何か言いました？ イワンさん」

「いや別に。さつさと食っちゃおう」

とりあえず今は、海産物パスタを平らげることに集中することに決めた。

午後１１時。夕食を終えたロア達はそれぞれの部屋へと戻り、明日の早朝の開戦に備えて、気持ち早めに床に就くことにした。
ロア達の部屋。ルーノとイワンはすでに眠りについていたが、ロア一人だけがなかなか寝付けずにいた。

「（……やっぱり寝付けないな……）」

ロアはベッドの上で体を起こす。
灯りの消されたホテルの部屋は、窓から射す月の光にぼんやりと照

らされていた。

両脇では、ルーノとイワンが気持ちよさそうに寝息を立てていた。

どうして今日は寝付けないのだろうか？　　ロアは考える。

単にいつもと寝場所が違うからなのか。

或いは、明日の早朝に開戦する戦いに、少なからずとも恐れを感じているのだろうか。

結局のところ、寝付けない理由はわからなかった。

「（ちよつと外の風に当たってこよ）」

ロアはベッドから立ち上がって、ルーノとイワンを起こさないよう物音に注意を払い、部屋を後にした。

第54章 く開戦前 その3

エントランスから外に出て、ロアはリラックスエリアに出た。
リラックスエリアには数個のベンチが置かれていて、
それに腰かけてイシユアーナの近海を眺められるようになっている。

「……きれいだ」

夜の海を見つめて、ロアは呟いた。

夜空に浮かんだ無数の星が水面に反射していて、まるで宝石が浮かんでいるようだった。

自然が作り出したとは思えない程に芸術的で、幻想的な光景だった。
思わず立ち空くして、その光景に見とれていた時、

「ロア？」

後ろからロアを呼んだのは、いつも聞き慣れた少女の声。
振り向くと、オレンジの髪をした少女が立っていた。

「アルニカ……？」

暗がりではつきりと顔は見えなかったが、間違いなくアルニカだった。

どうしてここに？ 真っ先にロアの頭に浮かんだのは、その疑問。

「……む」

ロアがその疑問を発する前に、アルニカが不機嫌そうな表情を浮かべた。

「どうしたの？」

その質問に、アルニカは答えなかった。

相変わらず不機嫌な表情を浮かべて、唸るように「む」と漏らすだけ。

ロアは知っている。これは、アルニカが不機嫌な時の癖なのだ。

「ねえロア、何で人の裸を見といて『ごめんなさい』の一言が無いの？」

「へ……？ あ……！！」

アルニカが不機嫌な理由に、ロアはようやく気付いた。
全ては、あの一件が原因だったのだ。

「い、いや。だってあれはアルニカがあんな大きな悲鳴を上げるから……」

ロアの言い分にも一理はある。隣の部屋にまで聞こえる悲鳴を上げるのだから、

それ相応の事態があつてのことだと普通は思うだろう。

まさか、あれほどの悲鳴の原因がたった一匹のゴキブリだとは、誰にも予想など出来る筈はない。

ましてや、扉の向こうにバスタオル一枚しか纏っていない少女がいるなど……

「むむっ！？」

ずいっ！！ アルニカがその不機嫌な顔をロアへと近づけた。

そして彼女は、上目使いでロアの目を見つめる。

「う……」

何も言われなくとも、彼女の威圧感がのしかってくる。

「……………」
「ごめんなさい」

弁解するのを諦めざるを得なかったロア。彼は小さく頭を下げ、謝罪した。

「ロア、明日の戦い。どうなるのかな？」

アルニカも、ロアと同じく眠りにつけなかったらしい。
そこでふらりと外に出た時、ロアと会ったということだった。

二人は、リゾートエリアのベンチに並んで腰かけていた。
夜の闇と静寂、そして海に反射された星々の光がロアとアルニカを包んでいた。

「……………」
「わからないよ」

アルニカの問いかけに、ロアはそう一言答えた。

「そつだよね、ごめん。変なこと聞いて」

背中をベンチの背もたれに寄り掛かせて、アルニカは海を見つめる。

アルカドールから滅多に出たことのない彼女は、海というものを見るのは初めてだった。

この世に生を享けて14年。アルニカが初めて見た海の夜景は、本当に美しかった。

先ほどのロアと同じく、思わず見とれてしまいそうになる程に。

「塔で戦った、『ヴィアーシェ』って人のこと覚えてる？」

海を見つめ、アルニカがロアに言う。

『ヴィアーシェ』、ロアは勿論覚えていた。忘れなくても忘れられない名前だ。

生気を感じさせない程の、異様に白い肌。そして腰まで伸びた暗い青色の髪。

自分の身の丈程の大きさの大剣を軽々と使いこなし、自分達を圧倒した彼女。

『魔族』という種族の強さを、ロア達に思い知らせたのが彼女だ。

「覚えてるよ。すごく強かった」

ロアは答えた。

「あれほどの強さの『魔族』が、今度は何人来るのかな？」

「不安なの？ アルニカ……」

アルニカは小さく頷いた。

ロアと渡り合えるほどに剣の腕があるとは言え、アルニカは14歳の少女だ。

明日の朝には、戦争に参加することになる。そして、『魔族』と戦わなければならない。

不安な気持ちを抱くのは、当然の事だろう。

「……僕だって不安だよ。でも、今度はあの時とは違う」

「え？」

その言葉に、アルニカは視線をロアに移した。

「今度は、ルーノがいる」

ベイルークの塔では、ルーノは一緒には戦えなかった。

だが今回は違う。今度は彼も、ロアとアルニカと共に『魔族』と戦う。

「ルーノだけじゃない。グルーム先生も、リオも、イワンさんだっている」

ロアの言う通り。今回は二人だけではない。

今度は沢山の仲間がいる。皆、共に戦う頼もしい仲間達だ。

「イワンさんが言ってたよね。くじけそうになった時は、自分の友達のことを思い浮かべろって」

確かに言っていた。その後にイワンが続けた言葉も、アルニカははつきりと覚えている。

あの言葉は、いつものイワンからは想像もつかない言葉だった。

「そして、自分は決して独りじゃないことを思い出せて」

ユリスが、どうしてエンダルティオの団長にイワンを選んだのか。
エンダルティオの少年少女達が、どうしてイワンについてきたのか。
あの時、それらの理由がはつきりとわかった。

「僕たちは、誰も独りなんかじゃないんだ。アルニカだってそうだよ」

「……うん」

ロアの励ましを隣で聞いているだけで、アルニカは自分の内に勇気が湧いてくるのを感じた。

彼の言葉には、不思議な力があつた。彼に励まされただけで、希望を持てるような、

雲のように心を覆っていた不安を少しずつ消し去っていくような、そんな不思議な力が。

「それじゃあもう休もう。明日に備えて」

ロアはベンチから立ち上がる。アルニカも、それに続いた。

「ありがとうロア。お休み」

「お休み」

二人はそれぞれの部屋へと戻り、床に就いた。

翌日、午前5時30分。朝日が空を照らし始めた頃。

イシュアーナの門の上には鎧や兜で身を固めた兵士達が集結していた。

彼らはエンダルティオではなく、アルカドールとイシュアーナの兵士達だ。

「時が来たな」

「ええ。そうですね」

ブルームとヒュウ。それぞれの騎士団を率いる立場の獣人族の二人は、門の前の状況を見下ろしていた。

イシュアーナ共和国の正門の前。

無数の『魔族』やバラヌーンの『人間』や『獣人族』の兵が、大地を埋め尽くしていた。

イシュアーナ共和国を滅ぼすという目的の為に、モルディーア王国から送り込まれた軍だ。

彼らの軍旗には、モルディーアの紋章があった。

開戦の時。イシュアーナの命運を分ける戦いが始まる時は、すぐ側にまで迫っていた。

第55章 く開戦く

「陣形を組め！！ 槍隊と剣隊は前に出る！！ 弓隊は後ろだ！！」

イシューアーナ正門前に集結した「魔族」の軍隊。

そして、バラヌーンの「人間」や「獣人族」の軍。

怒声の如き声を放ち、彼らに命令を飛ばしている者がいた。

その者は、刺々しい装飾の兜を被り、鎧で全身を固めている。

それよりも何よりも目を引くのが、その四本の腕。

この者の名は「ドルーグ」、魔族の軍を率いる將軍だ。

ラータ村にてロアとアルニ力と交戦し、毒剣によってアルニ力を窮地に追いやった。

「……軟弱な『人間』や『獣人族』ごときが、我らに刃向うつもりか」

正門の上の「人間」や「獣人族」の兵士を見つめ、ドルーグは忌々しげに漏らす。

彼らの表情からは少しの恐怖も、迷いも感じなかった。

本気で、「魔族」と戦うつもりなのだ。

「進軍合図だ！！ 角笛を吹き鳴らせ！！」

ドルーグのその命令に、数人の「魔族」の兵が角笛を吹いた。
モルディーアの角笛の独特の音色が、辺りに響き渡る。

それと同時に、「魔族」の兵士達が皆一斉に剣を引き抜いた。

「弓矢隊、構えろ!!」

ブルームは剣を鞘から引き抜き、アルカドールの兵士達に告げた。その隣で、ヒュウもイシュアーナの兵士達に命令し、弓を構えさせた。

「進め!! イシュアーナを陥落させよ!!」

「魔族」の兵士の中から、一際大きな声が聞こえた。

それは進軍の命令、そして開戦の合図。

命令を受けた「魔族」やバラヌーンの兵達が、合唱のように荒げた声を上げる、

刹那。まるで津波の如く、一斉に正門へと走り寄って来た。

高い門の上からその様子を見ると、まるで無数の黒い虫が迫ってくるかのようだった。

「ついに、開戦の時を迎えたか」

ブルームは呟く。

大型獣人族の鼻に、「魔族」特有のにおいが漂ってくる。

「人間」のものでも、「獣人族」のものでもない独特のにおいだ。

このにおいを嗅いだのは、まだブルームが幼かった頃――

そう。「第一次アスヴァン大戦」以来のことだった。

彼は、剣の銀色の刃を振り上げる。

それを振り下ろすと同時に、兵士全員の耳に届き渡る声で叫んだ。

「弓矢隊、放て!!」

アルカドールの兵士達は、門へと迫り来る「魔族」の兵達に向けて一斉に矢を放った。

放たれた無数の矢はまるで雨のように降り注ぎ、数十人の「魔族」の兵を射た。

命中はしている。だが、それでは足りなかった。

矢の雨を逃れた「魔族」の兵は、正門へと迫り続けている。

「こちらも放て!!」

ヒュウの命令を受け、続いて今度はイシュアーナの兵達が矢を放った。それでもやはり、「魔族」達の突進を完全に止めるには至らなかった。

「うあああつ!!」

「がああつ……!!」

ヴルームの隣にいた二人のアルカドールの兵士が胸を射られ、絶命した。

「魔族」も、こちらに向けて矢を放ってきている。

「……くそっ!!」

胸を射られた二人の兵士を見つめ、ヴルームは悔しげに漏らす。だが、今は戦うのが優先だ。ヴルームはすぐに、敵の方を向き直った。

「!!」

それと同時に、ヴルムに向けて四本の矢が飛んできた。

「数本の矢」ではなく、「四本の矢」だ。

矢が飛ぶ速さは、常人ならば到底反応できるスピードではない。

勿論のこと、自分に向かって飛んでくる矢を数えるなど、不可能だ。

だが、「獣人族」の反射神経と動体視力は「人間」とは比べ物にならない程優れている。

飛んでくる矢を数えることも、十分に可能だ。

「おおおっ!!」

掛け声と共に、ヴルムは剣を一振りする。

そのたった一振りで、彼に向けて飛んできた四本の矢は全て叩き落とされた。

「魔族」の兵が射られるのと同様に、門の上の兵士達も一人、また一人と射られ、

門の上から虚しく落下していく。

アルカドールとイシユアーナの兵士が門の上にいる以上、剣や槍は届かない。

戦況は完全に、弓だけによる遠距離の戦闘だった。

このまま門の上にいれば、近接戦闘になることはないだろう。

誰もがそう思っていた。

「ヴルム卿!!」

矢が飛び交う中、不意にヒュウと呼ばれ、ヴルムは彼を振り帰った。

「奴ら、門を破るつもりだ!!」

ヒュウが指差した方向を、ヴルムは目で追う。

彼が指していたのは、イシュアーナ正門の固く閉ざされた入り口。イシュアーナの外と中を行き出来る唯一の場所だ。

そこに向けて、巨大な「破城鎚」が迫っている。

破城鎚とは、主に城門を突破するのに用いられる攻城兵器だ。

屋根から巨大な円木が吊り下げられていて、これを何度もぶつけることによって城門を破る。

だが、今「魔族」が使おうとしている破城鎚は、ただの破城鎚ではなかった。

吊り下げられているのが丸太ではなく、まるでハンマーのような、巨大な鉄の塊。

遠目で見てもわかる。丸太などとは比べ物にならない程の重量だ。

頑丈なイシュアーナの門でも、あんなものをぶつけられれば、恐らく長くはもたないだろう。

何十人もの「魔族」の兵によって押され、車輪付きの破城鎚はゆっくりと、だが確実に正門へ迫っていた。

猶予はもう、数メートルもない。

「弓隊全員、狙いを向こうへ!! 阻止するんだ!!」

このままでは、門が破られる。危機感に煽られ、ヴルムはすぐさま指示を出した。

だが、その時にはもう遅すぎた。

まず一撃。破城鎚の巨大な鉄塊がイシュアーナの門を打った。その衝撃がまるで地震のように、門の上にいたヴルムやヒュウ、兵士達に伝わってきた。

「（やはり無理か……！！ 門を破られずに抑えるのは……！！）」

「魔族」の力は、ヴルムの想像以上だった。

あのような破城鎚を持ち出してくるなど、完全に予想外だ。このままでは、門がいつ破られてもおかしくはない。

「ヒュウ殿。申し訳ないが、少しの間だけここを離れる」

ヒュウにそう告げて、ヴルムは階段を下り、戦闘区域から離れた。

「始まったようだな」

モルディーア城のバルコニー、手にした水晶玉を見つめながら、黒いローブを纏った「魔族」の男性、ダフィウスは呟く。

彼が手にしているのは、「千里眼の水晶玉」と呼ばれる魔法道具。読んで字の如く、遠くの様子を見ることの出来る玉だ。

玉には、「魔族」の攻撃を受けているイシュアーナの様子が映っている。

破城鎚も使っているところから見て、門を破るのも時間の問題だろ

う。

「期は熟したようだ。俺達もそろそろ動くぞ」

ダフィウスは、側に立っていたヴィアーシェにそう告げる。

ヴィアーシェは頷き、手すりに立てかけていた大剣を掴み、背中へと掛けた。

二人の「魔族」は、同時に甲高い指笛を吹き鳴らす。

それから程なく、合図を受けた二匹のガジュロスが飛んできた。

ダフィウスとヴィアーシェはその背中に飛び乗り、ガジュロスと共に空高くへ飛んで行った。

第56章 く乱戦く

閉ざされた正門に、再び振動が走った。これで三度目だ。

門の向こうの詳しい状況はわからないが、戦いはすでに始まっていることだけは間違いなかった。

状況から考えて、「魔族」はこの門を破り、中へと侵入するつもりのようなのだ。

整列するように並んだ少年少女達は、皆それぞれの武器を手に、門を見つめていた。

皆の服装は外見上はいつもと変わらないが、普段着の下に鎖帷子を着けている。

鉄よりも固く、羽よりも軽い、そして鎧よりも動きやすいと評判の、イシュアーナ製の防具だ。

「二人とも、死ぬなよ」

両脇にいたロアとアルニカに向けて、ルーノが呟いた。

「ルーノもね」

アルニカが返す。

「全員生きて、アルカドールに帰ろう」

続いて、ロアが返した。

その会話の後、三人はもう何も言わなかった。何も言わずに、門を見つめていた。

ズウン……！！　また門に振動が走り、辺りに地鳴りが轟く。これで四度目。

門が破られる時、すなわち戦いの時は近かった。

「イワン！！」

門の上へと続く階段の上から、ヴルームがイワンを呼んだ。イワンはヴルームに向く。

「門が破られるのは最早時間の問題だ、戦闘準備に入れ！！」

「……オーケー、俺達の出番だな」

イワンの返事に頷くと、ヴルームは再び階段を駆け上がって、門の上に戻って行った。

その後ろ姿を見届けた後、イワンは大きく深呼吸をする。

そして、人垣をかき分けて、彼は皆の前へと出た。

「……」

一しきり、イワンは共に戦うエンダルティオの少年少女達の顔を見つめる。

「人間」の少年や少女に、兎型獣人族、犬型獣人族、狼型獣人族、狐型獣人族。

自分と同じくらいの歳の者もいれば、まだ年端のいかない子供もいる。

種族の違いや、年齢の差は確かにあった。

だが、ただ一つだけ、ここにいる皆が共通していることがあった。

この国を守る為、命を賭す覚悟と信念を持っているということだった。

彼らの目を見ただけで、イワンにはそれが分かった。
小さく息を吐いて、彼は口を開く。

「いいか、『魔族』は勿論、バラヌーンの『人間』や『獣人族』にも一片の慈悲もかけるな!!」

少年少女達は、無言でイワンの話に耳を貸している。

「奴らはすでに、『魔族』に魂を売り渡した者達、慈悲の心を捨てた連中だ!!」

それは、酷な宣告だったかもしれない。

「魔族」に下ったと言えども、バラヌーンは自分達と同じ「人間」や「獣人族」。

敵が同じ種族の者であったとしても気にせず殺せ、イワンはそう言っているのだ。

だが、イワンの言うように、バラヌーンの者達は慈悲の心など捨て去った身。

殺すのをためらっていれば、こちらが殺される。

彼らは「魔族」と変わらない。命を奪う事に何の躊躇も、葛藤もない者達だ。

そんな外道な連中に、イワンは自分の仲間を奪われなかったのだ。

「全員、武器を取れ!!」

一層声を張ったイワンの命令に、少年少女達は一斉に武器を取った。ロアとルーノは剣を鞘から引き抜き、アルニカは両腰からツインダガーを抜き、そしてリオは、槍を構えた。

五度目の破城鎚の一撃で、イシュアーナの正門はついに破られた。門が開くと同時に、敵がどっと押し入って来る。

「魔族」ではなく、敵の全員がバラヌーンの「人間」や「獣人族」だった。

それも、大半がロア達と同じ歳くらいの少年少女達。

バラヌーンの国家にも、エンダルティオは存在するのだ。

思った通りだった。これは「魔族」の策略だ。

「魔族」の兵ではなく、「人間」や「獣人族」の兵を送り込むことで、本気で戦うことを躊躇させ、

対して、慈悲の心を捨て去ったバラヌーン達はその隙を突き、有利に戦える。

人道など欠片も考慮されていない、冷酷な策だった。

だが、屈する事など出来る筈は無い。イワンは左手で剣を抜き、

「続け！！」

一瞬だけ後ろを振り返って、イワンは皆に告げる。

彼は左手に剣を握り、追い迫ってくるバラヌーンの少年少女達に向け、駆け出した。

それを皮切りに、ロア達を始め、アルカドールのエンダルティオの少年少女達も一斉に地面を蹴り、

土埃を巻き上げ、そして声を張り上げながらイワンの背中を追い、敵の元へと走り寄って行った。

戦いの火蓋が切られた。イシュアーナの正門前で、何千という数に達する少年少女達が入り乱れ、命のやり取りを繰り返す。

ロアは剣を振るい、追い迫ってくる敵を一人、また一人となぎ倒して行く。

バラヌーンの少年少女達は、剣術の訓練を受けていないのだろうか、個々の力はさほど大きなものでは無かった。

だが問題は、敵が多すぎることであった。倒しても倒しても、まるできりが無い。

少しでも油断していると、後ろを取られそうだった。

側にいたルーノと、ロアは背中を合わせる体制を取った。

後ろを彼に任せれば、少なくとも後ろを取られる心配は無い。

これは、剣術の授業で習った戦法だった。

「敵とはいえ、やっぱり気持ちの良いもんじゃねーな、『人間』や『獣人族』に武器を向けるのは」

ルーノが剣を振るいながら、ロアの背中ですう呟いた。

ロアは自分に向けて振り下ろされた剣を受け止め、それを弾く。その隙を突き、敵に向けて一刀を浴びせた。

「イワンさんだって言ってただろ？ バラヌーンは慈悲を捨てた連中なんだ。『魔族』と同じだって」

ロアはルーノにそう答える。

その時だった。バラヌーンの少年が、ロアに向けて矢を放ったのだ。

いち早く気付いたルーノはその方向に周り、すぐさま剣を振る。その一振り、ロアに向けて放たれた矢は地面に叩き落とされた。

ルーノはすぐさま、矢を放った少年に向かって駆け始める。それに気づくと、少年はすぐに新しい矢を番え、自分に迫ってくるルーノに向けて放った。

だが、ただ一直線に飛ぶだけの矢は、獣人族の動体視力ならば容易く見切ることが出来る。

ルーノは一瞬だけ足に力を込め、飛び上がった。

ただそれだけの行為で、少年が放った矢は容易くかわされた。目標を失った矢は一しきり飛んだ後、地面に突き刺さる。

「チツ!!」

舌打ちをして、少年は再び新しい矢を番えようとする、と、その時、目の前に何者かの気配を感じた。

「……え？」

視界を上げた瞬間だった、空中でルーノが繰り出した回し蹴りが、少年の右顔面を直撃した。

兎型獣人族の脚力を載せた蹴り、体が一瞬間に浮く程の威力だった。地面に倒れ伏した時、少年はすでに意識を失っていた。

「手加減はしといたぜ」

……返事は返って来なかった。

続けざまに一人の少年が、ルーノに攻撃を仕掛けて来た。剣を構え直して、ルーノは応戦する。

その側で、ロアは一人の少年と剣を交えていた。彼はロアより体が大きく、力もありそうな少年だった。

「死ね！！」

一人の少年が、大振りでロアに剣を振った。肩に力が入り過ぎていて、無駄に動きが大きい。容易く見切る事が出来た。

受けようとはせずに、ロアは姿勢を低めて避け、がら空きになった少年の腹部に、剣の柄を突き入れた。みぞおちを的確に捉えたロアの一撃によって、少年は地面に崩れ伏した。

だが、気を抜くことは許されなかった。

続いて、三人のバラヌーンの少年少女がロアに攻撃を仕掛けてくる。

「（息つく暇も無いな……！！）」

攻撃を受けながら、ロアは心の中で呟いた。

第57章　くリオの力く

ツインダガーを振るい、アルニ力は戦っていた。

その相手はバラヌーンの少年が二人。つまり二対一だ。

少女達はアルニ力を挟む位置に立ち、左右から攻撃を仕掛けている。

一対一ならはとうにかなったが、二対一では反撃する隙が見いだせなかった。

アルニ力は攻撃を完全に防いではいたものの、防戦一方だった。

攻撃を受けると同時に、アルニ力はこの状況を打開する策を考えていた。

どうする？　やっぱり一人ずつ倒すしか……

そう考えていた時だった。

「くぼッ!!」

交戦していた少年の一人が、人間の声帯から外れたような声を漏らした。

彼は口から泡を吹き出し、うつ伏せに地面へと崩れ落ちる。

少年の背中には、何か棒のような物をねじ込まれたように、服に皺が出来ていた。

崩れ落ちた少年の陰には、一人の少女の姿があった。

紫がかったピンクのショートヘアに、大きな瞳。そして、その手に握られた長い槍。

「リオちゃん……!？」

少年を打ち倒したのは、リオだった。

リオは槍の柄を握り直し、視線をアルニカの方に向けると、すぐさまアルニカに告げる。

「アニー、伏せて!!」

「えっ!?!」

言われるがままに、アルニカはその場でしゃがみ、姿勢を低めた。同時に、リオは槍の地面に立てる部分、「石突き」を使い、もう一人の少年の顔面に突きを繰り出した。

反応する暇も与えない程の速さで繰り出された突きはアルニカの頭上を通過し、

先ほどまでアルニカと戦っていた、もう一人のバラヌーンの少年の顔面に直撃した。

ゴキヤッ!! と鈍い音が響き渡る。と同時に、少年は仰向けに地面に崩れ落ちた。

ふう、とリオは一息つく。そして槍を持ち直し、アルニカに向き合った。

「ケガはない? アニー」

「う、うん。ありがとう、リオちゃん……」

その時だった。リオの後ろからバラヌーンの少年が迫っていた。その手には、太い剣。

先ほど、リオに背中を突かれた少年だった。完全に気を失ってはいなかったのだろうか。

それでも相当なダメージを負っていたのは間違いなかった。
少年は、よろけた歩調で後ろからリオに迫り、

「死ね、このクソガキがああああ!!」

その叫び声と同時に、リオの背中に向けて剣を振り上げた。

「リオちゃん、後ろ!!」

「わかってる」

アルニカの言葉に、リオは少しも動じる様子を見せなかった。

彼女は後ろを少しも振り向かず、槍の石突きの部分で、後ろから迫る少年に突きを繰り出した。

後ろを僅かも振り向かなかったにも関わらず、突きはさらけ出された少年のみぞおちを捉え、

深々と少年の腹部にめり込んでいた。

突きの勢いで、少年は引つ張られるように後ろに吹き飛ばされた。

そして、積み上げられていた丸太を派手に蹴散らし、今度こそ本当に気を失った。

「リオちゃん、すご……!!」

戦いの最中にも関わらず、アルニカは呑気に漏らした。

「アニー、ここはあたしに任せて、ロアとルーノを助けに行つて」

周りの様子に気を配りながら、リオはアルニカにそう告げた。

また一人、リオに向かって剣を振るってきた。

リオは槍の柄の部分で受け止め、すぐさま薙ぎ払う。

「あの二人、凄い数の敵を相手にしてる。二人じゃ倒しきれない」

リオとアルニカの周りに、次第に何十人もバラヌーンの者達が集結していく。

数で襲い掛かり、リオとアルニかを倒すつもりだ。

「早く、行つて!!」

「でもリオちゃんは!？」

リオは促すが、アルニカは首肯できなかった。

当然だ。今ここを離れば、残されたリオはこの数の敵と一人で戦うことになる。

「あたしは大丈夫。だから早く!!」

「……」アルニカは、黙ってリオの顔を見つめていた。

「アニー!!」

「……うん。ありがとう、リオちゃん!!」

アルニカはリオの側を離れ、ロア達の元へと駆け出して行つた。

走り去っていく彼女の後ろ姿を横目で見届けて、リオは自分の眼前の状況を見る。

彼女の前には、ざっと数えて50人以上のバラヌーンの少年少女達が集結していた。

「（流石にこの数は……キツいかな）」

心の中で、弱気な言葉を漏らす。

だがそれでも、リオは冷静だった。その表情には、緊張も恐れも浮かんでいない。

何故なら、自分にはまだ「隠し玉」があったからだ。

“わかっているとは思うが……『あの力』は使いなよ”

脳裏に、団体戦の時のグルームの言葉が過った。

「（……グルーム先生、今なら使ってもいいよね。『あの力』を）」

リオは両目を閉じた。

両目を閉じて、槍を斜めに立て、そして右手を槍の柄から離す。

左手だけで槍を持ち、離れた右手を銀色の槍頭へ添えた。

そして彼女は、ゆっくりと口を開く。

「ロヴェアティル・ユーラセア・アンデルフィル・アクラ……」

目を閉じたまま、リオは小声で、呪文のような言葉を呟いていく。

それと共鳴するかのように、リオが右手を添えている槍頭に、次第に赤い炎が迸り始める。

「かかれ!!」

眼前の50人以上のバラヌーンの者達が、一斉にリオへと走り寄って来た。

「セイヴェニア・エレノール・ヴァラトーラ……エンタ……！！」

呪文を唱えるリオの声が、徐々に大きくなっていく。

そして、バラヌーンの少年の一人がリオに向けて剣を振り上げた時、
リオは閉じていた両目を開き、

「アノーレア・デ・フレイヴィネア！！」 “ 我に炎の加護を！！ ”

最後の呪文を言い終えると同時に、右手を添えていた槍頭から、巨大な炎が発生した。

たき火に油を注いだように、槍頭から突然炎が燃え上がったのだ。
辺り一体がオレンジに照らされ、熱気が空気を満たしていく。

「何だ！？」

「こいつ、何をした！？」

「炎だと！？」

ざわめきが走り始める。

突然の出来事に、リオに攻撃を仕掛けようとした少年だけでなく、
バラヌーンの少女全員が怯んだ。

当たり前と言えば当たり前だろう。槍の先から炎が発生させるなど、
普通に考えれば在りえない事だ。

「さあて、一気に行くとしよっか……！！」

だじろぐ少年少女達、対してリオは炎を纏った槍を構え、姿勢を低める。

そして、地面を思い切り蹴り、リオは弾丸のような勢いで50人の敵に向かって突進して行った。

その時、リオの衣服の袖がめくれ、彼女の左肩の刺青が見えた。赤い色で彫られた、炎を纏った鳥のような刺青。これはセイヴィルト家の家紋だ。

第58章　　炎の舞

後方から上がった火柱、辺りを包む熱気に、辺りを照らすオレンジ色の光。

ロア達と共に、地上での戦闘に加わっていたヴルームは、その火柱を振り返った。

「（リオ、あれを使っただのか……）」

人垣の向こうに立つ火柱を見つめ、ヴルームは心の中で呟く。

魔法。それはアスヴァンに存在する、異端なる力。

常人には到底不可能な芸当、例えば自らの体を浮かせたり、手を使わずに物を動かしたり、

その種類は、星の数ほども存在すると言われる。

リオが使ったのは、その内の一つ。炎の魔法。

リオは、生まれながらに炎の魔法を操る力を授かっていた。

彼女がこの力を授かったのは、セイヴィルトの血筋故。

セイヴィルトの家系には炎の魔法使いの血が入っており、一部の子孫にはその力が受け継がれる事があると言う。

炎を纏った鳥のようなセイヴィルトの家紋は、ここから来ているのだ。

「あのバカ、切り札は最後までとっとけよ……」

剣を振るいながら後ろ目で火柱を見つめ、イワンは呟いた。

そのすぐ後、後ろから誰かが走り寄って来る気配に気づき、イワンは振り返る。

と同時に、彼に向けて剣が振り下ろされた。

「!!! っと!!!」

振り下ろされた剣を受ける。

斬りかかってきたのは、バラヌーンの少女だった。

敵ながら、イワンから見れば中々に美しい顔だちをしている少女。

「……あんたがバラヌーンじゃなかったなら、友達になりたかったな」

少女の顔を見つめ、イワンは残念そうに呟く。

バラヌーンは、「魔族」に魂を売り渡した者達だ。慈悲の心を捨てた者達なのだ。

相手が女だから手を出せない、などと言っている状況では無い。

それに、「バラヌーンの人間に一片の慈悲もかけるな」、エンダルティオの少年少女達にそう言ったのは、他でもないイワン自身だ。

「ふっ!!!」

即座に剣を弾き、少女の両腕を上にもう。

作り出したその隙を突いて、イワンは、姿勢を低めて、一気に間合いを詰めた。

そして、がら空きになった少女の腹部に、剣の柄を突き入れる。

「あっ……!!!」

イワンのその一撃で、少女は地面に崩れ落ちた。

彼女の背中を見つめて、イワンは呟く。

「女に手を出すのは、ポリシーに反するんだがな……」

その瞬間、イワンは再び、後ろから何者かの気配を感じた。

振り返った時、イワンの目前には大柄なバラヌーンの少年が迫っていた。

少年の大きな手には、斧が握られていて、今にも振り下ろしてきそうな雰囲気だ。

「ちっ！！」

イワンが剣を構え直そうとした、その時。

彼の真横を、一直線に飛んできた矢が通過した。

飛んできた矢は、イワンに向けて斧を振り上げていた少年を射た。

「！？」

突然の出来事に戸惑いつつも、イワンは視線を矢が飛んできた方向に向ける。

そこには、

「ミロル……！！」

視線の先には、大きな弓を手にした少女がいて、その後ろには武器を手にした無数の少年少女達がいる。

「わたしたちイシュアーナのエンダルティオ、あなたたちをお助けに……！！」

大きな弓を手にした少女は、長いポニーテールを後ろで丸くまとめた、シニヨンの髪型をしていた。

髪色は緑がかった明るい青色で、見ているだけで涼しく感じられそうな色だ。

彼女の名は「ミローイル」「ウィオラ」、イシュアーナ共和国のエンダルティオ団長の少女だ。

ちなみに、愛称は「ミロル」。

ミローイルは矢を背中に掛け、腰の鞘から短いナイフを引き抜いた。そして銀色の切っ先を空に向けて、自分の後ろにいる少年少女達に、

「全員、戦闘用意！！ 各の全力を以て我らの友を助け、あの『魔族』の奴隷達を殲滅せよ！！」

それまでのミローイルに似合わず、勇ましい声で皆に告げた。

あの控えめで、おとなしそうな様子だった彼女とは、余りにかけ離れていた。

「（……マジか……）」

その彼女の姿に、イワンは驚きのあまり、呆氣にとられていた。

そして、理解した。彼女も、立派にこの国のエンダルティオの団長なのだ。

何百人もの少年少女達を纏め上げる、リーダーなのだ。

ついこの前まで、ミローイルに少年少女達をまとめるリーダーとしての資質があるのかを疑っていたことを、心の中で謝罪した。

うわべで彼女の事を判断すべきでは無かった。イワンはそう思った。刹那、ミローイルと、イシュアーナのエンダルティオの少年少女達が、戦いへと加わった。

リオを取り囲んでいる少年少女達は、炎の熱気に阻まれ、思うように彼女に近づけなかった。

しかし、その熱気を一番間近で受けている筈のリオに、熱による負担を受けている様子は無い。

常人では耐えられない程の熱気にも耐性がある、炎の魔法を授かった者の特異体質だ。

「ちっ……！！ 全員でかれ！！ この女を殺せ！！」

自分を取り囲む者達の中から、リオはその声を聴いた。

同時に、前後左右から、自分に向かって無数の敵が迫って来るのを感じた。

それでも、リオの表情は一片も曇らなかった。

四方から敵が迫るといふ状況にも関わらず、炎を纏った槍を片手に、彼女は毅然とした表情を浮かべていた。

「……ふう」

リオは一度目を閉じ、一呼吸する。

一瞬の時の後、リオは再び目を開いた。それと同時に、槍の柄を両手で強く握った。

そして、槍を右斜め上に振り上げたかと思うと、右から左へ、扇の形を描くように槍を振った。

槍を振るうと、槍頭に纏っていた炎が尾を引くようにそれを追い、まるでカーテンのように炎の壁が出来た。

「うわあああつ!!」

「あ、熱い!!」

高温の炎を受け、正面からリオに襲い掛かろうとしていた少年達が怯んだ。

前方に道が出来たのを見逃さずに、リオはすぐさま前方へ駆け出す。

「だああつ!!」

掛け声と同時に、リオは炎を受けて怯んでいる二人の少年の顔面を柄で打ち、昏倒させる。

次に、後方から迫って来た数人の少年少女に向け、炎の槍を振り、炎を放つ。

その炎をともに受け、50人いたバラヌーンの少年少女達は、その半分程が倒された。

「この糞女あ!! よくも仲間達を!!」

「くたばっちまえ!! アルカドールのドブネズミが!!」

乱暴な言葉を吐きながら、横から二人のバラヌーンの少女が剣を振り上げ、リオに迫る。

「!!」それに気づいたリオは、炎を纏った槍を振るった。

その炎の槍の一振りで、二人のバラヌーンの少女が持っていた剣は、刀身を切断された。

切断された二つの刀身が暫く宙を舞い、地面に落ちる。
カランカラン、と二つの金属音が響く。

「あ、ああああ……」

「な……まさか……」

二人の少女は、刀身を切断された剣を見つめ、意味のない言葉を漏らす。

炎を纏った状態のリオの槍は、高温の熱エネルギーを発している。
熱に耐性を持たない金属ならば、容易く融解させ、切断してしまう
ことが可能なのだ。

ましてや、あの槍が人体に命中すればどうなるか、そんなことは考
えなくとも分かるだろう。

因みに、リオの槍の槍頭は特別な鉱石から精製された金属で出来て
おり、熱に耐性を持っている。

リオの炎で融解することはないのだ。

「悪いけど、『魔族』なんか魂を売ったような奴らに、負ける気
はしないよ」

槍を構え直し、リオはバラヌーンの少年少女達に言い放つ。

リオの瞳には、バラヌーンの少年少女達を軽蔑するような想いが籠
っていた。

「ほら、どうしたの？ かかって来なさいよ」

その挑発的なリオの言葉が、少年少女達の癪に障ったようだった。
残ったバラヌーンの少年少女達が、リオの周りから一斉に襲い掛か

る。

だが、リオはやはり動じなかった。

彼女は再び槍に炎を灯し、自分の頭上で、まるで風車のように槍を回転させ始める。

今度は自分の体をコマのように回転させ、円を描くように槍を振った。

その瞬間だった。リオを中心に、まるで竜巻が起こるように炎が巻き上がったのだ。

熱気が周りに放出され、オレンジの光が辺りを包み込む。

炎の竜巻の煽りを受け、リオの足元には土埃が舞った。

「なっ!？」

「おわあああッ!！」

炎の竜巻によって、リオに襲い掛かろうとしていた者達は、皆吹き飛ばされた。

リオが起こした炎の竜巻は、人を吹き飛ばすには十分な威力だったのだ。

だがそれでも、手加減されていた。

もしもリオが本気を出していたのなら、バラヌーンの少年少女達は皆、焼き尽くされていただろう。

炎が消えた後、リオの周りにはもうバラヌーンの少年少女達はいなかった。

先ほどまで、リオに群がるように集まっていたのが嘘のように思える程、彼女の周りは閑散としていた。

しかし、戦いはまだ続いている。

リオが倒したのは、敵のほんの一握り程度の人数でしかないのだ。今この瞬間にも、ロアやアルニカ達は、バラヌーンの少年少女達と戦っている筈だ。

助けに行かなければ——リオがそう思って、駆け出そうとした時、突然、彼女の視界が歪んだ。同時に、体から力が抜ける。それは、突然めまいが起こったような感覚だった。

「う……っ……！！」

リオは直ぐに地面に槍を立て、槍に寄り掛かる体制をとる。

「（やっぱり、魔法を使いすぎるのは良くないみたいだね……）」

槍に体を寄り掛かせながら、リオは心の中で呟いた。

第59章 く二つの影

いくら剣を振るっても、何人倒しても、一向にバラヌーンの少年少女達が減る気配がない。

一人一人の強さは大したことは無いが、数が多すぎるのが問題だった。

それに、バラヌーン達は捨て身の覚悟で襲い掛かってくる。

闇雲に武器を振り回すかのような、予想のつかない動きがとても厄介に感じられた。

「ぐっ、倒しても倒しても……!!」

「全然、数が減る気配がないわ……」

どれほどの時間、剣を振り続けたのだろうか。ロアとアルニ力は、疲れを感じ始めていた。

疲れは次第に重なり、集中力やスタミナを奪い始め、二人は次第に追い詰められつつあった。

「そろそろ頃合いだな……まとめてかかれ!! こいつらの息の根を止める!!」

眼前に集結するバラヌーン達のどこからか、その声が響く。

それとほぼ同時に、ロアとアルニ力に向かって少年少女達が迫ってきた。

ざっと数えて、十人以上。疲労が蓄積しているロアとアルニ力を仕留めるには、十分な数。

「アルニ力、来る!!」

「わかってる、だけど私、もう体力が……」

その時、ロア達の目の前に、一人の少年の後ろ姿が現れた。彼は手にした槍を振るい、ロア達に襲い掛かるうとしていたバラヌーン達に応戦する。

リオ程ではなかったが、彼の槍の扱いは上手かった。みるみるうちに、少年はバラヌーン達を打ち倒していく。

「このやろ……ごぼッ!!」

最後の一人の腹部に槍の柄を突き入れ、昏倒させる。そして、少年は槍を下ろし、ロアとアルニカを振り返った。

「どうしました？ ロア君、アルニカさん」

とても丁寧な口調で、彼はロアとアルニカに言う。

「こんな連中、お二人の力ならば容易く倒せる筈でしょう？」

二人の助太刀に入った少年は、カリスだった。

短めの髪型に、銀淵の眼鏡。とても知的な雰囲気を漂わせる少年。その雰囲気にならず、ロア達のクラスメートの中で最も成績優秀で博識。

さらに、十人以上のバラヌーンを打ち倒したことからわかるように、槍の扱いにも長ける。

その槍術の腕はリオに次ぐと言われ、あの特別授業に呼ばれる程の腕だ。

カリスも、アルカドール王国のエンダルティオの一員である。

召集を受け、このイシュアーナの戦いに参加していたのだ。

「ロア、アルニカ、もうへばっちまうのか!？」

そう言ったのはルーノ。彼にはまだ、疲れている様子は無い。これくらいの時間を戦い続けた程度では、獣人族は息切れすら起こさないようだった。

「ルーノ……」

周りを見渡すと、何人ものアルカドールのエンダルティオの少年少女達が戦っている。

皆の表情には、疲れが浮かんでいた。それでも、誰一人として逃げ出そうとはしていない。

ロアとアルニカの脳裏に、あのイワンの言葉が浮かんた。

“くじけそうになった時は、自分の友達や家族のことを思い浮かべる。そして思い出せ、自分は決して独りではないということ”。

そうだ。くじけそうなのは、自分達だけではないのだ。

それに、ロア達には仲間がいる。ルーノ、カリス、イワン、リオ……目の前はルーノとカリスがいるが、イワンとリオも、どこかで死力を尽くして戦っている筈だ。

自分達だけが音を上げるなど、仲間達への恥さらしだ。

ロアとアルニカは、互いに視線を合わせ、そしてお互いに小さく頷いた。

そしてロアは剣を、アルニカはツインダガーを握り直した。

アルカドールとイシユアーナのエンダルティオ団長という立場の二人、イワンとミローイル。

二人は互いに背を向け合い、バラヌーン達と交戦していた。

イワンは剣を振るい、そしてミローイルは、弓矢で戦っている。

アルカドールのエンダルティオで弓矢を扱う者は何人か見たことがあるが、ミローイルはその誰よりも上手かった。

矢をつがえる動作は素早く、そしてその狙いは正確で、一度たりとも外すことが無い。

彼女が放った矢は、まるで吸い込まれるかのように敵の腹部を射ていた。

「さっきから思ってたんだけどよ、襲ってくるのはバラヌーンの連中ばかりだと思わないか？」

イワンは、自分と背を向けているミローイルに問いかけた。

「同感です。『魔族』の兵が、一人もいません……！！」

そう答えると、ミローイルは背中の矢筒から一掴みで五本の矢を取り出す。

取り出した矢を全て弓につがえ、眼前から迫る敵に向ける。

それから一秒にも満たない時の後、ミローイルは五本の矢を放った。放たれた五本の矢は、ミローイルを中心にして放射状に広がり、眼前の五人のバラヌーンを射た。

「すっげ……!!」

ミローイルの弓の腕に、イワンは感嘆の声を漏らした。五本もの矢を同時に放ち、かつ全てを目標に命中させる彼女の弓術の腕は、生半可な物では無かった。おそらくは、相当な修練を積んだに違いない。

接近される前に矢で射抜き、倒しきれなかった敵は小さな投げナイフで倒していく。

彼女の強さは、イシュアーナのエンダルティオ団長を務めるに十分に値していた。

「（俺も負けてらんねえな……!!）」

一人の少年が、イワンに向かって斬りかかって来た。

振り下ろした剣をイワンが受け止めると、少年はすぐに弾き、再びイワンに斬りかかろうとする。

しかし、少年の剣が届く前に、少年の剣を持った腕を掴まれた。次の瞬間、少年の腹部から背部にかけて、突き抜けるような痛みが走った。

「う……っ……!？」

口の中に酸っぱい味が広がり、急激に意識が遠のく中、少年は自らの腹部に視線を向ける。

イワンの固い左膝が、自分の腹部にめり込んでいた。

次の瞬間、少年の意識は途絶え、地面へと倒れ伏した。

イワンは剣を下ろす。今の一人で、ひとまず自分達に群がっていた敵は片付いたようだった。

「怪我はないか？ ミロル」

左手に剣を握ったまま、イワンはミローイルに問いかける。
彼女も武器は仕舞わずに、その質問に答えた。

「大丈夫です、イワン様。あなたは……？」

勇ましい様子から一変、ミローイルの口調は、再び大人しいものへと戻っていた。

「『イワン』でいい、俺も別に怪我は無いよ。こいつら、弱いしな」

先ほど、膝蹴りを喰らわせて倒した少年を見つめて、答えた。

イワンの言う通り、バラヌーンの少年少女達は弱い。ただ武器を持っているだけで、全く使いこなせていない。

動きには無駄が多く、基本的な剣の構えすらなっていないかった。

アルカドールやイシュアーナの者達からすれば、バラヌーン達はまるで敵ではない。

バラヌーンの国家にもエンダルティオがあることは知っていたが、所詮は名ばかりの存在だったようだ。

「どうして、『魔族』の兵は攻め入ってこないのでしょうか……？」

「さあな。だが奴らは必ず来る、ひ弱なバラヌーンだけでこの国を制圧しようだなんて、思っちゃいないだろうさ」

イワンの言う事にも、一理あった。

少し間を空けて、イワンはミローイルに告げる。

「ロア達が気がかりだ、行こう」

イワンは駆け出し、ミローイルもその後ろに続いた。

ロア、アルニカ、カリス、ルーノ。

彼ら四人の他に、アルカドールのエンダルティオの少女少女達は、敗走するバラヌーンの少女少女達の後ろ姿を眺めていた。
一先ず、バラヌーン達を退けることに成功したようだ。

「アイツら、逃げていくな……」

ルーノが呟く。

開け放たれた正門に向かって遠ざかって行く、「魔族」の奴隷達の後ろ姿を見つめる。

撤退命令が下されたのか、或いは勝てないと踏んで逃げ出したのかは分からない。

分かるのは、アルカドールとイシュアーナの連合軍が、バラヌーンに勝利したことだ。

「一安心……と言った所でしょうか……」

カリスは、くいつと銀の淵の眼鏡に触れる。

その後、聞き慣れた声がロア達四人の方から発せられた。

「いや、安心するのはまだ早い」

振り向くと、後ろにはヴルームがいた。
これまで彼も、死力を尽くして戦っていたのだろ。その衣服が、
所々傷んでいる。

「どういことですか？ ヴルーム先生」

アルニカが聞き返すと、ヴルームは視線を斜め上へと向けた。
そして、空を指差す。ロア達はヴルームが指した先を目で追った。

空に、二羽の鳥が羽ばたいていた。

いいや、あれは鳥ではない。鳥にしては大きすぎる。

それに、鳥があんな耳を劈くような甲高い鳴き声を上げる筈は無い。

「ガジュロス……！？」

ロアが口にしたのは、化け物の名前。

「ガジュロス」、魔族が生み出した、不気味な風貌と大きな翼を持つ怪物だ。

直後、彼は気付いた。こちらに向かって飛んでいる二匹のガジュロスの背中の上に、誰かが乗っている。

「『魔卿五人衆』……その内の二人だ」

ヴルームのその言葉に、ロア達の表情に緊張が走る。

「魔卿五人衆」、「魔族」の中でも最強を誇る五人の戦士。

ユリスによれば、彼らは一人で「人間」の兵士500人と対等に戦える強さを持つとのこと。

今、その内の二人が、ここに着こうとしているのだ。

「お前達、戦闘準備に入れ。ここからが本当の戦いだ」

ブルームは、ロア達にそう命じた。

【キャラクター紹介 16】 “ミローイル”

【種族】 人間

【性別】 女

【年齢】 17歳

【髪色】 シアン

イシュアーナのエンダルティオ団長の少女。本名は『ミローイル』
ウィオラ』。愛称は『ミロル』。

長いポニーテールを後ろで丸くまとめた髪型が特徴。
基本的に奥手で控えめな性格だが、戦いの際には勇ましい姿を見せる。

使用する武器は弓と投げナイフ。

特に弓の扱いに長けており、イシュアーナで一、二を争う弓術の腕を持つ。

第60章 二人の魔族

イシユアーナ共和国の正門前に集結した、無数の「魔族」の兵達。その群集の眼前に、二匹のガジュロスが舞い降りた。

二匹のガジュロスの背中に乗っていたのは、「魔卿五人衆」のうちの二人。

一人で「人間」の兵士500人と対等に戦えると言われている程の、「魔族」の最強の配下だ。

「お待ちしておりました。ヴィアーシェ卿、ダフィウス卿。総攻撃の準備はつつがなく」

「魔族」の將軍。ドルーグが二人に告げる。

「……………」

ヴィアーシェは無言。そしてダフィウスは、

「よし、進軍の合図だ」

「御意に」

ドルーグは軽く頭を下げた。

「全員集まれ！！ 陣形を組み直すんだ！！」

イワンは少年少女達に声を掛け、戦闘態勢を整えさせる。そして彼は、門に視線を向けた。

この門の向こうでは、「魔族」の兵達が進撃の準備を整えている筈だ。

脆弱なバラヌーンとは違う、強力な「魔族」の兵達が。

ロア達三人もまた、「魔族」達との戦いに備えていた。

「今度は何が来るってんだ？ また弱っちいバラヌーン共じゃねえだろうな？」

「心配しないでルーノ、ロアでさえ敵うかわからない程の連中だから……」

アルニカの返答に、ルーノは唾を飲んだ。

「少なくとも退屈はしないさ。僕が保証するよ」

続けてロアが、青い毛並の兎型獣人族の少年に告げる。

ロアとアルニカは、ラータ村で一度、そしてベイルークの塔でもう一度。計二回、「魔族」と戦っている。

二人とも、「魔族」の強さは身に染みて知っていた。

「……来たぞ……！！」

グルームが発した言葉に、皆は彼を振り向いた。振り向いた時、グルームは斜め上を見上げていた。

皆が視線を上に向けた時、空から二つの人影がこちらに向かって落下して来ていた。
数秒の後、その二つの人影は、アルカドールの者達の眼前に着地した。

「あ……！？」

「……！！」

アルニカが驚きの一文字を漏らし、ロアは無言で、表情を驚愕に染めた。

落ちて来た二人の人物。その一人に、二人は見覚えがあった。
いや。見覚えがあった、所ではないだろう。

ほぼ黒に近い、腰まで伸びた暗い青色の髪。「魔族」特有の、生気を感じさせない程に白い肌。

精巧に作られた人形のように美しい容姿。そして——背中に掛けられた大剣。

「ヴィアーシェ……！！」

アルニカがその名前を呼ぶ。

と同時に、側にいたルーノが疑問を發した。

「知ってるヤツなのか？」

「ベイルークの塔で一度戦ったんだ。あの人……かなり強いよ」

答えると、ロアは剣を握り、ヴィアーシェに向き直る。

一方、ヴィアーシェは剣を構えようとはせずに、眼前の少年少女達を見つめていた。

何十人、何百人もの少年少女達の敵意ある視線を浴びていても、彼女は表情一つ変えない。

「……ヴィアーシェ、名を知られてるようだぞ。お前結構有名人だな」

黒いローブで顔を覆った「魔族」の男性、ダフィウスは彼女に耳打ちする。

と、その時。前方から突然、「かかれ!!」という一人の少年の声が聞こえた。

その声と同時に、アルカドールのエンダルティオの少年数十人が、二人の「魔族」へと突進して行った。

「な……!!」

恐らくイワンは、心底驚いていたことだろう。

まさか、先ほど「かかれ!!」と言った少年は、この二人の事を知らないのか。

「魔卿五人衆」の力を、バラヌーンと同じ程度に考えているのか。

まずい、このままでは、彼らは――

「お前等よせ!! そいつらに安易に手を出すな!!」

突進していく数人の少年達の後ろ姿に、イワンは叫んだ。
だが、彼の叫びは最早、少年達には届かなかった。

少年達が迫りくる中、ヴィアーシェは大剣の柄を握り、それを構える。

彼女は大剣を振り上げる、それと同時に、大剣の刀身に風が巻き起こり始めた。

風は次第に風圧を増し、周りに土埃を舞わせ始め、遠くにいたロア達にも届いた。

「これ、あの時の……！！！」

ロアは思い出す。ベイルークの塔でヴィアーシェと戦った時、彼女は自分に向けて手の平を向けた。

それと同時に激しい風が起こり、吹き飛ばされ、塔の壁に激突させられ、ロアは意識を失った。

風の、魔法だ。

ヴィアーシェが風を纏った大剣を振り下ろす。と同時に、前方の地面が激しく抉り取られ始めた。

彼女が放った風が、地面を抉り取りながら進んでいるのだ。

「な……！！！」

「嘘だろ……！！！」

回避することなど不可能。少年達にはもう、成す術は無かった。

ヴィアーシェの放った風を正面からまともに受け、少年達は軽々と吹き飛ばされた。

それとほぼ同時に、ヴィアーシェとダフィウスの後ろ。イシューアーナ正門から、無数の人影がなだれ込んできた。

バラヌーン等ではない、今度は「魔族」の兵達だ。進軍合図を受け、総攻撃に入ったのだろう。

「迎撃準備だ！！ 奴らを迎え撃つぞ！！」

イワンは少年少女達に指示を出して、自らも剣を構えた。

と、そのイワンに向かって、一人の人物がゆっくりと歩み寄って来ていた。

「魔卿五人衆」の一人。ヴィアーシェと共に乗り込んで来た、もう一人の方だ。

黒いローブを身に纏い、顔を隠している。

「アルカドールのエンダルティオ主導者と見受ける。貴殿に一对一の決闘を申し込む」

周りではすでに、「人間」と「魔族」との戦いが始まっていた。

イワンは、目の前にいる男を見つめる。

「魔卿五人衆」の一人ともなれば、その強さは相当な物の筈だ。

「……わかった」

返事すると、イワンは目の前の「魔族」に向き直った。

「受けてやるよ。俺に決闘を申し込んだ事を後悔させてやる」

そう答えると、「魔族」の男は自ら纏っていた黒いローブを取り払った。

覆い隠されていた顔が現れる。彼は意外なほど、若い容姿をしていた。年齢は20前後だろうか。

ヴィアーシェ同様に生気を感じさせない白い肌。そして、色が抜けたように真っ白な髪。

肌も髪も白い所為で、そのルビーのように赤い瞳が非常に目立つ。さらに彼は、真紅のロングコートを纏っていた。

「（……なかなかイケメンだな）」

イワンから見ると、「魔族」の男は中々に整った容姿をしていた。

「つーかよ、どうせ脱ぐんなら着てこなきゃいいんじゃないのか？
その黒いローブ」

地面に捨てられたローブを指して、イワンは尋ねる。

すると、眼前の「魔族」の男もそれを目で追った。少し考えるような表情を浮かべた後。

「……そうだな。次からそうするか」

意外なほど、間抜けな返事が返ってきた。

「ま、それはそうと……」

「魔族」の男は、コートに覆われた腰の鞘から、二本の短剣を取り出した。

両手に一本ずつ持ち、右手の剣を頭上に、左手の剣を自分の前に掲げる構えをとる。

「我が名はダフィウス、『魔族』最強の配下、『魔卿五人衆』の一人」

向こうはやるつもりようだ。イワンは剣を構える。
来るか——そう思ってイワンが身構えていた時、

「……名を名乗れよ」

「は？」

緊張が途切れる。ダフィウスからの突然の命令に、イワンは思わず
間の抜けた返事を返してしまった。

「決闘のしきたりだろ。まずは互いに名を名乗る。そんなことも知
らないのか？」

……そんなしきたりをわざわざ守っている者がいたとは。
内心、イワンは驚いた。

「魔族」であるにも関わらず、このダフィウスという男は、しきた
りを重んじる思考の持ち主らしい。

「……俺はイワン。『イワン』セイヴィルト」

その後に続ける言葉を、イワンは数秒考え込み、

「んーと……そうだ、アルカドールのエンダルティオ団長だ」

ぎこちなく付け加え、自己紹介を終える。

「……これでいいのか？　ダフィウスとやら」

「ああ。十分だ」

……こいつ、本当に「魔族」か？

イワンは思わず、心の中で疑ってしまった。

「ゆくぞ、『イワン』セイヴィルト」

「名字付けなくても、『イワン』でいいっつーの。来い！！」

魔卿五人衆のダフィウス、アルカドール王国のエンダルティオ団長のイワン。

二人の戦いが今、始まった。

第61章 リオの選択

イシュアーナの国に押し入ってきた「魔族」の兵達。

ロア達や、エンダルティオの少年少女達は、それぞれの武器で応戦する。

ロアはアルニカと背を向け合い、ルーノはカリスと背を向け合っていた。

他の仲間達も二人一組で、仲間に残るの敵を任せ、「魔族」の兵達と交戦している。

「手強いなこいつら……バラヌーン共は困だったってわけか？」

「恐らくはそうでしょう。まあ確かに、『魔族』なら考えそうなことですが……！！」

戦闘の最中にも関わらず、カリスの口調は丁寧な物だった。

カリスはルーノの言葉に答え、目の前の「魔族」の兵を槍で薙ぐ。

やはり、「魔族」の兵達の強さは、バラヌーンとは桁違いだ。

当然と言えば当然だろう。彼らはこのイシュアーナを陥落させる為に組織された軍隊。

先ほどまで相手にしていた、ただの武装した少年少女達と違い、戦闘の訓練だって受けている筈だ。

「なあカリス、ロア達は大丈夫かな？」

「ロア君達は大丈夫でしょう」

カリスは断言した。

「それよりルーノ君、今は自分達の事を考えた方が賢明なようです」
「ん？」

槍を振るう手を一時止め、カリスはルーノの後ろを指差す。
ルーノがカリスの指した先を視線で追うと、

「……な、何だありやあ……！？」

その光景を見るや否や、ルーノは驚嘆の言葉を呟く。
数人のアルカドールの少年少女達が、瞬く間に倒されていた。
問題は、彼らを打ち倒している「人間」。いや、あの者は恐らく、
「人間」ではないだろう。

何故なら、腕を四本持つ「人間」など、今まで見たことも聞いたこともない。

四本の腕で四本の剣を振るい、少年達を倒すと、その者は自分達に視線を向けてきた。

「……！！」

四本の腕を持つ「魔族」の將軍、ドルーグは、側にいた二人の少年に狙いを定めた。

一人は槍を持ち、銀淵の眼鏡をかけた知的な雰囲気のある少年。
そしてもう一人は、青い毛並の兎型獣人族の少年だ。

四本の腕を持つ男が、ゆっくりとルーノとカリスに向かって歩み寄る。

「カリス、ハラくくった方が良さそうだぞ」

「……ですね」

次の瞬間、四本の腕を持つ男は、四本の剣を振りかざし、ルーノとカリスに向かって走り寄って来た。

戦いが繰り広げられる中、ロアとアルニカは眼前に立つヴィアーシエを見つめていた。

ヴィアーシエもまた、無言でロアとアルニカを見つめていた。

ロア、アルニカ、ヴィアーシエ。この三人は以前、塔で剣を交えたことがある。

すなわち、これから始まるのは二度目の戦いだ。

「……今度は、負けない」

その言葉を発したのはロア。

ロアは剣を構える。アルニカもツインダガーを構え、ヴィアーシエも大剣を構えた。

数秒の沈黙、その後、ヴィアーシエが大剣を片手に地面を蹴り、ロア達への距離を詰めた。

その大剣のリーチに入ろうとした、その時――

戦いが始まるのを遮るように、ヴィアーシェの横から炎が飛んできた。

「!!」

「!？」

驚いたのは、ロアとアルニカ。

対して、炎を放たれたヴィアーシェは無表情。

大剣を下ろし、彼女は後ろへと飛び退いた。

一瞬前までヴィアーシェが立っていた場所を、炎と熱気と、オレンジ色の光が包み込む。

三人とも、炎が飛んできた方向に視線を向けた。

「リオ……？」

そこには、リオがいた。

彼女が持つ槍に、小さく炎が瞬く。先ほどの炎は、彼女が放った魔法だった。

しかし、何故なのだろうか。何故リオは、ロア達とヴィアーシェの戦いを止めたのだろうか？

ロアとアルニカの前に立つと、リオはその理由を話す。

「ダメだよ二人とも」

理由の説明の出だしは、その言葉だった。

「ダメって……どうして？ リオちゃん」

アルニカが聞き返す。

「あのヴィアーシェって『魔族』、風の魔法の使い手だよ。ロアと
アニーじゃ、勝負にならない」

ヴィアーシェが風の魔法で少年達を蹴散らした時、リオはそれを見ていた。

同じく魔法の使い手であるリオは、魔法の強さを身に染みて知っていた。

「……どういうこと？」

今度は、ロアが聞き返した。

「魔法使いを倒せるのは、同じく魔法を使える者だけってことだよ」

リオの言うことは正しい。

剣術ならば下手な大人を凌ぐ实力を持つロアとアルニカ。

しかし、ヴィアーシェの魔法の前では、その剣術の腕は無力だ。

ロアの剣でもアルニカのツインダガーでも、ヴィアーシェの風は防げない。

もしも彼女が本気で風の魔法を放てば、二人は成すすべもなくバラバラにされるだろう。

リオが言った通り、魔法を使う者に太刀打ち出来るのは、同じく魔法を使える者だけだ。

どうやらリオは、自らヴィアーシェの相手をするつもりのようなっ

た。

確かに、この三人の中で魔法を使えるのは、彼女だけだ。

「ロア、アニー、悪いけど今回は、あたしに任せてくれない？」

決してリオは、ロアとアルニカの強さを軽んじている訳ではなかった。

寧ろ、二人の強さはしっかりと認めている。

ただ、このまま二人がヴィアーシェと戦えば、二人が勝てる可能性は薄い。リオはそう思っていた。

リオにとってロアとアルニカは、学院のクラスメートであり、大切な友人。

友達想いな一面を持つリオは、ロアとアルニカに危険が及ぶことを知っていて、見過ごすことは出来なかった。

「……ロア、今回はリオちゃんに任せない？」

「だけど、いくらリオでもあの人相手じゃ……」

ヴィアーシェは強い。

ロアとアルニカの二人がかりでも敵わなかった相手だ。

リオ一人で、敵うのだろうか……

「心配しなくて大丈夫だよロア。このリオちゃんを信じなさい」

そう言うと、リオは自分の胸をぽん、と叩いた。

「……分かった。約束だよリオ。後で絶対に、僕たちと合流するん

だ」

「お願いね、リオちゃん!!」

そう告げ、ロアとアルニカはその場から去り、「魔族」の兵達との戦いに加わって行った。

だが、ロアはリオに完全に任せたつもりは無かった。

もしも彼女がヴィアーシェに追い詰められるようなことがあれば、直ぐにでも助けに戻るつもりだった。

その考えはアルニカも同じ。ロアとアルニカにとっても、リオはかけがえのない、大切な友人だから。

「さあて、ヴィアーシェ……だったっけ？ あたしが相手になるよ」

二人が行ったのを確認し、リオは再び槍の先に炎を灯した。

「……………」

対するヴィアーシェもまた、大剣に風を纏らせる。

「人間」の少年少女達と「魔族」の兵達の乱戦の中、二人の少女はそれぞれの魔法の力を宿らせた武器を手に、対峙していた。

第62章　く二つの炎く

ヴィアーシェとリオが地面を蹴ったのは、ほぼ同時だった。互いの武器は大剣と槍、双方ともリーチはかなり長い。地面を蹴ってから数秒と待たずに、互いの武器の射程内に入った。

そしてまた、二人が相手に向けて武器を振ったのもほぼ同時。ヴィアーシェは風を纏った大剣を上から振り下ろし、対するリオは、炎を纏らせた槍を薙ぎ払うように振るった。

瞬間——リオの炎が瞬く音と、ヴィアーシェの風が吹きすさぶ音に加え、金属がぶつかり合う音が響き渡った。

「（しめた……！！）」

その時、リオはその口元に微かに笑みを浮かべた。このまま自分の槍が放出する熱エネルギーをあの大剣に与え続ければ、大剣は熱で融解し、切断してしまうことが可能。大剣を切断してしまえば、ヴィアーシェは丸腰。勝負は決するだろう。

しかし、そう簡単にはいかなかった。

「（……剣が、溶けない！？）」

リオの顔に浮かんでいた笑みは、一瞬で消え去った。そう。炎の熱エネルギーを受け続けている筈なのに、ヴィアーシェの大剣はまったく融解しなかったのだ。

恐らくあの太剣は、熱に耐性を持つ金属から作られているのだろう。

次の瞬間。ヴィアーシェが再び、太剣を振り上げた。

太剣が纏った風が一層強く巻き起こり、周囲の砂利や木の葉を巻き上げ、互いの髪と衣服をなびかせる。

ヴィアーシェは、巻き起こした風と共に、太剣の一撃をリオに喰らわせるつもりだ。

「――！！ ヤバっ！！」

リオの心が警鐘を鳴らした。

まるで弾けるように右へ飛び退き、リオは太剣の射程から逃れる。

次の瞬間、ヴィアーシェの太剣が振り下ろされた。リオは、背後の気配でそれを感じた。

太剣が振り下ろされる風切り音。太剣が纏った風が空を切る音。その両方が混ざり合い、地面へと叩きつけられた。

爆発したような轟音と共に、砂煙が舞い上がる。

地面が激しく抉り取られ、無数の瓦礫の破片が、辺りに飛び散った。

「ぐっ！！」

背中を棒で突き上げられたような感覚。

飛び散った数個の破片が、リオの背中に命中した。

背後からの不意の衝撃に思わず体制を崩しそうになるが、とっさに槍を地面に突き立て、どうにか転倒は回避した。

体制を立て直すと、リオはすぐさま槍を構え直し、後ろを振り返る。自らが巻き上げた砂煙を太剣で切り裂くように払い、ヴィアーシェが突っ込んできた。

姿勢を低め、片手で大剣を持ち、かなりのスピードでリオへと迫る
ヴィアーシェ。

彼女の暗い青色の髪が、激しくなびいていた。

「（あの大剣を、片手で！？）」

普通に考えれば、あんな細い体の少女があんな大剣を扱える筈は無い。

ましてや、あの細い腕であの大剣を支えることなど、不可能に近い
だろう。

それなのにヴィアーシェは、表情一つ変えることもなく、大剣を振
るっていた。

自分に向けて突っ込んでくるヴィアーシェ。

再び槍を薙ぎ払うように振るい、リオは迎撃の一撃を繰り出した。

だがその薙ぎ払いは、いとも簡単に避けられた。

ヴィアーシェは前方に飛び、振られた槍を飛んで避けたのだ。

そのまま彼女は空中で一回転。リオの頭上を飛び越え、背後に着地
した。

リオが振り返った瞬間、大剣の刃が迫っていた。

後ろを取り、ヴィアーシェがすかさず大剣を振ったのだ。

「っ！……！！」

このままでは、斬られる——！！

すぐさま槍を振り、リオはヴィアーシェの大剣を受け止めた。

だが、攻撃を防いだのもつかの間。

続けざまに、リオに向けてハイキックが放たれた。

胸部を捉えたヴィアーシェの蹴り。防ぐ暇など無かった。

「がはっ！！」

肺の空気が無理やりに口まで押し出されるような感覚。

ドスッ、という蹴りが着弾する音と共に、リオは後方によろけた。

「く……と……！！」

ついでに後方に飛び退き、リオは一度、ヴィアーシェとの間に距離を取った。

このままでは、大剣と風の魔法の攻撃を受け続けるだけだ。

「（これが、『魔族』の最強の配下、『魔卿五人衆』の力……）」

リオは左手で、蹴りを受けた胸部をおさえた。

すると、ズキン……！！と響くような鈍い痛みが走る。

ヴィアーシェに視線を向ける。

彼女は大剣を下ろし、こちらの様子を伺っているようだった。

「（にしても、あのデカイ大剣を使いこなしてることといい、あのジャンプといい……）」

先ほどリオが繰り出した薙ぎ払いを、ヴィアーシェはジャンプで避けた。

「人間」の常識で考えれば、そんなことは不可能だ。

ジャンプで避ける所か、それ以前に常人ならば槍を振るスピードを見切れない。

「（『魔族』ってのは……無茶苦茶な種族だよな）」

初めて戦った「魔族」。正直に言えば、予想以上の強さだった。バラヌーンなどいなくとも、「魔族」の兵だけで十分にイシユアーナを陥落させることが出来るのではと思う程。

「（……だけど——）」

再びリオは、槍の柄を握りしめた。

彼女の大きな瞳に、再び闘志が蘇る。

相手がどれだけ強い者と言えども、ここで根を上げる訳にはいかなかった。

ここで諦めれば、他のアルカドールの少年少女達への恥さらしだ。

何よりも——

「（ここで折れたら、ロアやアニー達。それにイワン兄にも馬鹿にされちゃうよね……！！）」

同刻、イワンはダフィウスと交戦していた。

イワンは愛用の剣を使い、対するダフィウスはその両手に短剣を持っている。

ダフィウスが剣を振るうたびに、その白い髪や、真紅のロングコートがなびいた。

「（結構やるじゃねーか……！！）」

ダフィウスの二本の剣による攻撃をさばきながら、イワンはそう思った。

彼の動きには全く無駄が無く、洗練され尽くした剣さばきだった。二本の剣をここまで使いこなせる者は、アルカドールに何人いるのだろうか。

ぱっと考えて、アルニカくらいだろうか。ただし彼女が使っているのは剣ではなく、ダガーなのだ。

「どうした、こんなものか!？」

「ああ!？」

不意のダフィウスの問いかけ。
イワンはそう返した。

「アルカドールのエンダルティオ指導者というのは名ばかりか、もしや俺の見込み違いか!？」

カチン。ダフィウスの言葉で、イワンの中で何かが切れた。

「……だったら本気で相手してやるよ!!」

それまで左手だけで握っていた剣の柄を、イワンは両手で握る。そして一度目を閉じ、視界を黒く染める。

イワンはその口元を微かに動かし、呪文のような言葉を呟いていた。

数秒の後——イワンは閉じていた両目を開き、

「サルクーラ・デ・フレイヴォルタ！」 “愚者に炎の鉄槌を！！”

イワンが最後の呪文を唱えた、その瞬間。イワンの剣の刃に、赤い炎が迸った。

剣から発生した炎はたちまち燃え上がり、大きな炎となった。決まった形を持たない炎は不規則に瞬き、空気を裂くような凄まじい燃烧音を放っている。

「貴殿、炎の魔法の使い手か……」

アルカドール王国の貴族、セイヴィルト一族の一子、イワン。彼も妹のリオ同様に、炎の魔法を授かっていた。

「どうだ、ビビったろ？」

炎を纏った剣を片手に、イワンは得意げにダフィウスに問う。しかしダフィウスはその問いに答えることはなく、

「ならばこちらも、奥の手を見せるとしよう」

ダフィウスは再び、二本の剣を構える。

すると、二本の剣からバチバチと火花が飛ぶような音が鳴り、それが徐々に大きくなっていく。

数秒の後、ダフィウスの二本の剣に、紫色の稲妻が纏っていた。イワンの炎の燃烧音にも並ぶ雷鳴が、バリバリと音を立てている。紫の稲妻の一部が地面に触れ、轟音と共に地面を抉った。

「お前それ、雷の魔法か……」

「ご名答。では、戦いを続けるぞ」

ダフィウスが紫色の雷を纏った二本の剣を構え直した。
相対するイワンは、オレンジの炎を纏った剣を構え直す。

「ああ、どこからでも来いよ」

第63章 くダフィウスく

アルカドール王国では、学校での授業に剣術や槍術が組み込まれている。

すなわち、剣や槍に触れたことのない少年少女達が、一から武器の扱いを学ぶことになるのだ。

教師達の中にはアルカドール騎士団に所属する者もいて、その者達は剣術を担当科目としている。

数年も剣術を学んだ生徒達は、多少程度は武器を扱えるようになる。中には、ロアのように14歳で大人顔負けの剣術の才能を発揮する者もいるし、

アルニカやリオのように、少女でありながら同年代の少年を打ち負かす程の実力を持つ者もいる。

生徒と剣の打ち合いをしていた教師が、その生徒に大怪我を負わされたという事故もあったらしい。

そして、「アルカドールで剣術を学んだ少年少女達の中で、最も強い者は誰か？」と問われれば、真っ先に挙がる少年がいる。

因みにその人物、「大人顔負けの剣術の才能の持ち主」と謳われるロアではない。

その者は、今ここで「魔族」と剣を交えている、長めの金髪をした青年。

「イワン」セイヴィルト」。アルカドール王国でも多少は名の知れた貴族、セイヴィルト家の一子。

イワンはロアを超える剣術の才能の持ち主だ。

これは事実無根の噂や推測などではなく、名実一体の真実。

事実の事、ロアはイワンを「自分よりも強い」と自負している。

今ここでダフィウスと剣を交えているイワンを見ても、彼が優れた剣の腕を持っているのは一目瞭然だろう。

一切の無駄を欠いた動き、そしてかつ素早くも、正確な剣裁き。

「魔卿五人衆」のダフィウスを相手に、一人で互角に戦っていることから、彼の実力が垣間見える。

「貴殿、中々の太刀筋だな」

イワンの剣を、両手の剣を交差させて受け、ダフィウスが言う。

お互いの武器が纏っている魔法の力、オレンジの炎と紫色の雷がぶつかり合った。

「喋ってる余裕があんのか……よっ!!」

イワンは一度剣を引き戻し、後ろへと後退する。

そして彼は剣を頭上に掲げ、剣に纏らせた炎を大きく燃えさせた。辺りにオレンジ色の光が広がり、熱気が空気を満たしていく。

「（魔法使いでもない人間が、あそこまで炎の魔法を扱えるとはな）」

ダフィウスは熱気に腕で口元を覆い、その様子を見ていた。

魔法を扱うには相当の修練を要する筈だが、イワンは炎を自在に操っていた。

剣術の腕といい、あの炎の魔法といい、彼の強さは明らかに並大抵のものではない。

「こいつを喰らえッ!!」

イワンはその場で、大きな炎を纏った剣を振り下ろす。すると、それまでイワンの剣に纏っていた巨大な炎が放たれた。放たれた炎は、まるでその炎自体が意思を持っているかのように空を飛び、ダフィウスへと向かっていた。数秒も経たず、ダフィウスが立っていた場所はオレンジの炎に包まれた。

イワンは剣を降ろし、眼前に燃え盛る炎を見つめる。ダフィウスは避けなかった。つまり、あの炎をまともに受けた筈だ。燃え盛っていた炎は、徐々に徐々に小さくなっていく。

「――！！」

その時、イワンの表情に驚きが浮かんだ。弱まっていく炎の中に、一人の人影があったのだ。

「剣術の腕、そして炎の魔法。貴殿の強さは認めよう」

その人影はダフィウスだった。

あの炎を正面から喰らった筈なのに、不老不死の「魔族」と言えど、あんな炎を受けて生きていられる筈がないのに――

まるで何事も無かったかのように、ダフィウスは立っていた。

「（やっぱこんなじゃ、倒されてはくれねーか……）」

薄々気付いていたことだが、「魔卿五人衆」をこんなにあっさりと倒せる筈は無かったのだ。

雷の魔法を使ったか、或いは他の手で防いだのかは分からない。分かるのは、炎の攻撃を完全に避けられた、若しくは防がれたこと

だった。

「だがしかし、貴殿では俺には及ばん」

ダフィウスは、再び二本の剣に紫の電撃を纏らせた。

「今度は、俺の番だ」

イワンにそう告げる。

するとダフィウスは剣を交差する構えをとり、その両目を閉じる。ルビーのように赤い瞳が瞼に隠され、ダフィウスの顔は白一色に染まった。

「（何をしようってんだ……！？）」

何が起こるかわからない。目の前の「魔族」の男が、何をしようとしているのかも。

イワンに出来たのは、炎を纏った自身の剣を構え、事後に備えることだった。

「デオウエイラ、エルシオル、アラニオア……エルダ……！！」

途端に、ダフィウスの口が小さく動き、呪文を呟き始めた。

「（……！こいつ、他にも魔法を……！！？）」

イワンの表情が変わる。

呪文を唱え始めたダフィウス、彼は何かの魔法を使うつもりなのだ。どのような魔法かは分からない。雷の魔法かも知れないし、他の魔法かも知れない。

「させるかよ!!」

すぐさま地面を蹴り、イワンはダフィウスへの距離を詰める。
言いよふの無い焦りを感じた。

このまま放って置けば、目の前の「魔族」が何かとんでもない事を
しそうな気がした。

剣が届く範囲まで距離を詰め、イワンはダフィウスに向けて剣を振
り上げた。

その瞬間――

「グラルソルツ・エリヴェンテ!!」 “我が下に、全て集え!!”

止められなかった。

最後の呪文と共にダフィウスは閉じていた両目を開く。再びその赤
い瞳が現れた。

途端、ダフィウスの両手に握られていた剣に纏っていた紫の雷が、
ダフィウスの両手の剣に集まって行く。

まるで空から落ちた雷が、避雷針に集まるように。

数秒後、ダフィウスの剣は完全に雷を吸収し、その刀身が紫色の光
を放っていた。

バチバチと音を立てていることから、かなりの電圧で帯電している
のかも知れない。

「（何だ、この魔法……!?!）」

疑問に思いつつ、イワンはダフィウスに向けて剣を振り下ろした。
ダフィウスはすぐさまイワンの剣を、両手の紫に光る剣で受け止め

る。

——その瞬間だった。

イワンの腕から全身にかけて、突然凄まじい痛みが走った。

「があッ！！」

次の瞬間、腹部に固い物がめり込む感覚がイワンを襲った。
ダフィウスが繰り出した蹴りが、イワンの腹部を打ったのだ。

「うほッ……！！！」

イワンは腹部を抑え、後退した。

何だ、一体奴は何をしたんだ、自分は一体、何をされた……！？

イワンは先ほどの事を振り返り、考える。

ダフィウスに剣を振り下ろした時、彼はイワンの剣を受け止めた。
あの刀身が紫色に輝く二本の剣で。

次の瞬間、腕から全身にかけて凄まじい痛みが突き抜けた。
まるで、「感電」でもしたかのような……

「（！！……そうか、なるほどな）」

イワンは気が付いた。

先ほどの、ダフィウスが使った魔法が如何なるものなのか、自分が
一体、何をされたのか。

「さっきの呪文、魔法の力を剣に集束させる魔法だな？」

それが、イワンの導き出した結論。

彼の言う通りだ。ダフィウスが使ったのは、魔法の力を剣に集束させる魔法。

辺りに散らせていた雷の魔法を剣に全て集束させ、剣自体に雷の力を宿らせたのだ。

虫眼鏡で太陽の光を集めれば、紙を焦がすことも可能なように。

一点に集めたことで、分散させていた力は比べ物にならない程に上昇する。

イワンは、電撃の力を集めた剣を受けたことで電流を体に流され、感電させられたのだ。

それが、先ほどの全身を突き抜けるような痛みの正体だ。

「……またご名答。一度この攻撃を受けただけで気付いたのは、貴殿が初めてだ」

ダフィウスは、紫の光を纏った剣を構え直す。

やはりそうだった。あの剣には今、かなりの電圧が帯電していることだろう。

あの剣に少しでも触れれば、また感電させられてしまう。

「だが、貴殿の論には一つ大事な物が抜けているな。『俺を倒す方法』が」

確かにダフィウスの言う通りだ。

攻撃の正体が分かった所で、その攻撃を掻い潜る方法が分からなければ何の意味も無い。

「ああ。確かにその通りだな」

数秒の沈黙の後、

「……けど、それも今分かった」

イワンが、口元に笑みを浮かべてそう言い放った。

「何……？」

ダフィウスが返した。

攻撃の正体を見破り、こんな数秒にも満たない時間の間にその対抗策が見つかったと言うのか。

もしも本当だとしたら、このイワンという男、かなり分析能力に長けている。

とダフィウスは思う。

「ようはその剣に触れなければいい。その剣に触れなければ、感電させられることも無いわけだからな」

イワンが言っているのは、極めて単純な対抗策だった。

「つまり簡単な事だ、俺は剣を受けずに、全部避ければいいって訳さ」

それが簡単なことではないのは、イワン自身が一番よく分かっていた。

剣を受けずに避けるということは、相手の攻撃を「防ぐ」ことは出来ないという事。

例えるなら、武器を持った相手に両手を縛った状態で挑むような事だ。

相手は攻撃し放題、こちらはその攻撃を避けつつ、反撃の隙を見出さなければならぬ。
かなりのハンデがあった。

しかし、イワンにはこの方法しか無かった。

何故なら、彼は剣の他に武器を、遠距離から攻撃できる飛び道具を持っていないから。

炎の魔法で攻撃しようにも、魔法を使いすぎるのは得策ではないし、それに先ほど防がれたばかりだ。

このまま炎の魔法を使い続けても、無駄なのは目に見えている。

「……面白い。ではやってみろ」

そう答えると、ダフィウスは紫の光を放つ二本の剣を握る。
足に力を込め、再びイワンへと走り寄った。

第64章 く果てのなき戦い

ダフィウスは二本の剣を振りかざし、イワンへと走り寄る。

その白い髪と、纏った真紅のロングコートが激しくなびいている。

両手には、雷の魔法を宿らせた剣。

あの剣が触れれば、また感電させられる。

防いでも同じだ。剣で受け止めれば、剣による攻撃は防いでも、電撃は防げない。

「（やっぱ、避けるしかなさそうだな……！！）」

やはり、それ以外の選択肢は浮かばなかった。

イワンは、その左手に持った剣を構えようとはしなかった。

彼は、ダフィウスの二本の剣に意識を集中させていた。

ダフィウスが横に剣を振る。その瞬間、イワンは膝を折り、姿勢を低めた。

電撃が迸る音と共に、ダフィウスの剣の一振りがイワンの頭上をかすめた。

「！！」

表情には出さなかったが、ダフィウスは驚いていた。

「（避けただと？ まぐれか……！？）」

すぐにダフィウスは剣を構え直し、今度はイワンに向けて剣を振り

下ろした。

しかし、この攻撃もイワンは避けてしまった。身を少し、横に動かしただけで。

その後もダフィウスはイワンへと攻撃を続けたが、一度たりとも刃がイワンに届くことは無かった、横から剣を振っても、上から剣を振っても、イワンは素早い身のこなしで避けてしまう。

「もしかして、俺が出まかせを言ってるでも思ってたか？」

先ほど感電させた時のダメージは残っている筈だった。それなのに、イワンは表情に余裕すら浮かべている。

正直に言えば、イワンが言ったことはまかせだと思っていた。剣を一度も受けずに避け続けるだなんて、よほどの実力者でもなければ出来る筈が無い。

だが彼は、「よほどの実力者」のようだった。ダフィウスの剣の動き、回避する方向を一瞬で分析してしまう。その点から見ても、イワンは極めて優れた分析力、そして反射神経の持ち主だ。

「良い動きだ。だが、避けているだけでは俺を倒すことは」

「ああ、できねえな」

イワンは再び姿勢を低め、横に薙ぎ払うように振られた剣を避ける。そして、ダフィウスの背後へと回り込み――

「そこで、反撃っつー訳だ――」

剣を振り上げ、その刀身に再び炎を灯した。

一瞬で、先ほどとは比べ物にならない程大きな炎を。

5メートル。いや、10メートルを超えるかもしれない大きさの火柱だ。

「なっ!？」

ダフィウスは驚愕した。

あの一瞬にも満たない時間で、ここまで大きな炎を作り出すとは。全くの予想外だった。このイワンという人間は、こんな芸当までやってのけるのか。

「——よお!!!!!!」

イワンが剣を振り下ろした瞬間。

巨大な炎は、ダフィウスへと叩きつけられた。

同時に地面が揺るぐほどの爆発と、轟音が轟く。地面が燃え、炎が踊るように燃え盛った。

イワンは後ろへ飛び退く。剣を左手に、眼前で燃え盛る炎を見つめる。

「ハア、ハア……」

ふと、自分が息を切らしていたことに気付いた。ダフィウスの攻撃を避けていた以上に、巨大な炎の魔法を使ったことによる体力の消耗が大きかった。

「（やったか……!?!）」

数十秒、燃え盛っていた炎が小さくなり始めた頃。小さな炎が瞬く中、一人の人影が現れた。

「……ちつ、まさかこいつも避けやがったか」

ダフィウスは生きていた。

間一髪で、イワンの放った巨大な炎を避けたのだ。

紫の光を放つ二本の剣を持ち、ダフィウスはイワンへと歩み寄った。そして、イワンとの距離およそ五メートル程の位置に立つと、

「俺に一瞬でも恐怖を与えたのは、称賛に値する」

イワンが放った巨大な炎を、ダフィウスは避けていた。

しかし、間一髪だったことは間違いなかった。

ダフィウスの赤いロングコートの端が黒く焦げていることから、そのことは見て取れる。

背後から、あの至近距離で、あんな巨大な炎を放たれるとは思っていなかった。

「ここからは、小細工なしの勝負だ」

そう言い、ダフィウスは魔法を解いた。

彼の両手の剣から紫色の光が消え、銀色の刃が現れた。

「ほー、そりや一体どういいうつもりだよ？」

イワンが聞き返す。彼はまだ、剣に纏った炎を解こうとはしなかった。

「他意は無い。貴殿とは、真つ向勝負で決着をつけたくなくてな」

「……そうやって俺を油断させようってか？」

イワンは炎を纏った剣を構え直した。

ダフィウスはもつともらしい台詞を口に出しているが、相手が「魔族」である以上、容易に信用するのは危険だ。

自分の油断を誘い、隙を突くつもりなのかも知れない。

イワンの知る限り。「魔族」はそういう卑怯な作戦を平気で使う種族なのだ。

「だったら諦めな、俺はその手には引つかかんねーぜ？」

「……確かに俺は『魔族』だ」

イワンの考えていることを察したのか、ダフィウスは言う。

「俺だけでなく、俺達『魔族』はこれまで何人もの『人間』の命を奪い、多くの悲しみや苦しみを与えてきた」

そんなこと、言われなくともイワンは知っている。

『魔族』は下劣で、残忍な種族だ。

人の命を殺すことに何の躊躇も葛藤も持たない種族なのだ。

「んなこと、言われなくたって」

イワンが言いかけた時、

「だがな」

ダフィウスが口を開き、イワンの言葉を遮った。

「俺は『魔族』であると同時に、『武人』だ。戦いに対して嘘は吐かん」

そこまで言い、ダフィウスは両手の剣をイワンに向ける。そしてはつきりと、イワンの目を見つめ、

「たとえ相手が、『人間』でもだ」

イワンに向けて言い放つ。

「魔族」とは思えない程に、ダフィウスの目は誠意に満ちていた。

「それが俺の、『武人としての誇り』というものだからな」

ダフィウスは続ける。

彼は、誇りを抱いた「武人」の瞳をしていた。嘘を吐いている目では無い。

「……『魔族』のくせに、格好いい事言うじゃねーか」

イワンは思った。

このダフィウスという男、「魔族」にしては嫌気が無さ過ぎる。正々堂々とし過ぎている。

「魔族」だが、「魔族」らしくない。

イワンは、ようやく剣に纏った炎を解いた。そして、その剣の刃をダフィウスへと向ける。

「受けてやるよ、小細工無しの真っ向勝負」

ルーノとカリスは、ドルーグの四本の剣の攻撃を捌いていた。二人がかりでも、圧されている。力とリーチの差が勝負に響いていた。

長い槍を使っているカリスはまだしも、基本的に小柄な兎型獣人族のルーノは、その剣も彼相応の大きさ。

相手の攻撃を防ぐことは出来ても、反撃するにはリーチが足りない。

「（タコの足みてえな動きしやがって……）」

四本の腕を自在に動かしているその様は、まるでタコの足のようにも見えた。

忌々しげに心中で呟き、ルーノはドルーグの攻撃を避ける。

時には剣で防ぎ、時には兎型獣人族の脚力を活かし、フットワークを駆使して避ける。

そしてルーノの側で、カリスは槍を使って応戦していた。

「（あの四本の剣……毒仕込みですか……）」

カリスは気付いていた。ドルーグの持つ四本の剣の刀身から、何かの液体が滴り落ちていることに。

無色透明なことからして、おそらくはナジメ草。

それは数時間で人を殺せる毒草。かすっただけでも致命的だ。

「（早く勝負を付けた方が、良いようですね……！！）」

カリスは思う。長く戦いを続けるのは、得策ではなかった。

あの毒仕込みの剣で一度でも傷付けられれば、それだけで終わりだ。

「おおおっ!!」

僅かな攻撃の合間の隙を突き、カリスはドルーグの四本の腕の一本に槍を振るった。

そのカリスの攻撃で、ドルーグの剣の一本が弾き飛んだ。

しかし、その後。カリスが槍を引こうとした瞬間――

ドルーグが、空いた一本の手でカリスの槍の槍頭の付け根辺りを掴み、引き寄せた。

前方に引つ張られ、カリスはよろける。

「っ!？」

突然の出来事だった。

一本の剣を弾いたのはいい。しかしまさか、槍を掴まれるとは思っていなかった。

「死ね!!」

その声と共に、ドルーグがカリスに向けて毒剣を振った。

咄嗟にカリスは姿勢を低める。剣が風を切る音が聞こえた。頭上を剣が通過したのだろう。

剣の一振りは避けることが出来た。
しかし――

「！！！」

気付いた時には、もう遅かった。
続けざまに繰り出されたドルーグの蹴りが、カリスの腹部に直撃した。

「がつ……！！！」

全く手加減の無い蹴りを受け、痛みが腹部から背中まで突き抜ける。
腹部を抑えながら、カリスは地面へと伏した。
付けていた眼鏡が外れ、顔から離れていくのを感じた。

「カリス！！！」

ルーノがカリスの名を呼ぶ。

すぐ後、何かが羽ばたくような音が、ルーノの耳に入った。
その羽ばたき音、鳥ではなかった。鳥にしては、大きすぎた。

「（何だ！？）」

視線を空に、羽ばたき音の発せられている方向へと向ける。
その次の瞬間、ルーノの長い耳に、甲高い鳴き声が響いた。

「うっ！！！！！」

ルーノはその場に剣を落とした。しかし、そんなことを気にする余裕は無かった。

その甲高い鳴き声がルーノの耳に入り、彼の耳を劈いていた。
高い聴力を持つ兎型獣人族のルーノにとって、その甲高い鳴き声は凶器に等しい物だったのだ。

「があああつ……!!」

その場に倒れ伏し、ルーノは両耳を抑える。
だがそれでも、甲高い鳴き声は防げなかった。

ルナフ村で、ダルネスからマンドレイク玉の攻撃を受けた時のダメージがまだ残っていた。

ルーノは耳を抑えている手に、水滴が触れるのを感じる。耳から流れ出た血液だろう。

「（く……そ……!!）」

ルーノは、兎型獣人族の自分が無性に腹立たしくなった。
単なる高い音に耐えられない自分が、情けない。
自分のこの長い耳を切り落としたくなった。

「終わりだ……」

腹部に蹴りを喰らったカリス、甲高い鳴き声を耳に受け、地面に伏しているルーノ。

もう戦える状態にない二人に向かい、ドルーグは歩み寄り、

まずカリスに向け、毒剣を振り上げた。

「ぐ……っ!!」

眼鏡が無くなった所為で、カリスの視界はぼやけていた。
だがそれでも気配で感じる。自分の眼前にいる「魔族」の将軍が、
自分に向けて毒剣を振り上げている。

剣から滴り落ちる、ナジメ草の毒が見える。

カリスは立ち上がろうとした。

しかし、蹴りを受けた腹部の痛みが、それを阻んだ。

「このイシューアーナこそが貴様らの墓場だ。アルカドールの餓鬼共」

第65章 くヴルームの助けく

イシユアーナ共和国騎士団団長のピューマ型獣人族、ヒュウは三人の「魔族」の兵と交戦していた。

彼が剣を振るうたび、ビリヤード台のフェルトのような深い緑の毛並がたなびいている。

まず一人目の「魔族」の兵を斬り倒し、続けざまに二人目を斬り倒す。

そして、背後の三人目には、顔面に後ろ蹴りを見舞った。

ヒュウはその剣の腕と体術を駆使し、交戦していた三人の「魔族」の兵を倒した。

「ハア……」

倒した「魔族」の兵を見つめ、ヒュウは軽く息を漏らす。

その次の瞬間、前方から数十本の矢が飛んできた。

「!!!」

後方にいた数人の「魔族」の弓部隊が、彼に向けて放った矢だった。ヒュウはすぐさま身を横に動かし、飛んできた矢を避ける。

「何っ!?!」

「こいつ、あの数の矢を避けやがったぞ!!!」

ヒュウに向けて矢を放った数人の「魔族」の兵がざわめく。

「獣人族」の動体視力を駆使すれば、飛んでくる矢を剣で叩き落とすことは出来る。

しかし、「叩き落とす」のではなく、「避ける」のはまた別だ。矢が放たれ、自分に向けて飛んでくる一瞬の時間で、矢の飛んでくる位置から離れなければならない。

「続けて放て!!」

一人の「魔族」の兵の言葉に、他の「魔族」の兵達は新しい矢を弓につがえ直す。

そして、新しい矢をつがえた弓を前方に、ヒュウが立っている位置に向けた。

およそ15メートル程の位置に、あのピューマ型獣人族は立っている筈だ。

「——!？」

しかし、前方にヒュウの姿は無かった。

「魔族」の兵達は、右へ、そして左へ視線を向ける。

だが、そのどちらの方向にも、ヒュウの姿は無かった。

「魔族」の兵達が弓に新しい矢をつがえる為にヒュウから目を離したのは、ものの数秒。

そんな時間では、隠れることはおろか、周りで戦っている者達に紛れることすら出来ない筈だ。

しかも、ヒュウの毛並は緑色。他の者達に比べれば目立ちやすい筈だった。

「奴はどこに行った!？」

一人の「魔族」の兵が、怒気を込めて叫ぶ。

「私はここだ」

突然、「魔族」の兵達の真後ろからその声が聞こえた。弾けるように振り向く。そして「魔族」の兵達は驚愕した。

数秒前まで自分達の前にいた筈のヒュウが、いつの間にか背後へと移動していたのだ。

ヒュウは剣を振りかざし、数人の「魔族」の兵に切り込んだ。勝負は一瞬だった。弓を剣に持ち替えさせる時間すら与えず、ヒュウは全員を倒してしまった。

ヒュウはピューマの「獣人族」。

彼が「獣人族」として生まれながらに授かった能力は、「走力」。ピューマ型獣人族は、ルーノやイルトのような兎型獣人族同様、強靱な脚力を有している。

しかし、兎型獣人族は跳ぶこと、すなわちジャンプに特化した足の構造をしている。

対して、ピューマ型獣人族は走ることに特化した足を持っているのだ。

ピューマ型獣人族の走力は、全ての「獣人族」の中でも随一。

先ほどのように十数メートルの距離を一瞬で詰め、相手の後ろに回ることも可能。

さらに、少しの時間に限れば、垂直な壁を駆けることも出来る。

「うつ……!!」

イシューアーナの上空から響く甲高い鳴き声に、ヒュウは思わず片耳を塞いだ。

鳴き声を発しているのは、ガジュロスだった。

「魔卿五人衆」の二人が乗ってきたうちの一体だろう。

ガジュロスは空中に滞空し、地の様子を見つめている。

まるで砂浜で海に向かうウミガメ達を狙うカモメのごとく、歓喜に満ちた鳴き声を発していた。

数秒の後、黒い不気味な風貌を持つ「魔物」は、翼を羽ばたかせて地面に滑空する。

そして、少年少女達や騎士団、とにかく「人間」達を無差別に襲い始めた。

「うわあああつー!!」

「ば、化け物だー!!」

「逃げろー!! 喰われるぞー!!」

空中から襲い掛かるガジュロス、騎士団にも、エンダルティオの少年少女達にも成す術は無かった。

ガジュロスにとって、「人間」は羽虫のような無力な生き物だ。自分の「餌」に過ぎない。

一人、二人、三人。次々と、「人間」達はガジュロスの餌食となっていく。

「くっ、ミロルー!!」

ヒュウは、後方で「魔族」の兵と交戦しているミローイルを呼んだ。彼女は交戦していた「魔族」の兵を投げナイフで倒し、ヒュウを振り返る。

「ガジュロスを狙うんだー!! あの怪物を射ろー!!」

ヒュウの指す方向を目で追った。

すると、ガジユロスが「人間」達を襲っている。

アルカドールの者も、イシュアーナの者も。まるで見境なく。

「……！！」

ミローイルは何も言葉を発しなかったが、その表情に怒りを浮かべた。

少女はすぐさま投げナイフを仕舞い、その手に弓を握る。

もう片方の手で、背中の矢筒から一本の矢を取り出した。

そして、怪物に狙いを定め、ミローイルは矢を放つ。

放たれた矢は、まるで吸い寄せられるかのように正確に、ガジユロスの腹部を射た。

腹部に矢を刺された怪物は、悶えるような鳴き声を上げた後、上空へと飛び退って行った。

彼が現れたのは、ドルーグがカリスに向けて剣を振り下ろそうとした時だった。

ドルーグに向けて渾身の体当たりを見舞い、ドルーグを横へと突き飛ばした。

「（だ……誰だ……？）」

腹部の痛みを耐え、カリスは顔を上げる。

眼鏡が無い所為で視界がぼやけ、体当たりを見舞った人物の顔は見えない。

「ぐっ！！！！」

不意の一撃に、ドルーグは地面へと倒れた。

そして、体当たりを見舞った人物は、地面に落ちたカリスの銀淵の眼鏡を拾い上げ、カリスに歩み寄る。

「大丈夫か、カリス？」

そうして、その男性はカリスに銀淵の眼鏡を手渡す。

カリスはそれを受け取って、かけ直す。すると、ぼやけていた視界がはつきりと見え、

自分の窮地を救ってくれた人物の顔が見えた。

「ブルーム先生……！？」

青い毛並の犬型獣人族、ブルームだった。

教師であると同時に、アルカドル王国騎士団の副団長でもある男性。

「僕は大丈夫です、先生……」

腹部を押さえ、カリスはゆっくりと立ち上がった。

そしてブルームは、次にルーノに駆け寄った。彼は耳を押さえて、地面に伏していた。

手を貸そうとした時、

「大丈夫だ、化け物の鳴き声で耳をやられたただけだ」

「……そうか、無事だな」

耳を押さえながら、ルーノは立ち上がった。

もう化け物の鳴き声は聞こえてはこない。誰かが撃退したのだろうか？

二人の生徒の無事を確認し、ヴルムは振り返った。

「俺の生徒、随分と痛めつけてくれたな」

ドルーグを睨み、ヴルムは言った。

そして彼は、腰の鞘から剣を引き抜き、その刃をドルーグに掲げる。

「……カリス、行くぞ」

不意に、ルーノがカリスの服の裾を引いた。

「でもルーノ君、先生は……！？」

「オレ達と一緒に戦っても、戦力になんてならない。むしろ逆に足手纏いだ」

カリスは腹部を蹴られて負傷し、ルーノは耳を負傷している。

二人とも、万全な状態では無かった。

確かにルーノの言う通り、一緒に戦っても足を引っ張ってしまうだろう。

カリスは今一度、ヴルムの後ろ姿を見つめた。

「……わかりました、行きましょう」

そして腹部を押さえつつ、ルーノと共にその場を去った。

【キャラクター紹介 17】“ダフィウス”

【種族】 魔族

【種別】 人間

【性別】 男

【年齢】 - Unknown -

【髪色】 フロステイ・ホワイト

「魔族」最強の配下、「魔卿五人衆」の一人。外見は20歳前後の若い男性。

ヴィアーシェ同様にその肌は白い。さらに髪色も白。

対して瞳はルビーのような赤色で、纏っているロングコートも赤色。イワン曰く、その容姿は「中々にイケメン」。

二本の剣を用いた剣術と紫の雷の魔法を扱い、イワンと肩を並べる強さを発揮する。

「魔族」にしては珍しく、「武人」としての誇りを重んじる性格の持ち主。

その言動を見るに、「ただの悪人」と呼ぶには相応しくない点も幾つか。

第66章 く予感く

ルーノとカリスがその場を離れた後。

残されたヴルムは、「魔族」の將軍のドルーグと一騎打ちの戦いを繰り広げていた。

ドルーグは四本の腕を持っているが、そのうちの一本の手は素手。

先ほどの戦いで、カリスによつて一本の剣を弾き飛ばされた為だ。すなわち、ドルーグが振るっている剣は、全部で三本。

ドルーグは四本の腕を持ち、四本の腕を自在に操ることの出来る「魔族」。

彼が三本の剣を振るっているということは、三人で戦っているのと同義だ。

一騎打ちと言えども、三対一と同じ。

普通に考えれば、常人ではドルーグに太刀打ちする事は不可能な筈だった。

「（この犬男……出来るな……!!）」

だとすれば、ヴルムは「常人」の域を逸していると言えるだろう。荒波のように繰り出されるドルーグの攻撃を、ヴルムは一本だけの剣で防いでいる。

三本の剣の不規則で激しい動きを、彼は完璧に見切っていた。

アルカドル王国騎士団、副団長の犬型獣人族、ヴルム。

彼は、アルカドルの高等剣術、「アルヴァ・イーレ」を極めた、達人だ。

「アルヴァ・イーレ」が高等剣術と称される所以は幾つかある。
一つは、扱い時のリスクの大きさだ。

この剣術は、無防備な構えで相手の攻撃を誘い、その攻撃の勢いを逆手に取る剣術。

下手を打てば、自分から斬られにくいような事にもなりかねない。

もう一つは、「アルヴァ・イーレ」が非常に使い手の実力を問う剣術であること。

相手の剣の動きを完璧に見切る動体視力、必要最低限の動きで攻撃を避ける、若しくは受け流す技術、

そして、数秒にも満たない一瞬の隙を見逃さず、相手を追い詰めるセンス。

これら全てを併せ持つ者でなければ、「アルヴァ・イーレ」は到底扱えないのだ。

その極めて高い習得難易度故、「アルヴァ・イーレ」を会得している者は、アルカドール王国にも数十人しかいない。

その中で最年少なのが、14歳の若さでこの剣術を会得した、ロアだ。

そして、ロアに「アルヴァ・イーレ」を教えたのは、他でもないヴルームなのだ。

「おおおッ――！」

大振りで振られた剣を避け、ヴルームは一気にドルーグとの間合いを詰める。

「（このにおいは……）」

接近してみて、初めてヴルムは気付いた。

ドルーグの持つ三本の剣から、独特のにおいが漂っていたことに。

「人間」の鼻では嗅ぎ分けられないが、鋭敏な嗅覚を持つ狼や犬の「獣人族」ならば嗅ぎ分けられる、毒草のにおい。

「（ナジメ草……剣に毒を仕込んでいたか）」

剣の射程内に入り、ヴルムはすぐさま剣を振った。

一瞬の隙を突かれたドルーグには、反撃の手立ても、またその余裕も無かった。

「ぐおッ!!」

ヴルムの剣の一振りで、ドルーグは右足を負傷し、地面へと倒れた。

鎧の隙間を正確に狙っていたことから、ヴルムの実力の程が伺える。

ドルーグはすぐに立ち上がろうとした。しかし、中断を余儀なくされた。

自分の喉元に、銀色の刃が突き付けられていたから。

「お前の負けだ、『魔族』」

剣を突き付け、ヴルムは言う。

一対一の戦いでは、ヴルムが勝っていた。

三本の剣を駆使した攻撃など、「アルヴァ・イーレ」の達人であるヴルムにはまるで無力なのだから。

もう、ドルーグに成す術は無いだろう。

少しでも動けば、剣で喉を切られる。

「……フツ」

こんな状況にも関わらず、ドルーグが口元に笑みを浮かべた。

「……何が可笑しい？」

「貴様は俺に勝利したかも知れない。だが、貴様の大事な生徒はどうかな？」

「……！」

僅かながらも、ヴルームの表情に動揺が浮かんた。

それを見透かしたのか、ドルーグはさらに彼を煽るように続ける。

「アルカドールの餓鬼共では、あのお二方……ヴィアーシェ卿とダフィウス卿には敵わぬ」

そのドルーグの言葉の直後、ヴルームは背後から迫る気配を感じた。振り向いた時。一人の「魔族」の兵が剣を振り上げ、襲い掛かってきた。

「……！」

ドルーグの喉元に突き付けていた剣を戻し、ヴルームは振り下ろされた剣を受ける。

ヴルームはすぐさま剣を弾き、素早い剣の一撃を見舞い、「魔族」の兵を打ち倒した。

「魔族」の兵と言えども、ヴルーム程の強さを持つ者には敵になら

なかった。

そして、ヴルムは再び、ドルーグの方を振り返る。
だが、そこにはもう、ドルーグの姿は無かった。

「……逃げたか」

どうやら、ヴルムが「魔族」の兵の相手をしている隙に乗り、逃げ去ったようだ。

ヴィアーシェの繰り出す、大剣と風の魔法による攻撃。
それを防ぎ続けるリオには、限界が訪れ始めていた。

大剣の攻撃は一撃の攻撃力が高く、たとえ防いでも手首にダメージが入ることは免れられない。

さらに、ヴィアーシェの身体能力がその大剣という武器の強さに拍車をかけていた。

大剣は本来、非常に重量のある武器。故に、素早い攻撃を繰り出すことはまず不可能な筈だ。

その常軌を逸した攻撃を、ヴィアーシェは仕掛けてきていた。
自分の身の丈程もある大剣を軽々と使いこなし、まるで重量など無いかのように、大剣を振る。

高い攻撃力に加え、スピードもある絶え間ない攻撃。
あんな攻撃を繰り出し続ければ、当然スタミナの消費は激しい筈だった。

なのに、ヴィアーシェは一片たりとも表情を変えないことがない。

「（全然攻撃の勢いが落ちない……こっちはもう限界が近いってのに……!!）」

対し、リオは苦しい表情を浮かべていた。

攻撃を喰らってはいないものの、ヴィアーシェの猛攻で体力を削られ、さらに手首にはダメージが蓄積していた。

「ぐっ!!」

リオは、ヴィアーシェの大剣による渾身の一撃を受けた。槍で防いだものの、再び両手首に衝撃が走り、槍を落としそうになった。

「がはっ!!」

続けざまに、ヴィアーシェがリオの腹部に蹴りを入れた。寸前で身を引き、直撃は避けたものの、受けたダメージは小さくなかった。

蹴りに押し出されるように、リオは数メートル後ろまで後退する。

その直後、ヴィアーシェは大剣を頭上に上げ、刀身に大きな風を纏らせた。

周囲に砂煙が舞いはじめ、ヴィアーシェの長い髪がまるで空を泳ぐようになり始める。

彼女は、風の魔法をリオへと叩きつけるつもりだった。

「（まだあんな力が……!!）」

痛がっている余裕は無かった。

リオはすぐさま槍を構え直し、槍に炎を纏った。魔法に相対出来るのは、魔法だけだ。

ヴィアーシェは大剣を振り下ろす。

すると、大剣に纏った風は、リオに向けて進んで行った。

まるで形の無い、見えない波のように、激しく地面を抉り、周囲に凄まじい風音を放ちながら。

かなりの破壊力なのは見て取れる。あの風を喰らえば、ただでは済まないだろう。

「だあああつ！！」

ヴィアーシェが放った風に向けて、リオも炎を放った。

「！？」

ロアと共に「魔族」の兵と交戦していたアルニカは、後方から激しい風を感じた。

風と共に、地面が抉られるような轟音も聴こえてくる。

自然の風ではなかった。

人為的にこんな風を作り出せるのは、思いつく限りではヴィアーシエだけだ。

「（リオちゃん……！！）」

アルニカの頭に、不安が過る。

リオは、大丈夫だろうか？

ロアと二人がかりでも敵わなかったヴィアーシェを相手にして、無事でいるだろうか？

「……ごめんロア、私ちよつと行ってくる!!」

側で「魔族」の兵と交戦しているロアは、そのアルニカの言葉に振り返った。

「え、アルニカ!？」

そのロアの言葉に、アルニカは応えなかった。

もしかしたら、周りの声や剣がぶつかる音に紛れ、彼女の耳には届かなかったのかも知れない。

アルニカは走り去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6696r/>

Fragment of braves

2011年11月27日17時58分発行